福井県埋蔵文化財調査報告　第188集

福 井 城 跡

－北陸新幹線建設事業に伴う調査13－

第２分冊　遺物編

２０２４

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが北陸新幹線建設事業に伴い、平成28・29年度に実施した福井城跡（福井県福井市手寄１丁目所在）の発掘調査報告書である。なお、調査範囲が南北に細長いため二分割して整理作業を実施しており、本報告分はその北側にあたるため「新幹線北地点」と通称する。報告書は第１分冊遺構編、第２分冊遺物編で構成され、本書は第２分冊遺物編にあたる。「新幹線南地点」の報告書は令和４年度に刊行されている。

2　本書の編集は木村孝一郎があたり、第１章～６章、８章を執筆した。第７章は各種分析報告を木村が一部加除筆し編集した。

3　福井城跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。

4　出土遺物のデジタルトレース・写真撮影は、令和４年度に土器・陶磁器・瓦・木製品・石製品・金属製品を株式会社キミヨンに委託した。なお土器・陶磁器、石製品は図化作業も委託した。委託した図の校正、図版作成は、木村、九千房百合、杉田曜が行った。

5　木製品の一部は、令和５年度に株式会社吉田生物研究所に委託して保存処理とあわせて樹種同定と塗膜構造分析・材質分析を実施した。ほかの自然科学分析は、動物遺体・貝類同定・植物遺体同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

6　出土遺物のうち土師質皿の文字資料については、有馬香織氏（福井県立歴史博物館主任）、木製品の文字資料については、宇佐美倫太郎氏（福井県教育庁生涯学習・文化財課主任）の協力を得た。

7　土器・陶磁器のうち土師質皿の色調は、小山正忠・竹原秀雄編　新版『標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に拠る。

8　本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。

9　遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および会計年度任用職員が行った。

10　本遺跡の所在地は、中世から17世紀初頭まで「北庄」と呼ばれたが、寛永元年(1624)に「福居庄」「福井庄」へと改称され、さらに元禄年間(1688～1704)から「福井」の名称が定着していく。しかし本書では煩雑を避けるため、柴田勝家の居城を北庄城、結城秀康の入城以降を福井城とし、遺跡名としては北庄城の時期を含めて福井城跡と称する。

11　本書で使う福井城の曲輪等の名称は、幕末頃の住宅地図である福井県文書館所蔵の山内秋郎家文書「福井藩家中絵図」（「戊午屋舗絵図」）に記載されている呼称である。

目　　次

第１章　土器・陶磁器 …… 1
　第１節　第Ⅰ街区出土の土器・陶磁器 …… 1
　第２節　第Ⅱ街区出土の土器・陶磁器 …… 16
　第３節　第Ⅲ街区出土の土器・陶磁器 …… 20
　第４節　北庄城期の土器・陶磁器 …… 28

第２章　瓦 …… 42
　第１節　軒瓦類 …… 42
　第２節　丸瓦・平瓦・鬼瓦 …… 43

第３章　木製品 …… 47

第４章　石製品 …… 91

第５章　金属製品 …… 116
　第１節　金属製品 …… 116
　第２節　鋳造関連遺物 …… 125

第６章　その他の遺物 …… 132

第７章　自然科学分析
　第１節　自然遺物 …… 133
　第２節　遺物の構造分析 …… 153
　第３節　16−３調査区出土の材質調査 …… 161

第８章　まとめ …… 162

写真図版目次

図版第１　土器・陶磁器　屋敷境溝
図版第２　土器・陶磁器　屋敷境溝
図版第３　土器・陶磁器　第Ⅰ街区
図版第４　土器・陶磁器　第Ⅰ街区
図版第５　土器・陶磁器　第Ⅰ街区
図版第６　土器・陶磁器　第Ⅰ街区
図版第７　土器・陶磁器　第Ⅰ街区
図版第８　土器・陶磁器　第Ⅰ街区
図版第９　土器・陶磁器　第Ⅱ街区
図版第10　土器・陶磁器　第Ⅱ街区
図版第11　土器・陶磁器　第Ⅱ街区
図版第12　土器・陶磁器　屋敷境溝
図版第13　土器・陶磁器　屋敷境溝
図版第14　土器・陶磁器　第Ⅲ街区
図版第15　土器・陶磁器　第Ⅲ街区
図版第16　土器・陶磁器　第Ⅲ街区
図版第17　土器・陶磁器　第Ⅲ街区
図版第18　土器・陶磁器　第Ⅲ街区
図版第19　瓦
図版第20　瓦
図版第21　瓦
図版第22　木製品　漆器椀類
図版第23　木製品　漆器椀類
図版第24　木製品　漆器椀類
図版第25　木製品　箸・楊枝・切匙・擂粉木等
図版第26　木製品　漆器
図版第27　木製品　柄杓
図版第28　木製品　栓・曲物・桶
図版第29　木製品　下駄
図版第30　木製品　下駄
図版第31　木製品　下駄
図版第32　木製品　紐・刷毛・櫛・紡錘車
図版第33　木製品　バンバ・箆・鍬・槌等
図版第34　木製品　指物・折敷・灯明台等
図版第35　木製品　人形・玩具・不明品等
図版第36　木製品　水道・井戸関連
図版第37　木製品　墨書・焼印
図版第38　石製品　容器類・臼類
図版第39　石製品　暖房具・香炉等
図版第40　石製品　硯・砥石
図版第41　石製品　重石・碁石
図版第42　石製品　瓦・建材等
図版第43　金属製品　武器・武具
図版第44　金属製品　農具・漁具・工具
図版第45　金属製品　釘・日用品
図版第46　金属製品　日用品
図版第47　金属製品　煙管
図版第48　金属製品　不明品　鋳造関連遺物
図版第49　金属製品　銭貨
図版第50　自然遺物　大型植物遺体
図版第51　自然遺物　骨角器・貝類
図版第52　自然遺物　動物骨
図版第53　自然遺物　昆虫遺体
図版第54　木製品の樹種
図版第55　木製品の樹種
図版第56　木製品の樹種
図版第57　木製品の樹種
図版第58　木製品の樹種
図版第59　木製品の樹種
図版第60　木製品の樹種
図版第61　漆器　漆薄片
図版第62　漆器　漆薄片
図版第63　漆器　漆薄片
図版第64　漆器　漆薄片
図版第65　漆器　漆薄片
図版第66　漆器　漆薄片

挿 図 目 次

第１図　土器・陶磁器実測図１…… 2
第２図　土器・陶磁器実測図２…… 3
第３図　土器・陶磁器実測図３…… 5
第４図　土器・陶磁器実測図４…… 6
第５図　土器・陶磁器実測図５…… 7
第６図　土器・陶磁器実測図６…… 8
第７図　土器・陶磁器実測図７…… 9
第８図　土器・陶磁器実測図８…… 12
第９図　土器・陶磁器実測図９…… 13
第10図　土器・陶磁器実測図10…… 14
第11図　土器・陶磁器実測図11…… 15
第12図　土器・陶磁器実測図12…… 17
第13図　土器・陶磁器実測図13…… 18
第14図　土器・陶磁器実測図14…… 19
第15図　土器・陶磁器実測図15…… 21
第16図　土器・陶磁器実測図16…… 22
第17図　土器・陶磁器実測図17…… 24
第18図　土器・陶磁器実測図18…… 25
第19図　土器・陶磁器実測図19…… 27
第20図　土器・陶磁器実測図20…… 29
第21図　土器・陶磁器実測図21…… 30
第22図　土器・陶磁器実測図22…… 31
第23図　瓦実測図１…… 44
第24図　瓦実測図２…… 45
第25図　瓦実測図３…… 46
第26図　漆器椀類１…… 48
第27図　漆器椀類２…… 49
第28図　漆器椀類３…… 50
第29図　漆器椀類４…… 51
第30図　漆器椀類５…… 52
第31図　漆器椀類６…… 53
第32図　箸・楊枝等…… 55
第33図　漆器…… 56
第34図　漆器…… 57
第35図　指物部材…… 58
第36図　折敷脚…… 59
第37図　台所用品１…… 60
第38図　台所用品２…… 61
第39図　柄杓…… 62
第40図　曲物…… 63
第41図　桶・樽…… 64
第42図　栓…… 65
第43図　下駄１…… 66
第44図　下駄２…… 67
第45図　下駄３…… 68
第46図　下駄４…… 69
第47図　櫛・紡錘車…… 70
第48図　刷毛・紐等…… 71
第49図　バンバ・ヘラ状木製品等…… 72
第50図　桝・灯明台・硯屏・不明部材…… 73
第51図　棒材・棒状具…… 74
第52図　人形・玩具・不明品…… 75
第53図　不明品…… 76
第54図　水道の継ぎ手類…… 77
第55図　井戸材・井戸枠・杭…… 78
第56図　井戸材…… 79
第57図　墨書木製品１…… 80
第58図　墨書木製品２…… 81
第59図　木札…… 82
第60図　容器類１（盤）…… 92
第61図　容器類２（円形盤・盤・槽・容器状製品）93
第62図　容器類３（鉢・容器状製品）…… 94
第63図　容器類４（容器状製品３）…… 95
第64図　行火１（蓋）…… 96
第65図　行火２（蓋・身）…… 97
第66図　石臼…… 98
第67図　日用品…… 99
第68図　硯…… 101
第69図　砥石１…… 102
第70図　砥石２…… 103
第71図　日用品・その他１…… 104
第72図　日用品・その他２…… 105
第73図　瓦１（丸瓦）…… 106
第74図　瓦２（平瓦）…… 107
第75図　瓦３（棟瓦）…… 108
第76図　瓦４（棟瓦等）・石樋…… 109
第77図　礎石・石塔類…… 110
第78図　煉瓦…… 111
第79図　武器武具…… 117
第80図　農具・漁具…… 118
第81図　工具類…… 119
第82図　日用品１…… 120
第83図　日用品２…… 121
第84図　煙管…… 123
第85図　その他…… 123
第86図　銭貨…… 124
第87図　鋳造関連遺物…… 125
第88図　その他の遺物…… 132
第89図　イエバエ蛹のサイズ…… 151
第90図　中之馬場屋敷地の変遷１…… 163
第91図　中之馬場屋敷地の変遷２…… 164
第92図　中之馬場屋敷地の変遷３…… 165
第93図　北庄城期の遺構…… 167

表　目　次

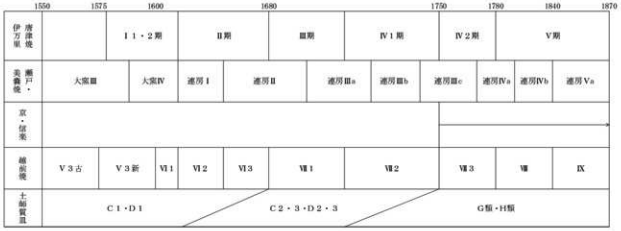
第１表　本書における土器・陶磁器時間軸…… 1
第２表　土器・陶磁器観察表…… 32
第３表　軒丸瓦・小丸観察表…… 43
第４表　軒平瓦観察表…… 43
第５表　丸瓦観察表…… 43
第６表　平瓦観察表…… 43
第７表　その他の瓦観察表…… 43
第８表　漆器観察表…… 83
第９表　箸・楊枝観察表…… 84
第10表　指物・折敷等観察表…… 85
第11表　切匙・擂粉木・杓子等観察表…… 85
第12表　柄杓・曲物・桶観察表…… 85
第13表　栓観察表…… 86
第14表　下駄観察表…… 86
第15表　櫛観察表…… 88
第16表　紡錘車観察表…… 88
第17表　刷毛・紐等観察表…… 88
第18表　バンバ・筵等観察表…… 88
第19表　棒材・棒状具観察表…… 88
第20表　人形・玩具観察表…… 89
第21表　不明品観察表…… 89
第22表　井戸材・井戸枠・水道の継手等観察表… 89
第23表　墨書・焼印・木札観察表…… 90
第24表　容器類観察表…… 112
第25表　暖房・調理具観察表…… 112
第26表　日用品・その他観察表…… 113
第27表　砥・砥石観察表…… 113
第28表　碁石観察表…… 114
第29表　石瓦・建材等観察表…… 114
第30表　煉瓦観察表…… 114
第31表　武器武具観察表…… 126
第32表　生産具等観察表…… 127
第33表　日用品等観察表…… 128
第34表　煙管観察表…… 129
第35表　銭貨観察表…… 130
第36表　鋳造関連遺物観察表…… 131
第37表　その他の遺物観察表…… 132
第38表　福井城跡出土の大型植物遺体分析（１） 134
第39表　福井城跡出土の大型植物遺体分析（２） 139
第40表　メロン仲間種子の大きさ…… 141
第41表　モモ各の大きさ…… 141
第42表　福井城跡出土具類一覧…… 143
第43表　福井城跡出土具類の最小個体数…… 143
第44表　福井城跡出土具類の遺体同定結果…… 144
第45表　福井城跡出土動物遺体一覧…… 146
第46表　福井城跡出土の動物遺体同定結果…… 147
第47表　16-４調査区土坑２から得られた
　　昆虫遺体…… 152
第48表　樹種同定結果一覧…… 156
第49表　漆塗膜分析結果表…… 160
第50表　中野馬場（調査地）の屋敷地名義の変遷 166
第51表　名前の記された遺物…… 166

第１章　土器・陶磁器

北陸新幹線建設工事にかかる発掘調査で出土した土器・陶磁器は、江戸時代を中心に中世末から近代初頭まで大量であるが、紙面の都合上その一部を報告する。遺物は街区・屋敷・遺構単位で整理し遺物図版・遺物観察表、遺物写真もそれに沿って編集した。図版は比較的時期に纏まりがある遺構出土遺物を提示したが、説明はそのなかでも遺構面の様相を示すものを生産地別に記載するに留め、ほかの遺物の詳細は観察表に譲った。なお遺物の説明は街区と屋敷別に遺構面ごとに上位層から行い、遺構の性格に関わりなく遺構番号順に行っている。

遺物の器種や時代は、伊万里・唐津焼は（九州近世陶磁学会2000）、瀬戸・美濃焼のうち福井城期以前は（瀬戸市2002）、以後は（瀬戸市2003）、越前焼は（福井県2016）、土師質皿は（福井県2015）に依拠し、それぞれを合せた時間軸を第１表に示した。

第１表　本書における土器・陶磁器時間軸



第１節　第Ⅰ街区の土器・陶磁器（第１～11図　第１表）

１）屋敷地Ⅰ-１・２の屋敷境溝

溝６-19・18

溝６-19（第１図）

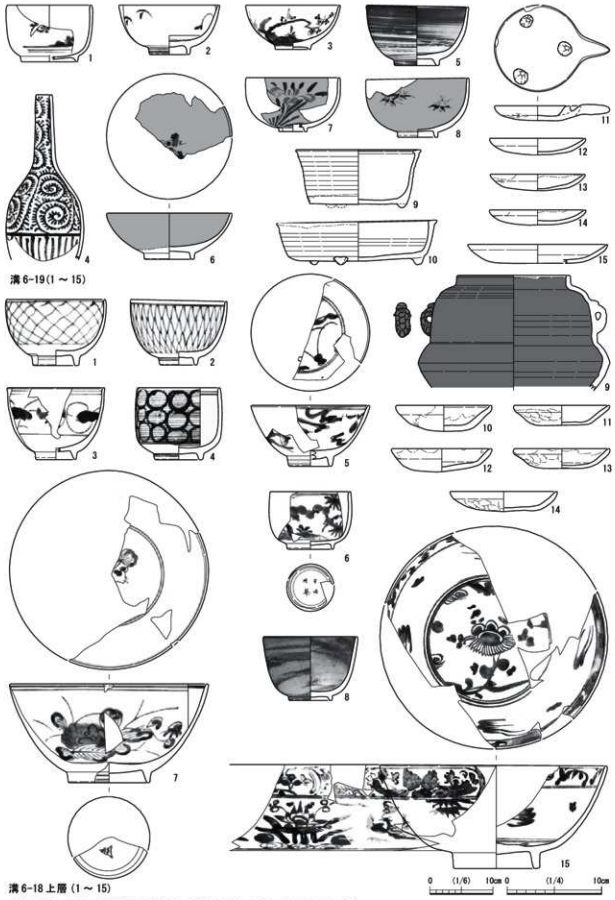
伊万里　１は外面に３本の圏線と風水文を描くⅤ期の碗で、それより口径の大きく、体部が外傾する２・３はⅣ期の碗である。３は外面に１同様、風水文を描く。４は外面に雑に唐草文と縦線を描く内面露胎の長頸瓶である。この文様構成はⅤ期に多く認められる。伊万里の年代は18世紀後半以降である。

唐津焼　５は灰釉系の釉の上に白化粧土を刷毛塗りして文様としたⅢ期の碗である。

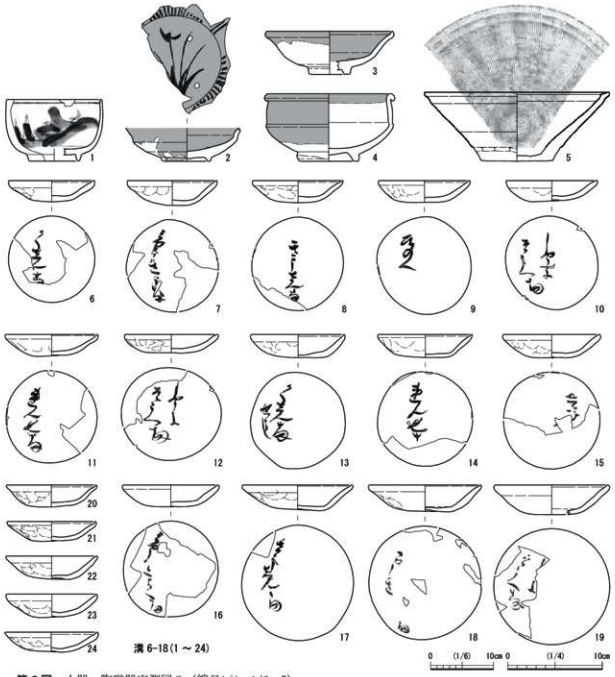
京・信楽焼　６～８は高台部露胎の色絵碗である。７は外面に緑色と紫色で菖蒲文、８は青色と茶色で笹文を描く。６は器高よりも口径の広い平碗で、見込中央に山水文を描く。

越前焼　９・10は18世紀末から大量に作られた一群で、口縁を横に伸ばし、体部に意識的に鉄泥を施す。深鉢と浅鉢があり、底面に粘土玉の低い脚を３箇所貼り付ける。いずれもⅦ-２期のものである。

土師質土器　内型成形のＧ系の皿で、11は見込に３つの突起を持つ把手付きの受け皿である。



第１図　土器・陶磁器実測図１（縮尺1/4　1/6：溝6-19-9・10）



第２図　土器・陶磁器実測図２（縮尺1/4　1/6：5）

溝６-18上層（第１図）

伊万里　１・２は外面に一重網目文を描くⅢ期、３は外面に蔓唐草文を描くⅡ期の碗である。筒型を呈する４は横書き細線の上に丸文を縦に描くⅡ期の碗である。５・７は器形が同じで、それぞれ外面に竜鳳凰文と牡丹文を描く。７は見込に瑞果文、裏面に一部を欠くが「大明」銘がある。ともにⅢ期のものであろう。６は溝19-１と同器形で、外面に松と思われる文様を描き、裏面に崩れた「宣明年製」銘を認める。Ⅳ・Ⅴ期に位置づくため混入品の可能性が高い。灰釉系の釉の上に白化粧土を刷毛塗りした８の碗は、６を除く伊万里に付随するⅢ期の唐津碗だが、裏面は露胎である。

瀬戸・美濃焼　９は口縁が直立して立ち上がり、体部下部が屈曲して膨らむ茶釜で、内外面に鉄泥を施す。左右に貼り付ける把手は松の実を模倣しており、中央に孔を認める。

土師質土器　10・11はＣ系３で、このほかに見込と立ち上がり部の境界に圏線を認める12のＤ系２、それが退化した13・14のＤ系３の土師質皿がある。

中国製　15は彰州窯の色絵の鉢である。赤色と緑色で外面に蓮池水鳥文、見込に草花文を描く。

溝６-18下層（第２図）

伊万里　１は外面に帆を持つ船と山で、やや崩れた山水文を描くⅢ期の碗である。

唐津焼　２は見込に胎土目痕があり、鉄絵で草花文を描くⅠ-２期、３は見込に砂目痕があるⅡ期の灰釉皿で、腰部が屈曲しロ縁端部を摘み上げる。４はロ縁が玉縁状で、腰部を鋭く屈曲させ稜を形成する火入で、腰部より上とロ縁内面に灰釉を施す。この資料もⅠ～Ⅱ期に収まると考える。

越前焼　５は擂鉢で、ロ縁部下が窪み、体部の櫛目が目立たない。Ⅵ-１期のものである。

土師質土器　裏面に墨書を記した土師質皿が一括で出土した。６～16のＣ系２と17～19のＤ系２で構成されるが、Ｃ系２には６・８・９・11・14などロ縁端部を摘み上げるものを認める。またＤ系２にも見込と立ち上がり部の境界の圏線が目立つものがある。なお各資料の墨書は観察表に示した。

２面目検出の溝出土遺物を上層・下層別に述べたが、大差はなく17世紀後半頃に纏まる。１面目の溝19は18世紀後半頃の遺物が主であることから、両溝の変遷が層序と遺物の両面から確認でき、各遺構面の年代および遺構もそれに伴うと理解できる。以下、その時期別に遺構の様相を述べる。

２）屋敷地１（１面目）

井戸２-４（第３図）

伊万里　１は体部が直線的に伸びる碗である。文様構成は複雑で、外側と内側の圏線内に列点文を配し、その内側に渦巻文を基調とした文様を描く。裏面に銘がある。近代に降るものである。

土坑６-38（第３図）

瀬戸・美濃焼　底部に穿孔を１箇所認める植木鉢で、高台にも切り込みを認める。銅緑釉を施した外面に牡丹文を貼り付け、その下部に鉄泥を刷毛で塗る。内面はロ縁付近を除き露胎である。

越前焼　小型の深鉢で底部中央に穿孔がある。これは焼成後に意図的に行ったもので、植木鉢として転用したことが分かる。体部上半に意識的に鉄泥を施す。植木鉢の使用はこの頃に増える。

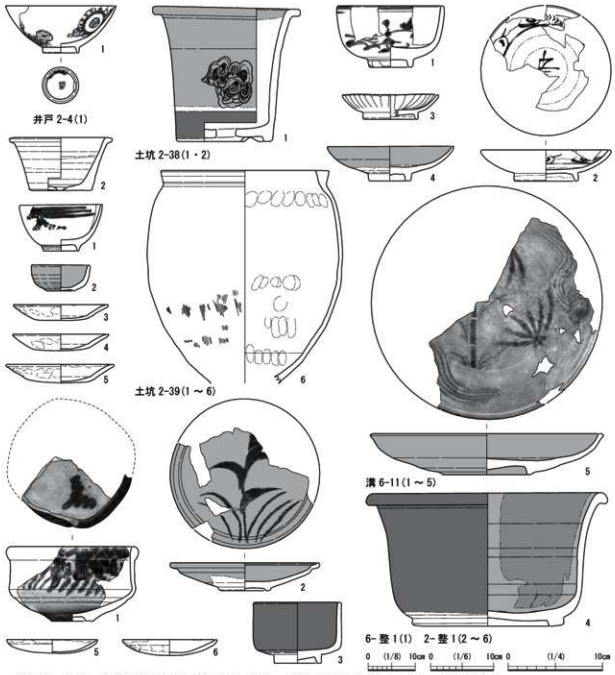
溝６-11（第３図）

伊万里　１は外面に草花文を描くⅤ期の波佐見産の陶胎染付碗である。２・４は波佐見産の皿である。２は内面に草花文を描き、蛇の目釉剥ぎした見込内に寿の文字を記す。２同様に見込を釉剥ぎする４は高台部露胎の青磁である。３は櫛目成形後に型押しして輪花皿とする。口縁部に口紅を施す。いずれもⅤ期のものであろう。５は青磁の皿で見込に印花竹文を認める。１～４と異なりⅢ期に降る。

整地土１（第３図）

唐津焼　１は体部が歪む沓形碗で、灰褐色の灰釉上に口縁部上面から鉄釉を垂らし掛け、外面に斜線文を施す。２は口縁部を屈曲させて摘み上げ、見込に鉄絵で草花文を描くⅠ-２期の皿である。

瀬戸・美濃焼　体部が直立気味に伸び筒型を呈する３は、高台を除き鉄釉を施す瀬戸黒碗である。露胎部は灰褐色でよく焼き締まる。大窯Ⅳ期のものである。４は水鉢である。外面に意図的に砂粒を付着させ、内面に透明釉の上から銅緑釉と白釉を垂らし掛けて装飾性を高める。上記の唐津焼等よりも時代は降る。Ⅰ期の唐津焼や大窯期の瀬戸・美濃焼があが、18世紀中頃から出現するＧ系の土師質皿等があるように時代は降り、１面目の遺構の年代とほぼ一致する。このことから新しい時期の遺構が構築された遺構面であることが理解できる。



第３図　土器・陶磁器実測図３（縮尺1/4　1/6：土坑2-38-2　2-整1-4　1/8：土坑2-39-6）

４）屋敷地２（第１面）

溝３-１（第４図）

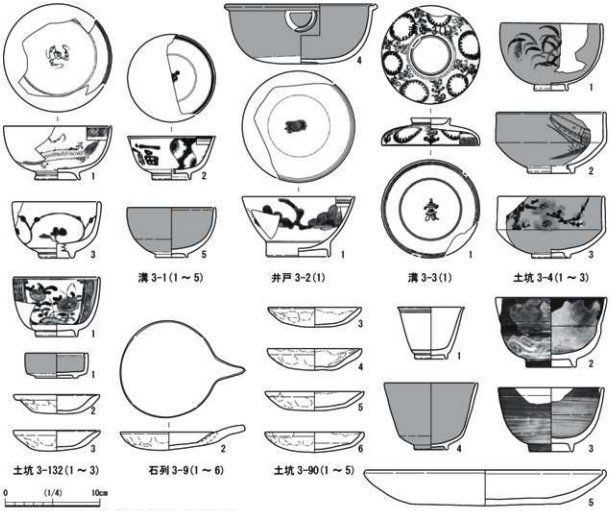
伊万里　１は外面に竜文、見込に崩れた花文を描くⅣ期の碗である。内面に四方襷文を認めるため18世紀後半に降る。２はやや外反した体部外面に福寿文を描く端反碗である。３は草花文を描く波佐見産の陶胎染付碗で、外器表面の発色はかなり暗い。ともにⅤ期のものである。

瀬戸・美濃焼　４は注口を持つ鍋で、ロ縁部に受け口を認める。上げ底の高台部を除き灰釉を施す。

京・信楽焼　５は体部が内湾する高台部露胎の無文の碗である。共伴遺物とほぼ同時代ものである。

井戸３-２（第４図）

伊万里　１はⅤ期の広東碗で、直線的な体部の外面に松樹文を描く。見込にもその文様を認める。



第４図　土器・陶磁器実測図４（縮尺1/4）

溝３－３（第４図）

伊万里　１は外面に内側に突起を持つ雪輪文間に寿と考える崩し字を縦列、内面に四方樽文を描くⅣ期の碗蓋で、見込にも寿の崩し字を認める。碗蓋は18世紀後半頃から認める。

土坑３－４（第４図）

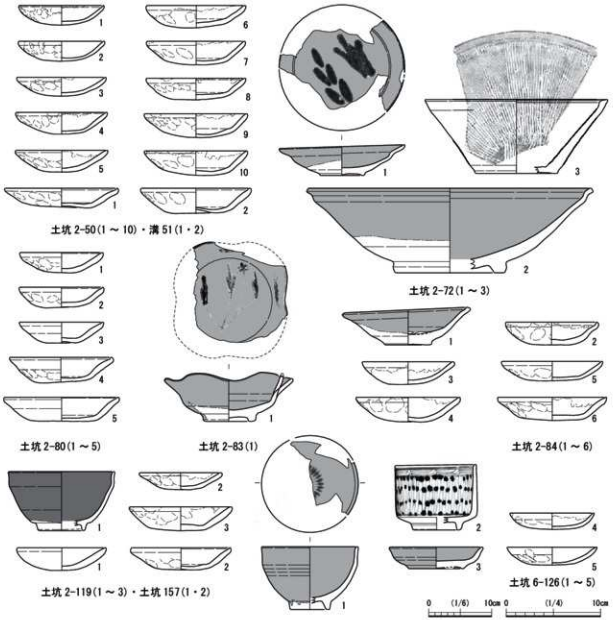
京・信楽焼　１～３は高台部露胎の灰釉系の碗である。１は器形が球体状で外面に薄文を描く。２・３は腰部が屈曲し、口縁部が直立する腰折碗で、それぞれ舟、梅枝文を描く。舟内は白泥である。

以上のように上記の各遺構にはⅣ・Ⅴ期の伊万里があり、18世紀中頃から量産される京・信楽系の碗を認めるようにⅠ街区屋敷地１の溝19出土遺物と同時期であることが分かる。

３）屋敷地１（２面目）

土坑２-50・51・80・84（第５図）

土師質土器　各土坑でC系２とD系２の土師質皿を認める。C系２は体部の歪みが顕著で見込と立ち上がり部の境界を強くナデ回す。口縁端部を摘み上げるものも認める。D系は土坑51のみ様相が異なる。各土坑のいずれも体部が歪むが、土坑51のみ見込の圏線が明瞭で口縁端部を摘み上げる一乗谷朝倉氏遺跡D類の成形技法をよく認める。土坑84ではC系２よりも見込の深い同系３が、見込に鉄絵で植物文を描くⅠ-２期の唐津焼の灰釉皿と共伴する。なおこの遺構と接する土坑119から、外面と口縁内に鉄釉、内面に透明釉を施す天目型のⅠ期の唐津焼の碗が出土している。



第５図　土器・陶磁器実測図５（縮尺1/4　1/6：土坑2-72-3）

土坑２-72（第５図）

唐津焼　１は見込に鉄絵で草花文を描くⅠ-２期の灰釉皿だが、文様が崩れる。２は口縁部が外反する腰部以下露胎の大皿である。口縁形態はⅠ期の様相を持つ。

越前焼　３の擂鉢は口縁部下に沈線がなく、体部の櫛幅目が目立たないⅥ-２期のものである。

土坑６-126（第５図）

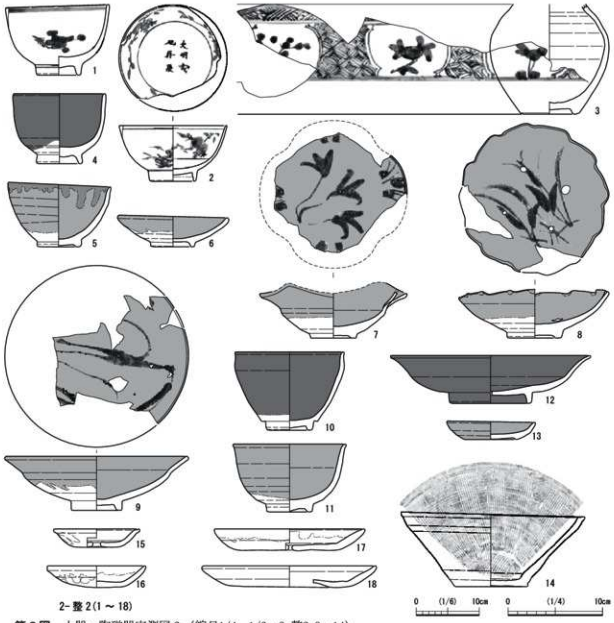
伊万里　１は口縁部が直立気味に伸びる高台部露胎の青磁碗で、見込に花文を描く。内面の釉は口縁部を除いて色調が薄い。２は一重網目文と列点文を描く半筒碗で、いずれもⅡ期のものである。

瀬戸・美濃焼　３は口縁部が外反する灰釉皿で、裏面に窯道具痕がある。大窯Ⅲ期のものである。

土師質土器　４・５ともC系２の土師質皿で、伊万里、瀬戸・美濃焼よりも時代が降る。

整地土２（第６図）

伊万里　１は外面に梅枝文、２は外面に草花文、内面に柘榴、見込に「大明成化年製」銘を描くⅢ期



第６図　土器・陶磁器実測図６（縮尺1/4　1/6：2-整2-9・14）

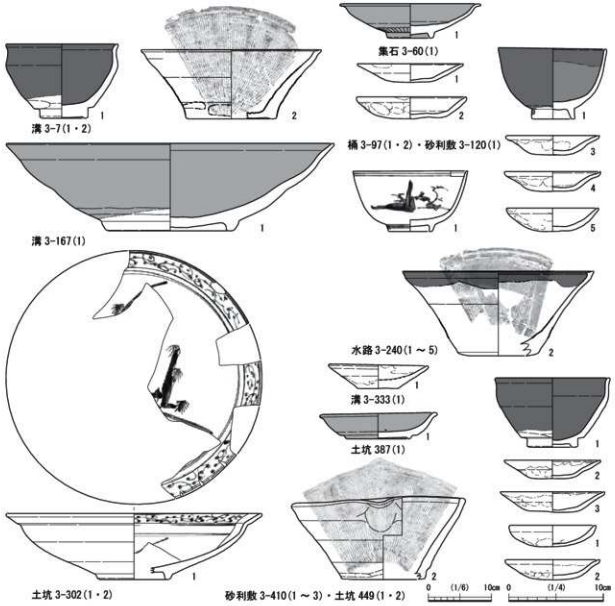
の碗である。３は密な花文の四方襷文内の円形状の窓内に草花文を描く瓶で、内面は露胎である。

唐津焼　４は体部が直立気味に伸びる鉄釉碗、５は丸みのある灰釉碗で、Ⅲ期とⅡ期のものである。６はⅠ期の灰釉皿、７は成形後に口縁の４隅を変形する絵唐津四方向付、８は輪花皿で、７・８は見込に草花文と笹文を描き、胎土目痕のあるⅠ-２期の皿である。９も見込に鉄絵のある同時期の皿である。

瀬戸・美濃焼　10は器高が高く、幅の広い直立気味の口縁端部が外反する連房Ⅰ期の天目茶碗、11は丸味を帯びる体部から僅かに外反する口縁部に至る丸碗で、腰部を除く内外面に青みがかった銅緑釉を施す。連房Ⅰ期のものである。12は高台裏を除く全面に鉄釉を施す端反皿である。胎土は緻密でよく焼き締まる。13は腰部で屈曲し直線的な口縁に至る大窯Ⅳ期の灰釉皿である。

越前焼　14の擂鉢は口縁上面が水平で沈線もない。体部の櫛目が目立つⅥ-２期のものである。

土師質土器　15はＣ系１の土師質皿で、見込中央を外面から穿孔する。17・18はＤ系の大型品で、器高は変わらないが、見込を広く平坦にして口径を増す。見込と立ち上がり部の境界に浅い圏線がある。



第７図　土器・陶磁器実測図７（縮尺1/4　1/6：溝3-7-2・水路3-240-2・土坑3-302-1・2）

５）屋敷地２（２面目）

溝３-７（第７図）

瀬戸・美濃焼　１は天目茶碗である。器高が高く、幅の広い直立気味の口縁端部が外反する。内外面の茶褐色の鉄釉上に黒褐色の鉄釉を筒で掛け流し装飾性を高めている。連房Ⅰ期のものである。

越前焼　２は体部がやや外反する擂鉢で口縁部下に沈線がなく、体部の櫛目が目立たない。

水路３-240（第７図）

伊万里　１は外面に蓬莱文を描くⅢ期の碗である。

唐津焼　２は口縁内外面のみに鉄泥を施すⅡ期の擂鉢で、口縁内側に小さな突起を形成する。

土師質土器　体部が強く外反する３・４は、口縁端部を摘み上げるＣ系１の土師質皿である。

土坑３-302（第７図）

伊万里　１は体部が丸みを帯び、口縁で屈曲する大皿で、幅の広い口縁内面に唐草文、見込に松と思われる樹木文を描く。口径に対して高台径の小さいことが特徴のⅡ期の初期伊万里である。

越前焼　２は片口が付く擂鉢で、体部が内湾気味に立ち上がる。Ⅵ-２期のものである。

砂利敷３-410（第７図）

瀬戸・美濃焼　１の天目茶碗は、器高が高く、幅の広い直立気味の口縁端部が外反する。この碗にも内外面の茶褐色の鉄釉上に黒褐色の鉄釉を筒で掛け流すが装飾性は少ない。連房Ⅰ期のものである。

土師質土器　２・３ともＤ系２の土師質皿で、見込と立ち上がり部の境界に浅い圏線を認める。

このほかに特徴的な遺物を集石３-60 と砂利敷３-120で認める。前者は見込に砂目痕のあるⅡ期の唐津焼の皿で、全体的に器壁が薄く、口縁端部を横に引き出す。透明釉を全面に施すが、胎土が灰白色であるため器面はやや黄色を帯びる。腰部に工具痕がみられる。後者は瀬戸・美濃焼の高台部露胎の丸碗で、外面と口縁内面に鉄釉、内面に灰白色の灰釉を掛け流し装飾性を高める。連房Ⅱ期のもので出土数は少ない。溝３-333からは見込全面に灯明痕のある唐津焼の皿が出土している。

６）３面目

溝２-63（第８図）

唐津焼　１は灰釉碗で、外面の灰釉上に鉄釉を僅かに認める。２は外面の露胎部に煤が付着した灰釉皿である。３は成形後に口縁の４隅を変形するⅠ期の絵唐津四方向付で、見込に草花文と胎土目痕を認める。４は口縁の一部を変形させる片口の灰釉鉢で、見込に胎土目痕がある。

瀬戸・美濃焼　５は天目茶碗の小型品で、幅の広い直立気味の口縁端部が外反する。連房Ⅰ期の天目茶碗と形態が似る。６は体部が内湾気味に伸びる灰釉皿で、大窯Ⅳ期頃のものである。

越前焼　７は擂鉢で口縁上面が内傾する。口縁部下に沈線がなく、体部の轆轤目も目立たないⅥ-２期のものである。また口縁上面が内傾し、内外面に段、内面に櫛目を認める備前焼の擂鉢もみられる。

土師質土器　９・10はＣ系１、11はＣ系２の土師質皿である。９・10は口縁端部を摘み上げ、一乗谷朝倉氏遺跡Ｃ類の成形技法をよく認める。12はＤ系２である。

土坑２-184（第８図）

伊万里　１・２は口縁部が屈曲する天目型の碗で、外面にそれぞれ筋彫を施す。１は３条の筋彫内、２は１条の筋彫内に福寿字を描くⅡ-１期のものである。３は体部の立ち上がりがやや強い碗で、外面に瑞果文を描く。４は白磁碗で高台内に圏線を認める。ともにⅡ期に収まる。５・６は香炉である。５は体部が垂直に立ち上がり、外面に山水文を描く。漆継ぎを認める。６は丸く張り出した体部と直線的な頸部を持ち、口縁部を横に引き出す。ともに口縁内面は露胎ではない。Ⅱ期頃のものであろう。

唐津焼　７は砂付き高台の裏を除く全面に灰釉系の釉を施す碗、８は腰部以下露胎の灰釉の坏で、７はⅡ期のものである。ともに兜布がある。９は見込に砂目痕を認めるⅡ期の灰釉皿で、これに口縁部が輪花状のⅠ期の灰釉系の皿が伴う。この両皿は同形態でセット関係と理解できる。12も腰部以下露胎の灰釉系の大皿である。13は鉢か火入であろう。全面に施す灰釉系の釉上に鉄絵で草花文を描く。14は大型の鉢である。体部が途中でやや屈曲し、口縁部に直角の受部、高台に四角形の抉りを認める。全面に灰釉系の釉を施し、見込に鉄釉と銅緑釉で草花文を描く。Ⅱ期の二彩唐津である。

瀬戸・美濃焼　15は見込の釉が削がれて露胎となる灰釉の内禿皿である。大窯Ⅳ期のものである。

中国製　16は彰州窯の皿である。内面に草花文、見込に寿の文字を描く。高台裏に工具痕がある。

越前焼　17の擂鉢は口縁上面が水平で、口縁部下に沈線がない。体部の轆轤目が目立つなど新しい属性も一部認めるが、17世紀中葉には収まるものである。

土師質土器　18～20はＣ系１、21～25はＤ系２の土師質皿である。

瓦質土器　26は火炉である。轆轤成形で内湾気味に立ち上がる体部を形成する。体部外面のミガキは顕著である一方、内面は目立たず露胎に近い。３脚を貼り付けるが欠損する。

溝２-201（第９図）

伊万里　１は体部の立ち上がりがやや強いⅡ-２期の碗で、外面に宝草華唐草文を描く。

唐津焼　２は体部が直線的に延びる全面露胎の皿で、底に回転糸切り痕が残る。形態と胎土から唐津焼と判断できる。３は見込に鉄絵で簡略化した草花文を描き、砂目痕のあるⅠ-２期の皿である。

瀬戸・美濃焼　３の天目茶碗は、器高が高く、幅の広い直立気味の口縁部の端部が外反するが、ほかのものと異なり、横への引き出しが大きい。連房Ⅰ期のものである。

越前焼　４は口縁上面が水平で、口縁部下に沈線がないなど土坑184出土遺物とほぼ同形態の擂鉢である。体部の轆轤目が目立たないⅥ-２期のもので、17世紀中葉に収まる。

土師質土器　７のＣ系２を除きＤ系２の土師質皿である。６は把手を貼り付けた受け皿で、Ｇ系と違い見込に突起を認めない。ほかの皿より見込が深く、見込と立ち上がり部の境界の圏線も明瞭である。

溝２-207（第９図）

唐津焼　１は絵唐津四方向付であろう。見込に鉄絵で草花文を描くⅠ-２期のものである。

瀬戸・美濃焼　２は成形後に口縁を変形する志野織部向付で、体部が内側に強く屈曲する。内面に列点文や渦巻文をランダムに密に施し、見込に草花文を描く。底部に半円状の脚を貼り付ける。

土師質土器　３～６はＣ系２の土師質皿である。全て口縁端部を摘み上げる。

土坑２-352（第９図）

備前焼　１は擂鉢で、外傾する口縁外面に２条の段を持ち、口縁上面がやや窪み内傾する。体部外面と異なり内面には成形痕が筋状に残り、直角に交差した櫛目を認める。これにＣ系の土師質皿が伴う。

土坑２-359（第９図）

土師質土器　１・２はＣ系２、３・４はＤ系２の土師質皿で、４は底部を広めに穿孔する。５は器壁がやや厚めで、見込と立ち上がり部の境界の圏線が明瞭なＤ系１の大皿である。

土坑３-303（第10図）

瀬戸・美濃焼　１は外反する口縁部の端部を横に引き出す志野皿である。全面に釉を施すため、裏面に溶着防止の円形状の窯道具の痕を３箇所認める。大窯Ⅳ期のものである。

越前焼　２の擂鉢は口縁上面が水平で、口縁部下に沈線がない。体部の轆轤目が目立たないⅥ-２期のもので、17世紀中葉に収まる。これに同時期の３・４のＣ系１、５～７のＣ系２の土師質皿が伴う。

井戸３-439（第10図）

瀬戸・美濃焼　１は口縁部が直線気味に伸びる皿、２は菊皿でともに裏面に窯道具痕がある。いずれも全面に志野釉を施す大窯Ⅳ期のもので、特に後者の窯道具痕は円形状のものを３箇所認める。これらに３-303出土品と同属性のⅥ-２期頃、17世紀中葉に収まる越前焼の擂鉢が伴う。

井戸３-451（第10図）

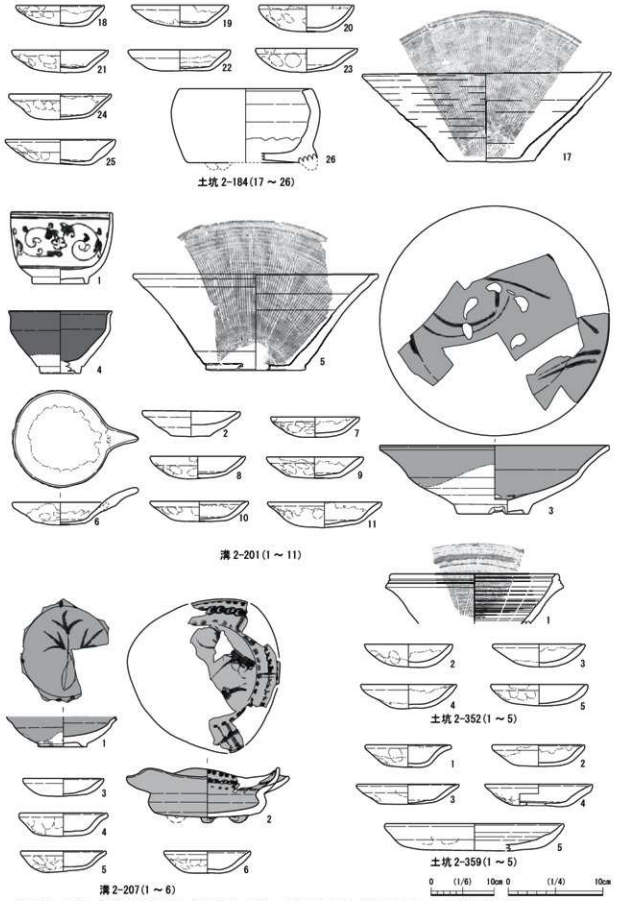
越前焼　１は口縁端部を僅かに横に引き出す壺である。Ⅵ期以降のものと異なり鉄泥を認めない。２の擂鉢は口縁下部に僅かに沈線が巡る。３は体部が内湾気味の浅鉢で、口縁部が丸みを帯びる。

土坑３-547（第10図）

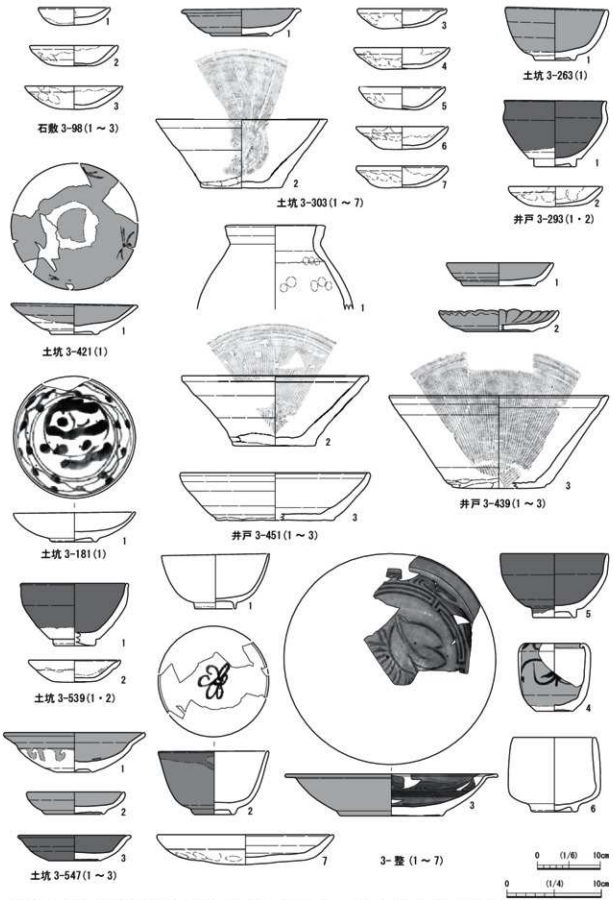
唐津焼　１は腰部が緩く屈曲する灰釉皿である。見込に胎土目痕を認めるⅠ期のものである。

瀬戸・美濃焼　２は体部が内湾気味に伸びる灰釉皿、３は見込の釉が削がれて露胎となる鉄釉の内禿

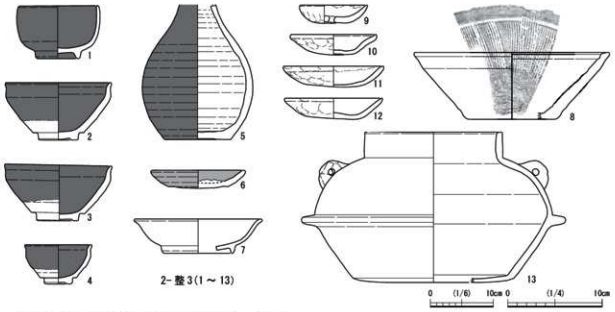
第８図　土器・陶磁器実測図８（縮尺1/4　1/6：溝2-63-7・8）



第９図　土器・陶磁器実測図９（縮尺1/4　1/6：土坑2-184-17　溝2-201-3・5　土坑2-352-1）



第10図　土器・陶磁器実測図10（縮尺1/4　1/6：土坑3-303-2　井戸3-439-3　井戸3-451-1～3　3-整-3）



第11図　土器・陶磁器実測図11（縮尺1/4　1/6：8）

皿である。福井城跡出土の瀬戸・美濃焼には鉄釉の皿は少ない。大窯Ⅳ期のものである。

整地土３（第11図）

瀬戸・美濃焼　１は全面に鉄釉を施す連房Ⅰ期の碗である。２・３は大窯Ⅳ期の天目茶碗で、連房期のものより器高が低く器壁が厚い。２は茶褐色の鉄釉上に黒褐色の鉄釉が垂れ掛かるが、意図的な装飾ではない。４の小型の天目茶碗は２などと比べて器高が高いが、同時期のものであろう。５は瓶で２と異なり、鉄釉を掛け分け装飾性を高める。裏面も釉を施すため円形状の窯道具痕が３箇所ある。内面にも鉄泥を施す。６は見込に漆が付着する灰釉皿で、裏面に窯道具痕を認める。大窯Ⅲ期のものである。

中国製　７は白磁の端反皿で、高台端部は露胎である。16世紀後半頃の普及品である。

越前焼　８は擂鉢で口縁上面が内傾し、口縁部下に明瞭な沈線を認める。口径に対して器高が低い。体部の櫛幅目の目立たないⅤ-３期頃のものと思われる。

土師質土器　９は口縁部が指押さえでやや歪むＢ系の土師質皿で、底部中央に穿孔を認める。10は口縁部はやや歪むがＣ系１、11・12はＤ系１と思われる。Ｄ系の見込には圏線を認める。

瓦質土器　13は茶釜で、やや強く丸みを帯びる体部中央に水平な羽部があり、その上半に穿孔を施した半円形状の把手を貼り付ける。外面にミガキを認めるが、内面は露胎である。

このほか16-３調査区の整地土出土遺物について述べる（第10図）。

伊万里　１は白磁だが、外面にミガキ状の山水文がみられるⅢ期の碗である。２は外面全体に鉄釉を施す碗で、見込に崩れた花文を描く。裏面に大きめの砂粒が付着する。Ⅱ-２期のものである。３は青磁の皿で、見込に蓮池文を彫り込む。裏面に蛇の目有剥ぎを認めるⅢ期頃のものである。

唐津焼　４は碗で、兜布のある裏面を除き鉄釉を施す。Ⅲ期頃のものである。５は口縁端部を内側に巻き込む灰釉系の無頸壺で、外面に鉄絵で唐草文を描く。底部外面と内面は露胎である。

軟質施釉陶器　６は胎土が赤褐色の軽量の碗で、外面は濃い赤褐色である。内面に鉄釉を施す。軟質施釉陶器は福井城跡でも量は少ないが確認できる。

土師質土器　７は見込と立ち上がり部の境界の圏線が明瞭な大型のＤ系の土師質皿がある。器高はほかのものと差がないが、底部を平坦に広く成形して口径を増している。

第２節　第Ⅱ街区の土器・陶磁器（第12～14図　第１表）

１）屋敷地２（１面目）

土坑４-164（第12図）

唐津焼　１は灰釉系の釉の上に白化粧土を刷毛塗りして文様としたⅢ期の碗で、高台端部に砂粒が付着する。２・３も同じⅢ期の刷毛塗り碗だが、１が釉薬の濃い灰褐色であるのに対して黄褐色であるため白化粧の装飾性は希薄である。なお、２は外面の一部に銅緑釉で文様を描き、３は体部が湾曲する。

瀬戸・美濃焼　４は成形時に上半部の轆轤目を意図的に目立たせ、その後に同箇所を複数回ます挙骨碗で、灰釉を口縁外面と内面、その箇所を除く外面と高台裏に鉄釉を施す。連房Ⅲ期のものである。５は腰部を屈曲させ、垂直気味に体部を立ち上げる腰折碗で、灰釉上に呉須で雷文を描く。

京・信楽焼　６～12は全て高台部露胎の碗である。形態は３つに分かれる。６・７は成形時に体部中央を窪ませる。ともに見込に目痕があり、前者は外面に鉄絵で松、後者は山水文を描く。また裏面には墨書を認める。10は腰部を屈曲させ、垂直気味に体部を立ち上げ、外面に梅木と家並みを描く。残りの４点は体部が丸みを帯びる。８は無文で、９は遠景、10は女郎花、11は松を描く。また８も裏面に墨書を認める。墨書を記した碗は３点あるが、その場所は裏面でも端に位置し大きさも小さい。

土師質土器　内型成形のＧ系の土師質皿で器高が低い。15は底部に板状痕を認める。

土坑７-13（第12図）

伊万里　１～３は同形態の碗で、１は外面に斜格子で構成する窓内に花文を密に描き、見込に五弁花文を認める。２は斜格子と半菊状の文様を描くが、半菊文は１単位ごとに向きが異なる。見込に寿の崩し字がある。３には稲束を描くが、稲束は１つと２つで１単位となる。見込に円内に十字を描いた文様を認める。４は端反口縁の坏である。窓内に３つの丸文がある。全てⅣ期以降のものであろう。

土坑７-28（第12図）

唐津焼　１は碗で腰部以下を除き藁灰釉を施す。２は見込に胎土目痕を認めⅠ期の灰釉皿である。

瀬戸・美濃焼　３は天目茶碗で、幅の広い直立気味の口縁端部が外反する。内外面の茶褐色の鉄釉上に黒褐色の鉄釉を筒で掛け流すが、装飾性は少ない。連房Ⅰ期のものである。

土坑７-51（第12図）

伊万里　１は体部中央が僅かに窪む青磁香炉で、口縁部を水平に内側に引き出す。底部は周囲を円形状に削り出し、外面に葉を表した３脚を貼り付ける。内面と底部中央は露胎である。

瀬戸・美濃焼　２は瓶で外面には鉄釉を施すが、内面と裏面は露胎である。裏面に墨書を記す。

京・信楽焼　３は高台部露胎の無紋の碗で、体部が直線的に伸びる。

土師質土器　ともに内型成形のＧ系の土師質皿で、器高が高い。ほかの遺物と年代は一致する。

土坑４-166（第12図）

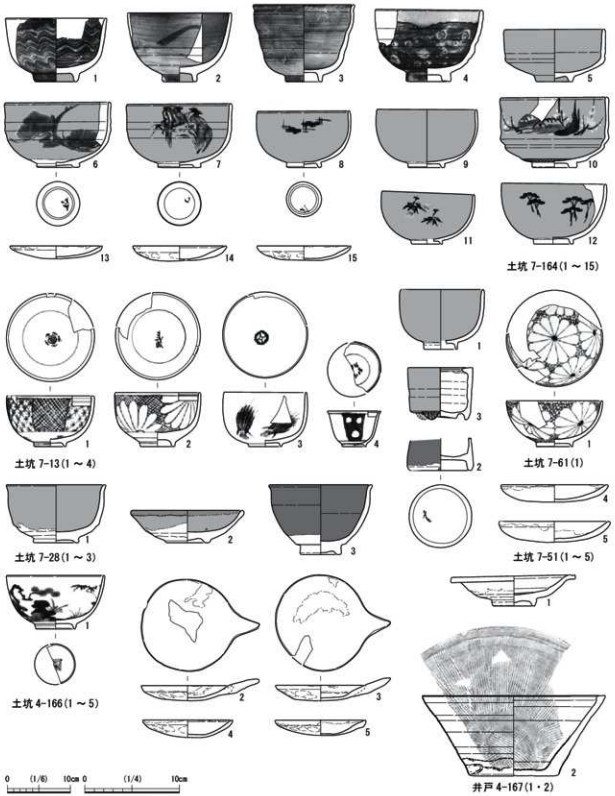
伊万里　１は外面に庭園を描く碗で、裏面に「福福」銘を認める。Ⅳ期でも古い様相を呈する。

土師質土器　２・３はＤ系２の受け皿である。２は見込と立ち上がり部の境界の圏線が痕跡的であるが、３は認めないためやや新しいものと考える。４・５はＣ系２で、５は口縁端部を摘み上げる。

井戸４-167（第12図）

唐津焼　１は見込に砂目痕のある灰釉皿で、内湾気味に伸びる体部から水平に引き出した口縁部に至り、端部を摘み上げる。灰釉の発色は明るく、裏面に兜布を認める。Ⅱ期のものである。

越前焼　２は口縁上面が水平で、口縁部下に沈線がないⅥ-２期の擂鉢である。



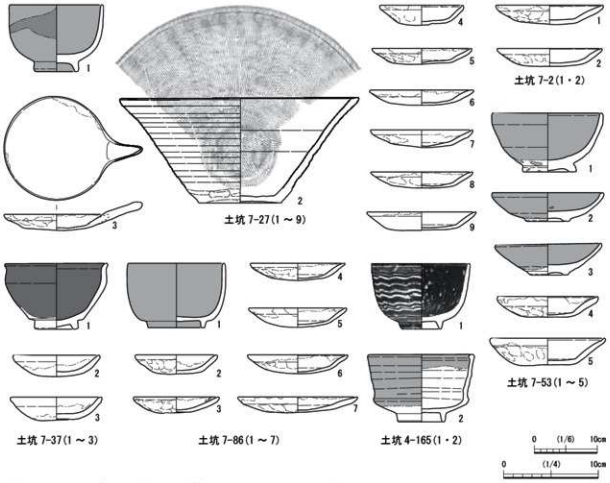
第12図　土器・陶磁器実測図12（縮尺1/4　1/6：井戸4-167-2）

２）屋敷地２（２面目）

土坑７-27（第13図）

唐津焼　１は全面に施した透明釉の上から、外面のみに銅緑釉を垂らし掛けるⅢ期の碗である。

越前焼　２の擂鉢は口縁上面が水平で、口縁部下に沈線がない。底部から口縁に至るまでの器厚が大



第13図　土器・陶磁器実測図13（縮尺1/4　1/6：土坑7-27-2）

きく変わらない特徴があり、体部の轆轤目が目立つ。Ⅵ-２期のものである。

土師質土器　４のＣ系２以外、全て見込と立ち上がり部の境界の圏線を認めないＤ系３土師質皿で、３は見込に突起がない器高の低い受け皿である。４・７は口縁端部を摘み上げる。

土坑７-53（第13図）

唐津焼　１は灰釉碗である。２・３は灰釉皿で、２は見込に胎土目痕を認める。全て腰部以下露胎で裏面に兜布がある。皿には口縁端部に鉄釉を施す。いずれもⅠ期のものであろう。

土師質土器　４・５ともＤ系２の土師質皿で、見込と立ち上がり部の境界の圏線が目立つ。

土坑７-86（第13図）

唐津焼　１は全面に透明釉を施したⅢ期の碗で、これにＣ系２とＤ系２の土師質皿が伴う。

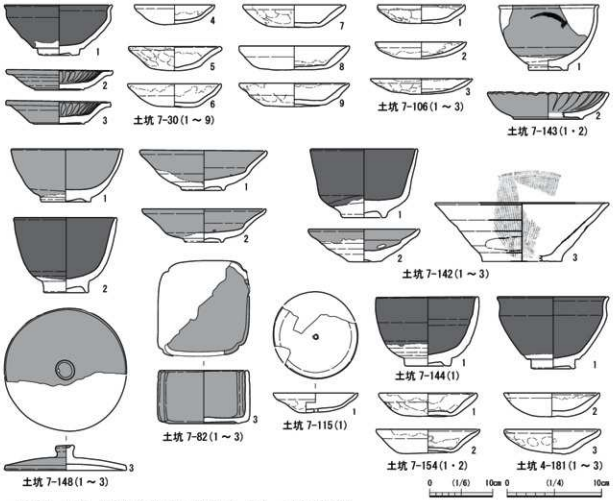
土坑４-165（第13図）

唐津焼　１は灰釉系の釉の上に白化粧土を刷毛塗りして文様としたⅢ期の碗である。２の香炉は体部外面の轆轤目が顕著で、外面と口縁内面に灰釉を施す。腰部の屈曲部分がやや張り出し、口縁は玉縁状を呈する。腰部以下と内面は露胎で、見込に円形の砂目痕を認める。椀とほぼ同時期のものであろう。

３）屋敷地２（３面目）

土坑７-30（第14図）

瀬戸・美濃焼　１は口縁部が外反する器高の低い天目茶碗である。２・３は見込の釉が削がれて露胎となる灰釉の内禿皿で、内面をヘラで溝状に削ぎ、裏面に窯道具痕を認める。大窯Ⅳ期のものである。



第14図　土器・陶磁器実測図14（縮尺1/4　1/6：土坑7-142-3）

土師質土器　４のＣ系２以外は全てＤ系２の土師質皿で、７～９は口縁に歪みを認めるが、Ｄ系１の特徴である見込と立ち上がり部の境界の圏線が明瞭であるという古い様相が残る。

土坑７-82（第14図）

唐津焼　１は藁灰釉、２は灰釉系の釉を施す皿で、見込に胎土目痕のあるⅠ期のものである。

瀬戸・美濃焼　３は全面に志野釉を施す型打ち成形の向付で、平面は正方形である。底部中央を円形状に僅かに削り出し高台状とする。底部には円形状の窯道具痕を数点認める。連房Ⅰ期のものである。

土坑７-142（第14図）

唐津焼　１は体部が直線的に立ち上がり、腰部に鉄泥を施す鉄釉碗、２は見込に砂目痕のある灰釉皿で、回転糸切り痕のある底部の中央を削り窪ます。ともにⅡ期のものである。

越前焼　３の擂鉢は口縁上面が水平で、口縁部下に沈線がない。唐津焼と同じ年代であろう。

土坑７-148（第14図）

唐津焼　１は腰部以下露胎の灰釉碗、２は高台部露胎の鉄釉碗で、ともにⅡ期のものである。３は中央に向け器高が徐々に高くなる蓋で、摘みを貼り付ける。表面に灰釉を施すが、裏面は露胎である。

土坑４-181（第14図）

瀬戸・美濃焼　１の天目茶碗は、器高が高く、幅の広い直立気味の口縁端部が外反する。連房Ⅰ期のものである。これに２・３のＣ系２の土師質皿が伴う。

第３節　第Ⅲ街区の土器・陶磁器（第15～20図　第１表）

１）屋敷地１・２の区画溝

溝５-４（第15・16図）

伊万里　１は外面に３本の圏線を交差させる格子文を描くⅤ期の小振りの碗である。４～８は内湾気味に立ち上がる碗だが、６は器壁が厚くくらわんか碗の様相がみられる。外面に４は草花文、５は牡丹唐草文、６は矢羽根文、７は松竹梅文、８は斜格子文内に鞠菊文を描く。また５は内面に四方襷文、見込に松竹梅文を認める。６の見込には寿の崩し字がある。２・３は上記と形態の異なる碗で、後者は高い高台が外側に伸びる。２は外面に草花文と渦福文、３は雷雲を伴う牡丹唐草文と雷文を描く。９は外面に緻密な華唐草文、内面に四方襷文、見込に松竹梅文を認めるなど、５と一部の文様構成が似る。10～12は端反碗である。10は鋸歯文を含む円形文、11は貝と網状の文様、小型品の12は山水文を外面に描く。13は広東碗で見込に４箇所の目痕があり、外面に山水文を描く。14・15は輪花皿で、15は型作りである。14は火を受けているが、見込に山水文を描き、口縁端部に口紅を施す。15は内面を呉須で青色に埋め、見込に草花文を描く。16の蓋は外面に葵唐草文、内面に四方襷文と松竹梅文を描く。17は火入である。外面に桐葉を描き、内面は口縁部を除き露胎である。底部は蛇の目凹型高台である。18は段重で外面に龍と宝珠文および鋸歯文が描く。口縁内面と腰部の段内部が露胎である。19は八角鉢である。外面と見込にサザエ文、内側に渦巻文を描く。

唐津焼　20はⅠ期の灰釉碗である。21は立ち上がりの低い扁平な高台以下露胎の灰釉皿で、唐津焼と判断した。22は口縁部が内外に水平に張り出す灰釉系の甕で、口縁上面に白化粧を轆轤回転で施し、体部上半に波状文で装飾性を持たせる。体部下半と内面、裏面に鉄泥を施すⅢ期のものである。

瀬戸・美濃焼　23は天目茶碗である。器高が高く、幅の広い直立気味の口縁端部が外反する。内外面の茶褐色の鉄釉上に黒褐色の鉄釉を筒で掛け流し装飾性を高めている。連房Ⅰ期のものである。24は腰部が屈曲する腰部以下露胎の碗である。内外面に鉄釉を施すが、上下で濃淡を変え装飾性を高める。25は全面に貫入を認める灰釉を施す端反皿、26は灰釉系の壺蓋で、内面が露胎である。

京・信楽焼　28は土瓶で、白釉の上から雀と野草を描き、注口と把手を貼付ける。

九谷焼　27は色絵碗で、外面に赤色と緑色で花鳥文を描き、口縁外面に緑色の格子文を認める。

三田焼　29は型押しの青磁の六角鉢で、外面に草花文を表出し、内外面に瓢箪文を焼き付ける。

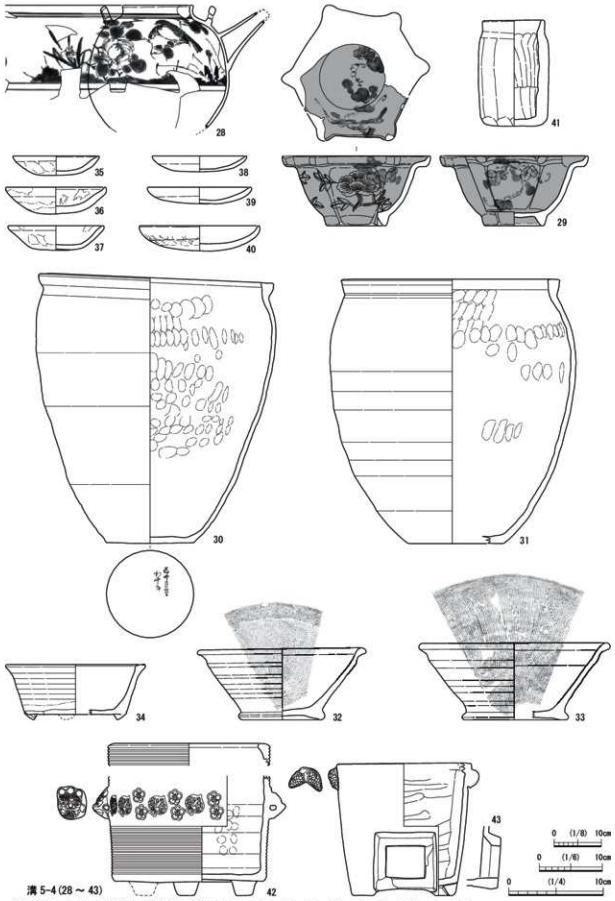
越前焼　30・31はねじたて技法で成形された中甕で、内面に粘土帯の継ぎ目と指頭圧痕を認める。30は裏面に墨書を記す。Ⅶ-２期のものである。32・33は擂鉢である。口縁部が外反し、横に伸びる貼り付け高台を持つ。体部の轆轤目が顕著なものである。34は口縁が横に伸び、体部に鉄泥を施す浅鉢で、底面に粘土玉の低い脚を３箇所貼り付ける。いずれもⅧ-１・２期のもので、18世紀末以降に認める。

土師質土器　35・36はＣ系２、37はＤ系２、ほかはＧ系の土師質皿と、時代の異なるものがある。41は焼塩壺で外面を縦に削る。体部上半に正方形の刻印があるが、文字は明瞭でなく判読はできない。

瓦質土器　42は火炉である。口縁外面と体部下半に複数状の沈線を巡らし、その間に葵と桜の印花文を認める。両側面の把手は型作りの獅子である。内面に指頭圧痕を認める。底部に円形を呈する３脚を貼り付ける。43は素焼の板作りの七輪で、内面４隅に成形のナデを認める。平面形態は方形で、中が円形状である。火口は方形状に張り出す。把手は松の実を２つ連結させたものであろう。

出土遺物は、伊万里はⅣ期でも内面に四方襷文を認める18世紀後半以降のものが多く、越前焼や土師質皿、京・信楽焼や九谷焼のほか、三田焼等、新しい様相の遺物を多く伴う。

第15図　土器・陶磁器実測図15（縮尺1/4）



第16図　土器・陶磁器実測図16（縮尺1/4　1/6：32・33・34・42・43　1/8：30・31）

２）屋敷地１（１面目）

土坑４-３（第17図）

伊万里　１はⅣ期の小振りの碗、２～４は内湾気味に立ち上がる同形態の碗である。２は矢羽根文、３は外面に竹と筍、４は草花文を描く。４は見込に崩れた五弁花文を認める。５は２つ連結させた鞠と瑞果文を外面に描く碗で、内面に四方襷文を認める。６～９は端反碗である。６は外面に花鳥文、見込に花文を描き、内面に呉須を波状に施す。７は外面の文様を麒麟と鳳凰、芭蕉文で構成する。内面は白抜きの円形内に福・珠の字を交互に描き、見込の雷文内には麒麟がみられる。また裏面には「五良太甫是祥瑞造」の銘がある。８は樹木で区切った窓内に松文を描く。５同様、内面に四方襷文を認める。９は濃淡のある呉須で三角形の文様を口縁部と底部に巡らせ、その間に柊文を描く。内面は直線で区切った呉須内に交差文があり、見込には葉文を円形状に配する。10は蛇の目凹型高台の皿で、外面に唐草文、内面に樹木文を描き、見込に五弁花文を認める。11は小型の皿で、外面と内面と見込に簡略化した花文を描く。12は頸部が内湾気味に立ち上がる内面露胎の瓶で、外面に笹文と思われる文様を描く。

瀬戸・美濃焼　13は端反碗で外面に細い筋状、口縁内面に波状に呉須を流し掛ける。14は中甕で、内外面に茶褐色の鉄釉を施すが、外面は黒褐色の鉄釉を筒で掛け流し装飾性を高めている。見込も施釉するため砂目痕が円形状に残り、露胎の裏面には墨書を認める。

京・信楽焼　15は腰部が屈曲し、内傾して直線的に立ち上がる腰折碗である。16は注口を欠く杓である。台形状の把手の内側を同形状に抉り上から下に穿孔する。17も笏で、口縁部は内側に窄まり、屈曲する肩部に注口と把手を貼り付ける。腰部以下露胎で、見込に３箇所目痕がある。いずれも灰釉系の釉を施す。18は口縁部に蓋の受け口を持ち、注口と輪状の把手を貼り付けた行平で、屈曲する腰部上半に鉋目を密に施す。腰部を除く外面と内面に灰釉を施す。19は信楽の灰釉系の土瓶で、外面に白色のイッチンで亀を描く。内面と高台部が露胎で、底面に外側に踏ん張る小さな３脚を持つ。20は摘みを貼り付ける灰釉系の土瓶の蓋で、口縁外面と内面を除き露胎である。

越前焼　21は体部に意識的に鉄泥を施す浅鉢で、底面に粘土玉の低い脚を３箇所貼り付ける。

土師質土器　22・23とも内型成形のＧ系の土師質皿で、ほかの遺物と年代は一致する。

溝４-７（第18図）

伊万里　１はくらわんか系のⅣ期の碗で、外面にコンニャク印判で松と鶴丸を施す。

京・信楽焼　２は高台部露胎の灰釉系の半筒碗で、外面に錆絵で崩れた文字と草花文を描く。

土坑４-15（第18図）

伊万里　１はくらわんか系のⅣ期の碗で、外面に渦巻文を含む草花文を描く。２は口径の小さい筒型碗で、外面に清朝風の鶴と波を描く。両者とも裏面に銘を認める。

越前焼　３は体部に意識的に鉄泥を施す深鉢である。体部外面に轆轤目が顕著に残り、口縁端部が外傾するⅨ期のもので、底面に粘土玉の低い脚を３箇所貼り付ける。

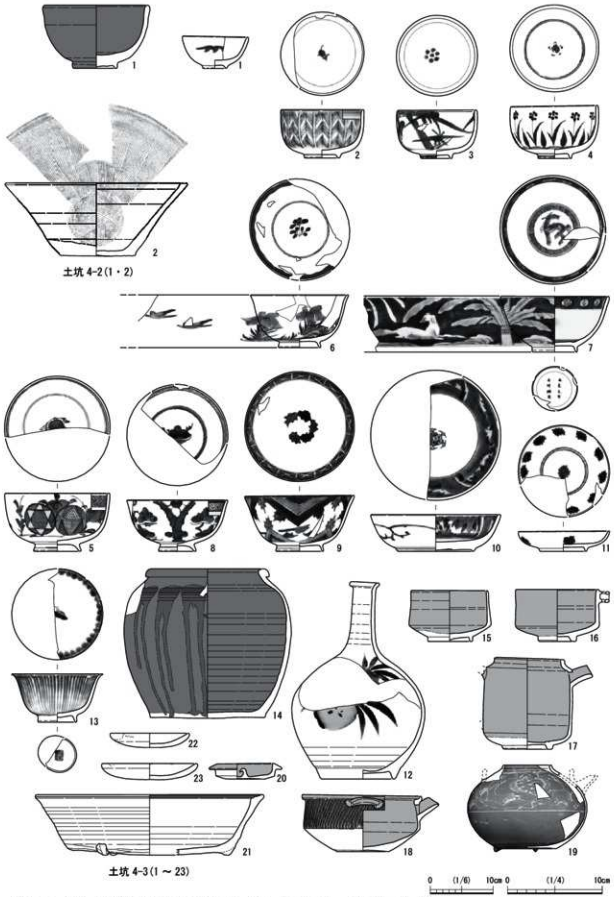
土坑４-16（第18図）

伊万里　１は内面に笹文を描くⅣ期の皿で、見込に五弁花文、裏面に「渦福」銘を認める。

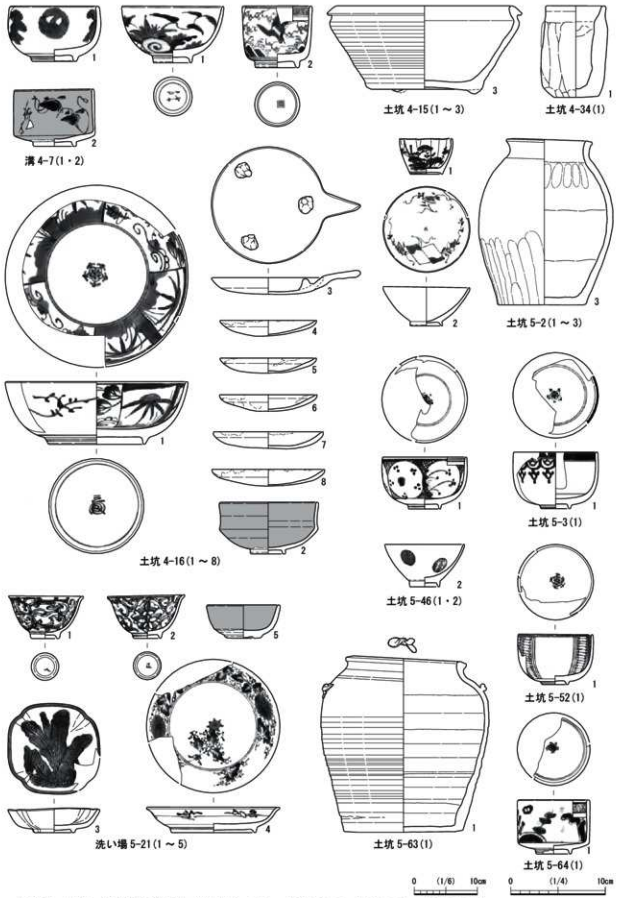
京・信楽焼　２は腰部が強く屈曲し鋭い段を形成する無文の腰折碗で、高台部露胎である。

土師質土器　内型成形のＧ系の土師質皿で、３は受け皿である。底部に板目痕を認めるものが多い。

このほか土坑４-34から体部外面を縦に削る焼塩壷が出土している。体部上半に刻印を認めるが、文字は明瞭でなく判読はできない。



第17図　土器・陶磁器実測図17（縮尺1/4　1/6：土坑4-2-2　土坑4-3-14・21）



第18図　土器・陶磁器実測図18（縮尺1/4　1/6：土坑4-15-3　土坑5-2-3　土坑5-63-1）

土坑５-２（第18図）

伊万里　１は成形後に口縁部を輪花状に変形するⅣ期の小坏で、外面に松竹梅文を描く。

九谷焼　２は体部が直線的に伸びる碗で、内面に赤色と緑色でなる草花文を焼き付ける。

越前焼　３は体部に意識的に鉄泥を施し、口縁端部を横に引き出すⅥ-２期の壺である。

洗い場５-21（第18図）

伊万里　１・２は端反坏で外面に華唐草文を描き、裏面に銘を認めるⅣ期のものである。ともに同形態で同じ文様であるためセット関係が分かる。３は型押し成形の角皿で、見込に芭蕉文を描き、口縁部に口紅を施す。４は裏面にハリのある端反皿で、内面と見込に草花文を描く。３・４ともⅢ期のものである。これらの伊万里に、瀬戸・美濃焼で腰部以下露胎の連房期の灰釉坏が伴う。

このほか土坑５-64から見込に崩れた五弁花文を認めるⅣ期の伊万里の半筒碗が出土している。

２）屋敷地２（１面目）

遺構数が少ないため遺物量も多くない。土坑５-46・52から見込に崩れた五弁花文を認める伊万里の碗等が出土している。前者の１は斜格子内の円内に草花文、２は円内に格子目文を描く碗で、Ⅴ期のものである。後者もⅤ期の碗で外面に鎧戸文を描く。また土坑５-63出土の越前焼の甕は体部に意識的に鉄泥を施す。体部外面に轆轤目が顕著に残り、肩部に撚り紐状の把手を持つⅧ-２期のものである。

３）屋敷地１（２面目）

土坑４-30（第19図）

唐津焼　１は建水で、腰部が丸く張り、僅かに直立した口縁の端部を内側に引き出す。高台部を除く外面と口縁内面に灰釉を施す。外面に鉄絵を施すⅠ-２期のものである。２は見込に胎土目痕、３は砂目痕のある灰釉皿だが、体部形態は異なる。それぞれⅠ期、Ⅱ期のものである。土坑４-１からも形態は異なるが、外面に鉄絵を施す壺が出土している。これも建水と考えることが可能であろう。

土師質土器　４～７はＣ系２の土師質皿である。器高が高く、口縁端部を摘み上げるものも認める。

土坑４-10（第19図）

唐津焼　１～４は同形態のⅡ期の灰釉皿で、見込に砂目痕を認める。おそらくセットで使用したものを同時に廃棄したと思われる。これに５・６のＤ系２の土師質皿等が伴う。

土坑４-65（第19図）

唐津焼　１・２は全面に釉を施すⅡ期の灰釉系の碗である。３は見込に砂目痕のある、４は口縁部を内側に引き出す皿で、裏面に墨書を記す。いずれもⅡ期のものである。

瀬戸・美濃焼　３は高台部露胎の鉄釉碗で、連房Ⅱ期のものである。

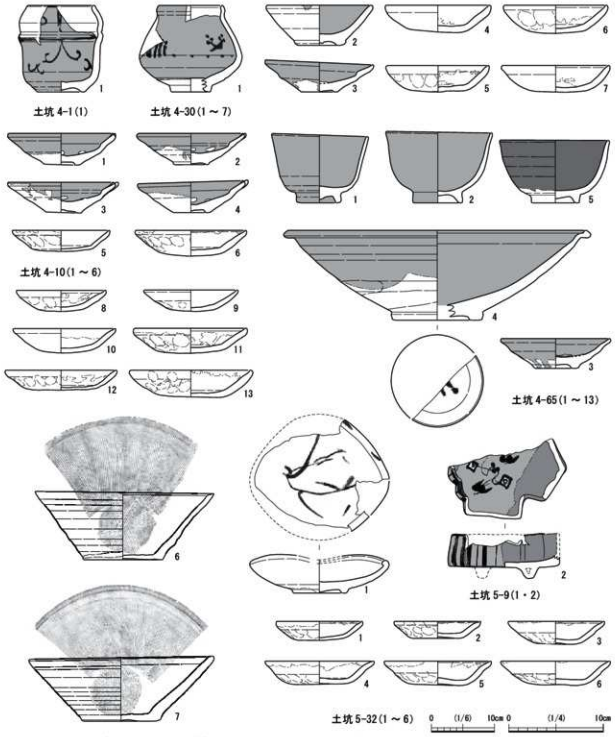
越前焼　６・７は擂鉢で、口縁上面は内傾するものと水平なものに分かれ、いずれも口縁部下に沈線はない。両者ともⅥ-２期のものだが、前者の体部外面の轆轤目が目立たないのに対し、後者は目立つ点に時期差を認める。７は６よりも新しく17世紀後半に降るものと考える。

土師質土器　８～10はＣ系１、11～13は見込と立ち上がり部の境界に圏線の巡るＤ系２の土師質皿で、口縁端部を摘み上げるものもある。土坑５-32出土品も同じ特徴を持つ。

土坑５-９（第19図）

唐津焼　１は平面形が四隅がやや鋭角な楕円形に近いⅠ-２期の灰釉皿で、見込に鉄絵で粗略な草花文を描く。高台部露胎で玉縁状の口縁端部を強く内側に強く巻き込む。

瀬戸・美濃焼　２は板作りの織部向付の変形角皿で、見込に草花文を描く。連房Ⅰ期のものである。



第19図　土器・陶磁器実測図19（縮尺1/4　1/6：土坑4-65-6・7）

４）屋敷地１（３面目）

溝５-８（第20図）

越前焼　１の擂鉢は口縁上面が水平で、口縁部下にやや窪む段がある。底部から口縁部に至るまでの器厚は大きく変わらず、体部外面の轆轤目は目立たない。Ⅵ-１期のものである。

土師質土器　２～４はＤ系１、５はＤ系２の土師質皿である。全て見込と立ち上がり部の境界に圏線が巡るが、Ｄ系１の方がより明瞭である。３・４は口縁端部を摘み上げる。

園池５-17（第20図）

唐津焼　１はⅠ期の灰釉皿で、口縁部に鉄釉を施す。４・５は見込に胎土目痕のあるⅠ期の灰釉皿で、高台径の大きい５の底部には胎土目痕が４箇所ある。ともにⅠ期のものである。

瀬戸・美濃焼　２は腰部以下を除く全面に緑釉を施す、３は体部が外反気味に立ち上がる碗で、２の緑釉は被熱のため緑がかった灰褐色を呈する。ともに連房Ⅰ期頃のものであろう。６・７は板作りの織部向付で前者は変形角皿、後者は扇型の皿で、６は見込に梅枝、７は幾何学文と花文を描く。８も板作りの志野向付で、底部に円環状の脚部を数が所貼付ける。

中国製　９は天目茶碗である。良く焼き締まり、成形時の轆轤は左回転である。

越前焼　10の擂鉢は口縁上面が内傾し、端部を摘み上げる。口縁部下にやや窪む段があり、体部外面の轆轤目は目立たないⅥ-１期のもので、11のＢ系、12のＣ２系の土師質皿等が伴う。

土坑５-33（第20図）

唐津焼　１はⅠ期の灰釉碗で腰部以下露胎である。内面の一部を露胎として文様とする。

瀬戸・美濃焼　２は天目茶碗で、器高が高く、幅の広い直立気味の口縁端部が外反する。連房Ⅰ期のものである。３・４は腰部以下露胎の灰釉坏で、裏面に兜布がある。天目茶碗と同時期のものである。

土坑５-88（第20図）

唐津焼　１は体部が内湾気味に立ち上がる灰釉皿で、見込に胎土目痕のあるⅠ期のものである。

土師質土器　全て見込と立ち上がり部の境界に圏線の巡るＤ系２の土師質皿である。

土坑５-77（第20図）

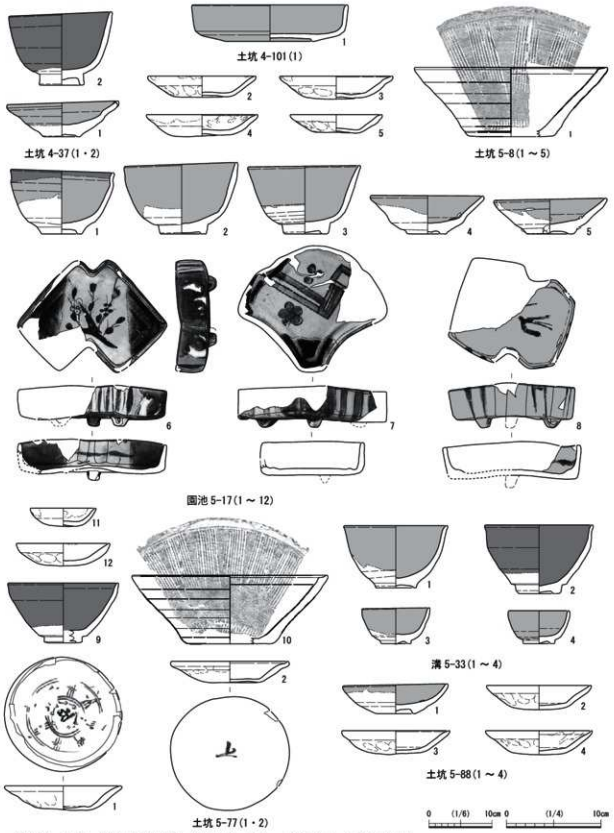
土師質土器　地鎮に伴う土師質皿である。口縁部が歪むが、見込と立ち上がり部の境界の圏線と、２の口縁端部の摘み上げが明瞭であることからＤ系１と考える。１は内面に墨書を記し、口縁端部を意図的にほぼ水平に打ち欠く。蓋となる２の裏面には「上」の墨書を認める。

第４節　北庄城期の土器・陶磁器（第21・22図　第１表）

第Ⅰ街区下層を中心に北庄城期の道路跡や井戸・土坑・溝等を確認した。ただ福井城築城時に大きく改変されたためか遺物量そのものは多くない。北庄城期は、天正３年（1575）の柴田勝家の北庄城築城から、慶長６年（1601）の結城秀康の越前入国までの約26年間である。結城秀康の福井城が一応完成したのが慶長11年（1606）頃とされるため、その頃まで北庄城期に含めてもよいと考える。本節では遺物量が少ないため、大まかな概要を生産地別に述べておきたい。

肥前陶磁器　伊万里は生産が開始されたのが慶長年間の1610年頃と推定されているため、北庄城期の遺構からは出土していない。天正年間にあたる1580年代のある時期に生産が始まる唐津焼は、道路下の整地土に碗を１点認める。本調査区では図化可能な資料は僅かで、既調査でもあまり出土していないため、福井城跡では微量であると考えるが、時期的に重複するため僅かに使用されていたと思われる。大阪や堺で出土している点から、北陸までは十分に流通していなかったと推定される。

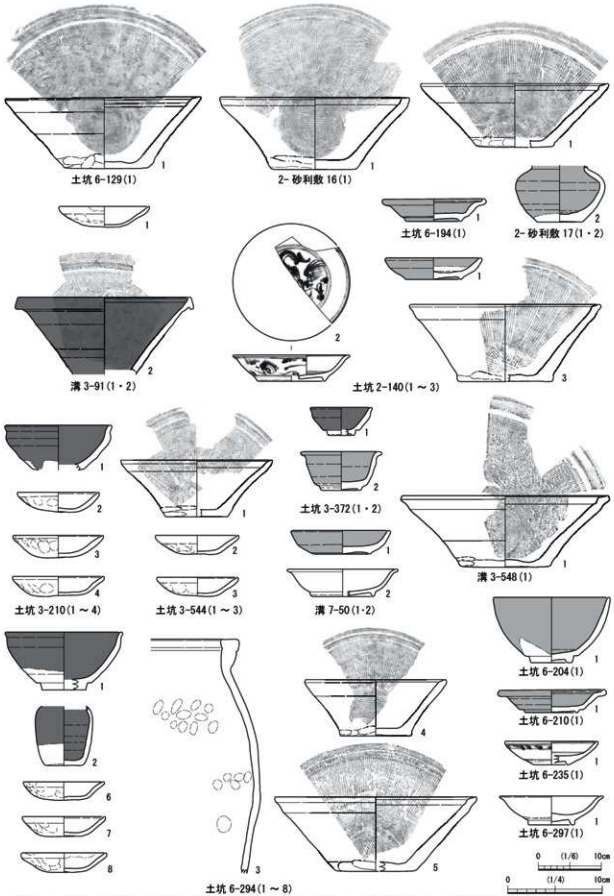
瀬戸・美濃焼　天目茶碗等の碗類、灰釉皿、小坏、茶入等がある。天目茶碗は器高が低く、器壁が厚いものが多い。皿類は灰釉皿が大半で器形は大きく２つに分かれ、見込が露胎の内禿皿を認める。また本調査区では灰釉と鉄釉の茶入が出土している。瀬戸・美濃焼は、中世から大量に越前国に流入しており、大窯Ⅲ・Ⅳ期の天目茶碗や灰釉皿がみられ、17世紀前半頃の遺構からは志野・織部焼が一定量出土しているが、当期のものは認めない。この状況から瀬戸・美濃焼のなかでも志野・織部焼とほかの碗・



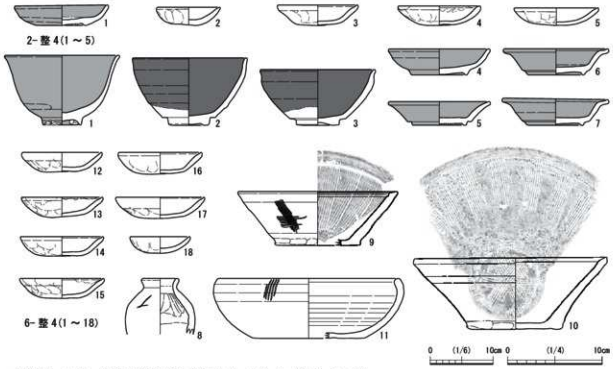
第20図　土器・陶磁器実測図20（縮尺1/4　1/6：土坑5-8-1　土坑5-17-10）

皿類の普及品では流通経路が異なっていた可能性が推定される。

越前焼　数量は擂鉢が目立つ。擂鉢は全て口縁上面が内傾し、口縁部下に沈線を認める。沈線の明瞭



第21図　土器・陶磁器実測図21（縮尺1/4　1/6：土坑6-129-1　2-砂利敷16-1　2-砂利敷17-1　溝3-91-2　土坑2-140-3　溝3-548-1　土坑3-544-1　土坑6-294-3・4・5）



第22図　土器・陶磁器実測図22（縮尺1/4　1/6：6-整3-8・9・10）

な古い様相を示すものと不明瞭な新しい様相を示すものがある。越前窯では慶長年間後半に塗り土技法が開始され、甕や壺に鉄泥を塗るが、本調査区で出土している同器種には認めない。

土師質土器　土師質皿が大半である。数量はＣ系とＤ系が多く、形態・調整技法ともに一乗谷朝倉氏遺跡出土のＣ・Ｄ類と大きな差はない。福井城期のものと異なり、口縁は正円形を呈する。

中国製　数量は白磁と染付の皿類が多い。景徳鎮産で、白磁皿はＥ群、染付皿はＢ・Ｃ群がある。

ここまで出土遺物の概要を述べてきた。その結果、本調査区では数例の良好な一括資料を認める点が分かるが、時期は17世紀と18世紀後半以降に偏ることが指摘できる。この傾向は南地区でも同様で、この期間の間の資料が希薄であることが理解できる。ただこの期間も福井城下での生活は変わらず営まれており、逆にいえば遺物を廃棄する行為自体が少なかったといえる。このため各遺物の変遷が通時的に辿れない問題があり、今後その事例の増加が待たれる。

参考文献

大橋浩二　1989『考古学ライブラリー肥前陶磁』ニューサイエンス社
九州近世陶磁学会　2002『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念
瀬戸市埋蔵文化財センター　2002『青戸時代の瀬戸窯』
瀬戸氏埋蔵文化財センター　2003『江戸時代の美濃窯』
多治見市教育委員会　1993『美濃窯の焼物』
畑中英二　2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2015　福井県埋蔵文化財調査報告第146集『福井城跡　第２分冊　遺物』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2016　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター初報６「越前焼総合調査事業報告書」

第２表　土器・陶磁器観察表

第Ⅰ側区　廃棄場層６-18・19（第１・２図）

遺跡No	器種	土師質：密明瞭 陶磁器：生地地	法量			成形・調整技法	土師質：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
			口径	器高	底径			
6-19-1	D9	鍋	伊万里	(8.8)	6.0	(5.8)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）風水文	V期
6-19-2	D9	鍋	伊万里	(10.6)	5.2	4.0	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）草花文	Ⅳ-1期
6-19-3	D9	鍋	伊万里	(9.8)	4.7	3.6	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）風水文	Ⅳ-1期
6-19-4	D9	瓶	伊万里	1.5	－	－	ロクロ成形	染付　外）唐草文　内）蘭軸	V期
6-19-5	D7・8	鍋	唐津	10.5	6.4	4.5	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　ハケメ	皿期
6-19-6	D9	平鍋	京信	(13.0)	4.9	(5.6)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　見）風水文　高台部露胎	18C中葉～
6-19-7	D9	鍋	京信	(9.7)	5.7	(2.7)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　色絵（菊露文：緑・黒） 高台部露胎	18C中葉～
6-19-8	D9	鍋	京信	10.7	6.3	4.2	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　色絵（惣文：青・茶色） 高台部露胎	18C中葉～
6-19-9	D6	鉢	越前	(19.4)	9.2	(15.4)	ロクロ成形　糸切り付け	鉄泥刷毛塗り	Ⅶ期
6-19-10	D9	鉢	越前	25.1	7.1	19.0	ロクロ成形　糸切り付け	鉄泥刷毛塗り	Ⅶ期
6-19-11	D9	土師質受皿	×	8.9	1.6	－	内型成形　ロ・内）回しナデ 見）横ナデ　把手貼付け	SYR5/4 に近い赤　橙色	6系
6-19-12	D9	土師質皿	×	9.8	1.7	－	内型成形　ロ・内）回しナデ　見）ナデ	7.5YR 8/2 灰白色	6系
6-19-13	D9	土師質皿	○	9.8	1.8	－	内型成形　ロ・内）回しナデ　見）ナデ	7.5YR 7/3 に近い橙色	6系
6-19-14	D9	土師質皿	○	10.0	1.6	－	内型成形　ロ・内）回しナデ　見）ナデ	7.5YR 6/4 に近い橙色	6系
6-19-15	D9	土師質皿	×	14.7	2.0	－	内型成形　ロ・内）回しナデ　見）ナデ	7.5YR 8/2 灰白色	6系
6-18上-1	D6	鍋	伊万里	(10.4)	7.0	(4.4)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）一重網目文	皿期
6-18上-2	D6	鍋	伊万里	10.0	6.9	3.6	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）一重網目文	皿期
6-18上-3	D6	鍋	伊万里	(11.2)	7.6	(5.1)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）蘭唐草文	Ⅱ-2期
6-18上-4	D9	干鍋鍋	伊万里	(8.5)	7.6	(4.5)	ロクロ成形　削出し高台	染付　横線＋丸	Ⅱ-2期
6-18上-5	D9	鍋	伊万里	(12.4)	6.4	(4.3)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）竜風風文　見）草花文	皿期
6-18上-6	D9	鍋	伊万里	(8.4)	6.1	(4.6)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）草花文　銅）線（宣口製）	Ⅳ-2期
6-18上-7	D8	鍋	伊万里	(20.8)	10.4	(8.3)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）杜丹文　見）瑞鳥文 銅）線（大明）	皿期
6-18上-8	D8	鍋	唐津	(9.7)	6.7	4.4	ロクロ成形　削出し高台	透明釉　神込み技法　高台部露胎	皿期
6-18上-9	D9	茶釜	瀬戸・美濃	11.5	－	－	ロクロ成形　耳貼付け	内・外）鉄泥	17世紀～
6-18上-10	D8	土師質皿	○	9.9	2.8	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/2 灰白色	C系3
6-18上-11	D8	土師質皿	○	9.9	2.1	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/2 灰白色	C系3
6-18上-12	D9	土師質皿	○	10.4	2.5	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ	7.5YR 8/2 灰白色	D系2
6-18上-13	D8	土師質皿	○	9.9	2.1	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ	7.5YR 8/4 淺黄橙色	D系3
6-18上-14	D8	土師質皿	×	11.2	2.1	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ	7.5YR 8/2 灰白色	D系3
6-18上-15	D6	鉢	信州窯	23.8	11.0	8.3	ロクロ成形　削出し高台	外）雷地水鳥文　見）草花文　高台部露胎	17世紀～
6-18下-1	D8	鍋	伊万里	(9.9)	6.5	(5.1)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）山水文（舟＋山文）	皿期
6-18下-2	D7・8	皿	唐津	－	－	6.9	ロクロ成形　削出し高台	見）鉄絵（草花文）　腰部以下露胎	Ⅰ-2期
6-18下-3	D7・8	皿	唐津	(13.2)	4.5	(3.9)	ロクロ成形　削出し高台	見）砂目痕	腰部以下露胎	Ⅱ期
6-18下-4	D9	火入	唐津	12.9	7.1	5.4	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　内）蘭軸　腰部以下露胎　兜巾	皿期
6-18下-5	D8・9	鍋鉢	越前	(28.0)	10.9	－	ロクロ成形	鐵釉系	Ⅶ-1期
6-18下-6	D8	土師質皿	×	(8.9)	2.3	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 7/3 に近い橙色	C系2「かくしんさま」
6-18下-7	D8	土師質皿	×	9.4	2.6	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/4 淺黄橙色	C系2「ミやうきうさま」
6-18下-8	D8	土師質皿	×	9.5	2.3	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/4 淺黄橙色	C系2「きうしんさま」
6-18下-9	D8	土師質皿	×	9.5	2.3	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/3 淺黄橙色	C系2「ひのへ」
6-18下-10	D8	土師質皿	×	9.5	2.2	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	5YR 8/4 淡橙色	C系2「しやうよ」 「そうへきま」
6-18下-11	D8	土師質皿	×	9.7	2.3	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/3 淺黄橙色	C系2「れん長さま」
6-18下-12	D8	土師質皿	×	9.7	2.0	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/4 淺黄橙色	C系2「しやうよ」 「そうへきま」
6-18下-13	D8	土師質皿	×	9.7	2.5	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/3 淺黄橙色	C系3「かくしんさま」 「せうし」
6-18下-14	D8	土師質皿	×	9.9	2.4	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	5YR 8/4 淡橙色	C系2「れん長さま」
6-18下-15	D8	土師質皿	×	(10.0)	2.5	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/3 淺黄橙色	C系2「□（長）さま」
6-18下-16	D8	土師質皿	×	(10.0)	2.3	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 7/3 に近い橙色	C系2「ミやうきち」
6-18下-17	D8	土師質皿	×	11.5	2.7	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	7.5YR 7/3 に近い橙色	D系2「□（うりしんさま」
6-18下-18	D8	土師質皿	×	11.8	2.8	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	7.5YR 7/3 に近い橙色	D系2「ミやしきさま」
6-18下-19	D8	土師質皿	×	(11.9)	3.1	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	7.5YR 7/3 に近い橙色	D系2「□上」 「そうへきま」
6-18下-20	D8	土師質皿	×	9.0	2.3	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/3 淺黄橙色	C系2
6-18下-21	D8	土師質皿	×	9.3	2.1	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	2.5YR 6/3 に近い橙色	C系2
6-18下-22	D8	土師質皿	×	9.5	2.5	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 7/2 明黒灰色	C系2
6-18下-23	D8	土師質皿	×	9.5	2.5	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	5YR 8/3 淡橙色	C系2
6-18下-24	D8	土師質皿	×	9.7	2.1	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	5YR 8/3 淡橙色	C系2

第Ⅰ側区　廃棄場１　１面目（第３図）

遺跡No	器種	土師質：密明瞭 陶磁器：生地地	法量			成形・調整技法	土師質：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
			口径	器高	底径			
2-4-1	A7	鍋	伊万里	(11.5)	5.0	(5.5)	ロクロ成形　削出し高台	外）草輪文　銅）線	近代
2-38-1	A7	植木鉢	瀬戸・美濃	14.0	14.3	9.5	ロクロ成形　削出し高台　貼付け文	外）鉄絵釉　内）蘭軸　腰部以下鉄泥	高台切り込みトケ形
2-38-2	A7	鉢	越前	(14.6)	8.4	(9.1)	ロクロ成形	鉄泥刷毛塗り	Ⅶ-2期
2-39-1	A7	鍋	伊万里	8.6	4.9	3.6	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）草花文	Ⅳ-1期
2-39-2	A7	杯	瀬戸・美濃	6.0	2.8	2.9	ロクロ成形　削出し高台	灰釉	19世紀
2-39-3	A7	土師質皿	○	9.8	1.7	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	5YR 8/4 淡橙色	D系2

遺跡No	器種	土師質：密明瞭 陶磁器：生地地	法量			成形・調整技法	土師質：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
			口径	器高	底径			
2-39-4	A7	土師質皿	○	10.0	1.7	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	5YR 8/4 淡橙色	D系2
2-39-5	A7	土師質皿	○	11.2	2.0	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	5YR 8/4 淡橙色	D系2
2-39-6	A7	甕	越前	(35.1)	－	－	ねじたて成形	鉄泥刷毛塗り	Ⅶ-1期
6-11-1	B6	鍋	伊万里	(10.9)	6.5	4.2	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）草花文	V期　陶軸染付
6-11-2	B6	皿	伊万里	(13.3)	3.3	6.4	ロクロ成形　削出し高台　見）蛇の目釉剥ぎ	染付　内）草花文　見）唐文文	V期
6-11-3	B6	輪花皿	伊万里	(10.0)	2.6	(5.5)	ロクロ成形後型押し、削り出し、高台	白磁　口紅	V期
6-11-4	B6	皿	伊万里	13.2	3.7	4.0	ロクロ成形　削出し高台　見）蛇の目釉剥ぎ	青磁　高台部露胎	V期
6-11-5	B6	皿	伊万里	(24.1)	4.3	(9.0)	ロクロ成形　削出し高台	青磁　内）印花竹文	皿期

第Ⅰ側区　廃棄場１　整地土１（第３図）

遺跡No	器種	土師質：密明瞭 陶磁器：生地地	法量			成形・調整技法	土師質：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
			口径	器高	底径			
6整1-7	C7	香形鍋	唐津	(13.0)	7.9	(4.4)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　鉄釉	Ⅰ期
2整1-2	J6	皿	唐津	(15.5)	2.9	4.9	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　見）鉄絵（草花文） 腰部以下露胎　兜巾	Ⅰ-2期
2整1-3	A+B7	半筒鍋	瀬戸・美濃	(8.9)	6.4	4.8	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	大窯IV期
2整1-4	B7	水鉢	瀬戸・美濃	36.0	21.1	20.1	ロクロ成形　見）砂目痕	外）鉄釉　内）透明釉　銅）線　白釉	型番
2整1-5	A+J6	土師質皿	○	9.5	1.5	－	内型成形　ロ・内）回しナデ　見）横ナデ	7.5YR 8/2 灰白色	G系
2整1-6	J6	土師質皿	○	9.8	1.7	－	内型成形　ロ・内）回しナデ　見）横ナデ	7.5YR 8/2 灰白色	G系

第Ⅰ側区　廃棄場２　１面目（第４図）

遺跡No	器種	土師質：密明瞭 陶磁器：生地地	法量			成形・調整技法	土師質：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
			口径	器高	底径			
3-1-1	F10	鍋	伊万里	(11.2)	5.7	4.6	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）竜文　内）四方瓣文　見）狼し花文	Ⅳ-2期
3-1-2	F10	鍋	伊万里	(9.1)	4.6	(3.9)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）福寿文	V期
3-1-3	F10	鍋	伊万里	(8.9)	6.0	(3.7)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）草花文	V期　陶軸染付
3-1-6	F10	鍋	瀬戸・美濃	(15.7)	6.3	(4.3)	ロクロ成形　茶筒底　底口貼付け	灰釉系　底部露胎	刻印
3-1-5	F10	鍋	京信	(9.1)	5.3	3.3	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　高台部露胎	18C中葉～
3-2-1	I1	広東鍋	伊万里	(11.7)	6.3	6.4	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）松樹文　見）草花文	V期
3-3-1	F10	鍋蓋	伊万里	4.0	2.9	10.1	ロクロ成形	染付　外）円文＋鳥し文字（春） 内）四方瓣文　見）鳥し文字	V期
3-4-1	F10	鍋	京信	10.5	7.2	3.5	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　色絵（蘭文）　高台部露胎	18C中葉～
3-4-2	F10	鍋折鍋	京信	(11.3)	6.5	(4.2)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　白泥（寿文）　高台部露胎	18C中葉～
3-4-3	F10	鍋折鍋	京信	(11.0)	6.5	3.9	ロクロ成形　削出し高台　見）ハリ	灰釉系　鉄絵（梅花文）　腰部以下露胎	18C中葉～
3-9-1	F10	鍋	伊万里	(8.9)	6.3	(4.3)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外）草花文＋蔓	Ⅳ-1期
3-9-2	F10	土師質受皿	×	(10.1)	1.9	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ 把手貼付け	5YR 8/4 淡橙色	D系3
3-9-3	F10	土師質皿	○	9.6	2.1	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	5YR 8/3 淡橙色	C系3
3-9-4	F10	土師質皿	○	9.8	2.3	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	5YR 8/3 淡橙色	C系3
3-9-5	F10	土師質皿	○	10.2	2.2	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	5YR 8/3 淡橙色	D系2
3-9-6	F10	土師質皿	○	10.2	2.2	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	5YR 8/3 淡橙色	D系3
3-90-1	G1	杯	伊万里	(6.9)	5.5	(3.1)	ロクロ成形　削出し高台	染付	Ⅳ-1期
3-90-2	G1	鍋	唐津	(10.2)	7.4	(3.8)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　ハケメ	皿期
3-90-3	G1	鍋	唐津	(10.9)	6.8	(4.3)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　ハケメ	皿期
3-90-4	G1	鍋	瀬戸・美濃	(9.7)	7.1	(3.2)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系	瀬戸II期
3-90-5	G1	皿	備前	(25.1)	3.8	(15.7)	ロクロ成形	見）ゴマ化粧	
3-132-1	F10	容器	唐津	6.5	2.6	3.6	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　腰部以下露胎	19世紀
3-132-2	F10	土師質皿	○	8.9	2.0	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 7/4 に近い橙色	C系2
3-132-3	F10	土師質皿	×	9.0	2.2	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 7/4 に近い橙色	C系2

第Ⅰ側区　廃棄場２　２面目（第５図）

遺跡No	器種	土師質：密明瞭 陶磁器：生地地	法量			成形・調整技法	土師質：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
			口径	器高	底径			
2-50-1	I6	土師質皿	○	8.9	2.1	－	手づくね　ロ・見）回しナデ	7.5YR 7/4 明黒灰色	C系2
2-50-2	I6	土師質皿	○	8.9	2.1	－	手づくね　ロ・見）回しナデ	7.5YR 8/2 灰白色	C系2
2-50-3	I6	土師質皿	○	9.3	2.0	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	2.5YR 7/4 淡赤橙色	C系2
2-50-4	I6	土師質皿	○	9.5	2.3	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	5YR 5/6 橙色	C系2
2-50-5	I6	土師質皿	○	9.6	2.3	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	7.5YR 8/2 灰白色	D系2
2-50-6	I6	土師質皿	○	10.3	2.4	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	7.5YR 8/2 灰白色	D系2
2-50-7	I6	土師質皿	×	10.3	2.5	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	7.5YR 8/2 灰白色	D系2
2-50-8	I6	土師質皿	○	10.3	2.3	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	7.5YR 8/2 灰白色	D系2
2-50-9	I6	土師質皿	○	10.7	2.5	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	7.5YR 8/2 灰白色	D系2
2-50-10	I6	土師質皿	○	10.8	2.6	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	7.5YR 8/2 灰白色	D系2
2-51-1	A7	土師質皿	×	11.8	2.1	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	5YR 8/3 淡橙色	D系1
2-51-2	A7	土師質皿	×	11.4	2.7	－	手づくね　ロ・内）挟みナデ　圏線	5YR 8/3 淡橙色	D系1
2-72-1	J6	段皿	唐津	13.1	3.3	4.5	ロクロ成形　削出し高台　見）砂土目痕	灰釉　見）鉄絵（草花文） 腰部以下露胎　兜巾	Ⅰ-2期
2-72-2	J6	皿	唐津	(29.8)	8.9	(11.2)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　腰部以下露胎	Ⅰ-2期
2-72-3	I6	擂鉢	越前	(28.7)	11.7	(13.0)	ロクロ成形	擂目8条	VI-2期
2-80-1	J6	土師質皿	×	8.6	2.2	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/4 淺黄橙色	C系2
2-80-2	J6	土師質皿	×	8.7	2.2	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/3 淺黄橙色	C系2
2-80-3	J6	土師質皿	×	8.7	2.2	－	手づくね　ロ・内）回しナデ	7.5YR 8/3 淺黄橙色	C系2

遺跡No	器種	土師質：胎明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師皿：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
2-89-4	J6	土師質皿	×	10.7	2.7	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 8/3 浅黄橙色	D系2
2-89-5	J6	土師質皿	○	12.0	2.5	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 8/3 浅黄橙色	D系2
2-83-1	B7	向付	唐津	(13.3)	4.5	4.8	ロクロ成形後変形　削出し高台	灰釉　見)鉄絵(草花文)　腰部以下露胎　兜巾	I -2期
2-84-1	I5	皿	唐津	12.8	4.0	5.0	ロクロ成形　回転糸切り　見)砂目痕	灰釉　腰部以下露胎	II期
2-84-2	I5	土師質皿	○	9.6	2.4	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系2
2-84-3	I5	土師質皿	○	9.5	2.4	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系3
2-84-4	I5	土師質皿	○	10.8	2.6	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 8/3 浅橙色	C系3
2-84-5	I5	土師質皿	○	10.5	2.1	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	5YR 8/3 浅橙色	D系2
2-84-6	I5	土師質皿	○	11.4	2.5	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	5YR 8/3 浅橙色	D系2
2-119-1	I5	碗	唐津	(11.1)	6.2	(4.6)	ロクロ成形　削出し高台	外)鉄釉　内)透明釉　腰部以下露胎	I -2期
2-119-2	I5	土師質皿	○	8.5	1.8	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 7/6 橙色	C系2
2-119-3	I5	土師質皿	○	10.6	2.5	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	10YR 8/2 灰白色	D系2
2-157-1	I4	土師質皿	×	9.2	2.4	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/4 浅黄橙色	C系2
2-157-2	I4	土師質皿	×	10.3	2.4	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 8/3 浅黄橙色	D系2
6-126-1	B+C7	碗	伊万里	10.3	6.6	3.9	ロクロ成形　削出し高台	青磁　見)花文　高台部露胎	II -2期
6-126-2	B7	半筒鉢	伊万里	8.3	6.9	4.7	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)一重網目文＋点描	II -2期
6-126-3	B+C7	皿	瀬戸・美濃	(9.7)	2.3	5.6	ロクロ成形　削出し高台　歯)窯道具痕	灰釉	大窯最期
6-126-4	B7	土師質皿	○	8.8	1.7	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 7/6 橙色	C系2
6-126-5	B7	土師質皿	×	9.4	1.9	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 7/6 橙色	C系2

第Ⅰ街区　屋敷地１　整地土２(第６図)

遺跡No	器種	土師質：胎明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師皿：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
2型2-1	J5	碗	伊万里	10.7	7.5	4.3	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)草花文　内)柘榴	III期
2型2-2	H5	碗	伊万里	(11.3)	5.9	4.5	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)草花文　内)柘榴 見)大明製化年製	III期
2型2-3	H4	瓶	伊万里	－	－	5.3	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)四葉文＋雲内＋草花文　内)圏線	III期
2型2-4	I4	碗	唐津	(9.5)	7.4	(4.4)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	III期
2型2-5	A6	碗	唐津	10.7	6.8	4.4	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　腰部以下露胎	I 期
2型2-6	J6	皿	唐津	11.3	3.2	3.8	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　腰部以下露胎	I 期
2型2-7	I5	向付	唐津	(15.4)	4.7	4.6	ロクロ成形後変形　削出し高台 見)粘土目痕	灰釉　外)鉄絵(草花文)　腰部以下露胎	I -2期
2型2-8	J6	輪花皿	唐津	15.6	5.1	4.4	ロクロ成形後変形　削出し高台 見)粘土目痕	灰釉　外)鉄絵(草花文)　腰部以下露胎	I -2期
2型2-9	A6	皿	唐津	(28.6)	8.6	7.6	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　外)鉄絵(草花文)　腰部以下露胎	I -2期
2型2-10	I6	天目茶碗	瀬戸・美濃	(11.3)	8.3	(4.1)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	瀬戸 I 期
2型2-11	J6	碗	瀬戸・美濃	(11.7)	7.2	(4.6)	ロクロ成形　削出し高台	緑釉　腰部以下露胎	瀬戸 I 期
2型2-12	I6	皿	瀬戸・美濃	(21.0)	5.1	(8.0)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉	17世紀
2型2-13	J6	皿	瀬戸・美濃	9.1	4.0	5.5	ロクロ成形　削出し高台	灰釉	大窯Ⅳ期
2型2-14	J6	擂鉢	越前	28.8	11.5	10.8	ロクロ成形	擂目9条	VI2期
2型2-15	A7	土師質皿	×	(8.8)	1.9	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	10YR 8/2 灰白色	C系1　底部擦孔
2型2-16	J6	土師質皿	○	10.2	2.3	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ	10YR 7/2 にぶい黄橙	D系2
2型2-17	A7	土師質皿	○	15.7	2.2	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 7/4 にぶい橙色	D系2　底部擦孔
2型2-18	A+B7	土師質皿	×	18.2	2.2	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 8/4 浅黄橙色	D系

第Ⅰ街区　屋敷地２　２面目(第７図)

遺跡No	器種	土師質：胎明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師皿：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
3-7-1	I1	天目茶碗	瀬戸・美濃	11.6	7.8	4.3	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	瀬戸 I 期
3-7-2	I2	擂鉢	越前	(28.3)	13.2	(10.9)	ロクロ成形	擂目8条	VI-2期
3-60-1	G10	皿	唐津	(14.2)	3.6	4.2	ロクロ成形　削出し高台　見)砂目痕	透明釉	II期
3-97-1	G10	土師質皿	○	11.0	2.0	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	10YR 6/3 にぶい橙色	D系2
3-97-2	G10	土師質皿	○	11.4	2.3	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	5YR 2/1 黒褐色	D系2
3-120-1	H10	碗	瀬戸・美濃	11.2	7.5	4.0	ロクロ成形　削出し高台	外)鉄釉　内)灰釉	瀬戸 II 期
3-167-1	F10	皿	唐津	(34.4)	9.3	(12.7)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　腰部以下露胎	I 期
3-240-1	B10	碗	伊万里	12.0	6.4	4.3	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)蓮華文	III期
3-240-2	B10	擂鉢	唐津	(30.0)	13.4	(12.9)	ロクロ成形	口)鉄泥　12条	II期
3-240-3	B10	土師質皿	○	9.7	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 8/1 灰白色	C系1
3-240-4	B10	土師質皿	○	10.1	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 8/1 灰白色	C系1
3-240-5	B10	土師質皿	○	9.6	2.5	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 8/3 浅橙色	C系2
3-302-1	G1	皿	伊万里	(40.1)	10.5	(10.6)	ロクロ成形　削出し高台	染付　内)唐草文　見)樹木文	II期
3-302-1	G1	擂鉢	越前	26.3	12.9	12.9	ロクロ成形	擂目9条	VI-2期
3-333-1	H1	皿	唐津	10.3	2.6	4.3	ロクロ成形　回転糸切り	露胎	I 期
3-367-1	G1	皿	瀬戸・美濃	11.7	2.7	6.5	ロクロ成形　削出し高台　見)目痕	志野釉	大窯Ⅳ期
3-410-1	H10	天目茶碗	瀬戸・美濃	(11.8)	7.3	(4.3)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	瀬戸 I 期
3-410-2	H10	土師質皿	○	10.0	1.9	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ	2.5YR 2/7 灰黄色	D系2
3-410-3	H10	土師質皿	○	10.8	2.1	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 7/3 にぶい橙色	D系2
3-449-1	B10	土師質皿	○	8.9	2.3	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 8/4 浅橙色	C系2
3-449-2	B10	土師質皿	○	9.8	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/3 にぶい橙色	C系2

第Ⅰ街区　３面目(第８～10図)

遺跡No	器種	土師質：胎明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師皿：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
2-63-1	A7	碗	唐津	(10.6)	6.8	3.9	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　外)鉄絵　腰部以下露胎　兜巾	II期
2-63-2	A+J6	皿	唐津	(11.9)	3.6	4.6	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　腰部以下鉄泥　兜巾	I 期　出化物付着
2-63-3	A+J6	向付	唐津	(15.2)	3.5	4.4	ロクロ成形後変形　削出し高台	灰釉　見)鉄絵(草花文)　腰部以下露胎	II-1期
2-63-4	A+J6	鉢	唐津	(23.2)	10.0	7.8	ロクロ成形後変形　削出し高台 見)粘土目	灰釉　腰部以下露胎	I 期
2-63-5	A+J6	天目茶碗	瀬戸・美濃	(7.0)	4.2	2.8	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	大窯Ⅳ期
2-63-6	A+J6	皿	瀬戸・美濃	(10.1)	1.9	(5.6)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉	大窯Ⅳ期
2-63-7	J6	擂鉢	越前	28.6	12.2	7.2	ロクロ成形	擂目9条	VI-2期
2-63-8	J6	擂鉢	備前	23.0	9.5	8.8	ロクロ成形	擂目8条	
2-63-9	A7	土師質皿	×	9.0	2.3	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/4 にぶい橙色	C系1
2-63-10	A6	土師質皿	×	9.0	2.6	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 6/3 にぶい橙色	C系1
2-63-11	A+J6	土師質皿	○	9.0	2.2	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	10YR 8/2 灰黄褐色	C系2
2-63-12	A+J6	土師質皿	○	11.0	2.4	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 7/4 にぶい橙色	D系2
2-184-1	I5	天目茶碗	伊万里	(10.8)	－	－	ロクロ成形　体)鉄絵	染付　外)福寿文	II-1期
2-184-2	I5	天目茶碗	伊万里	(9.6)	－	－	ロクロ成形　体)鉄絵	染付　外)福寿文	II-1期
2-184-3	I5	碗	伊万里	(9.4)	7.0	4.0	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)瑞果文	II-2期
2-184-4	I5	碗	伊万里	11.5	5.6	4.7	ロクロ成形　削出し高台	染付　歯)圏線	II-2期
2-184-5	I5	香炉	伊万里	(9.5)	8.1	(6.9)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)山水文	II期　漆接ぎ
2-184-6	I5	香炉	伊万里	(15.0)	10.0	(7.8)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)唐草風草花文	II期
2-184-7	I5	碗	唐津	10.6	7.4	4.5	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　兜巾	II期
2-184-8	I5	杯	唐津	(6.0)	4.6	(2.6)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　腰部以下露胎　兜巾	I 期
2-184-9	I5	皿	唐津	12.8	2.5	4.3	ロクロ成形　回転糸切り　見)砂目痕	灰釉	II期
2-184-10	I5	輪花皿	唐津	14.8	3.7	5.2	ロクロ成形後型押し　削り出し高台	灰釉系　兜巾	I 期
2-184-11	I5	輪花皿	唐津	15.0	3.4	5.0	ロクロ成形後型押し　削り出し高台	灰釉系　兜巾	I 期
2-184-12	I5	皿	唐津	(24.8)	6.0	8.8	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　腰部以下鉄泥	I -2期
2-184-13	I5	鉢	唐津	(8.9)	8.9	5.1	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　外)鉄絵(草花文)	I -2期
2-184-14	I5	鉢	唐津	43.4	14.4	13.8	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　内)鉄絵・鉄絵抽(草花文)	高台切り込みｼﾞｮｲﾝﾄ所
2-184-15	I5	皿	瀬戸・美濃	10.0	2.0	5.3	ロクロ成形　削出し高台　見)露胎	灰釉	大窯Ⅳ期
2-184-16	I5	皿	彩州窯	(14.6)	3.1	(7.6)	ロクロ成形　削出し高台　歯)工具痕	染付　外)圏線　内)草花文　見)寿文	17世紀～
2-184-17	I5	擂鉢	越前	39.1	14.1	13.6	ロクロ成形	擂目9条	VI-2期
2-184-18	I5	土師質皿	○	9.2	2.2	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/4 浅黄橙色	C系1
2-184-19	I5	土師質皿	○	10.0	2.3	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/4 浅黄橙色	C系1
2-184-20	I5	土師質皿	○	9.9	2.8	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系1
2-184-21	I5	土師質皿	○	10.0	2.4	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 7/4 にぶい橙色	D系2
2-184-22	I5	土師質皿	○	10.5	2.2	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 8/3 浅黄橙色	D系2
2-184-23	I5	土師質皿	○	10.5	2.5	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 7/6 橙色	D系2
2-184-24	I5	土師質皿	○	10.6	2.7	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 7/6 橙色	D系2
2-184-25	I5	土師質皿	×	11.4	2.7	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	10YR 8/3 浅黄橙色	D系2
2-184-26	I5	火鉢	瓦質	(13.8)	8.1	(11.9)	ロクロ成形　脚貼付け　ミガキ		
2-201-1	I6	碗	伊万里	10.4	7.6	5.4	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)宝相花唐草	II-2期
2-201-2	I6	皿	唐津	10.1	2.8	4.2	ロクロ成形　回転糸切り	露胎	I 期
2-201-3	I6	皿	唐津	(36.1)	10.9	10.4	ロクロ成形　削出し高台　見)砂目痕	灰釉　外)鉄絵　腰部以下露胎　兜巾	高台切り込みｼﾞｮｲﾝﾄ所
2-201-4	I6	天目茶碗	瀬戸・美濃	(10.7)	6.6	(3.9)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	大窯Ⅳ期
2-201-5	I6	擂鉢	越前	(38.4)	15.3	(15.8)	ロクロ成形	擂目8条	VI-2期
2-201-6	I6	土師質受皿	○	9.2	2.4	－	手づくね　ロ・見)挟みナデ 把手貼り付け　圏線	7.5YR 8/3 浅黄橙色	D系2
2-201-7	I6	土師質皿	○	9.2	2.2	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系2
2-201-8	I6	土師質皿	○	9.9	2.4	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 8/3 浅黄橙色	D系2
2-201-9	I6	土師質皿	○	10.0	2.3	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 7/4 にぶい橙色	D系2
2-201-10	I6	土師質皿	○	10.2	2.1	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	10YR 2/8 灰白色	D系2
2-201-11	I6	土師質皿	○	11.9	2.7	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ	5YR 6/6 橙色	D系2
2-207-1	J6	皿	唐津	－	－	4.8	ロクロ成形　削出し高台　見)粘土目痕	灰釉　外)鉄絵　腰部以下露胎　兜巾	I -2期
2-207-2	J6	向付	瀬戸・美濃	15.0	5.8	11.2	ロクロ成形後変形　脚貼付け	志野　見)草花文	瀬戸 I 期
2-207-3	J6	土師質皿	×	8.4	1.9	－	手づくね　ロ・見)回しナデ	5YR 8/4 浅橙色	C系2
2-207-4	J6	土師質皿	×	8.8	2.3	－	手づくね　ロ・見)回しナデ	2.5YR 7/6 橙色	C系2
2-207-5	J6	土師質皿	×	9.0	2.5	－	手づくね　ロ・見)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系2
2-207-6	J6	土師質皿	×	9.0	2.4	－	手づくね　ロ・見)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系2
2-352-1	I6	擂鉢	備前	(26.1)	－	－	ロクロ成形	擂目9条	
2-352-2	I6	土師質皿	○	9.1	2.5	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 6/6 橙色	C系2
2-352-3	I6	土師質皿	○	9.5	2.4	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	10YR 7/3 にぶい橙色	C系2
2-352-4	I6	土師質皿	○	9.9	2.6	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/4 にぶい橙色	C系2
2-352-5	I6	土師質皿	○	10.0	2.3	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/3 にぶい橙色	C系2
2-359-1	I5	土師質皿	○	8.8	2.4	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/3 にぶい橙色	C系2
2-359-2	I5	土師質皿	○	9.6	2.3	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/3 にぶい橙色	C系2
2-359-3	I5	土師質皿	×	10.6	2.1	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 8/3 浅黄橙色	D系2
2-359-4	I5	土師質皿	×	11.2	2.4	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	5YR 8/4 浅橙色	D系2　底部擦孔
2-359-5	I5	土師質皿	×	18.6	2.9	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ	5YR 8/4 浅橙色	D系
3-98-1	G10	土師質皿	○	7.4	1.9	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/2 灰白色	B系
3-98-2	G10	土師質皿	○	9.0	2.2	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系1
3-98-3	G10	土師質皿	○	10.1	2.5	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系2
3-181-1	F10	皿	伊万里	12.7	3.2	4.4	ロクロ成形　削出し高台	染付　内・見)草花文	II期
3-263-1	I10	碗	唐津	10.5	5.6	4.0	ロクロ成形　削出し高台	灰釉	II期

遺跡No	器種	土層質・胎土色調 陶器器・生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師器：胎土色調 陶器器：釉　装飾	備考
3-293-1	H10	天目茶碗	瀬戸・美濃	10.6	7.0	3.9	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	連房Ⅰ期
3-293-2	H10	土師質皿	○	9.7	2.2	－	手づくね　ロ・内向しナデ	5YR 7/6 橙色	C系2
3-303-1	H2	皿	瀬戸・美濃	11.9	2.8	6.1	ロクロ成形　削出し高台　鋸(雲道具痕	志野釉	大窯Ⅳ期
3-303-2	H10	擂鉢	越前	(26.8)	10.9	13.0	ロクロ成形	擂目9条	VI-2期
3-303-3	H2	土師質皿	×	8.8	1.9	－	手づくね　ロ・内向しナデ	5YR 7/4 にぶい橙色	C系1
3-303-4	H2	土師質皿	○	9.9	2.2	－	手づくね　ロ・内向しナデ	5YR 6/3 にぶい橙色	C系1
3-303-5	H2	土師質皿	×	9.2	2.2	－	手づくね　ロ・内向しナデ	5YR 6/3 にぶい橙色	C系2
3-303-6	H2	土師質皿	○	9.4	2.4	－	手づくね　ロ・内向しナデ	5YR 6/3 にぶい橙色	C系2
3-303-7	H2	土師質皿	○	9.4	2.2	－	手づくね　ロ・内向しナデ	5YR 6/3 にぶい橙色	C系2
3-421-1	I10	皿	唐津	12.9	3.3	4.3	ロクロ成形　削出し高台　見)砂目痕	灰釉　鉄絵(草花文)　腰部以下露胎	Ⅱ期
3-439-1	G10	皿	瀬戸・美濃	(11.1)	2.5	7.5	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　削出し高台	大窯Ⅳ期
3-439-2	G10	輪花皿	瀬戸・美濃	(12.4)	2.4	(6.9)	ロクロ成形　削出し高台　鋸)雲道具痕	志野釉	大窯Ⅳ期
3-439-3	G10	擂鉢	越前	(34.4)	14.7	(14.7)	ロクロ成形	擂目7条	VI-2期
3-451-1	H10	壺	越前	(14.3)	－	－	ねりたて成形	－	V-3期
3-451-2	H10	擂鉢	越前	(29.3)	11.1	13.1	ロクロ成形	擂目7条	VI-2期
3-451-3	H10	鉢	越前	(29.6)	7.6	(18.7)	ロクロ成形	－	V-3期
3-539-1	H10	天目茶碗	瀬戸・美濃	(11.1)	6.6	(4.0)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	大窯Ⅳ期
3-539-2	H10	土師質皿	○	9.5	2.3	－	手づくね　ロ・内向しナデ	5YR 7/6 橙色	C系1
3-547-1	G9	段皿	唐津	(14.7)	4.2	3.8	ロクロ成形　削出し高台　見)砂土目痕	灰釉　腰部以下露胎	Ⅰ期
3-547-2	G9	皿	瀬戸・美濃	10.0	2.3	6.1	ロクロ成形　削出し高台　鋸)雲道具痕	灰釉	大窯Ⅳ期
3-547-3	G9	皿	瀬戸・美濃	(11.5)	2.7	(5.3)	ロクロ成形　削出し高台　鋸)雲道具痕	鉄釉　見)鐵釉	大窯Ⅳ期

第Ⅱ面区　3面目　整地土3等(第10・11図)

遺跡No	器種	土層質・胎土色調 陶器器・生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師器：胎土色調 陶器器：釉　装飾	備考
3整-1	F10	碗	伊万里	11.3	5.8	4.2	ロクロ成形　削出し高台	白磁　外)山水文	Ⅲ期　外面に絵付け痕
3整-2	H1	碗	伊万里	(11.5)	6.7	4.1	ロクロ成形　削出し高台	外)鉄釉　内)染付(花文)	Ⅱ期
3整-3	F10	鉢	伊万里	(33.1)	6.7	(15.9)	ロクロ成形　器等底　注口貼付け	青磁　見)雷施文　鋸)蛇の目釉剥ぎ	Ⅲ期
3整-4	H10	碗	唐津	(11.2)	6.8	4.4	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　究布	Ⅰ期
3整-5	F10	無釉壺	唐津	16.2)	7.2	3.7	ロクロ成形　器等底	灰釉系　外)鉄絵(唐草文)　内)鐵釉　究布	Ⅰ期
3整-6	G9	半筒碗	京	16.5)	7.9	(4.3)	ロクロ成形　削出し高台	外)透明釉　内)鉄釉	軟質施釉陶器
3整-7	G10	土師質皿	×	18.4	3.2	－	手づくね　ロ・内向しナデ	5YR 8/4 淡橙色	D系
3整-1	I5	碗	瀬戸・美濃	8.2	5.6	4.3	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉	連房Ⅰ期
3整-2	H5	天目茶碗	瀬戸・美濃	(11.0)	6.1	2.9	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	大窯Ⅳ期
3整-3	H5	天目茶碗	瀬戸・美濃	11.1	5.9	3.5	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	大窯Ⅳ期
3整-4	J6	天目茶碗	瀬戸・美濃	16.7)	4.1	2.1	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	大窯Ⅳ期
3整-5	J6	瓶	瀬戸・美濃	－	－	6.6	ロクロ成形　鋸)雲道具痕	外)鉄釉＋梅鉢紋　内)鉄泥	大窯Ⅳ期？
3整-6	B3	皿	瀬戸・美濃	(9.6)	1.9	3.3	ロクロ成形　器等底　鋸)雲道具痕	灰釉	大窯最期　漆付着
3整-7	B6	皿	中国	(13.2)	3.6	(7.2)	ロクロ成形　削出し高台	白磁	E群
3整-8	I4	擂鉢	越前	(30.5)	10.6	(13.7)	ロクロ成形	擂目8条	VI-1期
3整-9	I5	土師質皿	○	7.0	1.9	－	手づくね　ロ・内向しナデ	10YR 8/2 灰白色	D系　底部穿孔
3整-10	I5	土師質皿	×	8.9	2.1	－	手づくね　ロ・内向しナデ	7.5YR 7/6 橙色	C系1
3整-11	I6	土師質皿	○	10.4	2.2	－	手づくね　ロ・内挟みナデ　圏線	7.5YR 8/4 淡黄橙色	D系1
3整-12	I6	土師質皿	○	10.2	2.2	－	手づくね　ロ・内挟みナデ　圏線	7.5YR 8/4 淡黄橙色	D系1
3整-13	H5	茶釜	瓦質	(14.3)	15.9	(16.0)	ロクロ成形　把手貼付け		17世紀～

第Ⅱ面区　1面目(第12図)

遺跡No	器種	土層質・胎土色調 陶器器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師器：胎土色調 陶器器：釉　装飾	備考
7-164-1	F6	碗	唐津	(10.4)	6.7	4.1	ロクロ成形	灰釉系　ハケメ	Ⅲ期
7-164-2	F6	碗	唐津	(10.7)	7.3	(3.3)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　ハケメ　外)長釉抽	Ⅲ期
7-164-3	F6	碗	唐津	(10.4)	6.1	(3.4)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　ハケメ	Ⅲ期
7-164-4	F6	染付碗	瀬戸・美濃	11.1	7.6	4.2	ロクロ成形　削出し高台	外)鉄釉　ロ・内)灰釉	連房最期
7-164-5	F6	端折碗	瀬戸・美濃	10.3	5.5	3.5	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　外)雷文(鳥獣)	連房最期
7-164-6	F6	碗	京信	10.9	6.8	3.3	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　鉄絵(松)　高台部露胎	18C中葉～　墨書
7-164-7	F6	碗	京信	10.8	6.8	3.4	ロクロ成形　削出し高台　見)目痕	灰釉系　鉄絵(山水文)　高台部露胎	18C中葉～　墨書
7-164-8	F6	碗	京信	9.6	6.0	3.2	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　鉄絵(松)　高台部露胎	18C中葉～　墨書
7-164-9	F6	碗	京信	10.3	6.1	3.4	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　高台部露胎	18C中葉～
7-164-10	F6	碗	京信	11.0	7.4	4.0	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　鉄絵(梅木・蝶)　高台部露胎	18C中葉～
7-164-11	F6	碗	京信	9.6	5.5	3.3	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　鉄絵(女郎花)　高台部露胎	18C中葉～
7-164-12	F6	碗	京信	10.8	6.4	3.8	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　鉄絵(松)　高台部露胎上	18C中葉～
7-164-13	F6	土師質皿	○	9.6	1.4	－	内型成形　ロ・見)回しナデ　見)横ナデ	7.5YR 8/3 淡黄橙色	G系
7-164-14	F6	土師質皿	○	9.7	1.6	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ	7.5YR 8/4 淡黄橙色	G系
7-164-15	F6	土師質皿	○	9.8	1.6	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ	7.5YR 8/4 淡黄橙色	G系
7-13-1	A2	碗	伊万里	8.9	5.4	3.2	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)斜格子＋四方襷文　見)玉和花文	V期
7-13-2	A2	碗	伊万里	8.8	5.7	3.4	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)斜格子＋手毬文　見)鳥し字(寿)	IV-2期
7-13-3	A2	碗	伊万里	8.6	5.7	3.4	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)稲束　見)花文	V期
7-13-4	A2	杯	伊万里	(5.5)	3.7	(2.3)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)丸文　見)花文	Ⅲ期
7-28-1	J3	碗	唐津	(10.3)	6.1	4.6	ロクロ成形　削出し高台	瓢灰釉　腰部以下露胎	Ⅰ期
7-28-2	J3	皿	唐津	(11.7)	3.4	4.1	ロクロ成形　削出し高台　見)砂土目痕	灰釉　腰部以下露胎　究布	Ⅰ期
7-28-3	J3	天目茶碗	瀬戸・美濃	(10.6)	7.4	4.2	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	連房最期
7-51-1	C・D5	碗	京信	8.6	6.3	3.3	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　高台部露胎	18C中葉～

遺跡No	器種	土層質・胎土色調 陶器器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師器：胎土色調 陶器器：釉　装飾	備考
7-51-2	C・D5	徳利	瀬戸・美濃	－	－	6.3	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　内・高台部以下露胎	墨書
7-51-3	C・D5	香炉	三田	6.5	5.5	5.4	ロクロ成形　脚貼付け	青磁　内)露胎	近代
7-51-4	C・D5	土師質皿	○	11.0	1.8	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ	7.5YR 8/3 淡黄橙色	G系
7-51-5	C・D5	土師質皿	○	11.5	2.2	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ	7.5YR 6/3 にぶい黄橙色	G系
7-61-1	A2	碗	伊万里	(10.0)	4.8	3.7	ロクロ成形　削出し高台	染付　外・内)菊文	V期
4-166-1	F5	碗	伊万里	(10.2)	5.7	(4.0)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)風水文　鋸)幽狐	IV-1期
4-166-2	F5	土師質受皿	○	9.7	1.6	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　把手貼付け	7.5YR 8/4 淡黄橙色	D系2
4-166-3	F5	土師質受皿	×	9.4	1.6	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　把手貼付け	7.5YR 8/4 淡黄橙色	D系2
4-166-4	F5	土師質皿	○	9.4	1.9	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/4 淡黄橙色	C系2
4-166-5	F5	土師質皿	○	9.4	1.6	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 淡黄橙色	C系2
4-167-1	F5	皿	唐津	11.9	3.3	4.1	ロクロ成形　削出し高台　見)砂目痕	灰釉　腰部以下露胎　究布	Ⅱ期
4-167-2	F5	擂鉢	越前	28.7	12.7	14.2	ロクロ成形	擂目8条	VI-1期

第Ⅱ面区　2面目(第13図)

遺跡No	器種	土層質・胎土色調 陶器器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師器：胎土色調 陶器器：釉　装飾	備考
7-2-1	J1	土師質皿	○	9.6	1.4	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ	5YR 8/3 淡橙色	D系2
7-2-2	J1	土師質皿	○	10.9	1.9	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ	7.5YR 7/4 にぶい橙色	D系2
7-27-1	A2	碗	唐津	(9.7)	7.1	4.1	ロクロ成形　削出し高台	透明釉＋胴線釉	Ⅲ期
7-27-2	A2	擂鉢	越前	－	－	－	ロクロ成形	擂目1条	VI-2期
7-27-3	A2	土師質受皿	○	10.9	1.5	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　把手貼付け	7.5YR 8/4 淡黄橙色	D系3
7-27-4	A2	土師質皿	○	8.7	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/3 にぶい橙色	C系2
7-27-5	A2	土師質皿	○	10.4	1.7	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	5YR 8/3 淡橙色	D系3
7-27-6	A2	土師質皿	○	10.7	1.6	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	7.5YR 7/3 にぶい橙色	D系3
7-27-7	A2	土師質皿	○	10.7	1.9	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	7.5YR 7/3 にぶい橙色	D系3
7-27-8	A2	土師質皿	○	10.7	1.7	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	7.5YR 8/3 淡黄橙色	D系3
7-27-9	A2	土師質皿	○	11.4	2.0	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	7.5YR 8/3 淡黄橙色	D系3
7-37-1	J1	天目茶碗	瀬戸・美濃	10.6	6.9	3.7	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	連房Ⅰ期
7-37-2	J1	土師質皿	○	8.9	2.3	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	10YR 5/2 灰黄褐色	C系2
7-37-3	J1	土師質皿	○	9.4	2.4	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	10YR 5/2 灰黄褐色	C系2
7-53-1	B・C3	碗	唐津	(11.4)	6.2	5.0	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　腰部以下露胎　究布	Ⅰ期
7-53-2	B・C3	皿	唐津	(11.5)	3.4	4.2	ロクロ成形　削出し高台　見)砂土目	灰釉　腰部以下露胎　究布	Ⅰ期
7-53-3	B・C3	皿	唐津	10.8	3.3	3.3	ロクロ成形　削出し高台　見)砂土目	灰釉　腰部以下露胎　究布	Ⅰ期
7-53-4	B・C3	土師質皿	○	10.4	2.2	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	5YR 6/3 にぶい橙色	D系2
7-53-5	B・C3	土師質皿	○	11.9	2.8	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	7.5YR 8/4 にぶい黄橙色	D系2
7-86-1	C・D4	碗	唐津	(10.0)	6.8	(5.8)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系	Ⅲ期
7-86-2	C・D4	土師質皿	○	8.5	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 淡黄橙色	C系2
7-86-3	C・D4	土師質皿	○	8.8	1.7	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 6/8 橙色	C系2
7-86-4	C・D4	土師質皿	○	9.8	1.8	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	5YR 7/6 橙色	D系2
7-86-5	C・D4	土師質皿	○	10.2	2.0	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	2.5YR 7/4 淡赤橙色	D系2
7-86-6	C・D4	土師質皿	○	10.4	2.0	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	2.5YR 7/6 橙色	D系2
7-86-7	C・D4	土師質皿	○	12.5	1.7	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	2.5YR 6/8 橙色	D系2
4-165-1	F5	碗	唐津	10.1	6.9	4.0	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　ハケメ	Ⅲ期
4-165-2	F5	香炉	唐津	10.8	7.1	4.5	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　内)露胎　腰部以下露胎	Ⅲ期

第Ⅱ面区　3面目(第14図)

遺跡No	器種	土層質・胎土色調 陶器器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師器：胎土色調 陶器器：釉　装飾	備考
7-30-1	A2	天目茶碗	瀬戸・美濃	(11.2)	5.4	4.2	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　高台以下露胎	大窯Ⅳ期
7-30-2	A2	皿	瀬戸・美濃	11.1	2.2	5.1	ロクロ成形　削出し高台　内面ノミ彫り　鋸)雲道具痕	灰釉　見)露胎	大窯Ⅳ期
7-30-3	A2	皿	瀬戸・美濃	10.9	2.5	5.2	ロクロ成形　削出し高台　内面ノミ彫り　鋸)雲道具痕	灰釉　見)露胎	大窯Ⅳ期
7-30-4	A・B2	土師質皿	○	8.4	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	内)10YR 7/4 にぶい黄橙色	C系2
7-30-5	A・B2	土師質皿	○	10.0	2.5	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/3 にぶい橙色	C系2
7-30-6	A2	土師質皿	○	10.0	2.5	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	7.5YR 7/3 にぶい橙色	D系2
7-30-7	A2	土師質皿	○	10.7	2.4	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	7.5YR 6/3 にぶい橙色	D系2
7-30-8	A・B2	土師質皿	○	11.4	2.5	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	内)10YR 7/6 にぶい黄橙色	D系2
7-30-9	A・B2	土師質皿	○	11.8	2.5	－	手づくね　ロ・内)挑みナデ　圏線	7.5YR 7/3 にぶい橙色	D系2
7-62-1	D5	段皿	唐津	13.2	2.9	4.0	ロクロ成形　削出し高台　見)砂土目	瓢灰釉　腰部以下露胎	Ⅰ期
7-62-2	D5	段皿	唐津	(12.9)	3.5	3.7	ロクロ成形　削出し高台　見)砂土目	灰釉　高台部以下露胎　究布	Ⅰ期
7-82-3	D5	鉢	瀬戸・美濃	(9.1)	5.6	(7.3)	型打ち成形	志野釉	連房Ⅰ期
7-115-1	J1・2	土師質皿	○	8.8	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	2.5YR 7/6 橙色	C系2　底部穿孔
7-142-1	J1・2	碗	唐津	(11.1)	7.3	(4.3)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下鉄足	Ⅱ期
7-142-2	J1・2	段皿	唐津	(11.5)	3.5	3.4	ロクロ成形　回転糸切り　見)砂目痕	灰釉　腰部以下露胎	Ⅱ期
7-142-3	J1・2	擂鉢	越前	(27.2)	9.3	(12.2)	ロクロ成形	擂目6条	VI-1期
7-143-1	J1・2	碗	唐津	10.3	6.9	4.0	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　鉄絵　腰部以下露胎　究布	Ⅱ期
7-143-2	J1・2	輪花皿	瀬戸・美濃	(12.5)	2.9	(7.1)	ロクロ成形　削出し高台　内面ノミ彫り	志野釉	大窯Ⅳ期
7-144-1	J1	碗	瀬戸・美濃	10.6	7.3	4.4	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　腰部以下露胎	連房Ⅱ期
7-148-1	J2	碗	唐津	11.6	5.6	4.8	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　高台部以下露胎	Ⅰ期
7-148-2	J2	碗	唐津	(10.7)	7.9	4.3	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　高台部露胎	Ⅱ期
7-148-3	J2	皿	唐津	1.6	2.7	12.5	ロクロ成形　綾み貼付け	灰釉　鋸)露胎	Ⅱ期

遺跡No	器種	土層質：明明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土胎盆：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
7-154-1	A-12	土師質盆	○	9.4	2.6	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 7/4 にぶい橙色	D系2
7-154-2	A-12	土師質盆	○	10.8	2.6	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	7.5YR 7/4 にぶい橙色	D系2
4-181-1	E4	天目茶碗	瀬戸・美濃	(11.6)	7.6	(4.1)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鐔部以下露胎	瀬戸Ⅱ期
4-181-2	E4	土師質盆	○	9.9	2.5	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系2
4-181-3	E4	土師質盆	○	9.9	2.6	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系2

第篇街区 規模規模 5・4（第15・16図）

遺跡No	器種	土層質：明明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土胎盆：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
5-4-1	B9	碗	伊万里	6.6	5.1	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)格子文	V期
5-4-2	B9	碗	伊万里	7.7	5.7	3.3	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)草花文＋篠文字	V期
5-4-3	B9	杯	伊万里	6.6	5.7	3.3	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)牡丹唐草文＋雲＋雷文　銅)銘	
5-4-4	B9	碗	伊万里	7.9	5.7	3.5	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)草花文	V期
5-4-5	B9	碗	伊万里	(7.6)	4.3	(3.2)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)牡丹唐草文　内)四方睡文　見)松竹梅	IV-2期
5-4-6	B9	碗	伊万里	(8.2)	5.3	(3.2)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)矢羽根文　見)梅し文字(梅)	V期
5-4-7	B9	碗	伊万里	8.0	5.5	3.3	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)松竹梅文　見)扇文	V期
5-4-8	B9	碗	伊万里	(9.4)	5.7	(3.9)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)菊＋網目文	V期
5-4-9	B9	碗	伊万里	10.4	5.6	4.0	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)草唐草文　内)四方睡文　見)松竹梅	IV-2期
5-4-10	B9	端反碗	伊万里	(10.3)	6.1	(4.4)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)丙形＋雑書　内)蔓形蓮文	V期
5-4-11	B9	端反碗	伊万里	11.7	6.0	4.8	ロクロ成形　削出し高台　見)目板	染付　外)貝＋網文	V期
5-4-12	B9	端反碗	伊万里	8.8	5.0	3.5	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)山水文	V期
5-4-13	B9	広東碗	伊万里	11.0	6.5	5.4	ロクロ成形　削出し高台　見)目板	染付　外)山水文　見)寿文	V期
5-4-14	B9	輪花皿	伊万里	10.2	2.7	5.4	ロクロ成形後型押し　削出し高台　目板	染付　内＋見)山水文	III期
5-4-15	B9	輪花皿	伊万里	9.2	2.6	5.0	ロクロ成形後型押し　削出し高台	染付　見)草花文	V期
5-4-16	B9	碗蓋	伊万里	3.6	2.6	9.4	ロクロ成形	染付　外)葵唐草文　内)四方睡文　見)松竹梅　銅)銘	V期
5-4-17	A9	火入	伊万里	(9.6)	7.4	7.5	ロクロ成形　蛇の目高台	染付　外)桐葉	V期
5-4-18	B9	段重	伊万里	11.7	4.9	6.5	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)龍＋宝珠文　内)蔓草	V期
5-4-19	B9	八角鉢	伊万里	14.4	7.4	7.5	ロクロ成形後変形　削出し高台	染付　外)波＋雲模　内)鳳凰文　見)栗蝶	V期
5-4-20	A9	碗	唐津	(9.7)	7.9	4.3	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鐔部以下露胎	II期
5-4-21	B9	皿	唐津	10.9	2.6	5.4	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　高台部露胎	近代
5-4-22	B9	鉢	唐津	(20.0)	20.2	11.4	ロクロ成形　削出し高台	外)ハケメ　鐔部・内・高台)鉄泥	III期
5-4-23	B9	天目形碗	瀬戸・美濃	10.7	7.4	4.3	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鐔部以下露胎	瀬戸前期
5-4-24	B9	腰折碗	瀬戸・美濃	(11.4)	6.9	(4.2)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鐔部以下露胎	瀬戸前期
5-4-25	A9	皿	瀬戸・美濃	(14.3)	4.8	(7.5)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　貫入	瀬戸前期
5-4-26	B9	壺蓋	瀬戸・美濃	11.7	3.6	9.0	ロクロ成形　摘み貼付	透明釉　内)蓮葉	18C中葉～
5-4-27	B9	碗	九谷	7.3	4.6	2.6	ロクロ成形　削出し高台	色絵　外)花鳥文	近代
5-4-28	B9	土瓶	京信	6.9	－	－	ロクロ成形　注口・把手貼付け	白釉　外)雀＋野菜	18C中葉～
5-4-29	B9	六角鉢	三田	(15.4)	7.4	6.0	型打ち成形　削出し高台	青磁　外＋内)飯茶文	近代
5-4-30	B9	甕	越前	(44.7)	57.0	18.4	ねじたて成形		VII-1期　墨書
5-4-31	B9	甕	越前	42.5	55.8	19.3	ねじたて成形		VII-1期
5-4-32	A9	擂鉢	越前	25.4	11.2	12.3	ロクロ成形　高台貼付け	擂目13条	VIII期
5-4-33	A9	擂鉢	越前	29.0	12.1	15.0	ロクロ成形　高台貼付け	擂目9条	IX期
5-4-34	A8	鉢	越前	(20.9)	7.9	(14.8)	ロクロ成形　鐔貼付け	鉄泥銅色塗り	VIII期
5-4-35	A9	土師質盆	×	9.0	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 7/6 橙色	C系2
5-4-36	A9	土師質盆	○	10.4	2.8	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 5/3 にぶい褐色	C系2
5-4-37	A9	土師質盆	○	9.9	2.6	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	D系2
5-4-38	B9	土師質盆	×	9.8	1.7	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ　銅)板状痕	7.5YR 8/3 浅黄橙色	G系
5-4-39	B9	土師質盆	×	10.8	1.8	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ　銅)板状痕	7.5YR 8/3 浅黄橙色	G系
5-4-40	B9	土師質盆	×	12.5	2.7	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ	7.5YR 7/4 にぶい橙色	G系
5-4-41	J8	焼塩壺		6.2	11.2	6.0	手づくね　体)縦ヘラ削り	素焼き	刻印
5-4-42	B9	火炉	瓦質	－	－	(23.3)	ロクロ成形　把手・脚貼付け	外)印花文(菊・桜)　下部・朱鷺　把手(獅子)	18C末葉～
5-4-43	B9	七輪	瓦質	20.9	19.8	17.0	板作り　火口・鐵修寸切取り		18C末葉～

第篇街区 規模地1・2　1面目（第17・18図）

遺跡No	器種	土層質：明明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土胎盆：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
4-2-1	H7	碗	唐津	10.8	6.7	4.3	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鐔部以下露胎	I期
4-2-2	H7	擂鉢	越前	(28.9)	11.6	12.0	ロクロ成形	擂目10条	VI-2期
4-3-1	H6	杯	伊万里	6.8	3.4	2.4	ロクロ成形　削出し高台	染付	IV-1期
4-3-2	H6	碗	伊万里	(8.6)	5.1	3.5	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)矢羽根文　見)昆虫文	V期
4-3-3	H6	碗	伊万里	6.2	5.1	3.1	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)竹＋雲文　見)五葉文	V期
4-3-4	H6	碗	伊万里	9.0	5.6	3.4	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)草花文　見)五弁花文	V期
4-3-5	H6	碗	伊万里	(10.9)	6.1	(4.8)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)梅＋瓢箪文　内)四方睡文	
4-3-6	H6	端反碗	伊万里	(10.2)	5.6	4.3	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)花蝶文　内)疎張蓮弁　見)花文	V期
4-3-7	H6	端反碗	伊万里	11.2	5.9	4.6	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)芭蕉・麒麟・鳳凰文　内)瑞寿文　見)銀鱗文　銅)五良太産最神廟治	V期
4-3-8	H6	端反碗	伊万里	(10.4)	5.4	(3.7)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)松文　内)四方睡文　見)花文	IV-2期

遺跡No	器種	土層質：明明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土胎盆：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
4-3-9	H6	端反碗	伊万里	11.1	5.9	4.9	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)桃文　内)格子文　見)草文	V期
4-3-10	H6	皿	伊万里	(13.4)	3.9	(7.9)	ロクロ成形　蛇の目高台	染付　外)唐草文　内)銀木文　見)五弁花文	IV-2期
4-3-11	H6	皿	伊万里	9.5	2.2	4.8	ロクロ成形　削出し高台	染付　外・内・見)花文	V期
4-3-12	H6	瓶	伊万里	2.7	20.9	7.7	ロクロ成形　削出し高台	染付　鉄絵	近代
4-3-13	H6	端反碗	瀬戸・美濃	(9.5)	5.1	(4.1)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)緻密文　内)疎張蓮弁　銅)銘	V期
4-3-14	H6	甕	瀬戸・美濃	(17.8)	23.7	18.0	ロクロ成形　見)砂目板	鉄釉	近代　墨書
4-3-15	H6	腰折碗	京信	8.0	5.4	4.4	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　高台部露胎　兜布	18C中葉～
4-3-16	H6	行	京信	8.6	5.5	3.7	ロクロ成形　削出し高台　把手貼付け	灰釉系　高台部露胎	18C中葉～
4-3-17	H6	水注	京信	6.8	9.7	4.8	ロクロ成形　削出し高台 注口・把手貼付け　見)目板	灰釉系　高台部露胎	18C中葉～
4-3-18	H6	鉢	京信	12.4	5.9	5.5	ロクロ成形　器筒底　把手・注口貼付け	灰釉　鐔部以下露胎	幕末
4-3-19	H6	土瓶	京信	(5.0)	10.0	5.9	ロクロ成形　器筒底　把手・脚貼付け	灰釉　イッチン掛け　高台部露胎	幕末
4-3-20	H6	土瓶蓋	京信	5.9	1.7	3.9	ロクロ成形　摘み貼付け	灰釉系	幕末
4-3-21	H6	鉢	越前	35.7	9.6	24.0	ロクロ成形　鐔貼付け	鉄泥銅毛塗り	VII期
4-3-22	H6	土師質盆	○	8.2	1.5	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ	7.5YR 7/6 橙色	G系
4-3-23	H6	土師質盆	○	9.9	1.7	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙色	G系
4-7-1	I6	碗	伊万里	(9.2)	5.2	(4.4)	ロクロ成形　削出し高台	染付　コンニャク印刷(松＋鶴丸)	IV-1期
4-7-2	I6	筒型碗	京信	8.2	6.0	4.0	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　鉄絵　高台部露胎	18C中葉～
4-15-1	I7	碗	伊万里	10.5	6.0	3.9	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)草花文＋満巻文　銅)銘	IV-1期
4-15-2	I7	碗	伊万里	(7.1)	6.5	4.1	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)唐朝風(鶴＋波)　銅)銘	V期
4-15-3	I7	鉢	越前	(27.4)	13.2	16.2	ロクロ成形　鐔貼付け	鉄泥銅毛塗り	VII期
4-16-1	I7	皿	伊万里	(19.0)	6.6	10.1	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)唐草文　内)竹文　見)五弁花文	IV-1期
4-16-2	I7	腰折碗	京信	10.2	5.5	3.5	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　高台部露胎	18C中葉～
4-16-3	I7	土師質受皿	×	11.8	1.8	－	内型成形　口)回しナデ　見)横ナデ　銅)板状痕　把手貼付け	7.5YR 7/6 橙色	G系
4-16-4	I7	土師質皿	○	10.1	1.7	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ　銅)板状痕	7.5YR 8/4 浅黄橙色	G系
4-16-5	I7	土師質皿	○	10.1	1.6	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ　銅)板状痕	7.5YR 8/4 浅黄橙色	G系
4-16-6	I7	土師質皿	○	10.2	1.8	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ　銅)板状痕	7.5YR 8/3 浅黄橙色	
4-16-7	I7	土師質皿	○	11.5	1.8	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ　銅)板状痕	7.5YR 8/4 浅黄橙色	G系
4-16-8	I7	土師質皿	○	11.8	1.8	－	内型成形　ロ・内)回しナデ　見)横ナデ　銅)板状痕	7.5YR 8/2 灰白色	
4-34-1	I6	焼塩壺		6.0	9.7	4.5	手づくね　体)縦ヘラ削り	素焼き	刻印
5-2-1	C9	杯	伊万里	5.4	3.8	3.3	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)松竹梅文	近代
5-2-2	C9	碗	九谷	9.0	4.2	3.3	ロクロ成形　削出し高台	色絵　外)草花文	近代
5-2-3	C9	壺	越前	11.5	26.2	13.1	ロクロ成形	鉄泥銅毛塗り	VI-2期
5-3-1	C9	碗	伊万里	(8.7)	6.0	(3.0)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)輪宝繋文　見)五弁花文	V期
5-21-1	I7	端反杯	伊万里	7.8	4.5	2.7	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)牡丹唐草文	IV-1期
5-21-2	I7	端反杯	伊万里	7.9	4.6	2.8	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)牡丹唐草文	IV-1期
5-21-3	I7	角皿	伊万里	9.3	2.5	5.3	ロクロ成形後型押し　削出し高台	染付　見)芭蕉文　口紅	V期
5-21-4	I7	皿	伊万里	13.8	2.7	8.8	ロクロ成形　削出し高台　銅)ハリ	染付　外)唐草文　内＋見)草花文	III期
5-21-5	I7	杯	瀬戸・美濃	(7.5)	3.5	3.3	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　高台部露胎　兜布	瀬戸V期
5-46-1	B10	碗	伊万里	(8.8)	5.5	(3.3)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)草花文＋網目文　見)五弁花文	IV-2期
5-46-2	B10	碗	伊万里	(6.3)	4.5	(2.9)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)円文	V期
5-52-1	C8	碗	伊万里	7.7	5.3	2.6	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)銀戸文　見)五弁花文	V期
5-63-1	C8	甕	越前	(16.9)	27.9	18.9	ロクロ成形　耳貼付け		VII-2期
5-64-1	A7	半筒碗	伊万里	(7.2)	5.7	(3.5)	ロクロ成形　削出し高台	染付　外)草木文　内)四方睡文 見)五弁花文	IV-1期

第篇街区 規模地1　2面目（第19図）

遺跡No	器種	土層質：明明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土胎盆：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
4-1-1	H7	無頭盃	唐津	(6.9)	9.1	4.8	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系(唐草文)　高台部露胎　兜布	I-2期
4-30-1	I7	壺本	唐津	(6.6)	9.1	(3.9)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　鉄絵　高台・内)露胎	I-2期
4-30-2	I7	皿	唐津	(10.9)	4.3	4.5	ロクロ成形　削出し高台　見)粘土目板	灰釉　鐔部以下露胎　兜布	I期
4-30-3	I7	段皿	唐津	11.3	3.4	3.7	ロクロ成形　削出し高台　見)砂目板	灰釉　鐔部以下露胎　兜布	II期
4-30-4	I7	土師質皿	○	10.6	2.9	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 5/3 にぶい褐色	C系2
4-30-5	I7	土師質皿	○	10.6	2.8	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/6 橙色	C系2
4-30-6	I7	土師質皿	○	10.6	3.0	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 6/4 にぶい橙色	C系2
4-30-7	I7	土師質皿	○	11.1	2.8	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 6/3 にぶい褐色	C系2
4-10-1	H7	段皿	唐津	11.1	3.2	3.1	ロクロ成形　削出し高台　見)砂目板	灰釉　鐔部以下露胎	II期
4-10-2	H7	段皿	唐津	11.2	3.3	3.3	ロクロ成形　削出し高台　見)砂目板	灰釉　鐔部以下露胎	II期
4-10-3	H7	段皿	唐津	11.5	3.1	3.3	ロクロ成形　削出し高台　見)砂目板	灰釉　鐔部以下露胎	II期
4-10-4	H7	段皿	唐津	10.7	3.2	3.4	ロクロ成形　削出し高台　見)砂目板	灰釉　鐔部以下露胎	II期
4-10-5	H7	土師質皿	○	10.2	2.2	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	10YR 7/6 明黄橙色	D系2
4-10-6	H7	土師質皿	○	11.6	2.7	－	手づくね　ロ・内)挟みナデ　圏線	10YR 5/2 灰黄褐色	D系2
4-65-1	I6	碗	唐津	10.0	7.3	3.7	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　兜布	II期
4-65-2	I6	碗	唐津	11.1	7.6	4.9	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　兜布	II期
4-65-3	I6	皿	唐津	(11.4)	3.2	4.2	ロクロ成形　削出し高台　見)砂目板	灰釉	II期
4-65-4	I5	皿	唐津	(30.7)	9.3	(6.2)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　鐔部以下露出　兜布	II期　墨書
4-65-5	I6	碗	瀬戸・美濃	11.3	6.6	4.5	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　高台部露胎	瀬戸II期

遺跡No		器種	土師質：胎明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師皿：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
4-65-6	16	擂鉢	越前	26.0	10.8	12.5	ロクロ成形	擂目9条	VI-2期
4-65-7	16	擂鉢	越前	28.8	10.3	12.2	ロクロ成形	擂目13条	VI-2期
4-65-8	16	土師質皿	○	9.3	2.2	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙色	C系1
4-65-9	16	土師質皿	○	9.8	2.2	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙色	C系1
4-65-10	16	土師質皿	○	10.6	2.6	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙色	C系1
4-65-11	16	土師質皿	○	11.6	2.6	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙色	D系2
4-65-12	16	土師質皿	○	11.7	2.1	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	7.5YR 7/4 にぶい橙色	D系2
4-65-13	16	土師質皿	○	12.6	2.6	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	7.5YR 8/4 浅黄橙色	D系2
5-9-1	J9	皿	唐津	(14.0)	4.1	5.4	ロクロ成形後変形　削出し高台	灰釉　外)鉄絵(草花文)　高台以下露胎	I -2期
5-9-2	J8	皿	瀬戸・美濃	－	4.8	－	型打ち成形　脚貼付け	織部　見)草花文	連関 I 期
5-32-1	18	土師質皿	○	8.9	2.0	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	5YR 8/4 淡橙色	C系2
5-32-2	18	土師質皿	○	9.0	1.8	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/4 浅黄橙色	C系2
5-32-3	J8	土師質皿	○	10.0	2.4	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	5YR 8/4 淡橙色	D系2
5-32-4	18	土師質皿	○	11.1	2.6	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	7.5YR 8/3 浅黄橙色	D系2
5-32-5	J8	土師質皿	○	11.3	2.5	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	7.5YR 8/3 浅黄橙色	D系2
5-32-6	18	土師質皿	○	11.4	2.5	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	5YR 8/4 淡橙色	D系2

第算街区 殿敷地 1・2　3面目（第20図）

遺跡No		器種	土師質：胎明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師皿：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
101-1	18	盤	瀬戸・美濃	(16.2)	3.9	9.1	ロクロ成形	志野釉	大窯IV期
37-1	H7	段皿	唐津	11.6	3.8	3.6	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　鞆部以下露胎	II 期
37-2	H7	碗	瀬戸・美濃	10.7	7.8	4.2	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　高台部露胎	連関 II 期
8-1	J8	擂鉢	越前	(30.3)	11.0	(13.8)	ロクロ成形	擂目9条	VI-1期
8-2	J8	土師質皿	○	11.7	2.4	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	5YR 7/6 橙色	D系1
8-3	J8	土師質皿	○	11.9	2.3	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	5YR 6/4 にぶい橙色	D系1
8-4	J8	土師質皿	○	11.9	2.2	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	5YR 7/6 橙色	D系2
8-5	J8	土師質皿	×	9.5	2.0	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	7.5YR 8/4 浅黄橙色	D系1
17-1	J8	碗	唐津	10.7	6.8	4.2	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　口)鉄釉　鞆部以下露胎	I 期
17-2	J8	碗	瀬戸・美濃	11.7	7.6	4.3	ロクロ成形　削出し高台	緑釉　鞆部以下露胎	連関 I 期
17-3	J8	碗	瀬戸・美濃	11.7	7.2	3.9	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　鞆部以下露胎	連関 I 期
17-4	J8	段皿	唐津	11.7	4.1	3.8	ロクロ成形　削出し高台　見)貼土目板	灰釉　鞆部以下露胎　究布	I 期
17-5	J8	段皿	唐津	11.7	3.8	4.7	ロクロ成形　削出し高台　見)貼土目板	灰釉　鞆部以下露胎　究布	I 期
17-6	J8	変形角皿	瀬戸・美濃	－	4.3	－	型打ち成形　脚貼付け	織部　見)梅枝	連関 I 期
17-7	J8	扇形皿	瀬戸・美濃	－	4.1	－	型打ち成形　脚貼付け	織部　見)花文	連関 I 期
17-8	J8	変形角皿	瀬戸・美濃	－	4.5	－	型打ち成形　脚貼付け	志野	連関 I 期
17-9	J8	天目形碗	中国	(11.5)	6.3	3.1	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鞆部以下露胎	
17-10	J8	擂鉢	越前	(30.7)	10.9	(14.2)	ロクロ成形	擂目9条	VI-1期
17-11	J8	土師質皿	○	6.8	1.9	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/4 にぶい橙色	B系
17-12	J8	土師質皿	○	9.7	2.4	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/4 にぶい橙色	C系2
33-1	J7	碗	唐津	(10.7)	6.6	4.3	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　鞆部以下露胎	I 期
33-2	J7	天目形碗	瀬戸・美濃	(11.2)	7.3	4.3	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鞆部以下露胎	連関 I 期
33-3	17	杯	瀬戸・美濃	7.0	3.8	3.0	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　高台部露胎　究布	連関 I 期
33-4	17	杯	瀬戸・美濃	(6.3)	3.5	3.1	ロクロ成形　削出し高台	灰釉系　高台部露胎　究布	連関 I 期
77-1	17	土師質皿	×	12.1	2.6	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	7.5YR 7/4 にぶい橙色	D系1　墨書 口縁部四ヶ、整形
77-2	17	土師質皿	×	12.3	2.3	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	7.5YR 7/4 にぶい橙色	D系1　墨書「上」
88-1	C8	皿	唐津	10.9	3.2	4.0	ロクロ成形　削出し高台　見)貼土目板	灰釉　鞆部以下露胎　究布	I 期
88-2	C8	土師質皿	○	10.9	2.6	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	7.5YR 7/3 にぶい褐色	D系2
88-3	C8	土師質皿	○	11.2	2.4	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	7.5YR 7/3 にぶい褐色	D系2
88-4	C8	土師質皿	○	11.2	2.5	－	手づくね　ロ・内)撫みナデ　圏線	7.5YR 7/3 にぶい褐色	D系2

北庄城期遺構出土遺物（第22図）

遺跡No		器種	土師質：胎明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師皿：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
2-16-1		擂鉢	越前	29.6	11.5	13.3	ロクロ成形	擂目13条	VI-1期
2-17-1	H5	茶入	瀬戸・美濃	－	－	4.6	ロクロ成形　回転糸切り	灰釉	大窯IV期？
2-17-2	H5	擂鉢	越前	29.4	11.4	11.8	ロクロ成形	擂目10条	VI-1期
6-129-1	C7	擂鉢	越前	30.6	11.2	13.3	ロクロ成形	擂目8条	VI-1期
6-140-1	C7	皿	瀬戸・美濃	(9.9)	2.3	(5.7)	ロクロ成形　削出し高台　見)露胎 銅)雲道具痕	灰釉	大窯IV期
6-140-2	C7	皿	美濃焼	(12.1)	2.1	(6.9)	ロクロ成形　削出し高台	外)唐草文　見)十字花文	B1群
6-140-3	C8	擂鉢	越前	(29.7)	12.2	(15.0)	ロクロ成形	擂目8条	VI-1期
6-194-1	C9	皿	瀬戸・美濃	10.5	2.4	5.6	ロクロ成形　削出し高台　見)露胎 銅)雲道具痕	灰釉	大窯IV期
3-91-1	I1	擂鉢	美濃	(27.0)	－	－	ロクロ成形	擂目17条　鉄泥	大窯II期
3-91-2	I1	土師質皿	○	9.4	2.2	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	2.5Y 6/6 橙色	C系2
3-210-1	F10	天目茶碗	瀬戸・美濃	(10.9)	－	－	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鞆部以下露胎	大窯IV期
3-210-2	F10	土師質皿	×	8.5	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/4 浅黄橙色	C系1
3-210-2	F10	土師質皿	○	9.4	2.4	－	手づくね　ロ)回しナデ　見)横ナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系1
3-210-4	F10	土師質皿	×	9.5	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系1
3-372-1	I1	天目茶碗	瀬戸・美濃	(6.3)	3.0	(2.5)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鞆部以下露胎	大窯IV期
3-372-2	I1	杯	瀬戸・美濃	(7.9)	4.1	3.9	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　究布	大窯IV期

遺跡No		器種	土師質：胎明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師皿：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
3-544-1	G10	擂鉢	越前	(23.9)	9.6	(6.6)	ロクロ成形	擂目10条	V-3期
3-544-2	G10	土師質皿	×	8.4	2.0	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 8/4 浅黄橙色	C系1
3-544-3	G10	土師質皿	×	8.6	2.0	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	2.5YR 6/1 黄灰色	C系1
7-50-1	B2	皿	瀬戸・美濃	(10.1)	2.5	5.8	ロクロ成形　削出し高台　銅)雲道具痕	灰釉	大窯IV期
7-50-2	B2	皿	中国	(11.3)	2.9	(6.4)	ロクロ成形　削出し高台	白磁	E群
6-294-1	D7	天目茶碗	瀬戸美濃	(12.1)	6.1	(4.1)	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鞆部以下露胎	大窯II期
6-294-2	D7	茶入	瀬戸美濃	－	－	3.8	ロクロ成形	鉄釉　鞆部以下露胎	大窯II期
6-294-3	C7	壺	越前	－	－	－	ねりたて成形		V-3期
6-294-4	B7	擂鉢	越前	(22.1)	8.9	(10.7)	ロクロ成形	擂目8条	V-3期　雲印
6-294-5	C・D7	擂鉢	越前	(31.7)	11.8	(12.4)	ロクロ成形	擂目10条	V-3期
6-294-6	C7	土師質皿	×	8.4	2.0	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	外)5YR 7/4 にぶい橙色	C系1
6-294-7	B7	土師質皿	×	8.6	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	外)5YR 7/4 にぶい橙色	C系1
6-294-8	C7	土師質皿	○	8.8	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	外)5YR 8/4 淡橙色	C系1
6-204-1	D7	碗	瀬戸・美濃	(12.1)	6.9	(4.1)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉　鞆部以下露胎	連関 I 期
6-210-1	C8	皿	瀬戸・美濃	10.9	2.4	5.5	ロクロ成形　削出し高台　見)露胎 銅)雲道具痕	灰釉	大窯IV期
6-235-1	D8	皿	中国	(9.7)	2.5	(3.5)	ロクロ成形　削出し高台	染付	C群
6-297-1	B6・7	皿	中国	(10.7)	3.1	(4.4)	ロクロ成形　削出し高台	白磁　高台部露胎	E群

北庄城期整地土出土遺物（第22図）

遺跡No		器種	土師質：胎明板 陶磁器：生産地	法量 口径	器高	底径	成形・調整技法	土師皿：胎土色調 陶磁器：釉　装飾	備考
2整-1	B6	皿	瀬戸・美濃	9.7	2.2	5.0	ロクロ成形　削出し高台　見)露胎 銅)雲道具痕	灰釉	大窯IV期
2整-2	B6	土師質皿	○	6.5	1.9	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/3 にぶい橙色	B系
2整-3	B7	土師質皿	×	8.3	2.2	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	7.5YR 7/3 にぶい橙色	C系1
2整-4	B6	土師質皿	○	8.5	2.1	－	手づくね　ロ)回しナデ　見)横ナデ	7.5YR 7/6 橙色	C系1
2整-5	B6	土師質皿	×	8.7	2.1	－	手づくね　ロ)回しナデ　見)横ナデ	7.5YR 8/4 浅黄橙色	C系1
6整-1	D8	椀	唐津	(11.0)	7.4	(3.9)	ロクロ成形　削出し高台	灰釉	I 期
6整-2	B6・7	天目茶碗	瀬戸美濃	(11.9)	7.1	4.0	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鞆部以下露胎	連関 I 期
6整-3	B7	天目茶碗	瀬戸美濃	(11.9)	5.9	4.4	ロクロ成形　削出し高台	鉄釉　鞆部以下鉄泥	大窯II期
6整-4	B・C7	皿	瀬戸美濃	(10.5)	2.5	5.5	ロクロ成形　削出し高台　見)露胎 銅)雲道具痕	鉄釉	大窯II期
6整-5	B6・7	皿	瀬戸美濃	(10.5)	2.8	5.7	ロクロ成形　削出し高台　銅)雲道具痕	鉄釉	大窯II期
6整-6	B7	皿	瀬戸美濃	10.8	2.8	5.7	ロクロ成形　削出し高台　銅)雲道具痕	鉄釉	大窯IV期
6整-7	B7	皿	瀬戸美濃	10.9	2.9	5.7	ロクロ成形　削出し高台　銅)雲道具痕	鉄釉	大窯IV期
6整-8	B7	壺	越前	(5.3)	－	－	ロクロ成形		雲印
6整-9	B8	擂鉢	越前	(24.9)	8.5	(13.2)	ロクロ成形	擂目8条	V-3期　雲印
6整-10	B7	擂鉢	越前	30.3	11.5	13.8	ロクロ成形	擂目9条	VI-1期
6整-11	B7	鉢	備前	(18.9)	6.3	(11.8)	ロクロ成形		刻線
6整-12	B6・7	土師質皿	×	8.3	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	外)7.5YR 7/3 にぶい橙色	C系1
6整-13	C8・9	土師質皿	○	8.5	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	外)7.5YR 7/3 にぶい橙色	C系1
6整-14	B7	土師質皿	×	8.6	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	外)7.5YR 7/3 にぶい橙色	C系1
6整-15	B7	土師質皿	○	8.8	2.1	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	外)5YR 7/4 にぶい橙色	C系1
6整-16	B6・7	土師質皿	×	8.7	2.3	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	外)7.5YR 8/3 浅黄橙色	C系1
6整-17	B6・7	土師質皿	×	9.3	2.3	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	外)7.5YR 8/4 浅黄橙色	C系1
6整-18	C7	土師質皿	○	6.2	1.8	－	手づくね　ロ・内)回しナデ	外)7.5YR 8/3 浅黄橙色	B系

備考の時期区分等は以下の文献に依る。　伊万里・唐津：九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念
瀬戸・美濃：瀬戸市埋蔵文化財センター　2002『江戸時代の瀬戸焼』・2003『江戸時代の美濃焼』
越前焼：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2016『越前焼総合調査事業報告』
土師皿：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2015『福井城跡』福井県埋蔵文化財調査報告第146集

第２章　瓦

福井城跡出土の粘土瓦はいぶし瓦と越前赤瓦に分類できる。いぶし瓦は外観が黒～灰色を呈する無施釉瓦である。近世ではだるま窯と呼ばれる窯で焼成され、冷却時に松葉等を投入して窯を密閉することで表面に炭素被膜を生成する。一方、赤瓦は鉄分を含む釉薬を塗り焼成され、外観が赤褐色を呈し、いぶし瓦より硬質である。赤瓦は17世紀初頭から始まる越前焼の塗り土技法を取り入れたものである。

調査で出土した瓦の多くは井戸３-258の構築部材等に伴うもので、図化はそのうち残りの良いものを中心に行った。なお軒瓦等の分類は、（福井県2015）に依拠した。

第１節　軒瓦類（第23・24図　第３・４表）

軒丸瓦は、第23図１～４のいぶし瓦のＡ類と５の赤瓦のＢ類がある。このうち残りの良い１は左巻きの巴尾がほかの巴から僅かに離れ、16個の小さな連珠文を持つ左16bである。外縁をナデ調整し、外側に幅６㎜程の面取りを施す。２～４は全体を把握できないが巴は全て左巻きで、連珠文の数の配置と大きさが１と同様であるため16個と考える。巴尾からほかの巴への間隔はそれぞれ異なる。巴の尾の先が長く伸び、ほかの巴に接して圏線状となる３は左16a、尾が僅かに離れる２は左16b、全ての尾が離れる４は左16cである。外縁をナデ調整するが、２は外側に幅６㎜、３は幅２㎜の面取りを施す。なお４は連珠文のうち３箇所に范傷を認める。５の赤瓦の外観はやや赤みを帯びた茶褐色で、太い右巻きの巴文は全ての尾が離れ、連珠文が12個の右12cである。外縁の面取りは認めない。

軒平瓦は、第23図11～14、第24図１～３のいぶし瓦のＡ類と第23図７～10の赤瓦のＢ類がある。文様は大きく２つの系統に分かれる。１つは中心飾りに５枚の葉文を持ち、そこから左右に２つの唐草が反転して伸びる１、もう１つが中央飾りに鋭い突起を持つ葉文がみられ、そこから左右に第一・二唐草が下向きに巻き込むように伸び、その先に第三唐草が上向きに反転する２である。ただ、今回１は７の赤瓦１点のみである。２類の文様は細部の違いでａ～ｆに分かれる。

井戸３-258出土遺物の文様構成は概ね共通するが、細部で４つに分かれる。第23図14、第24図２はＡ２aで、葉文は上に向かい湾曲し、中心に葉脈が通る。中心飾りから２枚の唐草が上方に伸び、下向きに反転する。下側の第一唐草は先端部が膨らみ丸まる。上側の第二唐草は第一唐草から派生し、半ばから幅が広がり、そこに２箇所の切り込みを持つ。切り込みでできた２箇所の突出部は尖るが、唐草の先端は丸くなる。第二唐草の半ばから第三唐草が下向きに伸び、上に反転して、先端は丸まる。第24図３はＡ２bで葉脈のない点、第23図13はＡ２cで、第一唐草と第二唐草の先端を結ぶ点がＡ２aと異なる。第23図11・12、第24図１はＡ２dで、中央飾り基部から第一唐草、第二唐草とも接して上方に伸び上がる点が大きく異なる。これらも細部に差異があるが、范傷による可能性もあるため１つに纏めた。第23図の赤瓦は破片資料で、Ｂ２eとした８は中心飾りの葉脈は明瞭だが、中心部を除くと切り込みが浅く、Ｂ２fとした９・10は葉脈が退化し痕跡的である。

図化した瓦の多くは寛文の大火以後の第Ｉ街区屋敷地２の井戸３-258出土品で、Ａ左16bの軒丸瓦とＡ２a～Ａ２dの軒平瓦が出土している。軒平瓦は福井県2015報告の赤瓦Ｂ２cと文様構成が似る。これらは井戸材として再利用されたもので、ある程度の時間幅に纏まると考える。詳細をみると、軒丸瓦Ａ左16bは過去の調査で寛文の大火の被災遺物に認めるため、寛文９年以前のものと考える。このタイプは17世紀中頃の越前町平等の上鍵谷窯跡群でＢ右16ｃ・右12ｃが出土しているため、種類は異なるが17世紀前半に収まると考える。Ｂ２cの軒平瓦を同窯に認めるため、Ａ２a～Ａ２dも17世紀中葉までに収まろう。以上から同遺構出土品は17世紀前半のいぶし瓦の様相を示す資料と考える。

第２節　丸瓦・平瓦・鬼瓦等（第24・25図　第５～７表）

第24図４～６はいぶしの丸瓦である。凸面に工具のナデ痕跡が残るものが多く、端面に面取りを施す。凹面に成形時のコビキＢの痕跡と布目が残る。６は上方に釘孔を認める。７は全長28.4cmを測る。

第25図１～４はいぶしの平瓦である。凹面や端面にナデ調整がなされ、凸面は無調整に近い。４は他用途への再利用のため意図的に途中で切断する。５は刻印、６の上面には円形の線刻を認める。

第25図６は棟部の飾りに使われた菊丸瓦である。いぶし瓦で花弁に凹線のある菊文を持つ。

第25図７～９は一部分が残るいぶし瓦の鬼瓦で、部位は明確ではない。

第３表　軒丸瓦・小丸観察表

図版番号	掲図番号	出土地点			種別	型式	法量				紋様			出土遺構の主な遺物の時期	備考
		遺構番号	地区	層位			外径	文様区径	珠文径	丸瓦部厚	分類	巴の巻き	珠文数		
23	1	258	H1		いぶし瓦	軒丸瓦	15.7	11.2	1.0	2.7	左16b	左	16	17C後	
23	2		H1	盛成土	いぶし瓦	軒丸瓦	(15.5)	(11.5)	0.9	2.3	左16b	左	16		
23	3	98	G10		いぶし瓦	軒丸瓦	(16.0)	(11.5)	0.8	－	左16a	左	16	17C初～中	
23	4	250	F10		いぶし瓦	軒丸瓦	(15.5)	(11.5)	0.8	－	左16c	左	16	18C後	
23	5		G10	盛成土	赤瓦	軒丸瓦	(15.5)	(12.3)	1.0	－	左12c	右	12		
23	6		B1	盛成土	いぶし瓦	軒丸瓦	10.5	－	－	－					

第４表　軒平瓦観察表

図版番号	掲図番号	出土地点			種別	型式	法量				紋様			出土遺構の主な遺物の時期	備考
		遺構番号	地区	層位			最大幅	瓦当高	文様区高	平瓦部厚	分類	唐草数			
23	7			攪乱	赤瓦	軒平瓦	(15.1)	4.4	2.6	2.6	B1	3			
23	8	2	I1		赤瓦	軒平瓦	(10.2)	4.1	2.8	2.3	B2e	3		～19C	
23	9			攪乱	赤瓦	軒平瓦	(16.0)	4.5	2.9	1.6	B2f	3			
23	10	2	I1		赤瓦	軒平瓦	(9.2)	4.3	3.0	1.9	B2f	3		～19C	
23	11	258	H1		いぶし瓦	軒平瓦	24.8	4.7	2.7	2.2	A2d	3		17C後	
23	12	258	H1		いぶし瓦	軒平瓦	25.1	4.2	3.0	2.0	A2d	3		17C後	
23	13	258	H1		いぶし瓦	軒平瓦	25.9	4.4	3.2	2.4	A2c	3		17C後	
23	14	258	H1		いぶし瓦	軒平瓦	24.6	4.4	3.1	2.2	A2a	3		17C後	
24	1	258	H1		いぶし瓦	軒平瓦	25.2	4.4	2.9	2.4	A2d	3		17C後	
24	2	258	H1		いぶし瓦	軒平瓦	(19.1)	4.2	2.9	2.3	A2a	3		17C後	
24	3	258	H1		いぶし瓦	軒平瓦	(14.0)	4.4	3.0	2.7	A2b	3		17C後	

第５表　丸瓦観察表

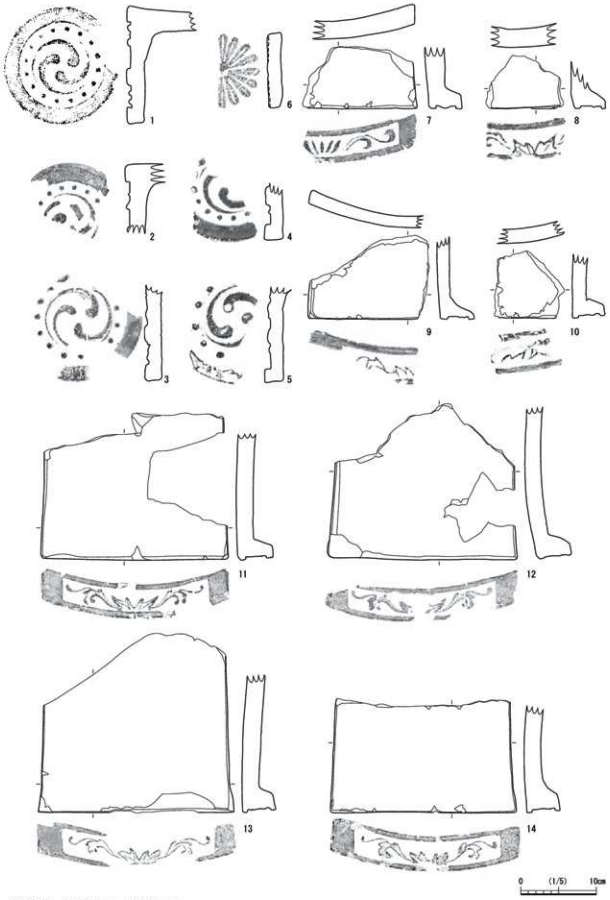
図版番号	掲図番号	出土地点			種別	型式	法量					出土遺構の主な遺物の時期	備考
		遺構番号	地区	層位			玉縁幅	玉縁長	丸瓦部高	丸瓦部厚	丸瓦部幅	全長		
24	4	258	H1		いぶし瓦	丸瓦	11.6	3.8	7.2	2.1	13.9	29.0	17C後	
24	5	258	H1		いぶし瓦	丸瓦	－	－	7.3	2.4	15.0		17C後	
24	6	258	H1		いぶし瓦	丸瓦	11.2	3.9	7.3	2.3	14.0		17C後	
24	7		G10	盛成土	いぶし瓦	丸瓦	11.3	4.1	7.5	2.0	14.6	27.9		

第６表　平瓦観察表

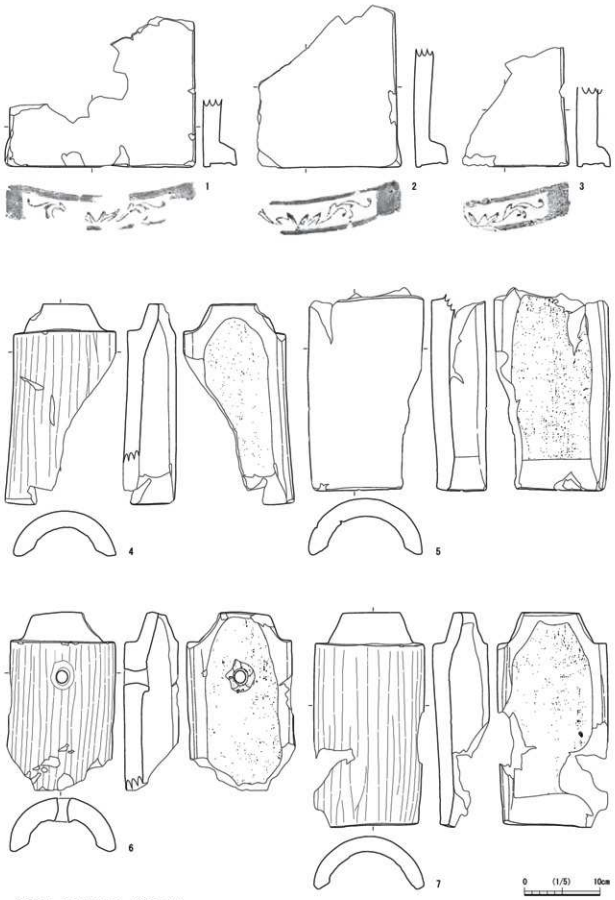
図版番号	掲図番号	出土地点			種別	型式	法量			出土遺構の主な遺物の時期	備考
		遺構番号	地区	層位			最大幅	全長	平瓦厚		
25	3	258	H1		いぶし瓦	平瓦	24.6	29.1	2.1	17C後	
25	1	258	H1		いぶし瓦	平瓦	25.2	29.3	2.1	17C後	
25	2	258	H1		いぶし瓦	平瓦	24.1	29.3	2.0	17C後	
25	4	258	H1		いぶし瓦	平瓦	24.7	(16.9)	1.9	17C後	
25	5	1	F10		いぶし瓦	平瓦	(10.2)	(9.8)	1.7	～19C	刻印あり
25	6		H10	盛成土	いぶし瓦	平瓦	(6.8)	(7.5)	2.0		

第７表　その他の瓦観察表

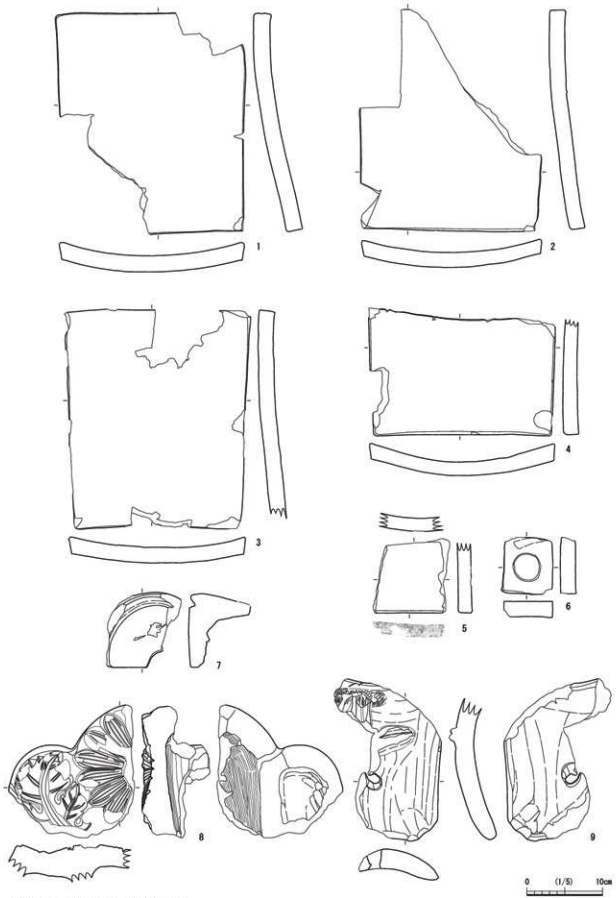
図版番号	掲図番号	出土地点			種別	型式	法量				出土遺構の主な遺物の時期	備考
		遺構番号	地区	層位			最大幅	全高	奥行	最大厚		
25	7			攪乱	いぶし瓦	鬼瓦	(9.8)	9.9	8.2	4.3		
25	8	250	F10		いぶし瓦	鬼瓦	(17.0)	(19.3)	(9.2)	3.8	18C後	
25	9	盛成土	G10		いぶし瓦	鬼瓦	(14.1)	(21.4)	(9.0)	2.6		



第23図　瓦実測図１（縮尺1/5）



第24図　瓦実測図２（縮尺1/5）



第25図　瓦実測図３（縮尺1/5）

第３章　木製品

今回の調査で出土した木製品を、器種、残存率、時期的特徴により354点を図化した。器種分類などはこれまでの福井城跡の報告書と近世遺跡の各出土事例を基に行った。

漆器（第26～31図　第８表）　施文方法、文様は過去の福井城跡の出土漆器の類例を基に判断した。なお近世以降の漆器も、中世から続く重ね椀が継続し、17世紀以降には一の椀・二の椀に、それぞれ蓋の機能も推定される三・四の椀、平椀・壺椀等を伴う揃え椀が普及する。しかし福井城跡から出土した漆器椀は、最終消費地で廃棄され、出土位置が分散的であるため、セット関係を把握できる資料がないのが現状である。そこで計測が可能であった81点の口径、高台径および高台高、器高を計測し、その数値から主にＡ～Ｆ類に分類した。

Ａ類：高台高1.5㎝以上。底部厚0.6㎝以上。一の椀に相当。

Ｂ類：高台高1.5㎝未満。底部厚0.6㎝未満。二の椀に相当。体部の深いＢ１類と低い２類がある。

Ｃ類：高台高1.0㎝未満。体部高4.0㎝未満。重ね椀の三の椀や揃え椀の三・四の椀に相当。高台裏に文様を持ち、蓋の用途も推定されるものもある。

Ｄ類：端反椀

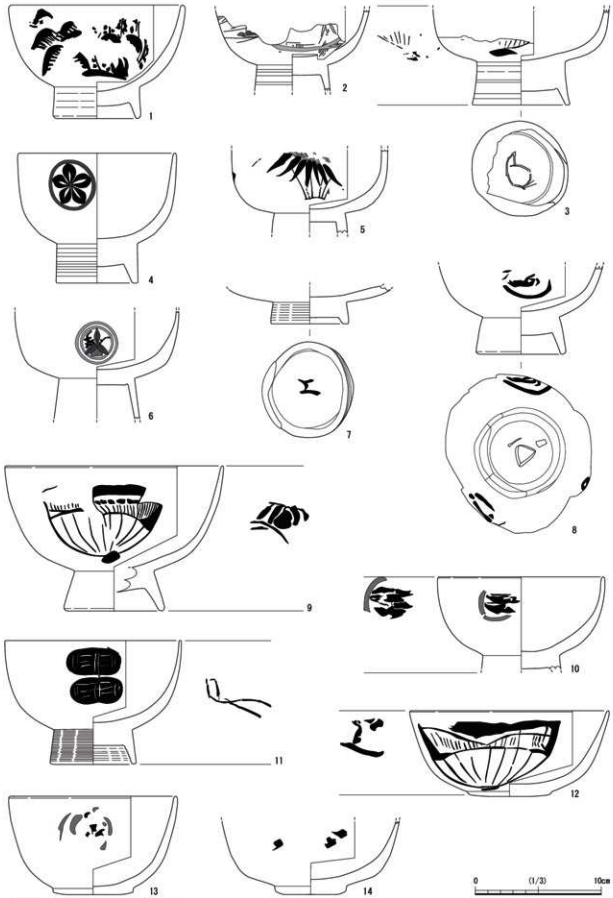
Ｅ類：腰椀

Ｆ類：腰高

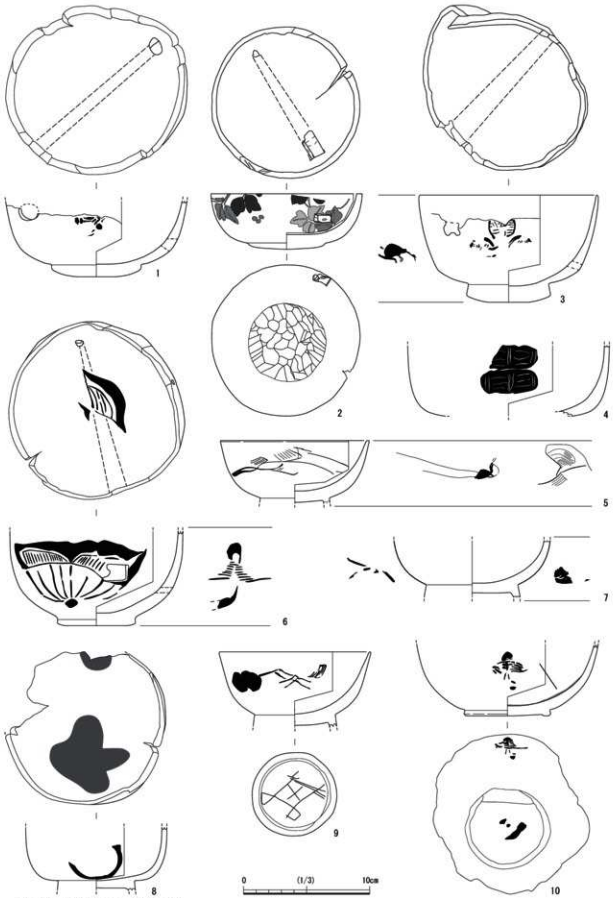
Ａ類は第26図１～11が該当する。１～４のように高台部分に轆轤の痕跡を残すものがある。高台は１・４のように直線的なものと８・９のように強く内傾するものに分かれる。１は蓬莱文を１箇所配す。文様内には簡略化した越前型の松文がある。これは一乗谷朝倉氏遺跡出土の漆絵と同一系統と考える。４・６は丸内に桔梗文と沢瀉文をそれぞれ配す。９は12同様、扇面を２箇所認め、11は縦に並ぶ俵文を確認できる。高台裏に上の字を記した７や線刻を施す３などがある。このほか第26図12～14、第27図１～３・６など、高台を削平して他用途に転用したものがある。そのうち柄杓に転用したものは体部に方形か円形の差込み口がある。共伴遺物の年代は16世紀後葉～幕末までだが形態の顕著な差はなく、変遷は追いにくいが、１・８など16世紀後半頃の遺物と共伴することは、蓬莱文や扇文等、一乗谷朝倉氏遺跡出土漆器椀と漆絵が同一系統である点とも関係しよう。樹種はブナとトチノキが中心である。

Ｂ類は最も多く出土した。口径に対して体部の立ち上がりの深いＢ１類と低い２類に区別し難いものもあるが、量は前者が多い。丸文で囲む文様がやや多い傾向があり、第28図１の梅、６の下がり藤、８の鶴、10の三ツ巴文、第29図１の三引両文、２の二階松、４の松葉菱、12の木瓜花菱と多様な様相を認める。Ｂ２類にはＢ１類の文様構成は少なく、蓬莱文、松文、枝菊と尾長鳥を配する10がある。なお第29図13・16・17など、高台裏に縦・横に格子状の刻線を施すものや墨書を記す第29図５がある。共伴遺物の年代は16世紀後半～幕末までと幅広いが、形態の顕著な差はない。樹種はＡ類と変わらない。

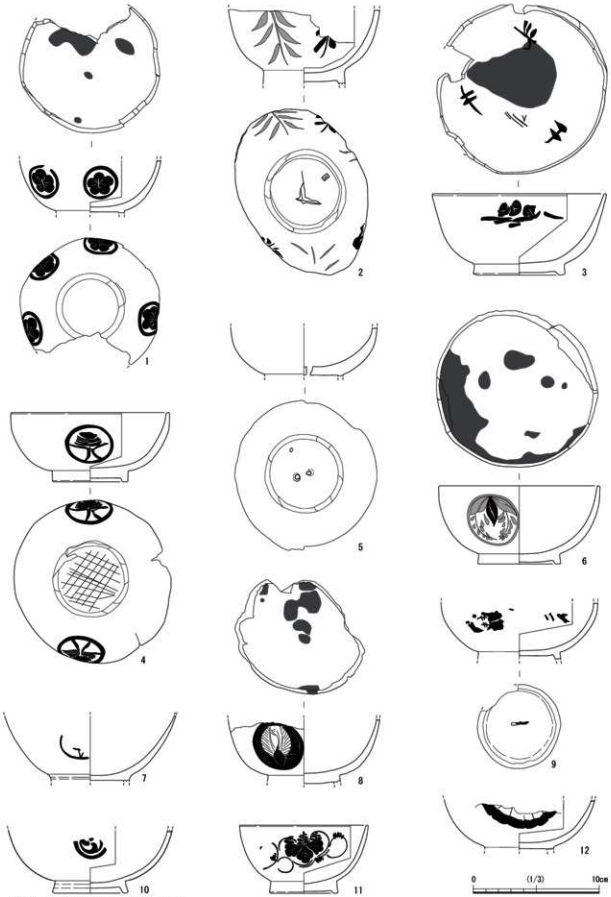
Ｃ類は椀と蓋に分かれる。第30図４・７・８・14の碗を除き蓋である。椀は器高が低く７・８は蓬莱文を配す。蓋のうち３は摘み内面に黒漆を施す。９は器高が高く碗の可能性があるが、丸内の干網文の向きから蓋と判断した。10は梅花が３箇所配する蓋である。内面に付着物を認めることから、後にパレット等に転用されたと考える。樹種はトチノキやケヤキを認める。



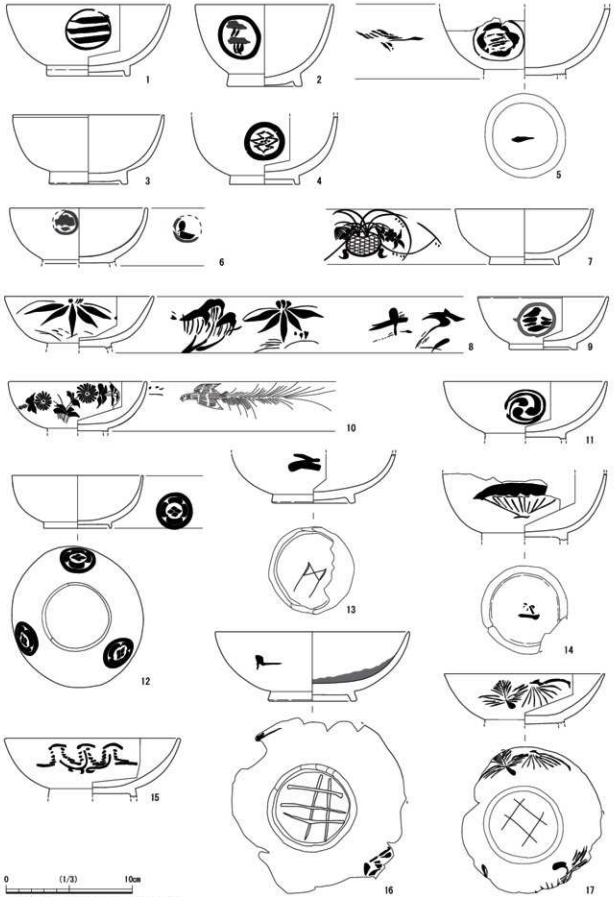
第26図　漆器椀類１（縮尺1/3）



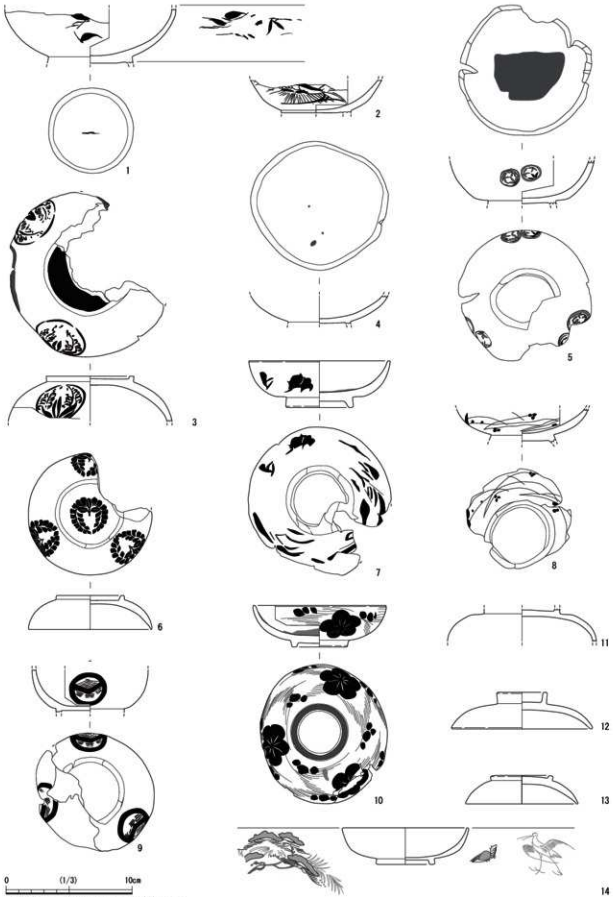
第27図　漆器椀類２（縮尺1/3）



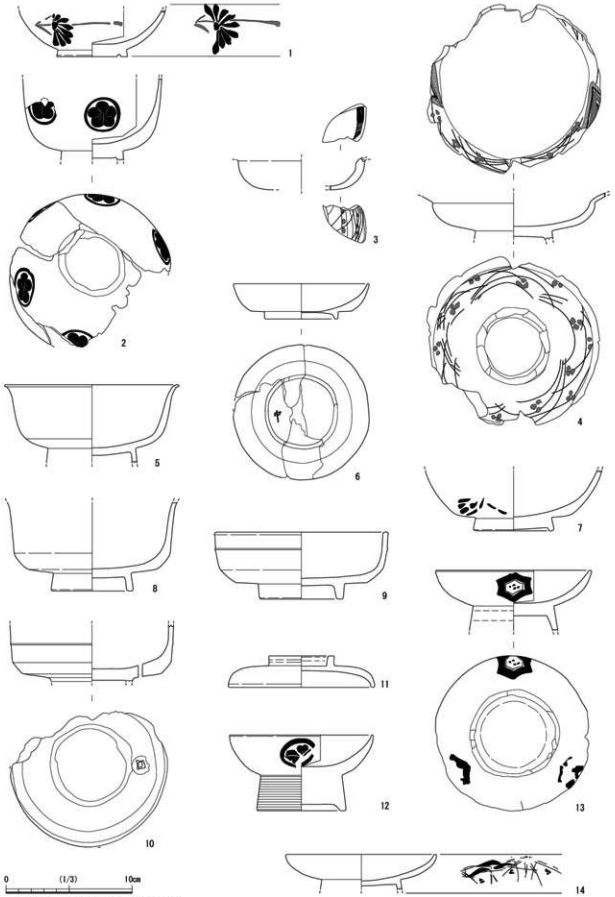
第28図　漆器椀類３（縮尺1/3）



第29図　漆器椀類４（縮尺1/3）



第30図　漆器椀類５（縮尺1/3）



第31図　漆器椀類６（縮尺1/3）

第31図５・８はＤ類の端反碗で、５は腰部が丸みを帯び、６はやや角張る。９・10はＥ類の腰椀で、直線的に立ち上がる体部に稜線が巡り、高台脇平坦部を垂直に穿孔するものもある。12～14は腰高で、12は丸内に桜、13は二重亀甲に花菱文、14は蓬莱文を認める。Ｄ・Ｅ・Ｆ類とも共伴遺物の年代は17世紀に収まるものが多い。樹種はブナとケヤキが中心である。

このほかの一群では、第31図６の碗は底部が水平に伸び、腰部の器壁が厚い。２㎜程と薄い高台の裏の中に墨書を記す。３・４は体部が丸みを帯びロ縁が外側に伸びる大小の皿で、体部と口縁内面に秋草文を配す。17世紀前半頃の同一遺構出土品である。２は蓋付の壺椀の可能性がある。

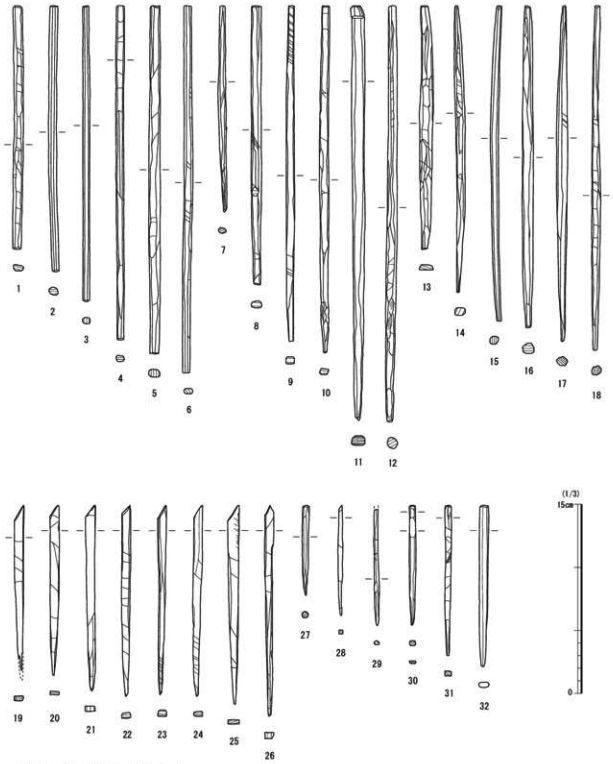
以上の資料のうち、主な遺構出土品で各類の共伴関係をみると、17世紀前半の土坑２-184でＢ・Ｃ・Ｄ類椀、溝６-18でＡ・Ｂ・Ｃ類蓋、土坑７-142でＢ・Ｃ類椀と第31図３・４を認めるように各類の同時性が窺える。加えて18世紀後半以降の溝６-19でＡ・Ｂ・Ｃ類蓋を認める事例から、使用年数や転用による使用の継続を考慮すべきだが、上記のセット関係が維持されたと考える。

箸・楊枝（第32図　第９表）　箸は全て白木の箸で、第32図７・10・11の片口箸、４・９・14～17の両口箸、それらを除く寸胴箸がある。箸の長さは様々だが太さに差異はない。断面形状は多角形、四角形、扁平に分かれるが、数量は多角形が多い。この差は加工段階の丁寧さを反映すると考える。なお、17世紀前半の土坑２-184出土品には多角形が多く、時代差を反映している可能性もある。

第32図の楊枝は先端が尖り、断面形状は長方形のものが多いが、四角形や円形のものもある。このうち19～26は基部先端を斜めに切り落とす。また32は竹を用いた竹楊枝である。断面形状の丸い27・29・30は箸の転用であろう。楊枝も前記の遺構から多く出土しているが、断面形状が長方形で基部先端を切り落とす特徴を認めるため、時代差の可能性がある。

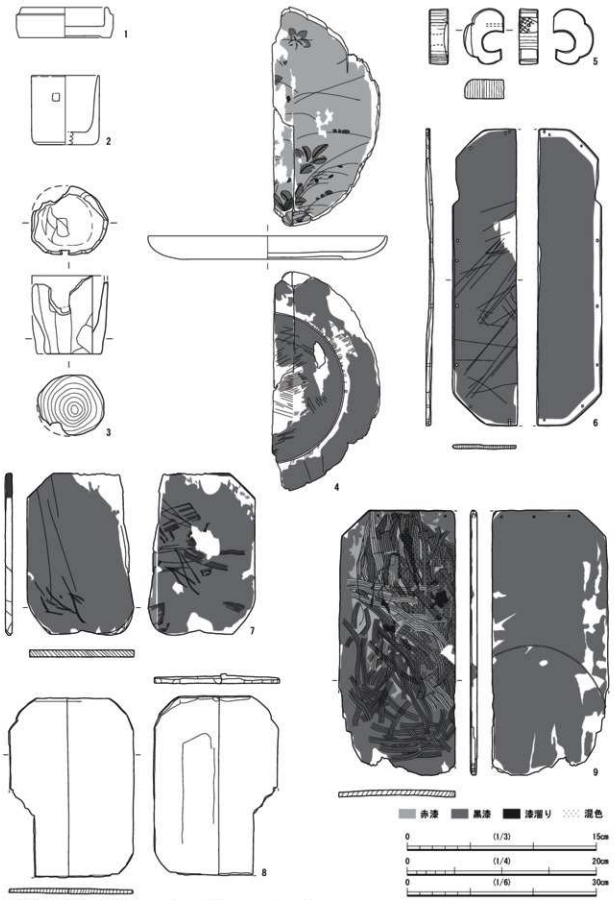
容器・指物・折敷類（第33～35図　第８・10表）　第33図１は黒漆の合子の身で、口縁外面に蓋の受け口がある。２も黒漆の縦長の容器で、体部上辺に0.5㎝四方の方形の穿孔がある。小型の柄杓の可能性もあろう。３は上部を欠くが、やや大きめの差込みロを持つ刳物の柄杓と考える。４は表面黒漆、裏面赤漆の盆で、内面に秋草文を描く。６～８は両面黒漆の折敷底板で、四隅に面を持つ。このうち６は一辺に複数の釘穴があり、８は材を２枚合わせる。９は漆塗り用の板に転用した特異なもので、表面に円形状の接着痕を認める。第34図１～４は重箱である。１の蓋は外面赤漆、内面黒漆で、外面に黒と緑の漆で鶯と山水文を描く。２は全面黒漆塗りで、表面に２条の沈線を５箇所施し、裏面に４段に分けた細い沈線を隙間なく施して装飾とする。周囲に側板を接着するための刻目と漆を認める。折敷、重箱とも刃物痕のあるものが多く、まな板に転用されたことが分かる。５の部材は外面赤漆で、黒漆で唐草文を描く。第35図は木釘、釘穴のある指物である。１～６が両端を食い違いの段状に切り込むのに対して12～14は臍を持つ。なお１～６は土坑２-184出土品である。折敷の脚は第35図９・12と第36図１～４を認める。中央部を抉るが、脚が高いほど抉りが中心に近づく。

切匙・擂粉木・杓子等（第37・38図　第11表）　第37図の切匙は形態がナイフ形の１～４、刃後部が円状に柄に至る８を除いて刃後部が水平である。13は柄先を斜めに切り、11は刃後部に円形、12は柄に長方形の穿孔がある。14は柄が刃部中央先端に付く両面茶漆のもので、両側面を用いたと考える。ナイフ形のものは19世紀の遺構出土品が多く、時代差を反映する可能性もある。第38図１の擂粉木は上端の紐穴から先端まで49cm程を測る大型品である。包丁の柄は２点認めるが、３には包丁の基部が残る。４の火鑽臼は長期利用が、上面13箇所、裏面に１箇所の使用痕からわかる。５・６は箆、７は製作時の工具痕が明瞭な杓子である。

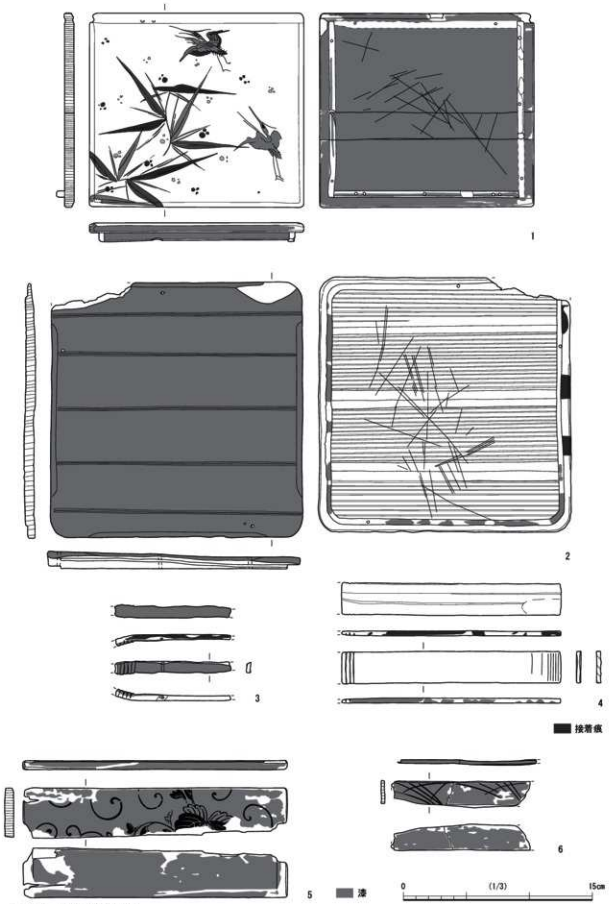


第32図　箸・楊枝等（縮尺1/3）

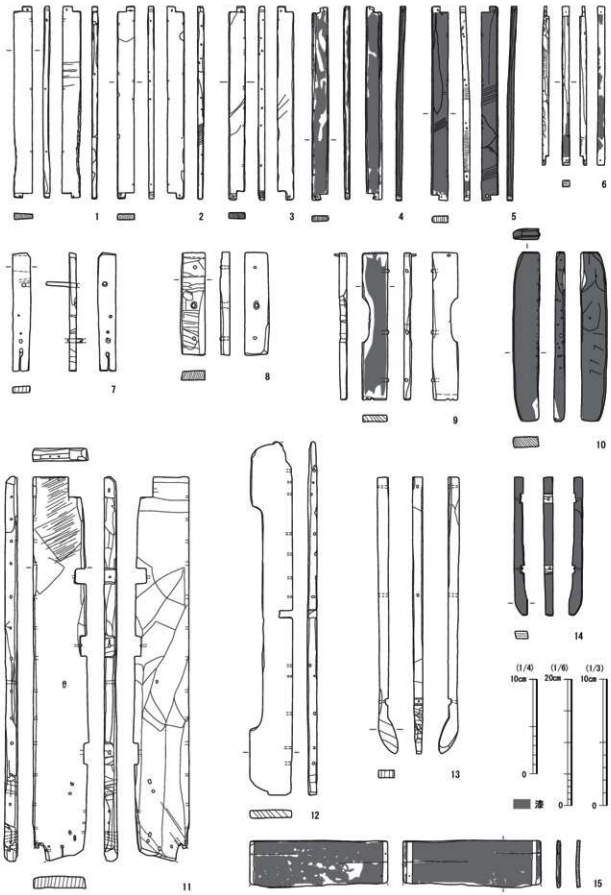
柄杓・曲物・桶・栓（第39～42図　第12・13表）　第39図１～12は柄杓の曲物と柄である。遺存状況の良い曲物は柄穴の反対側に柄の先端を固定する穿孔を持ち、樹皮や木釘で綴じる。曲物の大きさ同様、柄の長さは用途により様々だが先端は尖る。２は曲物と柄とも黒漆塗りで、３も柄の一部分に黒漆が残る。17世紀後半頃の土坑７-27から多く出土しており10点図化したが、１～３はセット関係が分かる。樹種はヒノキとアスナロが中心だが、マツもみられる。



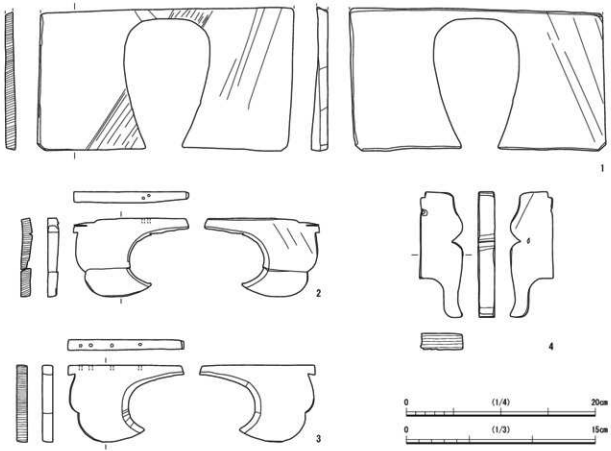
第33図　漆器（縮尺1/3：1～3・5　1/4：6～9　1/6：4）



第34図　漆器（縮尺1/3）



第35図　指物部材（縮尺1/6：1～6・10・15　1/4：7～9・11・12　1/3：13・14）



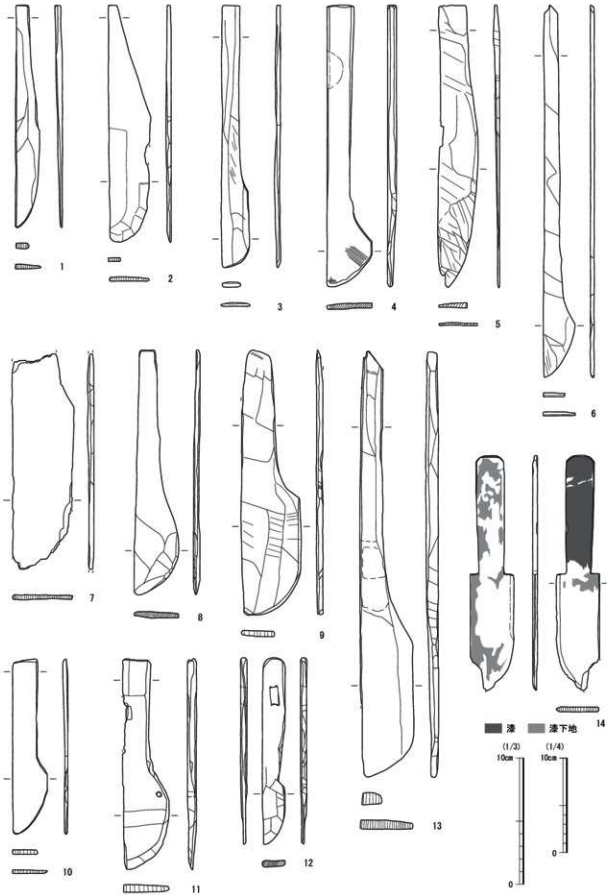
第36図　折敷脚（縮尺1/3：1・4　1/4：2・3）

曲物の形状は多岐に富み、樹皮の通し穴のある１・７は蓋である。２は底板で側面に木釘痕がある。３～６は円形の曲物で、２～３重に巻く身を樹皮で綴じる。三日月状の８は底板に受け口の段があり、その上に木釘痕が残る。９は全面黒漆塗りの大型の底板で、側端部が僅かに立ち上がる。10は楕円形を呈する蓋である。樹皮綴、木釘痕が３箇所みられ、まな板に転用されたため両面に刃物痕が多数残る。

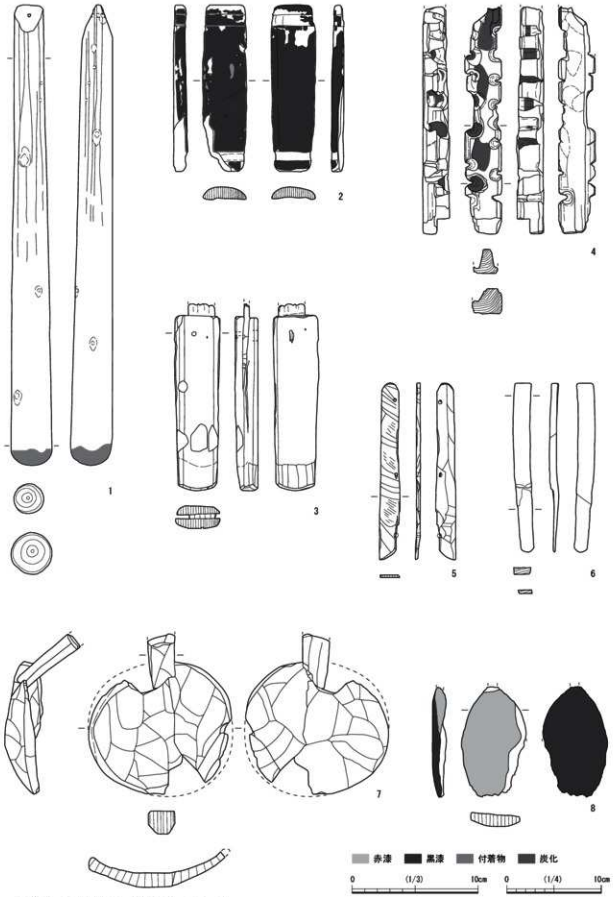
第41図は桶材である。１～３の底板は７～15cmを測る。１は片面を面取りし、側面を細かく面取りする２は２枚の板材を木釘で繋ぐ。４は７枚の桶板で成る小桶で、上中下の３箇所に箍痕がある。側板のうち５は上部に10箇所程の木釘痕があり、まな板に転用されたためか両面に刃物痕が残る。11は同一個体で、11-１・２には持ち手を通すための孔を認める。外面に製作時の箍痕、内面に付着物がみられる。18世紀後半以降の溝６-19出土品である。

第42図１～13の栓のうち１は頭部が正方形で、下部は円形状である。多くは断面が円形状で、４・８・10は加工が荒い。また２・３は頭部、４は下部に１箇所穿孔があり、８の頂部に釘穴がある。このほか７のように頭部と下部の厚さが均一なもの、13の全長の長い特異なものがある。

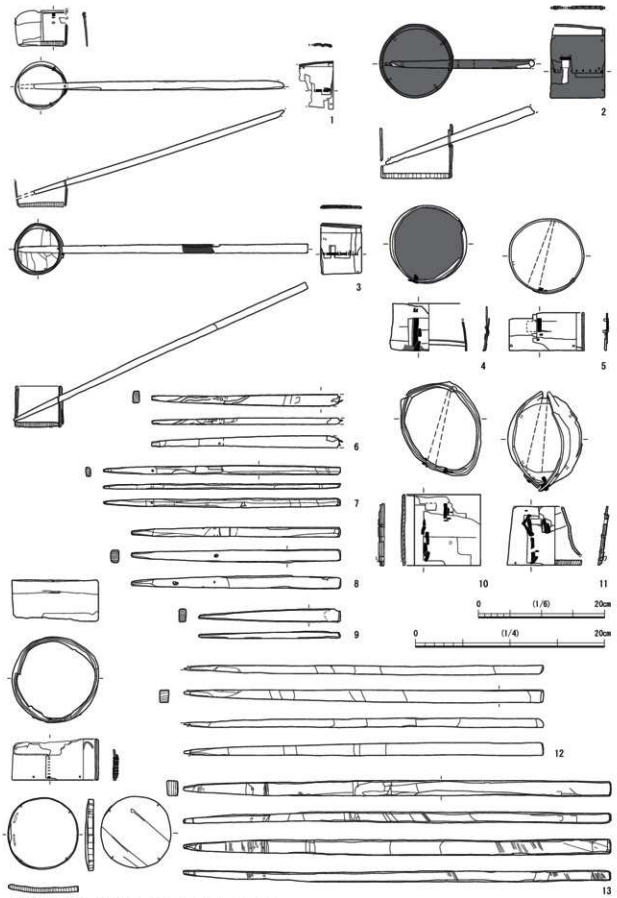
下駄（第43～46図　第14表）　下駄には連歯、差歯の露卯、陰卯のほか抉り、板草履等がある。連歯下駄は台が方形状のものが大半だが、楕円形で幅が広い第44図１・２や狭い６・７もある。歯の形態は長方形が多く、なかには第43図８・11など歯に草鞋を付け雪下駄にする際に打込む釘穴を認めるものもある。黒漆塗りの第44図７は歯が破損した後、露卯下駄と似る歯を外側から８本の釘で貼付ける。８は後ろの歯を補修する。このほか表面に刻線を認めるものもある。連歯下駄は近世を通して出土している。



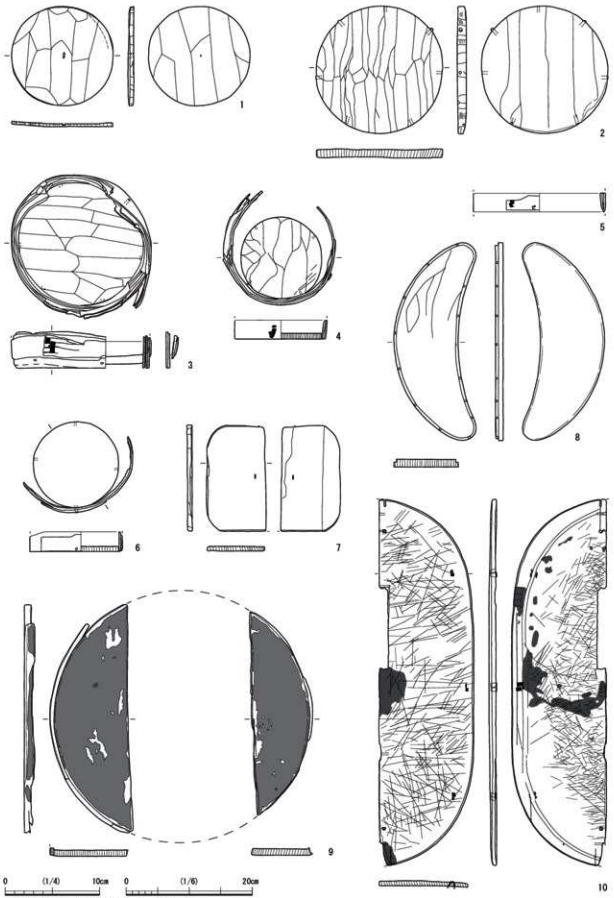
第37図　台所用品１（縮尺1/3　1/4：14）



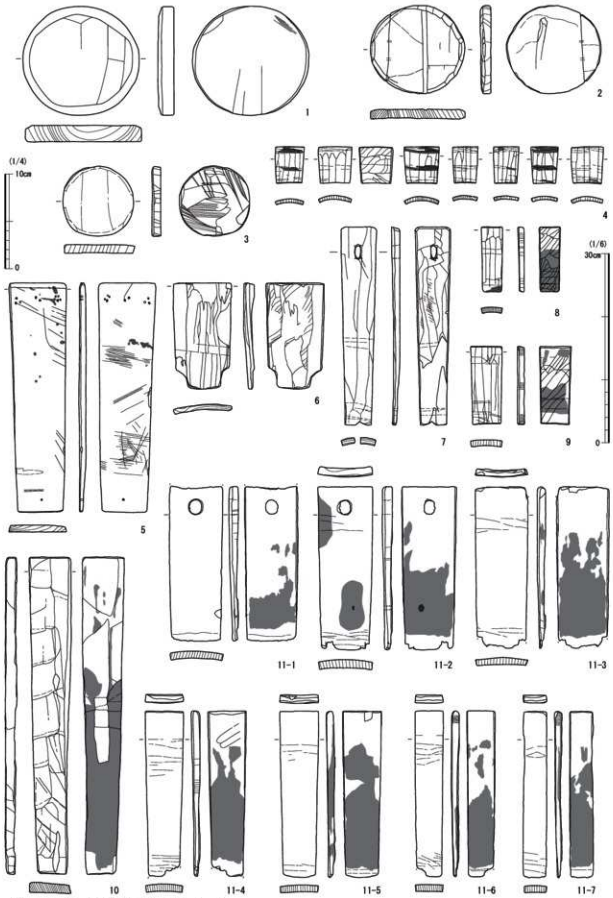
第38図　台所用品２（縮尺1/3　1/4：1）



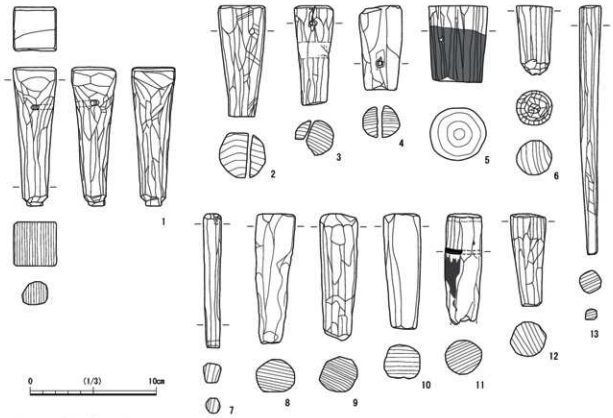
第39図　柄杓（縮尺1/6　1/4：2・4・5・10・11）



第40図　曲物（縮尺1/4　1/6：6）



第41図　桶・樽（縮尺1/6　1/4：1・3）



第42図　栓（縮尺1/3）

歯の内部を方形に抉る第44図９～11の抉り下駄は少ないが、９・11など黒漆塗りのものもある。

露卵下駄は第45図７を除く１～６は幅の狭い楕円形で、１・３～５は臍が１つで、それ以外は２つである。このうち１は黒漆塗りで、５には「T」・「×」の線刻を認める。歯の形状は台形と方形に区分できる。上部に臍穴と対応する数の突起を認めるが、その数は形状の差と関連しない。

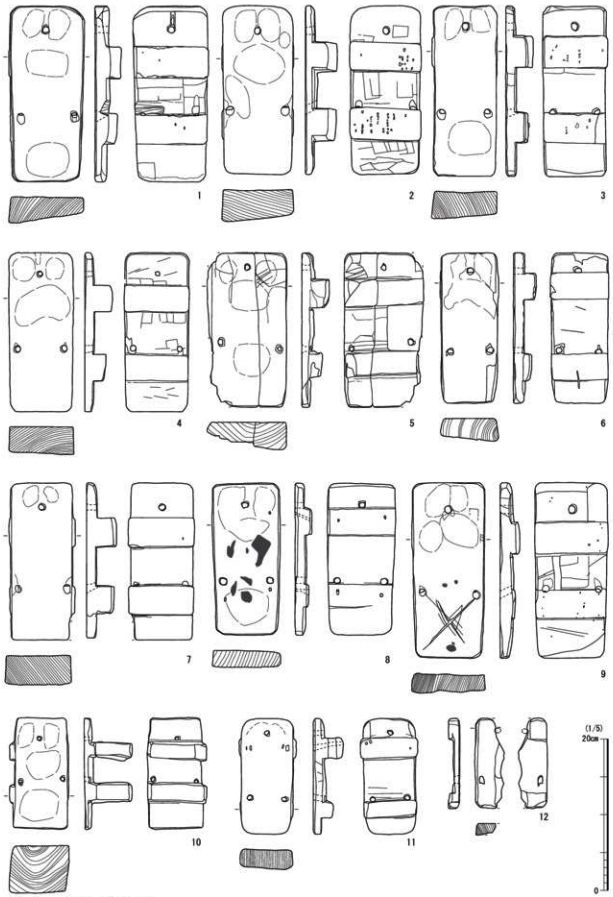
陰卵下駄は黒漆塗りの第45図８と９のみで出土数が少ない。ともに19世紀代の遺構出土品である。このほかに第46図１・２・４～８の板草履がある。舟底型である１・４のうち後者は黒漆塗りである。

櫛・紡錘車・箒・刷毛・その他（第47～50図　第15～18表）　櫛は用途により形状が３つに分かれる。第47図１は両先端を欠くが、方形の基部に長い歯が５本付く縦櫛である。２～４は解櫛で峰が湾曲する。２は歯が３・４より太い。５～８の流櫛は、５～７が峰の緩いのに対して８は水平である。

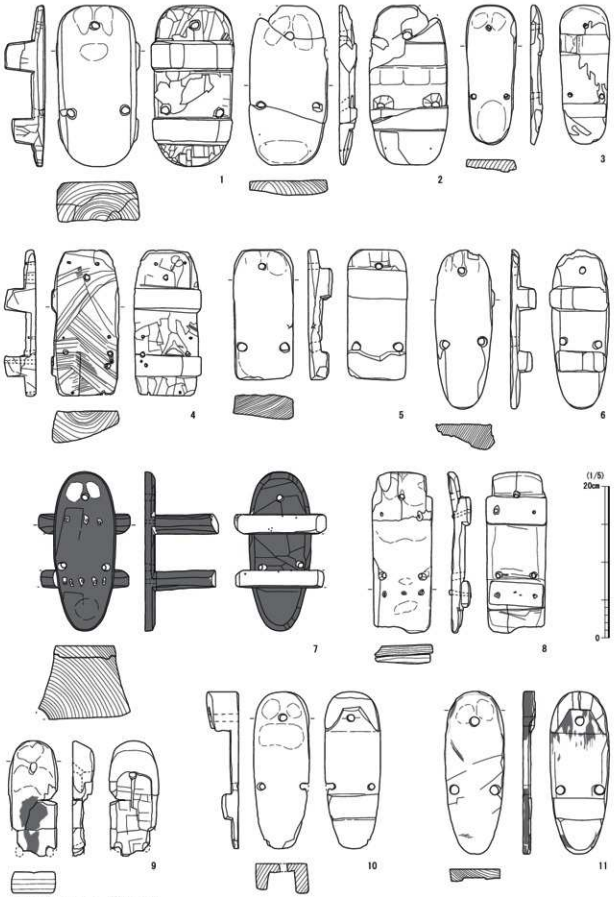
中央に穿孔のあるものを紡錘車とした。第47図11は四隅を切り落とす。残りは周辺を細かく面取る眼鏡形の14を除き正円形である。13は最も径が大きく両面に製作時の工具痕を顕著に認める。

第48図１は撚りの細かい縄で、炭化材をシュロ皮で包み、シェロ縄で結ぶ。２・３は籠で幅0.7㎝、厚さ0.1㎝の経木を編む。４は箒で、穂折れを防ぐための網を４列認める。５～８は刷毛で、形態は多岐に富む。５は上方が丸味を帯びる縦長の台形、黒漆塗りの６は撥状、７・８は形状の異なる柄が付き、先端に毛留めの穿孔を複数認める。全面漆塗りの６は「T」の線刻がある。

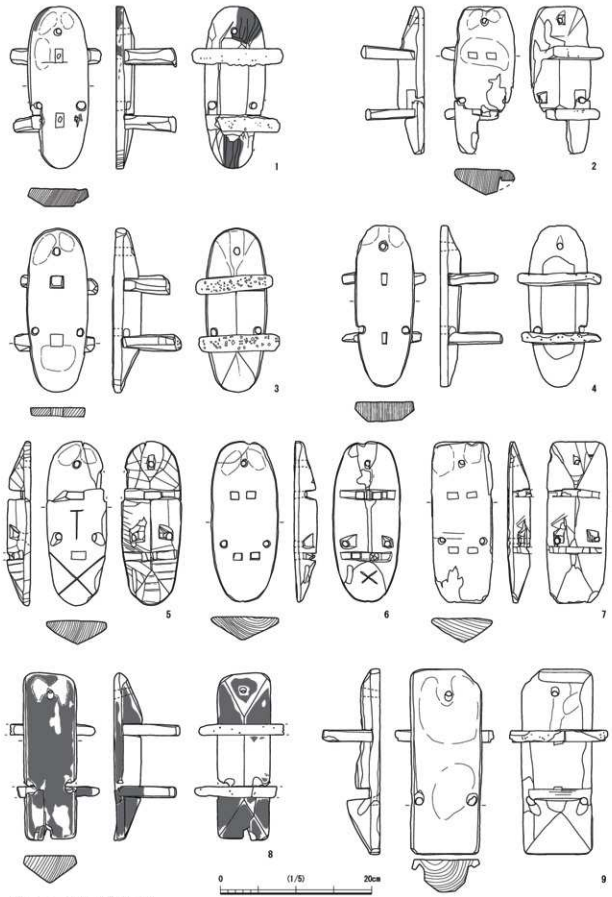
第49図１は長さ76.5㎝以上を測るバンバである。２～４は方形状の板材中央に長方形の柄が付く箆状のものである。５は全面を黒茶色に塗る把手で、２箇所に穿孔を認める。６は木槌で、高さ2.7㎝、幅4.2㎝程の角材を通す柄がある。７は鍬である。８の砥石台は砥石を入れるための長方形の段がある。10は形状から敷居の端材と思われる。11は２箇所の抉りがある。糸巻の部材の一部であろうか。



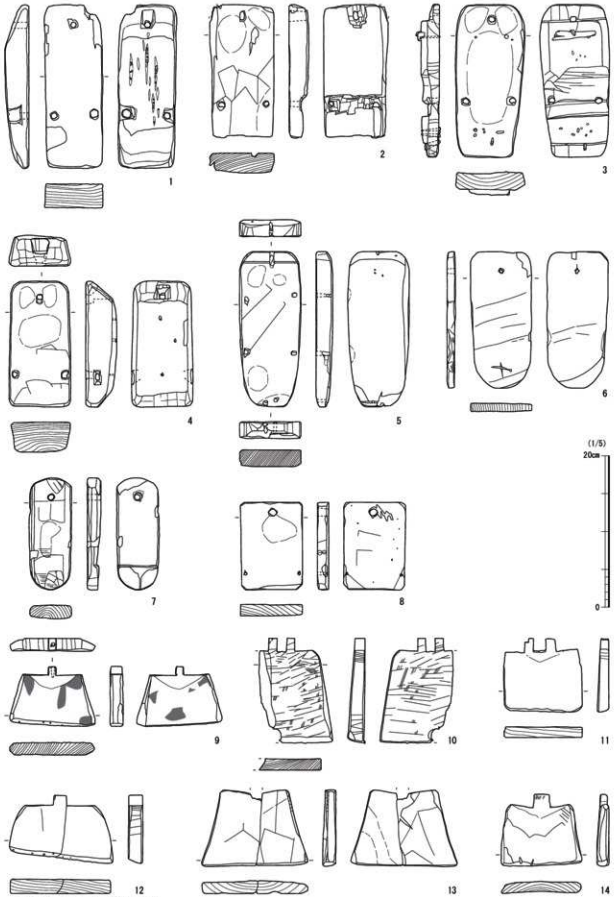
第43図　下駄１（縮尺1/5）



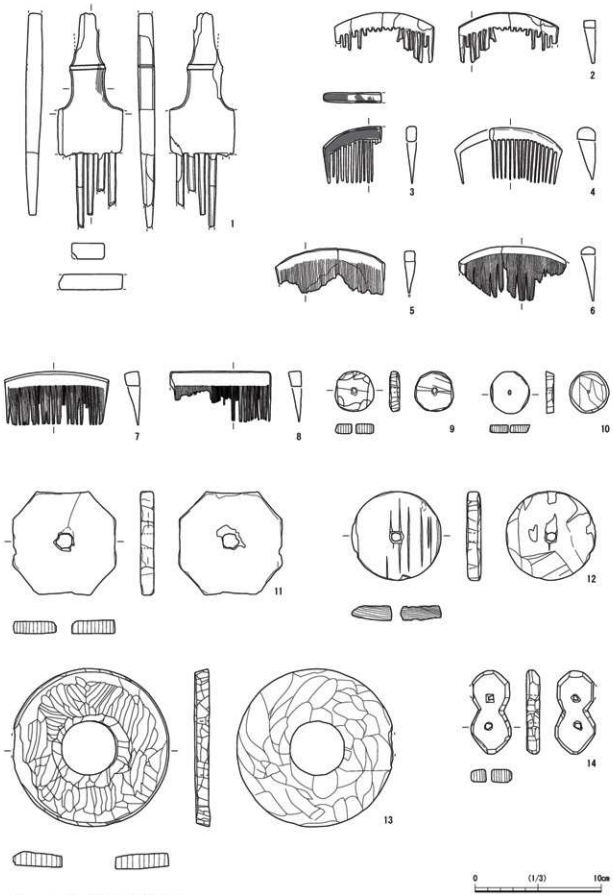
第44図　下駄２（縮尺1/5）



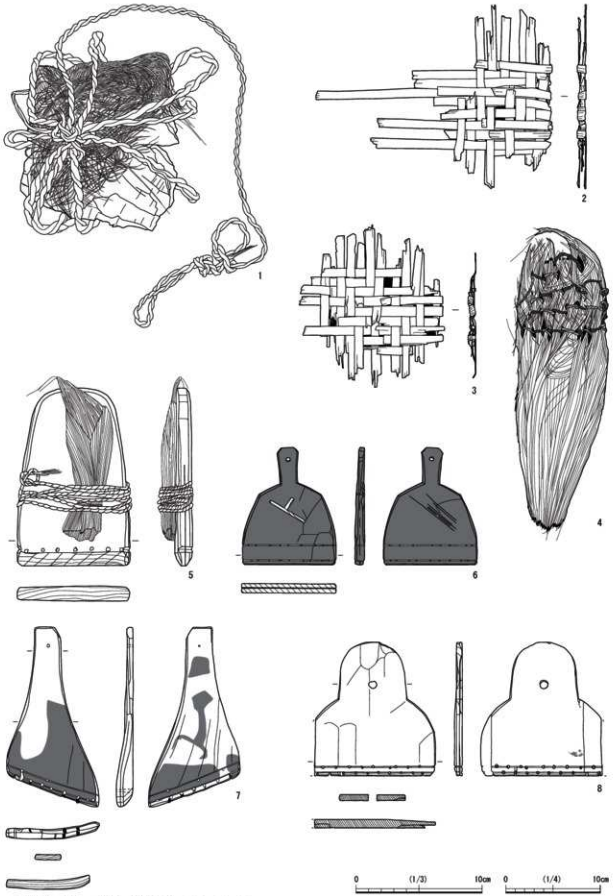
第45図　下駄３（縮尺1/5）



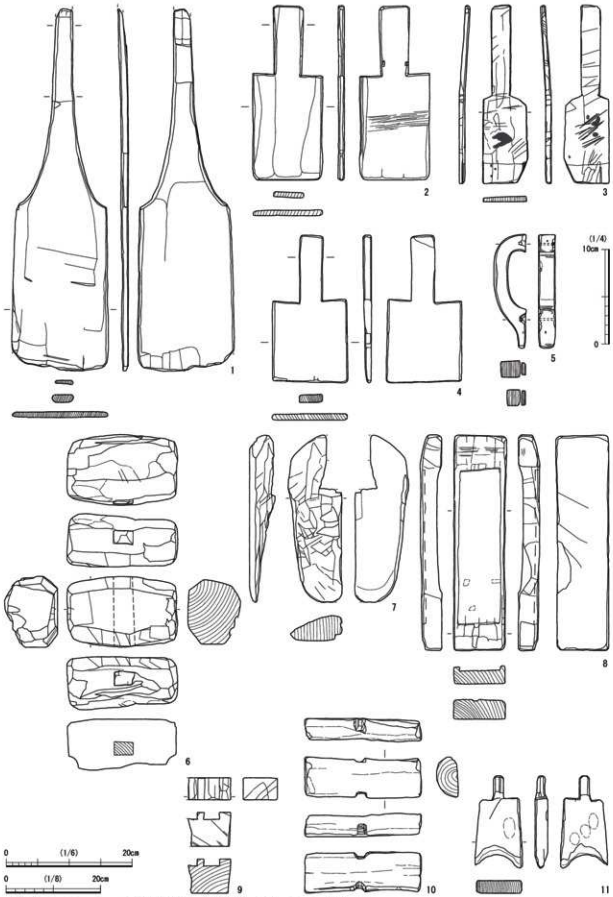
第46図　下駄４（縮尺1/5）



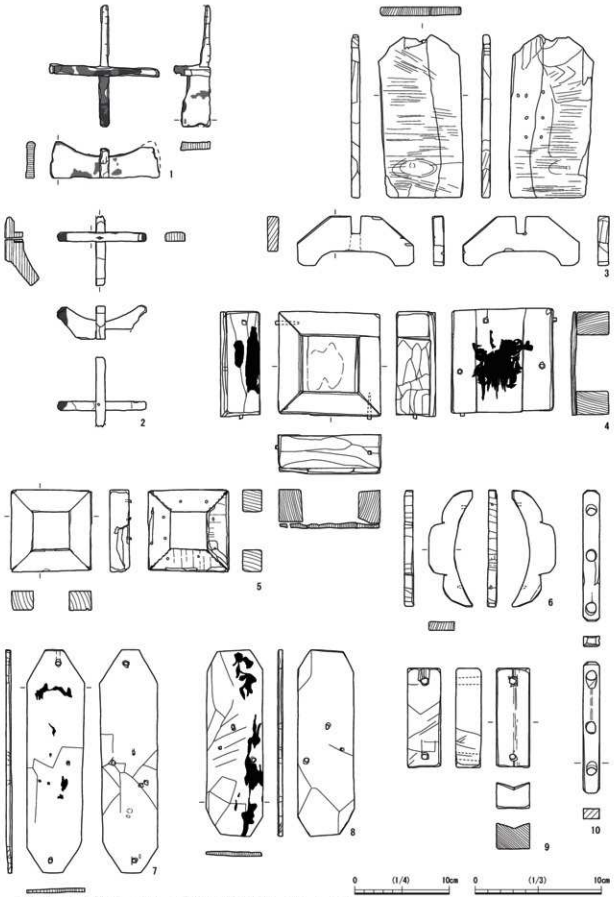
第47図　櫛・紡錘車（縮尺1/3）



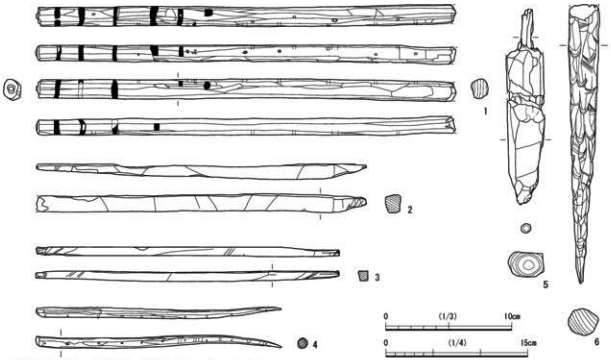
第48図　刷毛・紐等（縮尺1/3　1/4：6～8）



第49図　バンバ・ヘラ状木製品等（縮尺1/6　1/8：1・6　1/4：5）



第50図　桝・灯明台・硯屏・不明部材（縮尺1/4　1/3：3・10）



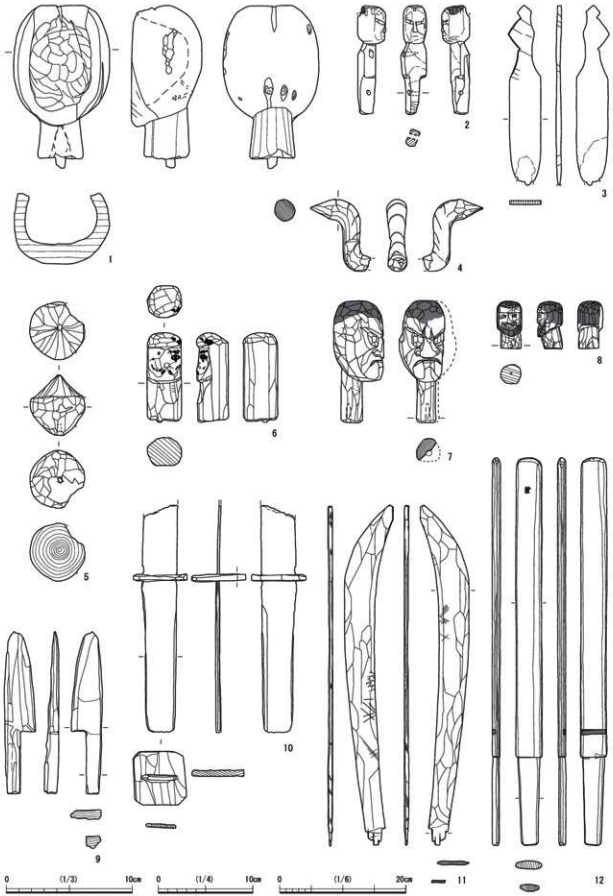
第51図　棒材・棒状具（縮尺1/4　1/3：4・6）

第50図１・２は灯明台で、上部が円状に回む２枚の板を組み合わせる。２は中央に釘穴がみられ、１は被熱痕と付着物がある。３は硯屏で両面に刃物痕、組み合わせる脚に幅１cmの抉りがある。４は木釘５本で組み立てる桝形のもので側面と裏面に墨痕を認める。５は断面方形で平面台形の部材を組み合わせる。裏面に木釘がある。７・８は墨書を認める板材で両端を斜めに切り落とす。前者は両端に穿孔がある。箱物の一部である。９は断面Ｖ字状で両端に穿孔を持つ。６は蓋の持ち手である。

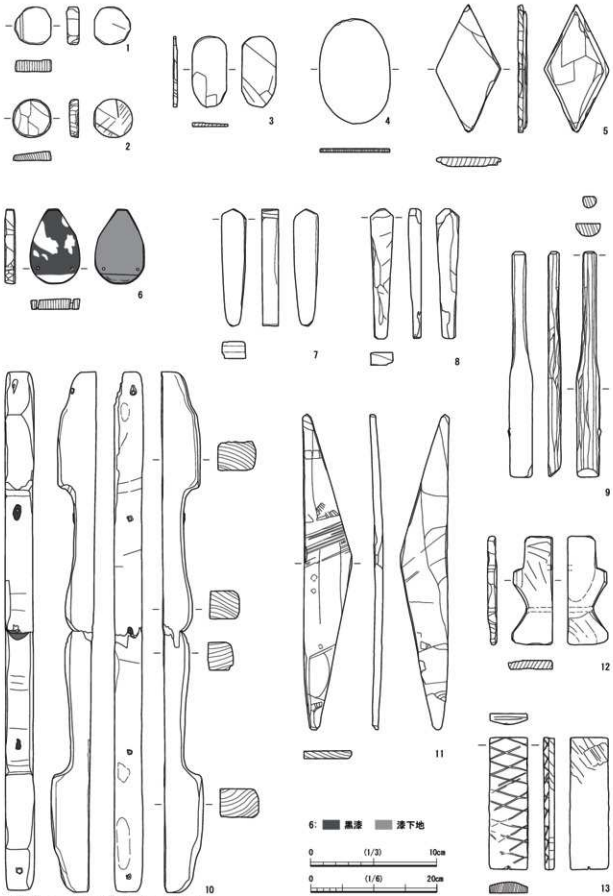
棒材（第51図　第19表）　１は６本の墨書線を片側に書き、頂部中央がやや膨らむ。複数の木釘がある。４は先端が尖る串で木釘の穴を複数認める。５・６は杭で、後者は片面に鱗様の加工がある。

玩具（第52図　第20表）　人形や駒、日常品や武具等がある。１・２・６～８の人形は頭部の遺存が多い。１は頭部の内側を刳り貫くやや大きめのもので、首と胴の接合用の木釘があり、髪を留める木釘痕が６箇所ある。２は上半部が残る。額に穿孔があり、胴部側面に手と足を付けるための穿孔がある。頭頂部には髪を表現した墨を認める。胴部と接合するための頸部の長い７は、頭頂部を黒、上唇を赤色に塗る。６は達磨であろう。なお３は形代と考える。８は上部に対して下部が鋭角な駒で、中央の軸穴が残る。９は包丁の玩具で、全長7.1cm、刃長11cm、刃幅3.2cmを測る。10は刀で刃部を欠くが、方形の鍔の四隅を狭く面取りする。11は薙刀で、刃物痕や擦痕、鱗状の圧痕がある。厚さは１cmに満たない。12は全長61.5cmを測る木剣である。樹皮巻きで一部に赤漆を認める。

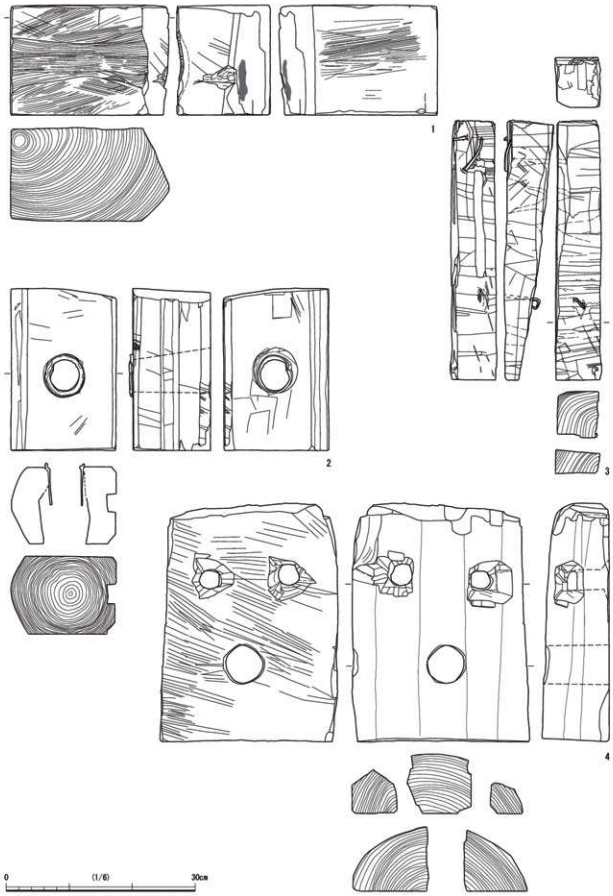
不明品（第53図　第21表）　１・２は正円状、３は小判状、４は楕円形の板材である。５は菱形の板材だが、裏面に段を持つため蓋として使用した可能性が高い。６は黒漆塗りで滴形を呈する。下部に釘痕が２箇所ある。７・８は断面長方形の圭頭形の板材である。９は柄と考える部位のある棒状製品を縦に割き２分している。10は窄まる中央から膨らみを持つ両端に至る。断面は方形で鉄釘を５本認める。11は三角形の板材で刃物痕がある。まな板に転用したものを縦に裂き、別の用途に転用したと考える。13は盛り上がった面に格子状の線刻がある。



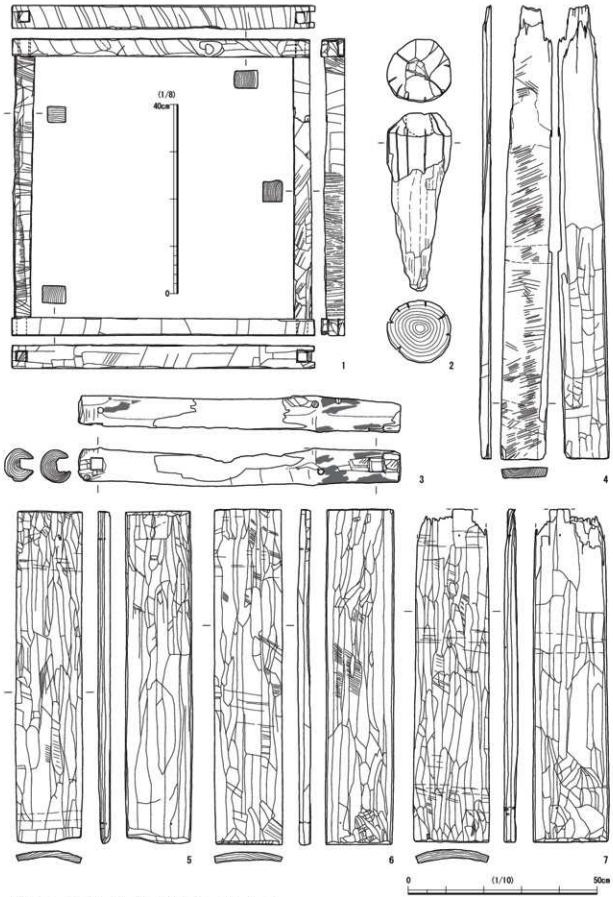
第52図　人形玩具・不明品（縮尺1/3　1/4：3・5・9・10　1/6：11・12）



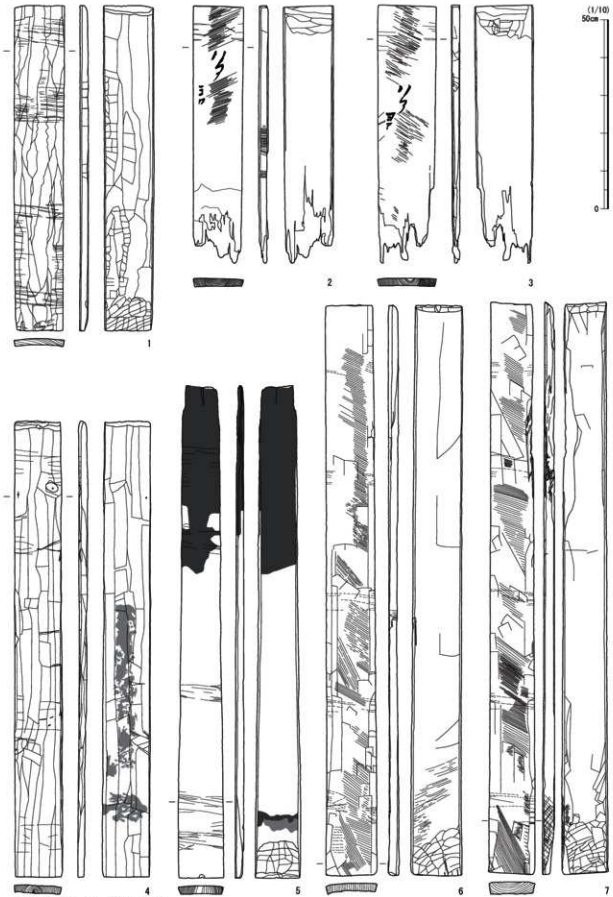
第53図　不明品（縮尺1/3　1/6：13）



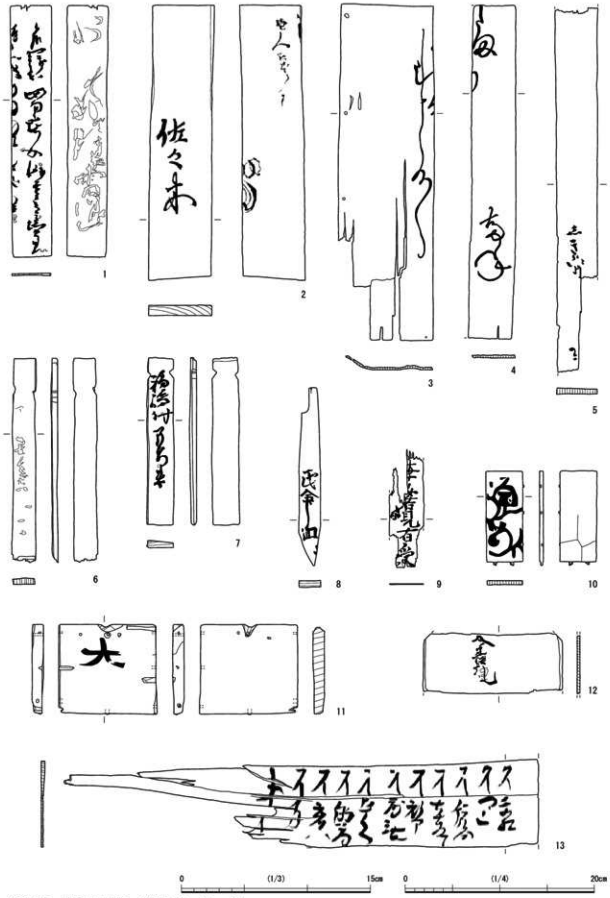
第54図　水道の継手類（縮尺1/6）



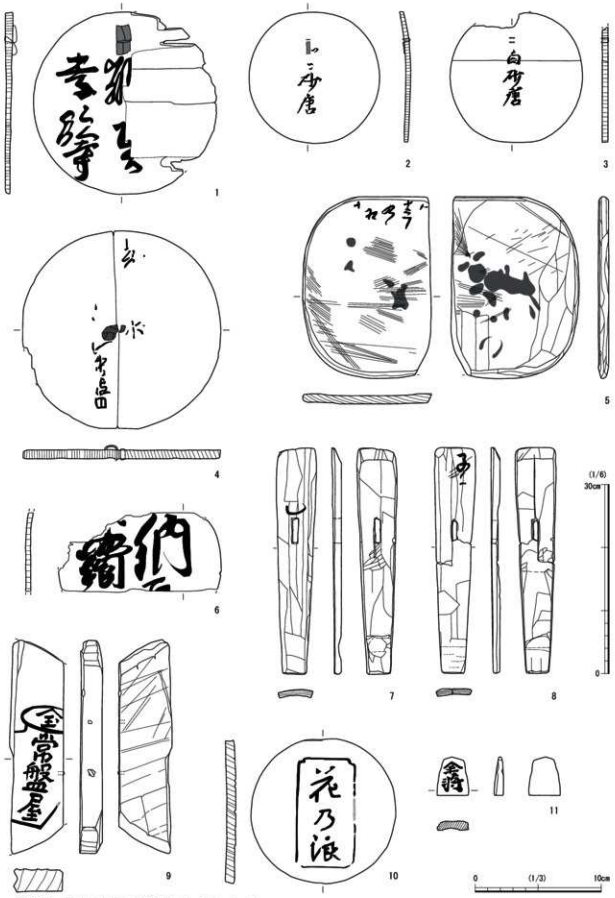
第55図　井戸枠・杭戸材（縮尺1/10　1/8：1・2）



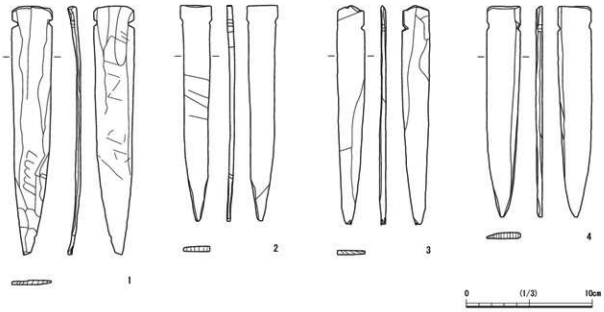
第56図　井戸材（縮尺1/10）



第57図　墨書木製品１（縮尺1/3　1/4：13）



第58図　墨書木製品２（縮尺1/3　1/6：7・8）



第59図　木札（縮尺1/3）

継ぎ手・支え木・井戸材（第54～56図　第22表）　第54図１・３の支え木、２・４の継手は上水路２－31構築材で、２は水道管の竹管が遺存し継ぎ目に縄を巻く。４は上部を２箇所、下部を１箇所穿孔する。３の支え木には鉄釘の周囲に槌様圧痕を認める。

井戸材の図化資料は複数遺構ある。第56図１・４・５は18世紀後半以降の３－２構築材で、１は鏟の斫り痕がある。２・３も同時期の２－41構築材で、同じ文字の墨書があるが判読できない。６・７と第55図４は３-250構築材で、側面に格子状の線刻がある。第55図１は16世紀末頃の３－439構築材で柄穴が２箇所ある。５～７は17世紀前半の３－451構築材で複数の鉄釘、釘穴を認める。このほか２の杭がある。

札・文字資料（第57・58図　第23表）　第57図１・２・４・５・８・13は板材である、１は「□銭四百弐文　□□□三郎」、２は「佐々木」「老人　正□□□」、５は「志き（ふ）」、８は「氏（命）□□」、13は「イ」等の文字を羅列した下に文字を記す。３・12は折敷の底板で、それぞれ「ししうろく」、「太□縄」と記す。広端近くの両側に刻みを入れる付札のうち７は「福島村　もち来」、９の柿経には「案女若見有受」の記載がある。第58図１～４は曲物蓋で、樹皮の持ち手がある１は「□　孝顕寺」、それ以外の２・３は「黒砂糖」、「白砂糖」と記す。当時の調味料の様相を示す資料である。５は墨書した後に楕円形に加工された板材で両面に刃物痕を認める。６は曲物の一部で「納」の文字があり、桶蓋の９・10には焼印で「常番屋」、「花乃浪」の屋号を施す。このほか墨書を認めない第59図の付札がある。

参考文献

北野信彦　2005 『近世出土漆器の研究』 吉川弘文館
福井県教育委員会　1979 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告１』－朝倉館の調査－
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2015　福井県埋蔵文化財調査報告第146集 『福井城跡　第２分冊　遺物』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2021　福井県埋蔵文化財調査報告第173集 『福井城跡　第２分冊　遺物』
溝口三郎　1968 「文様」『日本の美術29』 至文堂
南洋一郎　1986 「漆器・皿に関する二。三の問題」『朝倉氏遺跡資料館紀要1986』

第８表　漆器観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点 地区	出土地点 遺構番号	出土地点 層位	木取り	計測値(cm) 口径	計測値(cm) 全高	計測値(cm) 高台径	計測値(cm) 高台高	漆 外	漆 内	漆 高台	漆 文様	施文 体部	施文 内面高台	分類	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
26	1	椀	H5	2-415		横	14.0	9.0	7.0	2.5	黒	赤		赤	蓬莱文		A		16C後	2-40
26	2	椀	I6	4-65		横	(12.2)	(6.4)	(6.0)	(2.1)	黒	赤		赤・黄緑	蓬莱文		A		17C中	4-15
26	3	椀	C-37	6-294		横	(14.0)	(7.6)	(7.8)	3.4	黒	赤		赤	判別不明2	高:幾何	A		16C後	6-27
26	4	椀	B-C7	6-126		横	12.6	10.3	6.5	3.1	黒	黒		赤・黄	丸に格子紋3		A		～18C中	6-22
26	5	椀	D9	6-18	上層	横	(12.4)	(6.6)	(6.0)	(1.6)	黒	赤		赤	笹		A		17C後	6-4
26	6	椀	D4	7-163		横	(13.0)	(6.5)	(6.8)	(3.2)	黒	赤		赤・黄 黄緑	丸に変わり沢瀉		A		18C後～	7-51
26	7	椀	B10	3-512		横	(12.8)	(3.0)	6.2	2.1	黒	赤		赤	不明	高:「上」	A		16C後～17C前	3-19
26	8	椀	H7	4-1		横	(13.0)	(7.0)	7.0	2.9	黒	赤		赤	不明	高:幾何	A			4-1
26	9	椀	B10	3-512		横	17.4	11.5	8.0	3.2	黒	赤		赤	福面2 植物文		A		16C後～17C前	3-18
26	10	椀	F10	3-145		横	13.2	(7.3)	(6.2)	(1.0)	黒	黒		黄・赤	家紋2		A		17C前	3-3
26	11	椀	B9	5-4	Ⅲ層	横	14.0	98.0	6.8	2.6	黒	赤		赤・鍵			A		～近代	5-125
26	12	椀	B7・8	6-18	下層	横	15.8	(6.8)	(6.6)	(0.4)	黒	赤		赤	福面2			高台削平	17C後	6-15
26	13	椀	F10	3-207		横	13.4	(7.8)	(6.4)	(0.5)	黒	赤		黄・赤	不明			高台削平	17C後	3-5
26	14	椀	G9	3-605		横	(14.0)	(5.8)	(5.6)	(0.7)	黒	赤		赤	不明			高台削平	17C前	3-11
27	1	椀	J6	2-410		横	(14.4)	(6.0)	(7.0)	(1.0)	黒	赤		赤	不明			高台削平 穿孔2	16C後葉	2-70
27	2	椀	B9	5-4	Ⅲ層	横	12.0	(4.4)	6.0	(0.5)	黒	赤		赤・黄緑	植物文			高台削平 穿孔2	～近代	5-124
27	3	椀	H5	2-432		横	(14.2)	(8.5)	(6.6)	(1.4)	黒	赤			三ツ盛鶴丸2			高台削平 穿孔2	16C後	2-71
27	4	椀	H7	4-2		横	(18.0)	(5.6)	－	－	黒	赤		赤	鍵2		B		19C	4-7
27	5	椀	A2	7-27		横	11.8	(5.0)	(5.6)	(0.5)	黒	赤		赤	松に鶴亀		B		17C後	7-10
27	6	椀	I6	2-201		横	(13.6)	(7.5)	(6.2)	(0.5)	黒	黒		赤	福面2・雨	内:福	B	高台削平 穿孔2	17C前	2-64
27	7	椀	A-B2	7-30		横	(12.4)	(4.5)	(7.5)	(1.0)	黒	赤		赤	不明		B		16C後	7-11
27	8	椀	D4	7-163		横	(11.2)	(5.0)	(6.2)	(0.8)	黒	赤		赤・黄	不明		B	内面被熱		7-13
27	9	椀	J6	2-207		横	12.0	(6.0)	(6.6)	(1.0)	黒	黒		赤・鍵	鍵・鍵	高:幾何	B		17C前	2-67
27	10	椀	A-B2	7-30		横	(14.4)	(5.7)	(6.8)	(0.5)	黒	赤		赤	不明	高:「三」	B	内面付着物有	16C後	7-4
28	1	椀	J1・2	7-142		横	(11.2)	(4.2)	(5.2)	(0.2)	赤	赤		黒	丸に梅5		B	内面被熱	17C前	7-6
28	2	椀	H7	4-10		横	(12.0)	(5.9)	(5.9)	(1.1)	黒	赤		赤・黄	植物文	高:幾何	B	高台内に掘み	～18C後	4-12
28	3	椀	B7	6-294		横	13.8	6.5	7.2	0.9	黒	黒		赤	松2	内:鳥3	B	内面炭化	16C後	6-28
28	4	椀	I6	4-65		横	12.6	5.5	6.0	0.9	黒	赤		赤	家紋	高:幾何	B		17C中	4-17
28	5	椀	D9	6-19		横	(11.6)	(3.9)	(6.2)	(0.1)	黒	黒		赤	貫通孔2 穴1		B	貫通孔2 穴1	18C後～	6-7
28	6	椀	B8	5-4	Ⅱ層	横	12.8	6.2	6.6	0.8	黒	赤		赤・黄緑	丸に下がり藤3		B	内面被熱	～近代	5-247
28	7	椀	J6	2-234		横	(13.6)	(5.2)	(6.2)	(0.3)	黒	黒		赤	不明		B		16C後	2-36
28	8	椀	I6	2-201		横	(12.0)	(5.1)	(5.8)	(0.6)	黒	赤			鶴丸		B	内面被熱	17C前	2-61
28	9	椀	C8	5-88		横	(12.4)	(4.5)	(6.8)	(0.6)	黒	赤		赤	不明	高:「一」	B		17C前	5-140
28	10	椀	B9	5-4	Ⅱ層	横	(13.0)	(5.0)	6.0	1.0	黒	赤		赤・黄	三ツ巴		B		～近代	5-189
28	11	椀	I7	4-30		横	10.2	5.4	5.4	0.9	黒	赤		赤	五七桐唐草2		B		～17C中	4-13
28	12	椀	D8	6-18	上層	横	(12.0)	(4.0)	(5.4)	(1.0)	黒	赤		赤	菊2		B		17C後	6-2
29	1	椀	H7	4-2		横	13.0	5.7	6.6	0.9	黒	黒			三引両紋2		B		19C	4-3
29	2	椀	A2	7-27		横	(11.0)	(6.5)	(6.0)	(1.0)	黒	赤		赤・黄	二段松2		B		17C後	7-2
29	3	椀	B9	5-4	Ⅱ層	横	12.0	5.5	6.2	1.0	赤	赤	黒		無文		B		～近代	5-123
29	4	椀	D8	6-18	下層	横	(11.6)	(5.4)	5.6	0.7	黒	赤		赤	丸に松皮菱3		B	紋の中心に点	17C後	6-12
29	5	椀	A-J6	2-63		横	(13.5)	(5.3)	(6.5)	(0.5)	黒	黒		赤	丸に木瓜	高:「一」	B		17C前葉	2-7
29	6	椀	I6	2-201		横	(11.0)	(4.4)	(5.8)	(0.3)	黒	赤		赤 赤黄	横見梅3		B		17C前	2-65
29	7	椀	D8	6-19		横	11.0	4.4	5.6	0.6	黒	赤		赤	花籠1		B		18C後～	6-10
29	8	椀	H7	4-2		横	11.8	(4.2)	(5.2)	(0.5)	黒	赤		赤	蓬莱文		B		19C	4-5
29	9	椀	D9	6-196		横	10.4	4.2	5.4	0.5	黒	赤		赤・黄	家紋2		B			6-25
29	10	椀	B9	5-4	Ⅱ層	横	11.0	(4.0)	(4.8)	(0.2)	黒	赤		赤・銀	桂菊と尾長鳥		B		～近代	5-88
29	11	椀	D8	6-18	下層	横	13.0	4.6	(6.4)	(0.5)	黒	赤		赤	丸に左三巴2		B		17C後	6-20
29	12	椀	B9	5-4	Ⅱ層	横	10.4	4.2	5.4	0.5	黒	赤		赤	木瓜花菱3		B	内面炭化	～近代	5-92
29	13	椀	B7・8	T86		横	(13.0)	(3.9)	6.6	0.7	黒	赤		赤	不明	高:幾何	B			6-35
29	14	椀	B6・9	6-18	下層	横	(13.0)	(5.2)	(6.8)	(0.6)	黒	黒		赤	福文2	高:文字	B		17C後	6-18
29	15	椀	A2	7-27		横	14.0	(4.7)	(7.0)	(0.7)	黒	赤		黄	松2		B		17C後	7-9
29	16	椀	B7	6-294		横	15.4	5.5	7.0	0.8	黒	黒		赤	不明	高:幾何	B	内面付着物有	16C後	6-26
29	17	椀	J6		2整地土3	横	(12.8)	(4.0)	(6.4)	(0.3)	黒	赤			松	高:幾何	B			2-49
30	1	椀	J6	2-207		横	(13.6)	(4.3)	(6.7)	(0.5)	黒	黒		赤	竹・鶴・亀	高:「一」	B		17C前	2-66
30	2	椀	B10	3-293		横	(10.4)	(2.6)	5.5	(0.2)	黒	赤		黄	蓬莱文				16C後～17C前	3-7
30	3	皿	A2	7-30		横	(13.0)	(3.6)	7.0	0.4	赤	黒	黒	黒	上り藤		C	被熱有	16C後	7-3
30	4	椀			2整地土4	横	(10.9)	(2.2)	(5.0)	0.1	赤				無文					2-72
30	5	椀	I5	2-184		横	(11.4)	(3.5)	(5.4)	(0.3)	黒	赤		赤・黄	丸に雄丸枕獏		B	内面炭化物有	17C前	2-21
30	6	皿	D8	6-T81		横	9.8	2.7	(5.4)	(0.3)	黒	赤		赤	下がり藤3	下がり藤3	C			6-33
30	7	椀	D4	7-163		横	11.2	3.7	5.4	0.8	黒	赤		赤・黄	植物文		C	内面付着物有	18C後～	7-8
30	8	椀	I5	2-184		横	(10.4)	(2.7)	(5.4)	(0.7)	赤	赤		黒	秋草文		C		17C前	2-24
30	9	皿	D9	6-18	上層	横	(9.2)	(3.3)	(5.5)	(0.3)	黒	赤		赤	丸に福紋3		C		17C後	6-6
30	10	皿	J1・2	7-142		横	10.6	3.3	4.4	0.5	黒	赤		赤	梅花		C	黄付炭化 内面付着物有	17C前	7-7

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	計測値(cm)			漆			施文			分類	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			地区	遺構番号	層位		口径	全高	高台径	高台高	外	内	高台	文様	体部	内面高台			
30	11	蓋	B4	7-78		横	(12.0)	(3.6)	(3.0)	(0.4)	赤	赤		赤	無文	高:「三」	C		7-12
30	12	蓋	D8	6-18	下層	横	(11.2)	2.9	4.0	0.9	赤	赤			無文		C	17C後	6-14
30	13	椀蓋	H5	2-415		横	9.0	2.3	5.0	0.4	黒	赤			無文		C	16C後	2-42
30	14	椀	15	2-184		横	16.0	2.9	4.7	0.5	黒	赤			蓮華文		C	17C前	2-23
31	1	椀	15	2-184		横	(11.6)	(3.7)	5.6	0.5	黒	赤		赤・黄・緑	花:赤・黄・黄・黄			17C前	2-19
31	2	椀	15	2-184		横	(11.0)	(6.5)	(5.0)	(0.8)	赤	赤		黒	丸三輪6		畳孔1	17C前	2-20
31	3	皿	J1・2	7-142		横	(10.2)	(2.5)	－	－	黒	赤		赤・黄	秋草文		31図1と同一?	17C前	7-43
31	4	皿	J1・2	7-142		横	(14.6)	(3.7)	(6.2)	(0.8)	黒	赤	黒	赤・黄・緑	秋草文	口:植物	31図1と同一?	17C前	7-5
31	5	椀	15	2-184		横	13.8	(6.2)	(7.2)	(1.2)	黒	黒			無文		D	17C前	2-60
31	6	椀	B6	4-3		横	10.8	2.8	5.8	0.6	黒	赤		赤	無文	高:「中」		19C	4-11
31	7	椀	H7	4-2		横	(14.0)	(4.8)	6.2	1.0	黒	赤			不明			19C	4-6
31	8	椀	16	4-33		横	(13.5)	(7.1)	6.5	1.4	黒	黒			無文		D	～18C中	4-14
31	9	椀	16	4-65		横	13.8	5.3	6.6	1.2	黒	黒			無文		E	17C中	4-16
31	10	椀	F5	4-167		横	(13.0)	(4.5)	(6.4)	(0.3)	黒	黒			無文		E	～19C	4-18
31	11	蓋	B8	6-19		横	11.6	2.5	5.2	0.8	黒	赤			無文			18C後～	6-8
31	12	椀	D8	6-TB3		横	11.4	6.0	7.0	2.8	黒	赤		赤	丸二稜3		F		6-34
31	13	椀	B9	3-4	Ⅱ層	横	12.4	(4.8)	(7.0)	(2.0)	黒	赤		赤	二重亀甲に花菱3		F	～近代	5-108
31	14	椀	B4	4-194		横	12.0	(2.8)	(6.4)	(0.8)	黒	赤			蓮華文		F		4-20
33	1	合子身	D7	6-294		横	6.9	2.4	7.3	0.15	黒	黒			無文			16C後	6-59
33	2	容器	D7	6-294		縦	5.4	5.5	5.2	0.2	黒	黒					0.5cm角の穿孔1	16C後	6-66
33	3	柄杓	B10	3-448		縦本	6.0	5.2	6.2	4.3							刳物 柄孔1 底部厚1.7cm		3-196
33	4	盆	D4	7-163		縦目	(38.0)	3.7	(24.0)	－	黒	赤		黒		内:秋草文	底面に刃物痕有	18C後～	7-81
							最大長	最大幅	高さ	厚さ									
33	5	花型	H7	4-1		縦目	4.4	3.1	－	1.5	黒	－					釘穴1 脚		4-45
33	6	折敷底板	J5	2-226		縦目	31.4	(6.9)	－	0.4	黒	黒					木釘5 釘穴4 片面に刃物痕有	17C前	2-322
33	7	折敷底板	F5	4-167		追柾目	17.1	11.1	－	0.7	黒	黒					被熱痕 内面付着物 片端全丸木加工	～19C	4-316
33	8	折敷底板	D8	6-18	下層	縦目	19.0	(13.2)	－	0.5	黒						2枚接合 2隅面取り	17C後	6-191
33	9	漆塗り用板	F5	4-167		追柾目	(28.0)	(12.3)	－	0.7	黒 赤	黒					折敷再利用 釘穴5 木釘2 晩存 非内部 接着痕有	～19C	4-315
34	1	重箱蓋	H7	4-65		縦目	15.4	17.0	1.5	0.8	赤	黒		黒・緑	鷲と木草文		刃物痕	17C中	64-48
34	2	重箱蓋	B9	5-4	Ⅱ層	縦目	20.2	20.05	1.0	0.8	黒	黒			外:2条×5列 内:蔓4列		釘穴3 側板接着痕有	～近代	5-23-1
34	3	重箱	B9	5-4	Ⅱ層	追柾目	(9.2)	(1.0)	－	0.6	黒	黒					端に曲げるための溝有	～近代	5-23-3
34	4	重箱	B9	5-4	Ⅱ層	追柾目	(17.5)	2.55	－	0.4	黒	黒					端に曲げるための溝有	～近代	5-23-2
34	5	部材	B6	4-3		縦目	21.0	(4.0)	－	0.9	赤	赤		黒	唐草文			19C	4-69
34	6	部材	16	4-65		縦目	(11.0)	(2.1)	－	0.3	黒	黒		赤				17C中	4-64

第９表　箸・楊枝観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	計測値(cm)			備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			地区	遺構番号	層位		最大長	最大幅	最大厚			
32	1	箸	D8	6-18	下層	板目	19.3	0.8	0.6	両端同太最平	17C後	6-236
32	2	箸	A2	5-27			21.1	0.6	0.6	両端同太多角		7-230
32	3	箸	15	2-184			23.5	0.6	0.5	両端同太多角	17C前	2-418
32	4	箸	D4	4-194		板目	26.5	0.7	0.5	両端同太四角		4-285
32	5	箸	B10	3-448			27.6	0.9	0.6	両端同太多角		3-215
32	6	箸	15	2-184			28.1	0.7	0.4	両端同太多角	17C前	2-420
32	7	箸	H7	4-1			16.4	0.6	0.5	片端先細多角		4-269
32	8	箸	D8	6-18	下層	板目	22.0	0.8	0.6	両端同太最平	17C後	6-244
32	9	箸	15	2-184			26.7	0.7	0.6	両端先細四角	17C前	2-417
32	10	箸	B10	3-425		板目	27.6	0.8	0.4	片端先細四角	～18C前	3-213
32	11	箸	I3	7-28			32.9	1.1	0.8	片端先細多角 上部一周漆有	18C後～	7-353
32	12	箸	15	2-184			33.0	0.8	0.9	両端同太多角	17C前	2-422
32	13	箸	H7	4-1		板目	19.3	1.1	0.4	片端先細多最平		4-271
32	14	箸	A9	5-4	Ⅱ層		22.7	0.8	0.6	両端先細多角	～近代	5-27
32	15	箸	15	2-184			25.0	0.6	0.6	両端先細多角	17C前	2-411
32	16	箸	G10	3-393			25.5	0.9	0.8	両端先細多角	16C末～17C前	3-211
32	17	箸	15	2-184			26.6	0.9	0.7	両端先細多角	17C前	2-412
32	18	箸	B3	7-54			27.3	0.7	0.7	両端先細多角		7-285
32	19	楊枝	D8	6-18	下層	柾目	(12.8)	0.8	0.4		17C後	6-233
32	20	楊枝	15	2-184		板目	13.5	0.7	0.3		17C前	2-353

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	計測値(cm)			備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			地区	遺構番号	層位		最大長	最大幅	最大厚			
32	21	楊枝	15	2-184		柾目	14.7	0.8	0.4		17C前	2-341
32	22	楊枝	15	2-184		板目	15.2	0.7	0.5		17C前	2-347
32	23	楊枝	15	2-184		板目	15.0	0.7	0.5		17C前	2-351
32	24	楊枝	15	2-184		板目	15.1	0.7	0.4		17C前	2-344
32	25	楊枝	15	2-184		追柾目	15.8	0.9	0.3		17C前	2-349
32	26	楊枝	15	2-184		柾目	16.7	0.7	0.5		17C前	2-352
32	27	楊枝	J1	7-37			7.2	0.6	0.6	箸の転用か	18C後～	7-355
32	28	楊枝	B9	6-18	上層	追柾目	8.7	0.4	0.3		17C前	6-232
32	29	楊枝	A-B9	5-4	Ⅱ層	追柾目	(9.2)	0.4	0.3	箸の転用か	～近代	5-64
32	30	楊枝	A-B9	5-4	Ⅱ層	板目	9.5	0.5	0.4	箸の転用か	～近代	5-63
32	31	楊枝	A-B9	5-4	Ⅱ層	追柾目	11.9	0.5	0.4	箸の転用か	～近代	5-62
32	32	竹楊枝	D7		6整地土1		12.8	0.8	0.4			6-229

第10表　指物・折敷等観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	計測値(cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	高さ	厚さ			
35	1	指物	2-184	15		柾目	30.4	3.1	－	1.0	両端に段状の切り込み 木釘4 釘穴2	17C前	2-320
35	2	指物	2-184	15		柾目	30.4	2.7	－	1.0	両端に段状の切り込み 木釘9 釘穴1	17C前	2-317
35	3	指物	2-184	15		追柾目	30.6	2.7	－	1.0	両端に段状の切り込み 木釘3 釘穴9 端部摩耗	17C前	2-313
35	4	指物	2-184	15		柾目	30.5	2.6	－	1.0	両端に段状の切り込み 木釘7 鉄釘1 釘穴3 黒漆塊存	17C前	2-314
35	5	指物	2-184	15		柾目	30.8	2.6	－	1.1	両端に段状の切り込み 木釘4 釘穴6 黒漆塊存	17C前	2-321
35	6	指物	2-184	15		柾目	25.2	1.2	－	1.1	両端に段状の切込みと釘穴	17C前	2-315
35	7	不明品	5-4	B8・9	Ⅱ層	板目	12.5	1.9	－	0.7	貫通孔5(木釘孔2　ひこ状部材2)	～近代	5-35
35	8	板材	5-4	B8	Ⅱ層	柾目	10.9	2.5	－	1.0	木釘2 中央に貫通孔	～近代	5-242
35	9	折敷脚	5-4	B9	Ⅱ層	追柾目	15.6	2.7	－	0.7	黒漆塗り 木釘4 木釘孔(現存)2	～近代	5-220
35	10	漆塗り部材	4-1	H7		追柾目	26.9	(4.1)	－	1.7	黒漆塗り 鉄釘3 木釘5 木釘痕9		4-52
35	11	不明品	5-4	B8・9	Ⅱ層	柾目	40.6	5.9	－	1.3	切り込み4 鉄釘3 釘穴2 木釘19 木釘孔4	～近代	5-34
35	12	折敷脚	6-294	C7		追柾目	37.3	4.5	－	1.0	中央部に膠 側面に木釘12 木釘孔1	16C後	6-189
35	13	指物部材	5-4	B8	Ⅱ層	柾目	22.0	1.3	－	0.8	膠1 木釘3	～近代	5-240
35	14	指物部材	5-4	B8	Ⅱ層	板目	11.0	1.0	－	0.8	唐下地　膠2ヶ所に木釘孔2 (うち1ヶ所残存1)	～近代	5-241
35	15	漆板	5-88	C8	Ⅱ層	柾目	21.9	(7.5)	－	0.7	木釘2 木釘孔1	17C前	5-143
36	1	折敷脚	6-18	D8	下層	板目	－	20.0	(11.4)	0.8	両端に刃物痕有	17C後	6-223
36	2	折敷脚	5-4	B9	Ⅱ層	柾目	－	12.3	8.3	1.2	木釘1 釘穴1	～近代	5-217-2
36	3	折敷脚	5-4	B9	Ⅱ層	柾目	－	12.3	8.1	1.1	木釘4	～近代	5-217-3
36	4	脚	5-4	B9	Ⅱ層	板目	－	3.4	9.8	1.3	木釘孔2	～近代	5-218

第11表　切匙・擂粉木・杓子等観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	計測値(cm)						備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	刃部長	刃部幅	柄部長	柄幅	最大厚			
37	1	切匙	4-2	H7		柾目	17.7	7.8	2.0	9.9	1.0	0.5		19C	4-171
37	2	切匙	4-1	H7		柾目	16.8	9.3	3.3	9.5	2.0	0.4			4-169
37	3	切匙		H7	2整地土4	板目	20.8	6.0	2.3	14.8	1.9	0.4			2-334
37	4	切匙	6-18	D8	下層	柾目	22.3	3.7	3.6	18.6	2.1	0.7	刃部磨滅	18C後	6-195
37	5	切匙	4-2	H7		柾目	22.4	12.4	3.1	10.0	2.3	0.5		19C	4-172
37	6	切匙	2-184	I5		板目	29.4	4.2	2.5	25.2	1.1	0.3		17C前	2-329
37	7	切匙	3-303	I2		柾目	(17.1)	13.0	4.9	(4.0)	(3.5)	0.5	柄部欠く	17C前	3-183
37	8	切匙	Tr3	D8		柾目	19.4	5.0	3.5	14.4	1.9	0.5			6-197
37	9	切匙	2-184	I5		板目	21.0	9.3	4.8	11.7	2.7	0.5		17C前	2-325
37	10	切匙	4-10	H7		柾目	13.9	5.0	2.7	(6.9)	2.0	0.4		～18C後	4-173
37	11	切匙			2整地土3	板目	16.7	7.8	3.6	8.9	2.3	0.7	貫通孔1		2-333
37	12	切匙	6-18	D7・8	下層	柾目	14.8	5.1	1.8	9.7	1.8	0.5	柄に1.5×0.6cmの孔	17C後	6-196
37	13	切匙	2-184	I5		板目	33.5	10.6	4.2	22.9	1.8	1.0	柄尻を刃状に削る	17C前	2-323
37	14	漆塗切匙	Tr6	J2・3		柾目	(24.8)	(12.4)	4.5	12.5	3.0	0.5	両面茶漆塗り		7-79
			遺構	最大長	最大幅	最小幅	高さ	厚さ							
38	1	擂粉木	2-2	A7		丸木	4.2	48.7	3.3	－			上端に格孔1 下端変色	18C後～	2-361
38	2	包丁柄	2-184	I5		柾目	－	13.2	3.5	－		2.1	紐穴有	17C前	2-336
38	3	包丁柄	4-2	H7		柾目	－	(14.8)	3.6	2.1	－	1.8	包丁の茎部残存	19C	4-162
38	4	火鋏口	4-10	H7		板目	－	(18.0)	2.9	－	－	2.1	紐穴有	～18C後	4-195
38	5	箆	4-6	H7		柾目	－	14.0	1.6	－	－	0.3	貫通孔3	19C前	4-166
38	6	箆	7-149	A・J1		板目	－	13.4	1.4	1.0	－	0.7		17C前	7-208
38	7	杓子	4-29	G7		柾目	11.5	(13.2)	－	(6.0)	－	1.2	柄一部残存 深さ1.8cm	～近代	4-167
38	8	漆塗杓子	6-19	D9		柾目	－	(8.7)	(5.0)	－	－	(1.1)	表:赤漆 裏:黒漆 柄欠	18C後～	6-65

第12表　柄杓・曲物・桶観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	計測値(cm)					備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅	厚さ	高さ			
39	1	柄杓(曲物)	7-27	A2		柾目	7.3	－	－	底板0.8 側板0.3	5.7	黒漆塗 樹皮綴 木釘1 木釘孔2	17C後	7-216
39	1	柄杓の柄	7-27	A2			－	(41.7)	1.5	1.0	－	黒漆塗 木釘1	17C後	7-216

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	計測値(cm)					備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅	厚さ	高さ			
39	2	栓(曲物)	7-27	A2		柾目	7.0	－	－	底板0.5 側板0.2	5.8	黒漆塗 樹皮銘 木封2 木封孔2 方形の穿孔	17C後	7-213
39	2	栓(曲物)の栓	7-27	A2			－	(16.5)	1.0	1.0	－		17C後	7-213
39	3	栓(曲物)	7-27	A2		柾目	7.2	－	－	底板0.8 側板0.4	6.5	黒漆塗 樹皮銘 木封3 木封孔1	17C後	7-215
39	3	栓(曲物)の栓	7-27	A2		柾目	－	51.3	1.4	1.0	－	木封1 炭化有	17C後	7-215
39	4	栓(曲物)(曲物)	2-184	I5		柾目	8.1	－	－	底板0.5 側板0.2	5.0	樹皮銘 木封不明 内面付着物有 (漆か)	17C前	2-133
39	5	栓(曲物)(曲物)	7-27	A2		柾目	7.9	－	－	底板0.5 側板0.2	4.0	樹皮銘 木封2 木封孔1 方形の穿孔	17C後	7-210
39	6	栓(曲物)の栓	3-405	G9		追柾目	－	(30.3)	1.9	1.0	－	木封1	17C前	3-185
39	7	栓(曲物)の栓	2-184	I5		板目	－	37.6	1.5	0.8	－	木封1	17C前	2-248
39	8	栓(曲物)の栓	4-6	H7		板目	－	33.2	2.0	1.3	－	木封1 封穴1	19C前	4-143
39	9	栓(曲物)の栓		B10	3整地土	追柾目	－	(22.5)	2.1	1.1	－	切断痕有		3-186
39	10	栓(曲物)(曲物)	6-19	D8		板目	8.5	7.5			0.2	3重巻 樹皮銘 底板欠く	18C後～	6-120
39	11	栓(曲物)(曲物)	7-27	A2		側:板目 底:追柾目	7.8	－	－	底板0.5 側板0.4	6.2	樹皮銘 木封3 木封孔5 方形の穿孔	17C後	7-211
39	12	栓(曲物)(曲物)	6-18	D8	下層	柾目	13.6	－	－	側板0.3	6.5	底板欠く 樹皮銘 木封6(うち2は 柄穴補強)木封孔1	17C後	6-180
39	12	栓(曲物)の栓	6-18	D8	下層	柾目	－	57.0	2.0	1.5	－	底板欠く 樹皮銘 木封6(うち2は 柄穴補強)木封孔2	18C後	6-180
39	13	栓(底板)	7-27	A2		柾目	11.3	－	－	0.8	－	木封孔4	17C後	7-214
39	13	栓(曲物)の栓	7-27	A2		板目	－	67.8	2.40	1.7	－	木封孔2 刃物痕有	17C後	7-214
40	1	曲物蓋	5-4	B-M9	II層	柾目	10.8	－	－	0.6	－	持手の樹皮通し穴1	～近代	5-80
40	2	曲物底板	5-4	B9	II層	柾目	13.5	－	－	1.0	－	側面に木封7	～近代	45065
40	3	曲物	6-18	D8	下層	柾目	14.8	－	－	底板0.9 側板0.2	(3.8)	3重巻き 樹皮銘 木封6	17C後	6-121
40	4	曲物	6-18	D8	下層	側:板目 底:柾目	9.8	－	－	底板0.6 側板0.2	(2.0)	樹皮銘 木封2 木封孔2	17C後	6-122
40	5	曲物	6-18	D8	下層	柾目	(14.0)	－	－	－	(2.0)	側板のみ	17C後	6-124
40	6	曲物	6-19	D9		側:板目 底:柾目	9.8	－	－	底板0.6 側板0.2	(2.1)	木封1 木封孔3	18C後～	6-119
40	7	曲物蓋板	4-65	I6		柾目	－	11.2	(6.3)	0.5	－	持手の樹皮通し穴1	17C中	4-124
40	8	曲物底板	2-184	I5		柾目	－	20.9	6.8	0.8	－	三日月形 木封15	17C前	2-259
40	9	曲物底板	7-27	A2		側:板目 底:柾目	(27.8)	－	－	底板0.7 側板0.4	1.1	全面黒漆塗り	17C後	7-69
40	10	桶(曲物)蓋	7-30	A2		柾目	－	58.1	15.0	0.8	－	樹皮銘3 穿孔2 内側面に木封孔3 炭化有 刃物痕多数(転用または板)	16C後	7-155
							直径	最大長	最大幅	最小幅	最大厚			
41	1	桶底板	5-4	B9	II層	板目	12.3	－	－	－	1.7	片面面取り	～近代	5-33
41	2	桶底板	6-19	D8		追柾目	15.0	－	－	－	1.5	2枚の板を木封2本で縫ぐ 面取り	18C後～	6-163
41	3	桶底板	3-132	F10		追柾目	7.4	－	－	－	0.9		18C後～	3-117
41	4	小桶側板	5-4	B9	II層	柾目	約11.0	5.8	4.6～5.5	3.4～4.8	0.7	7枚の板板から成る 上中下3ヶ所 にタガ痕有	～近代	5-99
41	5	桶側板	4-6	H7		追柾目	－	36.4	9.1	7.1	1.1	上部に木封孔10 刃物痕多数(転用 または板)	19C前	4-106
41	6	桶側板	4-65	I6		板目	－	16.8	9.2	(8.5)	0.9	分解後抜りを入れる	17C中	4-108
41	7	桶側板	2-207	J6		板目	－	31.4	5.6	4.2	1.3	持ち手用穴(2cm×1cm)	17C前	2-186
41	8	桶側板	6-18	D8	下層	柾目	－	10.3	3.4	3.0	1.0	外面腰板・内面付着物有	17C後	6-156
41	9	桶側板	7-Tr5	J1		柾目	－	12.4	5.0	4.5	1.1	タガ・底板圧痕 内面付着物有		7-138
41	10	桶側板	3-166	G1		追柾目	－	50.3	6.7	4.7	1.8	内面付着物有	18C	3-99
41	11-1	桶側板	6-19	D8		柾目	－	(24.6)	8.5	7.7	1.2	外面腰板・内面付着物有	18C後～	6-147
41	11-2	桶側板	6-19	D8		柾目	－	25.9	8.7	7.6	1.3	木140～149は同一個体 持手を通 すそれ(1.7×1.2) 外面腰板・内面付 着物有	18C後～	6-140
41	11-3	桶側板	6-19	D8		柾目	－	(25.6)	8.4	7.7	1.1	枘穴側長2.2cm 内面付着物有	18C後～	6-145
41	11-4	桶側板	6-19	D8		柾目	－	26.2	6.1	5.0	1.2	内面付着物有	18C後～	6-141
41	11-5	桶側板	6-19	D8		柾目	－	26.4	6.2	5.2	1.1	外面腰板・内面付着物有	18C後～	6-142
41	11-6	桶側板	6-19	D8		柾目	－	26.3	4.5	4.0	1.1	外面腰板・内面付着物有	18C後～	6-143
41	11-7	桶側板	6-19	D8		柾目	－	26.4	3.8	3.6	1.1	外面腰板・内面付着物有	18C後～	6-144

第13表　栓観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	計測値(cm)			備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大径	最大幅	最大厚			
42	1	栓	2-184	I5		みかん割例出し	11.0	3.5	3.5	胴部正方形 斜めの穿孔1	17C前	2-302
42	2	栓	2-184	I5		みかん割例出し	8.8	3.7	3.6	胴部近くに直径3mmの貫通孔	17C前	2-303
42	3	栓	2-184	I5		みかん割例出し	7.9	3.1	2.8	上部に斜めの穿孔1 摩耗著しい	17C前	2-308
42	4	栓	2-184	I5		みかん割例出し	6.7	3.4	3.2	上部に穿孔1 転用か	17C前	2-309
42	5	栓	丸木		3整地土		6.1	4.7	4.7			3-156
42	6	栓	2-184	I5		みかん割例出し	5.5	2.8	2.8		17C前	2-304
42	7	栓？	2-201	I6		みかん割例出し	10.6	1.4	1.5	頂部に封穴1	17C前	2-310
42	8	栓	7-Tr5	J1		みかん割例出し	10.3	3.1	2.7	摩耗著しい		7-193
42	9	栓	6-19	D8		みかん割例出し	10.0	3.0	2.8	摩耗著しい	18C後～	6-188
42	10	栓	4-2	H7		みかん割例出し	9.2	2.9	2.7		19C	4-179
42	11	栓	7-106	C-D5		みかん割例出し	8.8	2.95	2.7	樹皮銘残存 炭化有	～17C後	7-192
42	12	栓	2-184	I5		みかん割例出し	7.3	2.8	2.7	上下端摩耗有	17C前	2-305
42	13	栓？	2-184	I5		みかん割例出し	19.8	1.8	1.7		17C前	2-307

第14表　下駄観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	計測値(cm)						備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		長さ	台幅台厚	前歯高後歯高	前歯幅前歯厚	後歯幅後歯厚	歯間			
43	1	連歯下駄	6-18	D-D8	上層	追柾目	23.2	9.4 2.0	3.5 3.0	10.0 4.2	9.4 3.8	4.8		17C後	6-69
43	2	連歯下駄	6-18	D8	下層	追柾目	22.3	9.3 1.7	4.3 4.0	9.5 3.7	9.4 4.2	4.8 5.8		17C後	6-78
43	3	連歯下駄	6-19	D8		追柾目	22.5	8.2 1.4	3.6 2.9	8.6 4.2	8.2 4.0	5.8		18C後～	6-74
43	4	連歯下駄	4-2	H7		板目	21.0	8.6 1.3	3.7 2.8	8.6 3.5	8.5 3.5	5.8		19C	4-78
43	5	連歯下駄	4-65	I6		板目	20.4	10.4 1.6	3.7 2.7	10.4 3.8	10.4 3.5	5.5		17C中	4-87
43	6	連歯下駄	2-184	I5		柾目	19.9	7.5 1.4	(3.0) (2.0)	7.9 3.6	7.6 3.6	7.4		17C前	2-95
43	7	連歯下駄	6-18	D9	下層	追柾目	20.8	8.3 1.4	4.2 3.8	8.7 3.8	8.6 3.8	4.7		17C後	6-79
43	8	連歯下駄	2-184	I5		追柾目	20.1	8.9 1.5	(2.2) (1.8)	8.9 3.7	8.6 3.2	6.4	前後歯摩耗著しい 封穴4(うち貫通3)	17C前	2-93
43	9	連歯下駄	6-18	D7-8	下層	追柾目	23.2	9.7 1.5	2.6 2.0	9.8 4.1	9.3 3.7	4.6	台裏裸出に×印 紐然有	17C後	6-80
43	10	連歯下駄	3-179	F10		板目	14.8	7.0 1.0	6.5 6.3	7.5 2.0	7.4 2.6	3.3			3-49
43	11	連歯下駄	2-164	F10		柾目	15.3	6.9 1.7	4.0 2.8	7.7 2.7	7.0 2.4	5.6	鉄釘4		3-44
43	12	連歯下駄		B7	6整地土4	追柾目	11.9	(3.9) 6.8	1.5 1.3	(2.5) 2.8	(3.4) 2.0	7.0			6-98
44	1	連歯下駄	6-297	B7		板目	21.3	10.4 2.0	5.3 4.3	11.0 4.0	10.6 3.6	6.2		16C後葉	6-94
44	2	連歯下駄	2-432	H5		追柾目	21.1	10.3 2.0	(2.4) (2.0)	(10.0) 3.1	(10.1) 3.1	5.7	前後の歯はほ摩耗	16C後	2-115
44	3	連歯下駄	3-207	F10		柾目	18.4	6.6 1.6	0.1 0.0	6.6	(5.7)	6.7	前後の歯はほ腐滅	17C前	3-54
44	4	連歯下駄	2-184	I5		板目	19.3	8.2 1.6	(4.2) (4.2)	(9.0) 3.2	(8.9) 2.9	5.8	封穴(うち鉄釘残存1) 両歯の右 側摩耗著しい	17C前	2-103
44	5	連歯下駄		H5	2整地土4	追柾目	17.2	7.9 1.9	3.2 2.5	7.9 4.0	7.8 3.7	7.0	後の歯が最後尾に付く		2-117
44	6	連歯下駄	2-63	A-J6		追柾目	21.0	7.5 1.3	(3.4) (2.0)	(7.8) 3.3	6.8 2.7	6.0		17C前葉	2-81
44	7	連歯下駄	4-30	I7		追柾目	21.0	8.2 1.4	9.9	12.2 2.7	11.7 2.1	4.8	黒漆塗り 台表に封穴8	17C中	4-49
44	8	連歯下駄	2-184	I6		板目	21.3	7.8 1.5	2.2 2.4	7.9 3.8	7.3 3.6	7.7	前歯部鉄釘2 後歯部鉄釘3 後歯補修	17C前	2-377
44	9	朝り下駄	6-19	D9		板目	(15.3)	6.5 1.4	2.8	6.5 2.9	－	－	黒漆塗り	18C後～	6-67
44	10	朝り下駄	2-63	J6		板目	20.7	7.4 1.2	(4.3) (2.2)	7.3 2.2	6.8 3.5	8.3	左側がより摩耗	17C前葉	2-80
44	11	朝り下駄	2-63	A-J6		追柾目	21.5	7.9 1.2	(1.6) (1.2)	7.7 2.5	7.2 2.9	8.6	黒漆塗り 歯は摩耗	17C前葉	2-79
45	1	鼻緒下駄	2-184	I6		追柾目	21.4	8.0 2.3	7.9 7.9	12.0 2.2	(8.5) 2.0	6.7	黒漆塗り 鼻1 鼻に鉄釘各1残存 後歯に封穴2	17C前	2-111
45	2	鼻緒下駄	2-184	I5		柾目	19.5	8.0 3.5	8.3 7.8	(6.8) 1.4	(5.9) 1.4	6.6	鼻2	17C前	2-109
45	3	鼻緒下駄	6-18	D8	下層	追柾目	21.7	8.1 3.8	7.5 9.6	10.2 2.6	10.7 2.2	6.0	鼻1	17C後	6-76
45	4	鼻緒下駄	6-19	D8		柾目	21.3	7.8 2.8	7.6 8.2	11.0 1.3	10.4 1.2	6.1	鼻1	18C後～	6-75
45	5	鼻緒下駄	6-18	D8-9	下層	柾目	21.7	7.9 3.1	－	－ (1.1)	－ (0.9)	6.7	歯欠損 台表に線刻「T」「×」	17C後	6-86
45	6	鼻緒下駄	7-138	J1		板目	21.2	8.9 3.0	－	－ (1.2)	－ (1.0)	7.0	歯欠損 台裏裸出に線刻「×」	17C前葉	7-96
45	7	鼻緒下駄	2-184	I5		板目	21.3	7.9 3.2	－	(1.0)	(0.9)	6.7	鼻2	17C前	2-97
45	8	陰卸下駄	4-3	I6		追柾目	22.2	7.1 3.8	8.8	(11.3) 1.5	(10.8) 1.5	6.7	黒漆塗り 後歯に樹皮有	19C	4-47
45	9	陰卸下駄	5-46			板目	24.5	9.5 4.3	7.5	12.9 1.5	－ (1.2)	6.3	後ろの鼻緒孔が後歯の後ろ	19C	5-151
46	1	板草履(雪下駄)	4-4	H7		板目	21.7	7.6 3.1	－	－	－	－	前後が摩耗 元は連歯下駄か		4-73
46	2	板草履(雪下駄)	4-194	D4		追柾目	17.6	8.5 2.6	－	－	－	－			4-91
46	3	朝り下駄	6-18	D8-9	下層	板目	20.2	9.1 1.5	2.4 2.2	9.1 1.8	8.2 3.9	－	前歯4本後歯6本鉄釘打付け 前3本後5本貫通	17C後	6-85
46	4	板草履(台近型)	7-37	J1		板目	16.6	8.1 4.1	－	－	－	－	後ろの鼻緒が横面に空く 台裏に未貫通封穴3	18C後～	7-89
46	5	板草履	7-149	A-J1		追柾目	20.5	8.1 2.2	－	－	－	－	鼻緒の位置はかなり所 0.5cmの穿孔	17C前	7-103
46	6	板草履(雪下駄)		B6	2整地土4	柾目	18.0	8.1 1.1	－	－	－	－	裸出に十字の線刻有		2-118
46	7	板草履	7-53	B-C3		板目	14.8	5.5 1.8	(0.4)	－	5.2 3.2	－		17C	7-91
46	8	板草履	7-142	J1-2		追柾目	10.5	8.2 1.5	－	－	－	－	後鼻緒の位置に0.2cmの穿孔	17C前	7-100
46	9	下駄歯(雨卸)	2-184	I5		追柾目	－	－	(6.8)	11.3 1.7	－	－	鼻1 黒漆塗り 鼻に封穴1	17C前	2-128

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			本取り	計測値(cm)						備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		長さ	台幅 台厚	前端高 後端高	前縁幅 前端厚	後端幅 後端厚	歯間			
46	10	下駄歯(露出)	5-4	B9	Ⅱ層	板目	－	－	13.9	(8.6) 2.3	－	－	露出部2本	～近代	5-215
46	11	下駄歯(露出)	5-4	A・B9	Ⅱ層	板目	－	－	9.8	10.4 1.5	－	－	露出部2本 うち1本に切り込み	～近代	5-84
46	12	下駄歯(露出)	3-164	F10		板目	－	－	9.0	13.7 1.9	－	－	鼻1 敲痕有	17C初～中	3-77
46	13	下駄歯(露出)	4-65	I6		板目	－	－	10.0	14.0 1.7	－	－	鼻1	17C中	4-97
46	14	下駄歯(露出)	6-18	8・I9	下層	板目	－	－	9.5	10.7 1.6	－	－	鼻1	17C後	6-110

第15表　櫛観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			本取り	計測値(cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最大厚	歯数/1cm			
47	1	整櫛	4-6	H7		不明	(17.0)	(5.2)	1.3	5本	馬櫛	19C前	4-314
47	2	解櫛	7-30	A8			(4.0)	7.9	1.2	歯数3/1cm		16C後	7-220-2
47	3	解櫛	2-410	J6		板目	4.5	(4.4)	0.8	歯数3/1cm	黒漆塗り	16C後葉	2-373
47	4	解櫛	7-30	A8			4.1	(5.9)	1.4	歯数4/1cm		16C後	7-220-1
47	5	梳櫛	2-410	J6		板目	3.7	6.7	0.8	櫛数9/1cm		16C後葉	2-372
47	6	梳櫛	7-142	J1-2			4.3	(6.5)	1.1	歯数13/1cm		17C前	7-222
47	7	梳櫛	7-142	J1-2			4.2	8.3	1.2	歯数9/1cm		17C前	7-223
47	8	梳櫛	7-30	J1			4.0	(8.0)	1.0	歯数9/1cm		16C後	7-221

第16表　紡錘車等観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			本取り	計測値(cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅	厚さ			
47	9	不明品	6-294	C7		柾目	－	3.2	3.1	0.8	中央に径3mmの孔	16C後	6-206
47	10	不明品	5-4	B9	Ⅱ層	柾目	－	3.3	3.2	0.6	中央に貫通孔	～近代	5-224
47	11	不明品	2-63	A・J6		柾目	－	8.2	8.2	1.0	中央に径1.2cmの孔	17C前	2-288
47	12	紡錘車？	3-163	G10		板目	7.1	－	－	1.2	中心に径0.7cmの孔	～18C後	3-157
47	13	不明品	2-184	I5		柾目	12.5	－	－	1.2	中央に径4.2cmの孔	17C前	2-291
47	14	不明品	5-4	B9	Ⅱ層	柾目	－	6.6	3.2	1.0	孔2	～近代	5-17

第17表　刷毛・紐等観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			本取り	計測値(cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最小幅	厚さ			
48	1	鋼	2-2	A7			14.2	12.4	－	5.0	刷毛シュロ束で包み、シュロ縄で結える	18C後～	2-462
48	2	籠	2-207	J6			(14.6)	(18.7)	－	0.7	幅0.7cm厚さ0.1cmの縞木を編む	17C前	2-465
48	3	籠	2-207	J6			(12.9)	(11.5)	－	0.5	幅0.7cm厚さ0.1cmの縞木を編む	17C前	2-464
48	4	帯	5-4	B8・9	Ⅱ層		24.0	7.3	－	－	4段に編み組couple	～近代	5-77
48	5	刷毛	2-184	I5		板目	14.1	9.0	－	1.2	貫通孔2 切り込み長約8cm 毛束全長13.0cm 毛を柄で柄に結付ける	17C前	2-463
48	6	漆塗刷毛	7-28	J3		追柾目	12.4	9.9	2.2	1.0	全面漆塗り 柄に孔 下字の線刻有 毛留孔上8下9	18C後～	7-73
48	7	刷毛	6-18	D9	下層	板目	19.0	9.7	3.8	1.0	黒漆塗り 縦突飛存 柄に孔 毛留孔11(うち未貫飛存8)	17C後	6-192
48	8	刷毛	3-294	G1		柾目	14.1	(12.8)	－	0.8	柄に孔 毛留孔上10下9	17C後	3-166

第18表　バンバ・箆等観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			本取り	計測値(cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最小幅	厚さ			
49	1	バンバ	6-19	D9		柾目	(76.5)	28.0	柄4.5	1.7	全体に漆跡	18C後～	6-275
49	2	ヘラ状木製品	4-6	H7		柾目	27.6	11.1	柄4.8	1.0		19C前	4-313
49	3	ヘラ状木製品	2-184	I5		柾目	28.3	7.2	柄3.1	0.9	柄部長14.3cm 被熱有	17C前	2-293
49	4	ヘラ状木製品	4-1	H7		柾目	23.3	12.1	柄3.8	1.1			4-312
49	5	把手	6-19	D8・9		柾目	12.5	4.5	－	2.7	全面に黒系の塗料 貫通孔2 木釘2 付着物あり	18C後～	6-194
49	6	木鎖	5-4	B9	Ⅱ層	追柾目	14.8	23.4	－	11.2	4.2×2.2cmの柄穴に角材貫通 四方面取り	～近代	5-133
49	7	鍬	2-184	I5		柾目	(26.5)	(8.3)	－	4.1		17C前	2-339
49	8	砥石台	6-19			追柾目	34.2	8.4	－	3.4	中央に砥石を入れる26×6.5×0.7の刳り	18C後～	6-222
49	9	不明部材	4-6	H7		追柾目	3.5	(6.7)	－	5.4	敷設の端材	19C前	4-184
49	10	不明部材	4-10	H7		丸木(半割)	18.5	6.2	4.9	3.4	両端に切り込み	～18C後	4-185
49	11	不明品	3-2	I1	階方西	柾目	12.6	7.5	1.6	2.0	両端に側縁の圧痕有 鋸刃下敷の歯	～19C	3-187
50	1	灯明台	6-19	D5		柾目	12.8	11.6	－	1.0	被熱・付着物有	18C後～	6-198
50	2	灯明台	2-201	I6		板目	(7.4)	9.4	－	1.0	中央に釘孔1	17C前	2-337
50	3	破壁	2-184	I5		柾目	17.2	8.5	－	0.9	刃物痕多数	17C前	2-379
50	4	破壁鏝	2-184	I5		柾目	燕3.9	12.3	4.1	1.2	柄穴幅1.6cm	17C前	2-379
50	4	刺形	4-2	H7		追柾目	11.0	10.9	－	4.0	木釘5本で隙立て 側面と底に墨痕 木309～311と接合	19C	4-308 ～311
50	5	不明品	6-18	D8	上層	柾目	8.7	8.6	－	2.0	鋼鋸連 下面に木釘9 釘穴1	17C後	6-200
50	6	不明品	5-4	A9	Ⅱ層	柾目	12.3	2.8	－	0.9	木釘1 木釘孔1 鋼鋸の跡子	～近代	5-195
50	7	墨書板	4-2	H7		柾目	23.6	6.1	1.9	0.6	墨書(判読不能)上下に穿孔2 釘穴4	19C	4-301
50	8	墨書板	4-2	H7		柾目	19.7	6.0	3.2	0.5	墨書(判読不能) 釘穴3	19C	4-302
50	9	不明部材	4-2	H7		追柾目	10.5	3.5	－	2.7	断面V字に用工 両端に貫通孔	19C	4-180
50	10	不明部材	4-3	H6		追柾目	10.4	1.3	－	0.8	径0.7cmの円孔3	19C	4-183

第19表　棒材・棒状具観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			本取り	計測値(cm)			備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	厚さ			
51	1	棒材	5-80	C8	Ⅱ層	板目	(44.4)	2.1	1.8	墨書線 6ヶ所 木釘10 木釘孔5	17C前	5-145
51	2	杭	3-178	H1		追柾目	(34.9)	1.9	1.6		18C後	3-161
51	3	棒材	2-184	I5		追柾目	32.1	1.0	1.0	上端に物加工 下端に側投有	17C前	2-247
51	4	串		B6・7	6層地土4	丸木	19.5	0.8	0.8	木釘孔 表面10 裏面9		6-193
51	5	杭	3-512	H10		丸木	(21.0)	3.5	2.7		16C後～17C前	3-165
51	6	杭？	3-293	H10		追柾目	(22.1)	2.5	2.0	片面に鋸跡の加工	16C後～17C前	3-162

第20表　人形・玩具観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			本取り	計測値(cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最小幅	厚さ			
52	1	人形(頭)	6-18	D7・8	上層	板目	12.9	7.6	3.1	5.6	後頭部(内部刳抉く)首と胴の接合用 木釘 髪を留める木釘孔6 墨描き	17C後	6-199
52	2	人形(頭)	4-2	H7		追柾目	8.6	2.0	1.8	2.2	側に孔 胴部に貫通孔 頭頂部に墨書り	19C	4-294
52	3	不明品	4-10	H7		柾目	19.0	3.3	－	0.5	形代	～18C後	4-198
52	4	不明品	6-18	D8	下層	追柾目	5.7	3.5	1.8	1.3	頭部から胴部に掛状の加工	18C後	6-201
							最大長	最大幅	最小幅	高さ			
52	5	独楽	7-148	J2		丸木	－	6.1	－	6.4	径6.1cm 軸穴2度	16C後～17C初	7-219
52	6	人形	7-130	J2			7.1	2.7	－	2.5	人面墨書(漆塗か)	19C	7-356
52	7	人形(頭)	4-2	H7		追柾目	9.7	(3.5)	(1.5)	4.0	頭部に黒、上唇に赤の彩色	19C	4-292
52	8	人形(頭)	4-2	H7		追柾目	3.7	2.0	1.5	2.0			4-293
52	9	木製鉛丁型	5-4	B9	Ⅱ層	板目	17.1	3.2	1.5	1.5	刃部10.7cm	～近代	5-221
52	10	玩具の刀	3-448	H10		柾目	(24.0)	3.7	－	0.4	刃部ほぼ欠失		3-250
52	10	玩具の刀の鞘	3-448	H10		柾目	5.7	5.5	3.8	0.7			3-250
52	11	鍛刀型木製品	5-4	B8	Ⅱ層	柾目	(53.9)	5.0	－	0.7	膨板・刃物痕・鋸状の圧痕有	～近代	5-36
52	12	木剣	6-18	D8	下層	柾目	61.50	4.2	2.6	1.3	柄部14.0cm 根皮巻 漆塗有	17C後	6-274

第21表　不明品観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			本取り	計測値(cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最小幅	厚さ			
53	1	不明品	6-18	D8・9	下層	柾目	3.0	2.9	－	1.0		17C後	6-203
53	2	不明品	3-73	I1		柾目	3.0	3.0	－	0.7	円盤状	18C	3-190
53	3	不明品	4-2	H7		追柾目	5.6	2.7	－	0.3	小判型	19C	4-193
53	4	不明品	2-184	I5		柾目	8.3	5.6	－	0.3	楕円形 片端に膨痕有	17C前	2-296
53	5	不明品	3-70	G1		追柾目	10.1	5.1	－	0.7	菱形 面	17C後	3-189
53	6	漆塗不明品	7-128	A2		柾目	5.9	3.9	0.8	0.8	全面黒漆 歪型下部に釘穴2	17C	7-77
53	7	不明品	2-184	I5		柾目	9.3	2.0	－	1.4	主端形 漆塗り	17C前	2-299
53	8	不明品	2-184	I5		板目	10.3	1.8	1.0	1.0	主端形	17C前	2-300
53	9	不明部材	5-4	A・B9	Ⅱ層	追柾目	17.9	1.9	1.1	1.0	1面平坦	～近代	5-66
53	10	不明品	2-184	I5		板目	41.4	3.1	1.6	2.3	鉄釘5	17C前	2-292
53	11	三角板	5-4	A9	Ⅱ層	板目	25.0	3.7	－	0.6	両端摩耗 長辺割裂 刃物痕有	～近代	5-193
53	12	不明品	4-1	H7		追柾目	8.6	3.2	2.1	0.7			4-203
53	13	不明板材	2-184	I5		追柾目	21.0	6.2	－	1.8	盛上がる面に格子状の線刻有 片端に釘穴1	17C前	2-296

第22表　井戸材・井戸枠・水道の継手等観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			本取り	計測値(cm)			備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	厚さ			
54	1	継手	2-31	A7		丸木	25.7	16.7	12.9	竹管飛存 縁目に縄を巻く	19C	2-366
54	2	支え木	2-31	A6		板目	25.1	17.4	14.8	樹皮飛存	19C	2-364
54	3	支え木	2-31	A6		柾目	41.1	最大厚 7.4	最小厚 2.4	鉄釘3 釘周囲に敲痕圧痕有	19C	2-365
54	4	継手	2-31	A6		半割り	37.6	28.0	10.6	穿孔3	19C	2-367
55	1	井戸枠	3-439	G10		板目	62.6	4.2	3.3	519～522は1基の井戸枠 枘2	16C末～17C中	3-519
55	1	井戸枠	3-439	G10		板目	62.3	3.8	4.2	519～522は1基の井戸枠 枘2	16C末～17C中	3-520
55	1	井戸枠	3-439	G10		板目	64.1	3.9	4.8	519～522は1基の井戸枠 枘穴2	16C末～17C中	3-521
55	1	井戸枠	3-439	G10		板目	62.9	3.8	5.0	519～522は1基の井戸枠 枘穴2	16C末～17C中	3-522
55	2	杭	3-324	F10		丸木	37.3	13.5	13.2	中央に穴(横5.4×縦3.0×深さ5.0)	17C前	3-158
55	3	部材	3-387	G1		丸木	84.3	9.8	9.6	枘穴2 樹皮飛存	17C後	3-518
55	4	井戸材	3-250	F10		板目	(119.9)	12.4	2.6	タガ痕	18C後	3-538
55	5	井戸材	3-451	H10		板目	87.8	17.6	2.0	タガ痕2 鉄釘1 釘穴1	17C前	3-523
55	6	井戸材	3-451	H10		板目	88.7	18.0	2.3	タガ痕3 鉄釘1 釘穴1	17C前	3-526
55	7	井戸材	3-451	H10		板目	88.0	20.0	2.5	タガ痕3 鉄釘5	17C前	3-530
56	1	井戸材	3-2	I1		追柾目	86.0	13.3	2.3	鋸はつり痕	～19C	3-533
56	2	井戸材	2-41	A6		追柾目	(67.7)	13.3	2.3	タガ痕1 墨書判読不能	18C後～	2-363
56	3	井戸材	2-41	A6		追柾目	(68.1)	15.5	2.2	タガ痕1 墨書判読不能	18C後～	2-362
56	4	井戸材	3-2	I1		芯持ち柾目	120.6	12.6	2.2	タガ痕4 釘穴1 内面付着物有	～19C	3-532
56	5	井戸材	3-2	I1		柾目	130.2	12.0	2.3	タガ痕4 側化 内面付着物有	～19C	3-531
56	6	井戸材	3-250	F10		柾目	150.7	13.5	2.9	タガ痕5	18C後	3-534
56	7	井戸材	3-250	F10		柾目	150.4	12.1	3.2	タガ痕5 側面に格子状の線刻有	18C後	3-536

第23表　墨書・焼印・木札観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			本取り	計測値(cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最小幅	厚さ			
57	1	墨書板付札	5-4	B9	Ⅱ層	柾目	20.0	3.5	－	0.2	(表)■鶴四吾戎文 ■■■三郎 (裏) 判読不能	～近代	5-1

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	計測値(cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最小幅	厚さ			
57	2	墨書板	3-2	I1		追柾目	21.8	5.0	－	0.8	(表)佐ヵ木　(裏)壱人　正■■■■／■■■	～19C	3-500
57	3	折敷底板	4-15	I7		柾目	(26.6)	(7.6)	－	0.2	〔　〕／「しろうろ」釘穴4	～近代	4-305
57	4	墨書板	4-1	H7		柾目	26.5	3.7	－	0.3	さ ま／両年		4-298
57	5	墨書板	4-1	H7		柾目	(28.9)	3.4	－	0.5	し き〔ス〕〔　〕		4-296
57	6	付札	5-4	B9	II層	柾目	16.2	1.9	－	0.5	5～6文字判読不能 上部両側に切込み有	～近代	5-113
57	7	付札	5-4	B9	II層	板目	13.3	2.2	－	0.6	福嶋村　もち米　上部両側に切込み有	～近代	5-182
57	8	墨書板	4-65	I6		板目	14.1	1.7	0.6	0.5	氏〔命〕　筒に再利用	17C中	4-306
57	9	棒状	6-153	B7		柾目	(9.4)	2.7	－	0.1	薬女者見有受	16C後葉	6-217
57	10	板(墨書)	5-4	A・B9	II層	柾目	7.4	3.0	－	0.3	絵あり　2辺に釘打ち　箱物の一片	～近代	5-78
57	11	板(墨書)	7-154	J1-2		柾目	7.2	7.7	－	0.9	大　穿孔1 木釘8 釘穴2	16C後葉～17C初頭	7-357
57	12	折敷底板	6-126	B・C7		柾目	(4.8)	11.1	(9.9)	0.2	〔太〕■縄	～18C中	6-216
57	13	墨書板	3-439	G10		柾目	(9.1)	(50.2)		0.4	①イ　■〔利〕　②イ　■■　③イ　■九分　④イ　〔七〕■太郎　⑤イ　〔都〕〔β〕　⑥イ　■黒　⑦イ　上ろ	16C末～17C中	3-501
58	1	曲物蓋	4-3	I6		柾目	14.5	－	－	0.6	孝顕寄／〔　〕　樹皮綴け ヶ所	19C	4-303
58	2	曲物蓋	2-184	I5		柾目	10.4	－	－	0.4	黒砂糖　樹皮持ち手有	17C前	2-402
58	3	曲物蓋	2-184	I5		柾目	10.5	－	－	0.5	白砂糖　樹皮持ち手有	17C前	2-399
58	4	曲物蓋	2-184	I5		柾目	15.1	－	－	0.8	豆■■■■■／■■■■■　2枚の板を樹皮の綴みで留じる　裏面に刀物痕	17C前	2-137
58	5	墨書板	4-10	H7			14.4	(10.2)	－	0.8	■〔■／九〔　〕／〔　〕　後に楕円形に加工　両面に刀物痕・被熱有	～18C後	4-304
58	6	曲物	5-4	B9	II層	柾目	(6.2)	(13.0)	－	0.4	砂糖／■	～近代	5-2
58	7	桶側板	5-4	B9	II層	板目	35.9	6.3	3.7	1.5	巳〔年〕　納穴あり	～近代	5-30-1
58	8	桶側板	5-4	B9	II層	板目	35.8	6.5	3.8	1.4	子〔年〕〔　〕■　納穴有	～近代	5-30-2
58	9	桶蓋	5-4	B9	II層	柾目	(17.0)	(4.2)	－	1.8	(強印)(黒印)　蜜盤箱　側面に木釘1 木釘孔1	～近代	5-238
58	10	桶蓋	5-4	B9	II層	柾目	11.5	－	－	0.7	(強印)花乃良	～近代	5-101
58	11	将棋駒	6-18	D8	下層	追柾目	3.1	2.5	1.6	0.8	「金将」	17C後	6-214
59	1	付札	2-184	I5		追柾目	19.7	3.2	－	0.4		17C前	2-387
59	2	付札	2-184	I5		柾目	17.1	2.5	－	0.5		17C前	2-386
59	3	付札	2-184	I5		追柾目	17.4	2.2	－	0.4		17C前	2-384
59	4	付札	2-184	I5		柾目	16.7	2.7	－	0.5		17C前	2-383

第４章　石製品

今回の調査で出土した石製品は、器種、残存率などにより171点を図化した（碁石は写真図版に掲載）。多種多様な製品の多くは笏谷石と考える凝灰岩で製作されるが、器種別にその他の石材が適宜使用される。以下、容器類、暖房・調理具、日用品、石瓦、建材、石塔、煉瓦等に分けて説明する。

１　容器類（第60～63図　第24表）

容器類は、表面を平盤で平滑に仕上がるものや丸盤か鶴嘴状の工具痕を残すものがある。形状から体部立ち上がりが直線的なもののうち、体部長が底部短辺や径の半分程度までのものを盤、体部長が底部短辺を超えるものを槽、体部立ち上がりが緩やかに内湾するものを鉢とした。平面形は方形・円形が主だが、三角形や雫形などの特殊な形状を呈するものもあるが、一隅の破片である資料も定量ある。また全体的に粗い成形のものや、容器状を呈するものは容器状製品とした容器類に含めた。

盤（第60、61図１・２）　平面形が方形と円形と三角形のものがあり、概ね３か４箇所に形状は様々な脚が付く。脚を体部とは区別して立体的な形状に削り出すもののうち、６は台部があり、外面に筋状工具痕による簾状装飾、７・８は外面に魚々子状装飾を施すが、８は雲形の脚を持ち、正面に葵と思われる花、両側面に河骨の文様を陽刻で施す。体部外面と一連となる脚を認める方形の４や三角形の５は全体的に成形が粗い。第61図１は内面に煤を認める円形の盤で、表面を平刃の工具で平滑に仕上げる。

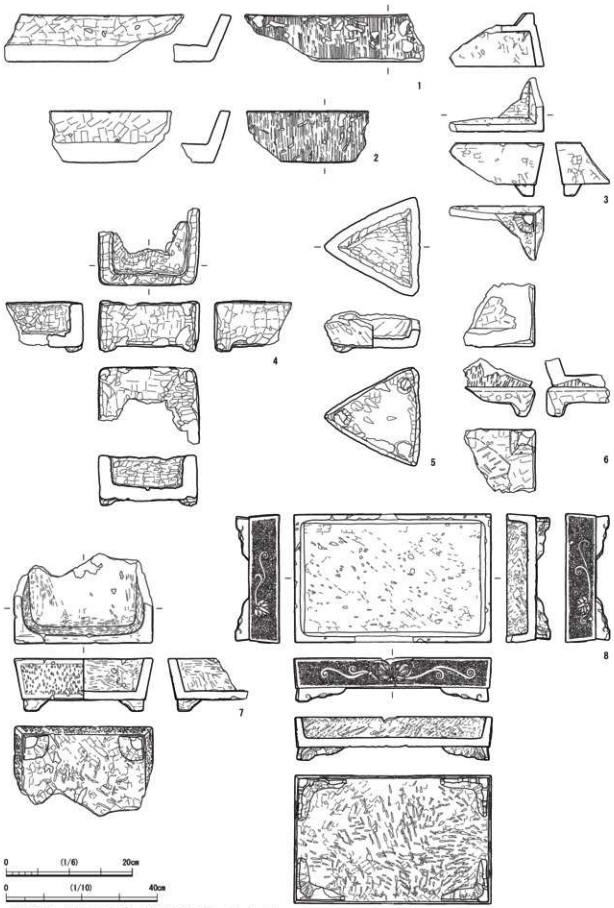
槽（第61図３）　１点と少ない。体部外面と一連となる脚を認める方形のものである。

鉢（第62図１～７）　体部が内湾しつつ立ち上がる１～４、６・７と直立気味な５がある。１は内面に汚れが残り、平刃の工具で上げ底に仕上げた底部中央を除く外面に魚々子状装飾を施す。２～４・７は外面に簾状装飾を施す。このうち４は口径91cm、底部径73cmに復元できる大型品である。６は平面形が洲浜形と思われ、横に延びる断面円形の脚が付く。７は先端が窄まるため雫形を呈すると考える。これらは全て内面を平滑に仕上げる。５は内外面とも平刃の工具により平滑に仕上げる。底部を内側から穿ち穿孔する。植木鉢に使用したものと考えられる。

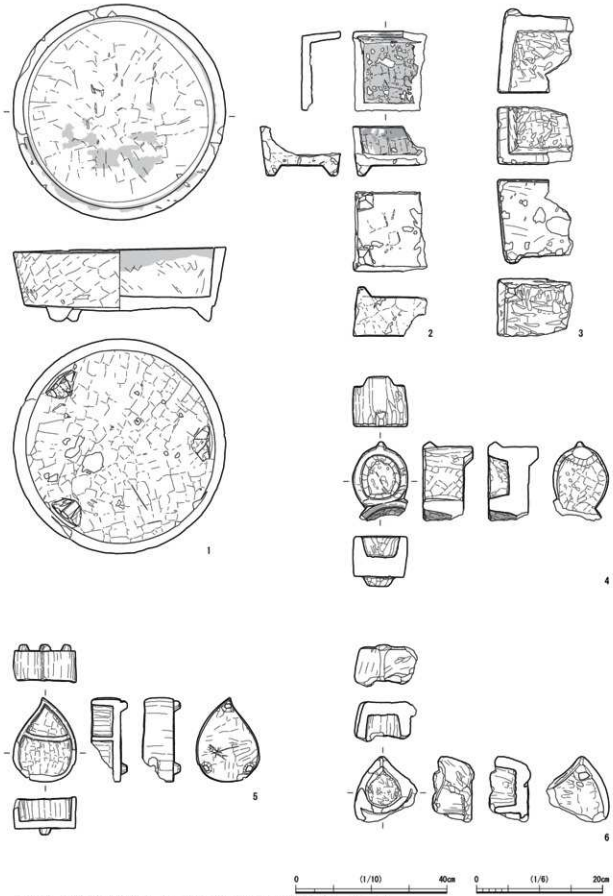
容器状製品（第61図４～６、62図８～12、63図）　第61図４～６は全てに脚がある。１は平面形が楕円形で先端上部が張り出す。遺存状況から円形の他容器と連結していたと考える。雫形の５・６は内に仕切りがある。５は作りが良く先端の成形も丁寧である。脚を体部とは区別して削り出し、表面を平滑に仕上げる。一方、体部外面と一連となる脚を持つ６は、全体的に成形が粗いため平面形が歪である。

第62図８～12は平面形が円形のもので、体部が直線的なものと内湾気味なものがある。８は底部内側に小さな脚、９・10は体部外面と一連となる脚を持つ。11はほかより成形が丁寧で、底部内面と立ち上がり部分の境が明瞭である。９は内面、11は外面に煤が付き、12には底面に被熱痕を認める。第63図１は長方形を呈する底部外側を１か所穿孔する。植木鉢として使用したと考えるが、内外面に煤が付着するため、別の用途に転用された可能性もある。８は破片資料だが口縁上面に葉脈状の陰刻を施す。

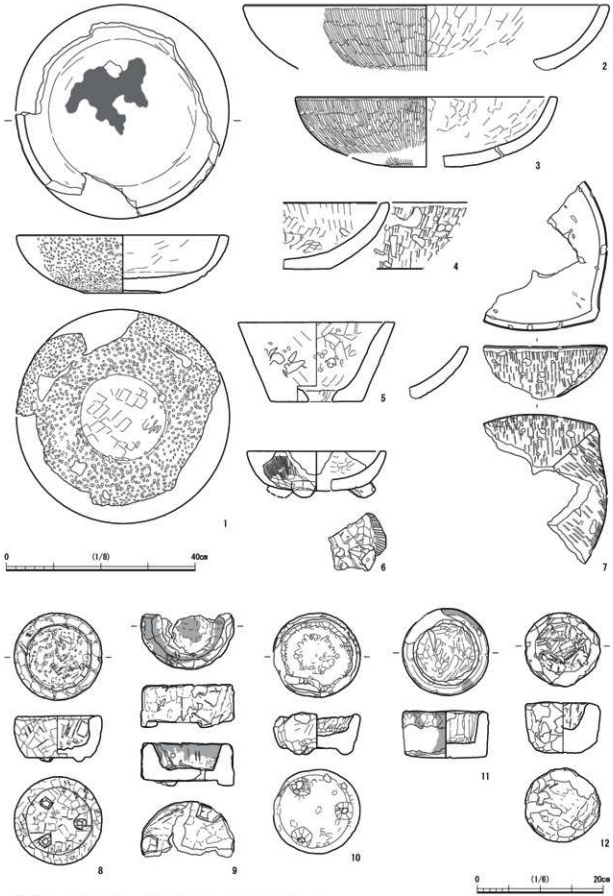
第63図４～９はいずれも容器形だが、全てが歪で鶴嘴状工具痕が明瞭に残るため容器として機能を果たしたか疑わしい。全て平底で、平面形は４・５は隅丸方形、６・８は長方形、７は円形を呈する。また内面に煤の付着する７は側面を２箇所抉る。９は笏谷製桝状製品だが、底部内面と立ち上がり部分の境が不明瞭である。



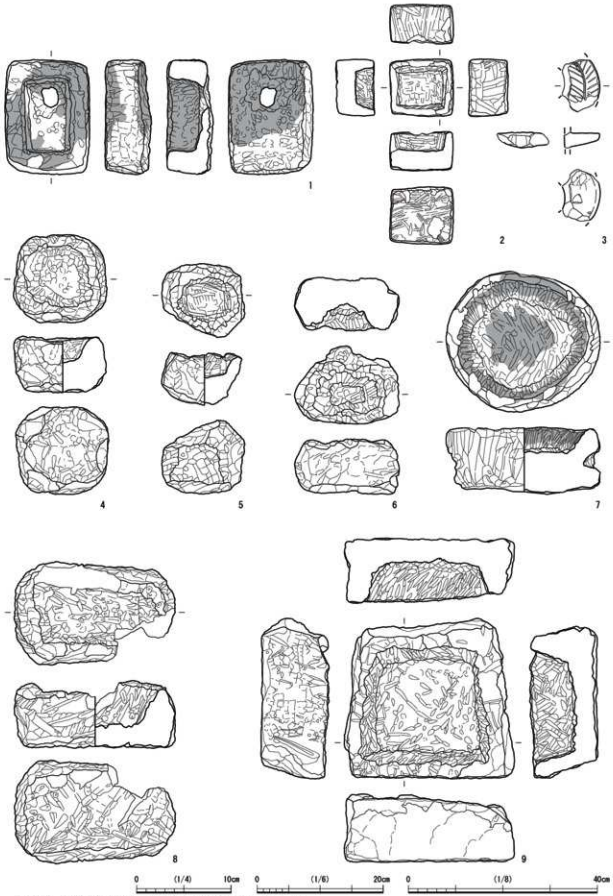
第60図　容器類１［盤］（縮尺1/6 1/10：3・7・8）



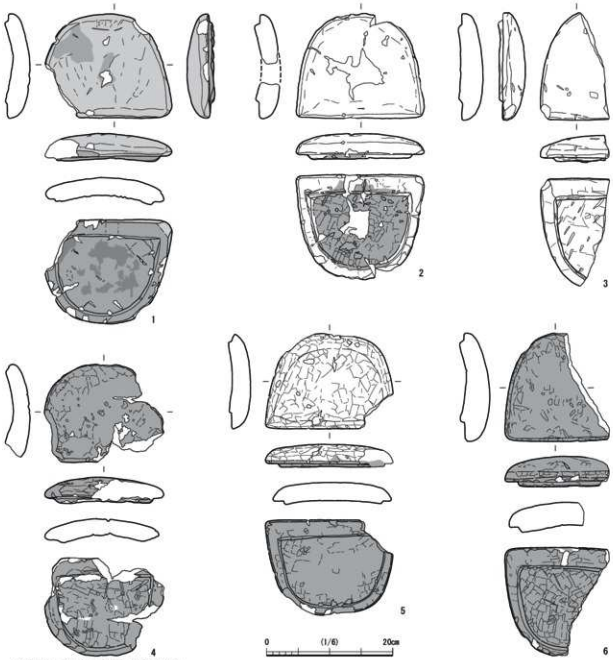
第61図　容器類２［円形盤　盤　槽　容器状製品］（縮尺1/6　1/10：1）



第62図　容器類３［鉢　容器状製品２］（縮尺1/6　1/8：1）



第63図　容器類４［容器状製品３］（縮尺1/6　1/8：9）

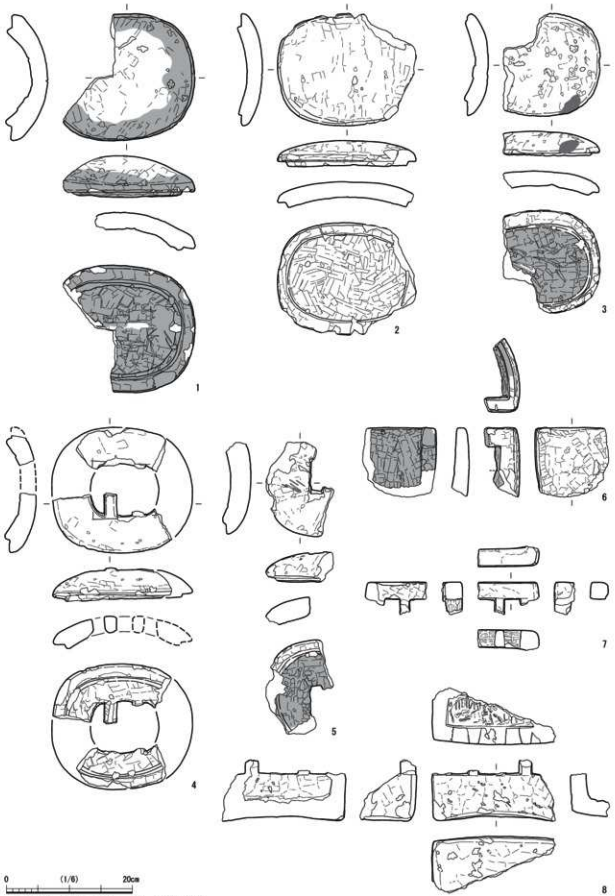


第64図　行火１［蓋］（縮尺1/6）

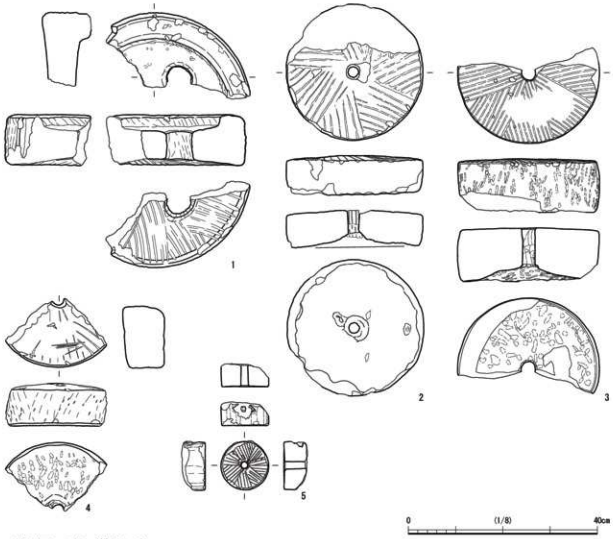
２　暖房・調理具等（第64～66図　第25表）

暖房・調理具として、行火、粉挽臼、茶臼を図化した。

行火（第64・65図）　蓋と身からなる行火でバンドコと呼ばれる。形態はD型と楕円型に分かれるが、図化できたのは蓋が多く、身は一部の破片にすぎない。蓋は第64図のD型と第65図１～５の楕円形型に分かれる。蓋は身の平面形に合わせた形で、やや膨らんだドーム状の天井を形成する。返しを削り出し全体に平滑にするが内側になる面の仕上げがやや粗い。いずれも個体差があり、全く同じ形状のものはないが、定型化した製品である。使用時に火を受けるため内外面に煤を認めるものが多い。なお第65図４・５は煙出しを持つ。第66図６～８はD型の身で、体部正面に長方形の煙出し、もしくは内部確認用の穴が窓のように並ぶ。身も蓋と同様、外面は平滑に仕上げ、体部内面はやや粗く仕上げる。



第65図　行火２［蓋・身］（縮尺1/6）



第66図　石臼（縮尺1/8）

ただ工具の届かない底部内面は仕上げが粗く鶴嘴状の工具痕を認める。本調査の出土品は身がいずれも破片であるため、セット関係になるものは確認されていない。

臼（第66図１～５）　粉挽臼と茶臼がある。１は物入れのある上臼で使い込み変形している。２～４は下臼で軸孔を認める。２・３は擂り目が８分画で、花崗閃緑岩製の３は上面の摩滅が少ない。３を除き擂り目が直線的でないため職人の目立てでない可能性がある。５は茶臼の上臼で、径約10㎝、高さ５㎝を測る小型品である。挽手の差し込み口を認めるが、周囲に意匠は確認できない。

３　日用品等（第67～72図　第26～28表）

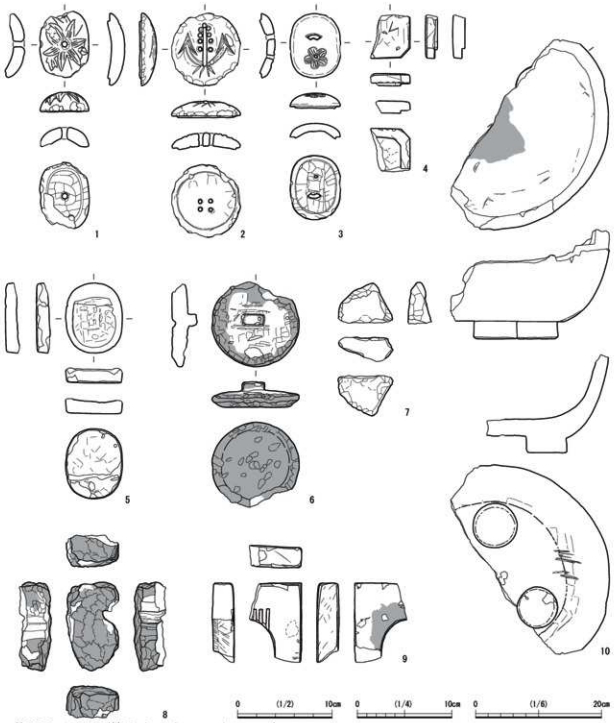
香炉、硯、砥石、重石、碁石等を図化した。

香炉（第67図１～５）　１・３は楕円形、２は円形、４は方形を呈する蓋である。行火の蓋と似る１～３は煙出しの穴を１～４つ認める。１は穴の周囲に花文、２は植物文、扇形の透かし穴を認める３は梅花を線刻で施す。扁平で隅を斜めに切る４は１～３と異なり返しを直角に削り出す。５は身である。

火消壺（第67図６）　外面に方形の摘みが付く蓋である。表面と裏面周辺に煤が付く。

火打石（第67図７）　三角柱に近い形の石英の火打石で、２つの角に使用痕を認める。

鍋掛重り（第67図８）　囲炉裏上の自在鉤等に釣った鍋のバランスをとるため鍋の縁に掛ける重りで、



第67図　日用品（縮尺1/4　1/2：7　1/6：9・10）

猿の手の形状をしているためサルと呼ばれる。全体に粗い成形で突起下をやや抉り気味に削る。

焜炉（第67図９）　円弧に削り出す部分があるため竈や焜炉の釜輪に当たると考える。上面に筋彫りがあり、下面の円弧周辺に煤が付着するため、箱状の身に被せ中で火を炊いたと考える。

風炉（第67図10）　体部がやや湾曲して立ち上がり、３つの短い円筒形の脚を正三角状に配置する。

硯（第68図）　１～11はいずれも長方硯で四隅が角張る。墨地と陸を囲む縁の内側の形状は概ね隅丸長方形で、７～11の小型品のみが長方形となる。硯背は多くが平らだが、５は脚を持つ。完形のものの長さは６～18㎝、幅も３～９㎝台だが、小型品の幅は３～４㎝に収まる。法量と形状の関連性をみると

長さが幅の２倍以上の２・９・10は縦長となる傾向がある。このうち１・２・４・６は線刻文字を認める。１は石材を示す「琥珀石」、４は所有者の氏名と考える「□木金次郎」と線刻する。２は不明確だが「肴や/（兼）善/三一」であろう。なお赤色顔料が付着する６には「64」と線刻する。５は下端に切断痕、７は穿孔、８は上端に半円状の加工面がある。12は笏谷石製のミニチュアで、長さ9.8cm、幅4.8cmである。縁の幅はほかと比べて広いが、墨地と陸を囲む縁の内側の形状は隅丸方形であり、やや大型の製品を模倣した可能性が高いと考える。出土事例は少ない。

砥石（第69・70図）　砥石は断面形が方形に近い第70図８、断面形の短辺と長辺の比が１：２以上の第69図１～12、第70図４・５・７とそれらを除く断面形が長方形のものがある。平面形は概ね板状か棒状だが、使用により撥型に変形した第70図３・９・10や、同図１・２のように小型化したものがある。なお第69図12には筋状の研き痕があり、棒状か湾曲した刃の道具に用いたと思われる。

重石（第71図）　やや扁平な角形もしくは円形で中央に孔を穿つものを重石とした。表面はおもに平盤でやや粗く仕上げるが平滑な７などもある。孔は主に両面から開けたと考える。厚みのある角型には２の小型品もあるが、いずれも上半部に孔を認める。楕円形の４と円形の５～７は厚みが異なる。円形のものには断面が扁平なもののほかに傘形の８と饅頭形の９がある。

人形（第72図１・２）　１は笛を吹く猿、２は太鼓を打つ猿である。

蓋石（第72図11・12）　平面形が半円形の11は上部に半円形の臍がある。円形で側面の上部に半円の抉りがある12は内面に低い返しを削り出す。ともに蓋の上面を平刃の工具で平滑に仕上げる。

碁石（写真図版第41　碁石１～29）　形状は４・11・15・21・28など、真円に近いものもあるが、一部に歪な部分を残すものが多い。縦、横とも概ね1.8cm～2.2cm前後のものが多く、厚さも８mmまでに収まるが、１など大きく歪むものもある。黒石はおもに粘板岩だが、２・４の泥岩や６の片麻岩等もみられる。白石は色調が多様だが、13・18の灰色や14～17の濃灰色のものが多い。なお安山岩の18など数点は、白石の代用とした可能性がある。規模は現代のものと大差ないが、厚さは薄いものもある。

不明品（第72図３～８）　円環状の３は側面に孔がある。４・５は球状で、中央に穴を途中まで空ける。６～８は円盤状を呈する。６は錘の可能性がある。９は弾丸、10は軽石である。

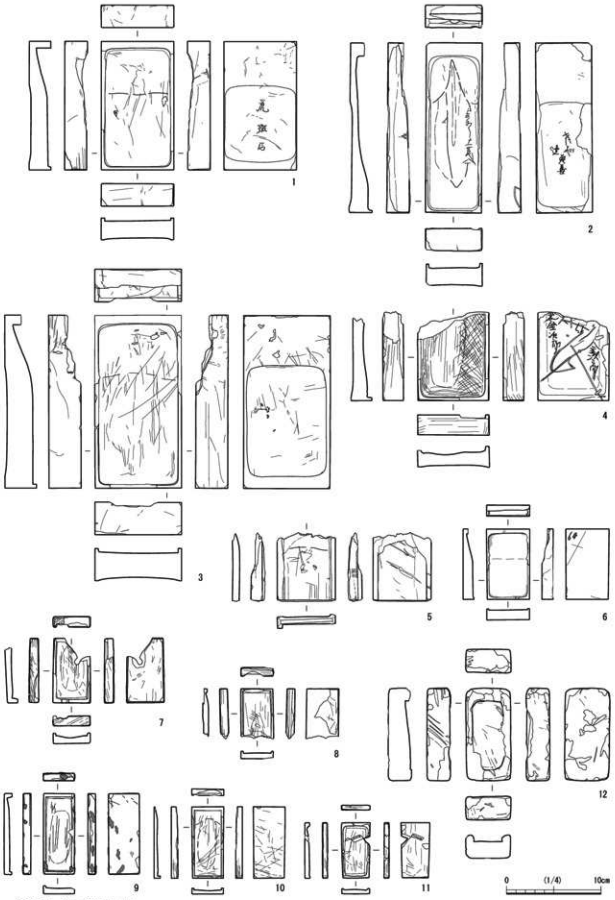
４　石瓦・建材（第73～77図　第29表）

石瓦は軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、棟瓦等、建材は石樋、礎石がある。

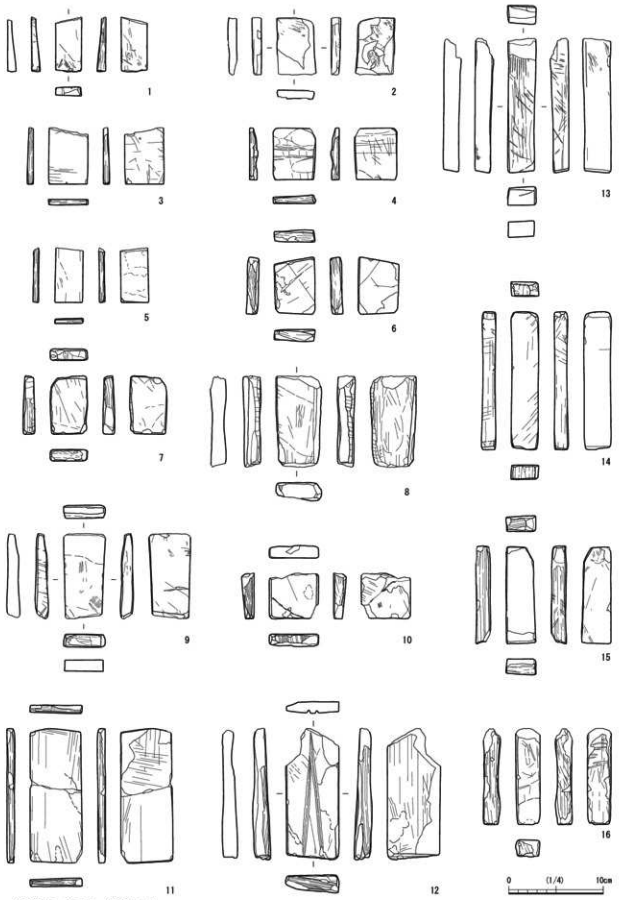
軒丸瓦・丸瓦（第73図）　１の軒丸瓦の瓦当は無紋で、その角度は本体に対してほぼ直角となる。丸瓦のうち２・３・５・７は棟側の連結部分が残るが破片で、瓦当を欠いた軒丸瓦と区別がつかない。連結突起の形状は稜があり山形の２、稜がなく緩やかに盛り上がる３・７、平らな５がある。なお、軒丸瓦を含む丸瓦類の幅は、11.7～12.6cm（４寸前後）、14.4cm（４寸７分）、15～15.3cm（５寸前後）と多様で、図化したもののなかでは５寸前後のものが７点中３点とやや目立つ。なお４は両端を欠くが、改変して鳥衾に転用したと思われる。

軒平瓦・平瓦（第74図・第76図１）　６・７瓦当は無紋の軒平瓦で、全幅のわかる３とともに幅は30cm程（10寸前後）である。大型品の第76図１は長さ89.5cm、幅36.1cm（12寸）を測る。

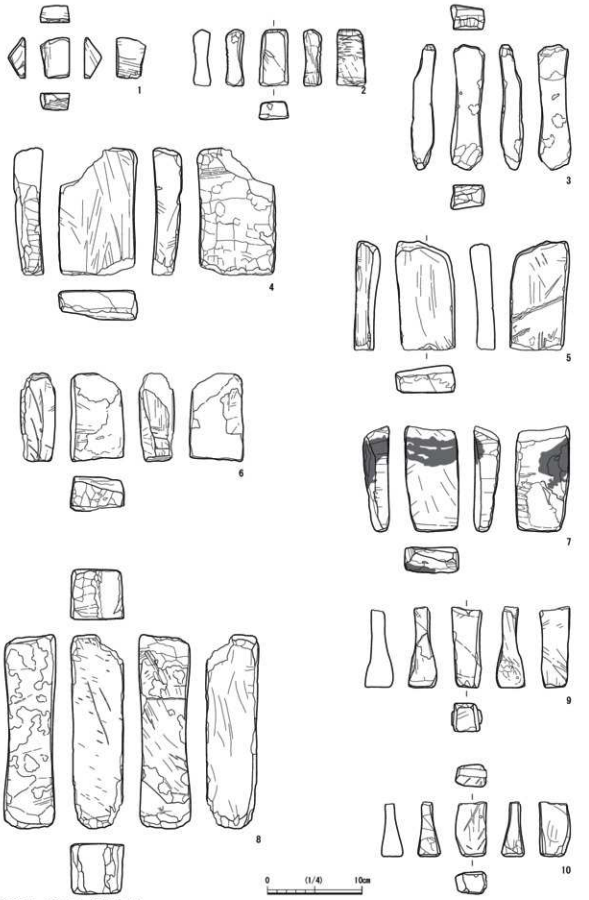
棟瓦（第75図）　全て角型で上面が滑らかな無稜式である。棟瓦は両側が連結部となるが、連結突起を上面に削り出すのをオス側、連結面を削り出し、突起が下面側となるのをメス側とする。４はメス側を欠き、オス側の連結突起を欠く。１の大型品を含む３・６・７はオス側、２・５はメス側を欠く。１～３、５は下面の掘り込みが鋭いＶ字状である一方、４・６・７はやや丸味を帯びる。なお、幅は２の



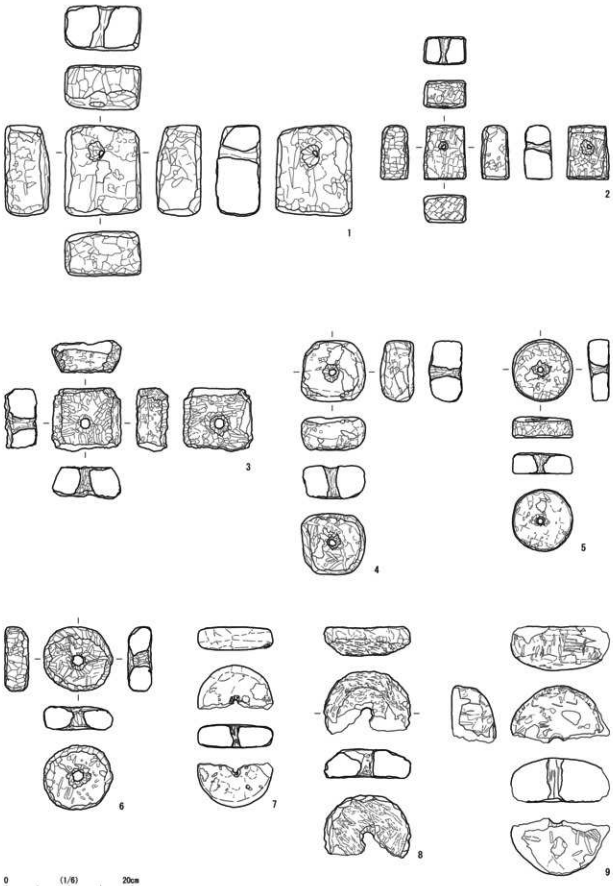
第68図　硯（縮尺1/4）



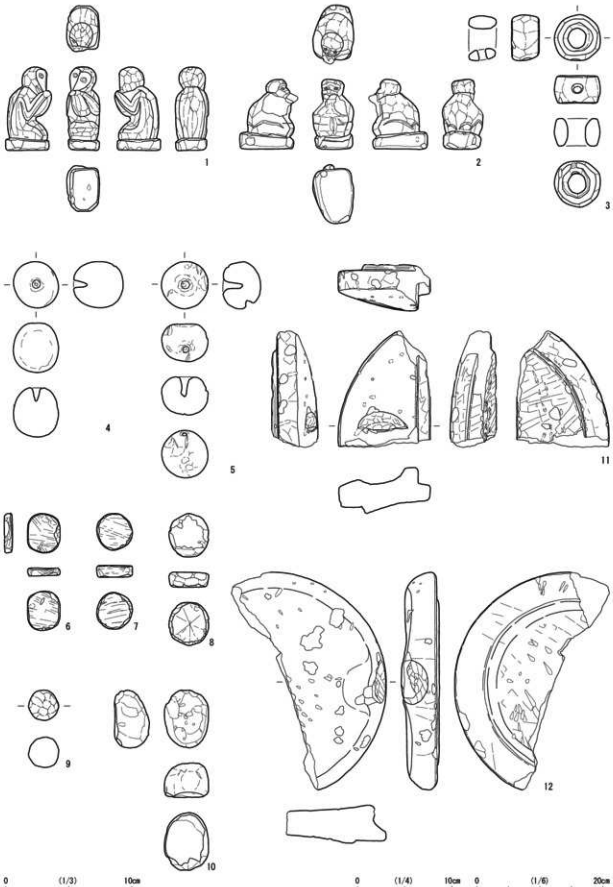
第69図　砥石１（縮尺1/4）



第70図　砥石２（縮尺1/4）

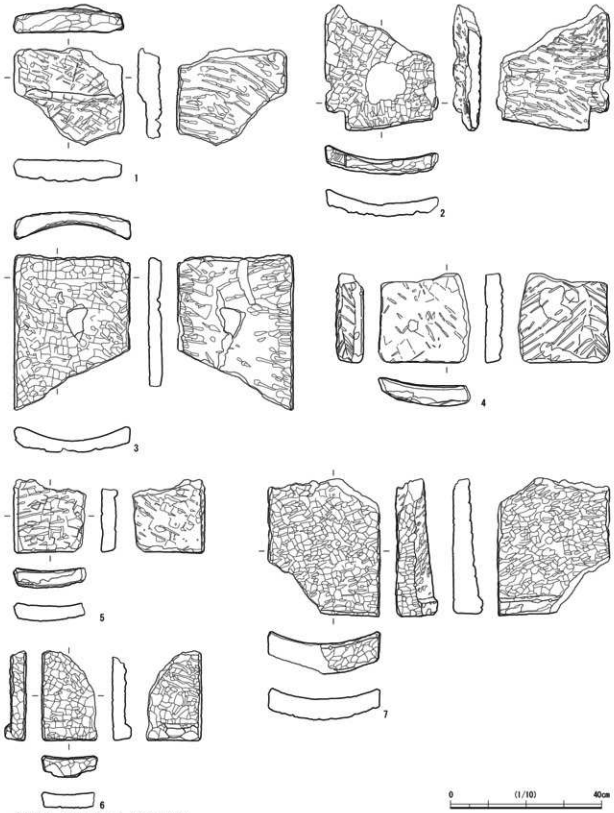


第71図　日用品・その他１［重石］（縮尺1/8　1/4：1）



第72図　日用品・その他２（縮尺1/4　1/3：1・2・9　1/6：11・12）

第73図　瓦１［丸瓦］（縮尺1/10）

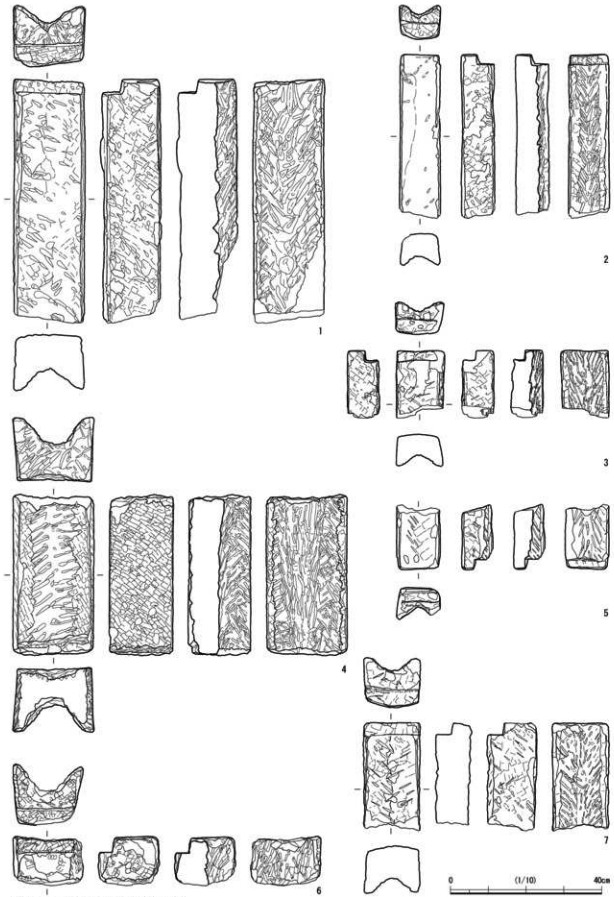


第74図　瓦２［平瓦］（縮尺1/10）

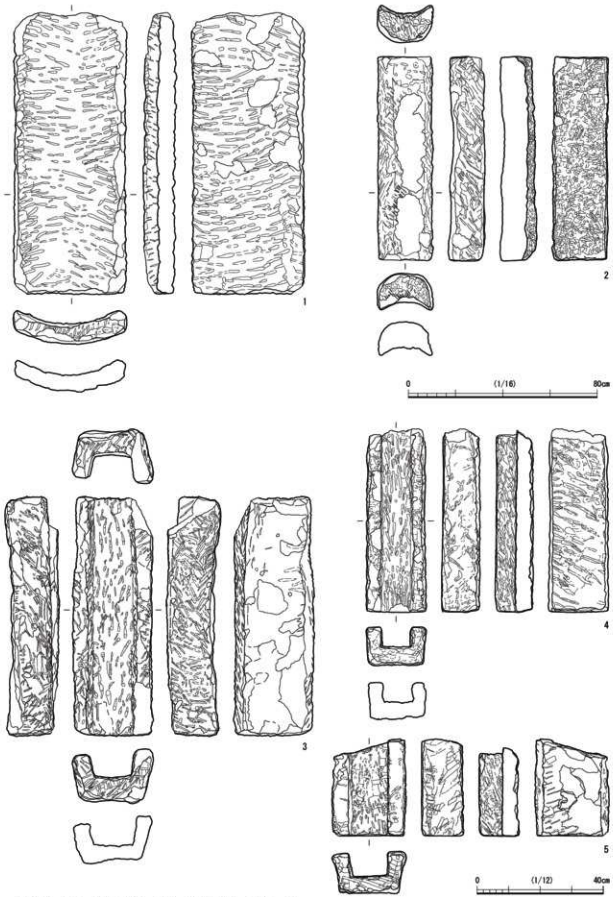
10.8cm（３寸３分）～４の21.5cm（６寸５分）と幅がある。

棟石（第76図２）　残存長86.2cm、幅23.7cmを測り、下面の掘り込みは丸味を帯びる。

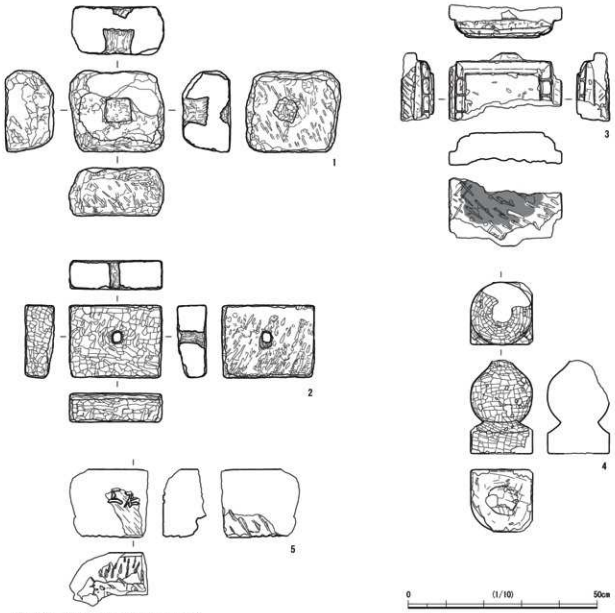
石樋（第76図３～５）　石樋は外面が概ね粗い成形で、ほぼ全体に鶴嘴状工具痕が残る。規格は３・



第75図　瓦３［棟瓦］（縮尺1/10）



第76図　瓦４［棟石等］・石樋（縮尺1/12　1/16：2）



第77図　礎石・石塔類（縮尺1/10）

５が幅25.6、23.6cmであるのに対して４は18.6cmと小さい。

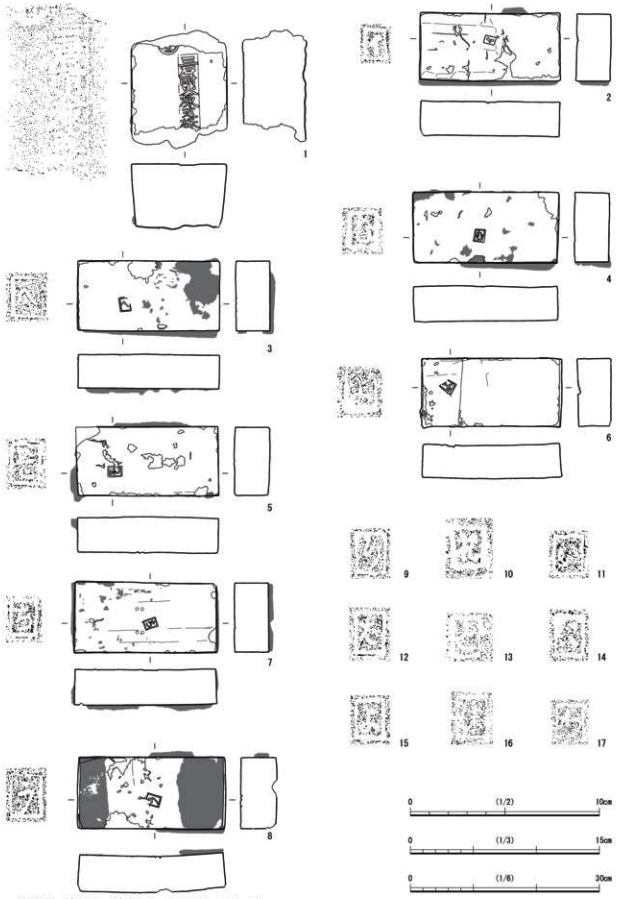
礎石（第77図１・２）　１は２より成形が粗い。上面に平面断面とも方形の柄穴を中間まで削り、下面にも抉りを入れる。２は平面断面とも角張る長方形で、細い柄穴が貫通する。

５　石塔類（第77図　第29表）

石塔（第77図３～５）　３は宝篋印塔の基壇の反花座、４は灯篭の上部で宝珠形を呈する。平面形が正方形の下部は底面が平坦である。５は部位が不明で表面が剥離するが、「石□」の線刻を認める。

６　煉瓦（第78図　第30表）

図化した煉瓦は１を除き16-４調査区の転車台の構築材である。全て耐火煉瓦で、１に岡山県備前市に現存する「三石耐火煉瓦株〔〕」の刻印がある。１～８と図が未掲載の９～17は長さ10～11cm、幅22～23cm内に収まる規格品で、２・６・７は絞り出しの痕、５・８はナデを認める。全て「い」・「そ」・「た」・「に」・「は」・「む」・「よ」・「わ」等の刻印がある。



第78図　煉瓦２（縮尺1/6　拓本1/3　1/2：1）

第24表　容器類観察表

図版番号	挿図番号	種別	出土地点 地区	出土地点 遺構番号	出土地点 層位	計測値(cm) 縦	計測値(cm) 横	計測値(cm) 高	計測値(cm) 厚	(g) 重	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
60	1	盤	I5	2-15 集石		-	(28.4)	7.5	底部2.4 側面1.8	900	外面簾状装飾	18C後	2-42
60	2	盤	I6		2類地層1	-	(19.5)	(8.2)	底部2.8 側面2.0	612	円形　外面簾状装飾		2-46
60	3	盤	H7	4-2		(14.3)	(24.9)	14.1	1.6	1275	方形　脚付	19C	4-28
60	4	盤	H10		3類地主	(12.3)	16.0	8.1	2.0	870	方形　脚付		3-226
60	5	盤	G1		3類乱	(15.1)	(15.6)	(6.5)	1.5	638	三角形　脚付		3-45
60	6	盤	A6・A7		2類地主1	(10.0)	(11.3)	(9.2)	底部4.3 側面2.3	646	方形　脚付　外面簾状装飾		2-36
60	7	盤	D6	6-21		(23.8)	36.7	14.0	2.3	5143	方形　脚付 外面角々子状装飾	～17C後	6-23
60	8	盤	B9	5-4	層層	34.0	52.2	11.7	2.4	11323	方形　雲形脚付 外面角々子状装飾　陽刻 (正面に花・両側面に河骨)	17C頃～近代	5-11
61	1	盤	J10		2類地主3	口径 34.0	底径 30.2	11.7	底部2.2 側面1.8	5000	円形　脚付　内面煤付着		2-231
61	2	盤	I5	2-184		(12.7)	(11.8)	7.8	1.8	475	方形　脚付　内面煤付着	17C前半	2-37
61	3	樽	H10		3-撹乱	(9.1)	(12.0)	13.3	2.0	935	方形　脚付		3-62
61	4	容器状	C8	5-88	Ⅱ層	(12.5)	(8.7)	7.9	3.3	749	脚付　仕切り有 内面煤付着	17C前	5-98
61	5	容器状	H2		3類地主	13.3	10.0	6.0	1.3	339	甲形　脚付　仕切り有		3-26
61	6	容器状			3撹乱	(10.9)	(10.0)	(6.6)	2.0	389	甲形　脚付　仕切り有		3-117
62	1	鉢	C7	6-171		口径 (65.0)	底径 (16.5)	12.2	2.5	6154	外面角々子状装飾 内面汚れ有		6-3
62	2	鉢	C9	6-194		-	(56.0)	(10.4)	1.8	1747	外面簾状装飾	～17C前	6-4
62	3	鉢	A2	7-137		-	(41.6)	(11.1)	1.8	1187	外面簾状装飾		7-49
62	4	鉢	H5		2類地主3	口径 (91.0)	底径 (73.0)	10.6	2.4	940	外面簾状装飾		2-27
62	5	鉢	G4		2撹乱	口径 (24.6)	底径 (14.6)	12.7	2.5	690	底部穿孔1		2-157
62	6	鉢			4撹乱	(22.0)	(22.0)	7.4	1.8	236	脚付　州浜形？		4-26
62	7	鉢	H5		2類地主3	(23.8)	(19.5)	(8.3)	1.8	1011	外面簾状装飾　2-45と接合		2-28
62	8	容器状	J5・6	2-63	下層	口径 13.0	底径 10.3	7.2	2.0	958	円形　脚付　内面汚れ有	17C前葉	2-24
62	9	容器状	J5・6	2-63	下層	口径13.8	底径 (14.7)	6.6	3.1	457	円形　脚付　内面煤付着	17C前葉	2-25
62	10	容器状	F10		3類地主	13.5	13.5	6.9	1.6	756	円形　脚付		3-81
62	11	容器状	G9	3-405		13.8	13.7	7.5	2.3	933	円形　口縁・外面煤付着	17C前	3-152
62	12	容器状	A7	2-92		12.0	12.4	7.8	3.0	1209	円形　底面一部欠熟		2-23
63	1	容器状	D9	6-18	下層	18.2	13.4	7.3	3.0	1886	長方形　底部に穿孔1 内外面煤付着		6-41
63	2	容器状	I1	3-7		9.1	10.1	6.3	3.0	594	方形	17C後	3-142
63	3	容器状			3表土	(5.5)	(4.0)	(1.6)	1.6	31	口縁部のみ薄脚状の脚刻		3-301
63	4	容器状	G1		3類地主	13.9	14.8	8.9	4.8	1911	隅丸方形		3-102
63	5	容器状	G1・H1		3類地主	11.7	13.1	8.1	3.9	1020			3-314
63	6	容器状	H2	3-303		12.4	16.6	8.7	3.8	1334	長方形	16C後～17C前	3-144
63	7	容器状	C7		6類地主3	22.3	24.4	10.7	6.3	5977	円形　側面に抉り2 内面煤付着		6-81
63	8	容器状	H7	4-6		16.4	25.5	10.7	3.2	3055	長方形	19C	4-27
63	9	容器状	D8	6-19		33.6	33.8	10.7	6.3	14445	笈谷製桶状	18C後～	S166-104

第25表　暖房・調理具観察表

図版番号	挿図番号	種別	出土地点 地区	出土地点 遺構番号	出土地点 層位	計測値(cm) 縦	計測値(cm) 横	計測値(cm) 高	計測値(cm) 厚	(g) 重	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
64	1	行火(鹿)	J5・J6		2類地主1	16.4	(20.1)	4.4	2.7	1185	D型　内外面煤付着		2-64
64	2	行火(鹿)	A6	2-63		16.6	20.3	3.9	3.5	1254	D型　内面煤付着	17C前葉	2-67
64	3	行火(鹿)	B7		2類地主2	(17.1)	(10.9)	4.3	3.5	714	D型		2-149
64	4	行火(鹿)	F10	3-168		(15.5)	(18.9)	4.1	2.7	892	D型　内外面煤付着	中世	3-163
64	5	行火(鹿)	C8・9・D8	6-99		15.1	(20.2)	3.6	3.0	1022	D型　内面煤付着	16C後半	6-50
64	6	行火(鹿)	H10		3類地主	17.1	(16.6)	4.8	3.5	1013	D型　内外面煤付着		3-196
65	1	行火(鹿)	I1	3-2	層方	20.1	(20.9)	6.6	2.6	1569	O型　内面・外面両接煤付着	～19C	3-317
65	2	行火(鹿)	C7	6-102	井戸枠	17.8	(22.0)	4.1	2.6	1291	O型	17C前半	6-1
65	3	行火(鹿)	G1	3-302・347		16.3	(15.4)	3.9	2.3	657	O型　内面煤付着	～17C後(302)	3-285
65	4	行火(鹿)	H7	4-24		(19.9)	(22.3)	(5.1)	3.1	(1086)	O型　焼出し		4-29
65	5	行火(鹿)	I8		5撹乱	(14.9)	(10.7)	4.8	3.1	502	O型　焼出し		5-24
65	6	行火(鹿)	D4・5		7撹乱	焦行 (11.7)	(5.6)	(10.8)	2.4	444	D型　内面煤付着		7-3
65	7	行火(鹿)	H5		2類地主2	(3.1)	(9.7)	(5.2)	2.7	132	D型		2-61
65	8	行火(鹿)			2類地主1～3	(8.1)	(19.6)	(9.6)	2.9	952	D型		2-54
66	1	粉挽臼	J1・2	7-142		(15.6)	(32.4)	10.8	10.3	7007	上臼　物入	17C前半	3-198
66	2	粉挽臼	A5	2-3	層方	28.8	28.9	8.3	-	7976	下臼　軸孔有　軸径(2.1)　8分面　左回り	18C後～	2-21
66	3	粉挽臼			2表土	(20.8)	30.0	11.4	-	9429	下臼　軸孔有　軸径(2.8)　8分面　左回り 花崗閃緑岩		2-19
66	4	粉挽臼	F6	転来台西	基礎層方	(14.5)	(21.3)	(9.0)	-	3891	下臼		4-72
66	5	茶臼	G9	3-405		10.4	10.1	(5.0)	-	624	上臼	17C前	7-51

第26表　日用品・その他観察表

図版番号	挿図番号	種別	出土地点 地区	出土地点 遺構番号	出土地点 層位	計測値(cm) 長・縦	計測値(cm) 幅・横	計測値(cm) 高	計測値(cm) 厚	(g) 重	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
67	1	香炉(鹿)	A3		7表土	(7.0)	5.2	1.1	1.3	59.26	楕円形　花文線刻　穿孔1		7-16
67	2	香炉(鹿)	B2	7-50		7.3	7.7	1.8	1.4	81.1	円形　植物文線刻　穿孔1	16C後半	7-17
67	3	香炉(鹿)	G9		3類地主	5.3	6.8	1.6	0.9	46.81	楕円形　梅花線刻　透かし孔(脚部)		3-218
67	4	香炉(鹿)	H5		2類地主3	4.6	4.2	-	1.3	33.03	鋲切角形		2-49
67	5	香炉(身)	J6		2類地層2	7.4	6.0	(1.6)	1.5	83.25	楕円形		2-64
67	6	火消壺(蓋)	F10	3-9		(13.5)	13.8	4.1	2.4	549	摘み付　煤付着	18C後～	3-5
67	7	火打石	I10	3-421		(2.1)	(2.9)	-	1.3	7.81	石英片	16C末～17C前	3-30
67	8	サル	E4	4-177		9.3	5.5	-	(3.4)	174.98	鐘鋳重り　被熱　煤付着	17C	4-38
67	9	煙炉	A6・7		2撹乱	(12.6)	(8.3)	-	3.5	428	笈谷石　内面煤付着		2-155
67	10	鳥炉	A7		2類地層2	(18.0)	(33.4)	(17.3)	3.5	3363	円形脚付　復元径(36.6)		2-22
71	1	重石	G・F10		3類地主	9.6	8.1	4.8	4.7	518	角形　穿孔1		3-59
71	2	重石	G10		3-98	11.5	8.9	5.8	5.8	892	角形　穿孔1	17C初～中	3-161
71	3	重石	G1		3類地主	(13.4)	14.7	6.5	6.1	1515	角形　穿孔1		3-55
71	4	重石	G10	3-60		12.9	13.6	7.0	6.8	1504	楕円形　中央に穿孔1	17C	3-11
71	5	重石	D8	6-252		13.2	12.7	4.5	4.0	906	円形　中央に穿孔1		6-83
71	6	重石	H1	3-121		13.6	14.6	5.1	4.7	999	円形　中央に穿孔1		3-140
71	7	重石	A6・7		2撹乱	(9.3)	15.8	4.9	-	666	円形　中央に穿孔1		2-156
71	8	重石	J6		2類地層2	(13.3)	18.2	6.2	-	1305	笹形　中央に穿孔1		2-13
71	9	重石	J5・6	2-63	下層	(12.1)	20.9	9.4	-	2400	笠～瓢箪形　中央に穿孔1	17C前葉	2-14
72	1	人形	B9	5-4	Ⅱ層	3.7	2.6	6.6	-	62.75	笛を吹く像	17C頃～近代	5-282
72	2	人形	J1	7-37		4.6	3.2	5.6	-	54.65	鼓を打つ猿	17C	7-18
72	3	不明	G1		3類地主	3.4	3.6	2.2	1.1	26.42	僧侶　側面に穿孔1		3-103
72	4	不明	H1		3類地主	4.8	4.7	5.1	-	129.64	球状		3-91
72	5	不明	B6・7		6類地主3	4.8	4.9	3.8	-	105.00	球状		6-60
72	6	不明	G9・10		3類地主	4.2	3.5	0.8	0.8	18.12	円盤状		3-92
72	7	不明	J8	5-4	Ⅱ層	3.9	3.8	1.2	1.2	26.39	円盤状		5-280
72	8	不明	A8		5-撹乱	4.6	4.2	1.6	1.6	37.34	円盤状		5-281
72	9	解丸	A6		2類地主3	直径2.4	-	2.4	-	13.63			2-75
72	10	解石	D7		6表土	4.7	6.1	3.7	3.7	36.95			6-19
72	11	面石	-		2表土	(18.4)	(14.7)	7.3	-	1580	半円形　摘み・膠有		2-15
72	12	面石	F10		3表土	(35.2)	(18.8)	6.0	3.8	3875	円形　側面に抉り有		3-133

第27表　碾・砥石観察表

図版番号	挿図番号	種別	出土地点 地区	出土地点 遺構番号	出土地点 層位	計測値(cm) 長・縦	計測値(cm) 幅・横	計測値(cm) 高・厚	(g) 重	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
68	1	碾	G4	2-44	撹乱	13.6	7.7	2.4	478.98	鐘刻「売瑞石」	～近代	2-86
68	2	碾	G4	2-44	撹乱	18.0	5.9	2.4	629.10	鐘刻「春や／(緑)野／三一」	～近代	2-87
68	3	碾	G3・G4	2-44	撹乱	18.3	9.2	3.4	900.00		～近代	2-85
68	4	碾	H6	4-3		(9.4)	7.6	2.2	242.94	鐘刻「■木金次郎」	19C	4-78
68	5	砥	I5		2類地主2	(7.5)	6.1	1.3	77.92	下端切断痕有		2-91
68	6	砥	G2・G4	2-44	撹乱	7.4	4.6	1.2	78.57	赤色顔料付着　鐘刻「64」	～近代	2-92
68	7	砥	G1		3類地主	6.9	4.0	1.1	36.70	穿孔有		3-224
68	8	砥	A2		7類地主1	(5.3)	3.5	0.8	21.31	上端に半円状の加工		7-20
68	9	砥	B6		6類地主2	8.6	3.4	0.8	42.83	付着物有		6-61
68	10	砥	A7	2-110		7.6	3.4	0.7	26.46			2-93
68	11	砥	G10	3-544		5.9	3.0	0.6	11.40		16C後	3-256
68	12	砥	I5	2-184		9.8	4.8	2.5	189.79	笈谷石製ミニチュア	17C前半	2-94
69	1	砥石	A7・B7		2類地主2	(5.8)	2.7	0.9	20.38			2-103
69	2	砥石	J5		2類地主2	(6.0)	4.1	0.9	40.75			2-110
69	3	砥石	H10		3撹乱	(6.0)	4.1	0.6	29.62			3-231
69	4	砥石	C7		6類地主2	5.4	4.5	0.9	3.41			6-105
69	5	砥石	H10	3-549		(5.8)	3.0	0.5	15.97			3-259
69	6	砥石	D8	6-19		6.1	4.3	1.2	55.39		18C後	6-40
69	7	砥石	G1		3撹乱	6.2	3.9	1.2	45.60			3-273
69	8	砥石	D8	6-19		(9.7)	4.8	1.9	137.21		18C後	6-16
69	9	砥石	B6		2類地主4	9.0	4.4	1.4	91.61			2-107
69	10	砥石	C7		6類地主2	(5.2)	4.8	1.3	50.46			6-106
69	11	砥石	B9	5-4	Ⅱ層	14.2	5.5	0.9	120.80		17C頃～近代	5-298・300
69	12	砥石	D8		6類地主2	(12.8)	5.6	1.7	128.87	筋砥石		6-14
69	13	砥石	A6・A7		2類地主3	14.2	3.0	1.9	155.85			2-102
69	14	砥石	G10	3-290		14.6	2.9	1.5	126.98		16C末	3-252
69	15	砥石	G9		3撹乱	10.3	3.1	1.5	89.61			3-293
69	16	砥石	F10		3類地主	(10.1)	2.5	1.4	72.29			3-226
70	1	砥石	G10		3類地主	4.3	3.0	1.9	26.14			3-130
70	2	砥石	B6		6類地主2	(6.0)	3.1	1.9	50.00			6-54
70	3	砥石	G10		3類地主	13.2	3.5	2.5	159.30			3-322
70	4	砥石	B9	5-4	Ⅰ層	13.4	8.3	3.1	433.00		17C頃～近代	5-151
70	5	砥石	H10	3-455		(11.5)	6.0	2.3	244.16			3-255
70	6	砥石	H10	3-451		8.4	5.8	3.7	273.05		17C前半	3-201
70	7	砥石	B8・B9	5-72	Ⅱ層	(11.1)	5.7	2.7	221.82	汚れ付着		5-296
70	8	砥石	I6	4-113		20.5	5.6	5.3	1046		～18C後半	4-25
70	9	砥石	J1・J2	7-154		(8.4)	(3.4)	2.9	91.61		16C後葉～17C前	7-29
70	10	砥石	J3	7-28		(5.8)	(3.3)	2.4	50.50		18C後～	7-40

第28表　碁石観察表

図版番号	挿図番号	種別	出土地点			計測値(cm)			(g)	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			地区	遺構番号	層位	長・縦	幅・横	高・厚	重			
	1	碁石	A-87		3整地土2	2.64	2.02	0.52	3.92	不明　黒		2-76
	2	碁石	J5		2撹乱	1.79	1.88	－	0.62	3.21	泥岩　黒		2-77
	3	碁石	A-87		3整地土1	2.00	2.10	－	0.38	3.03	不明　黒		2-78
	4	碁石	－		2表土	2.19	2.19	－	0.37	3.40	泥岩　黒		2-79
	5	碁石	A6	2-41	盛土	1.90	2.26	－	0.69	3.77	不明　黒	18C後～	2-80
	6	碁石	A7		3整地土2	2.04	1.96	－	0.37	2.70	片麻岩　黒		2-81
	7	碁石	I1		3整地土	2.23	1.88	－	0.65	3.93	黒		3-227
	8	碁石	I1	3-555		2.06	1.99	－	0.43	2.96	黒	17C～19C	3-302
	9	碁石	I1		3整地土	2.11	2.43	－	0.55	4.26	黒		3-310
	10	碁石	J6	5-50		1.88	2.03	－	0.65	3.60	黒		5-286
	11	碁石	J8	5-4	Ⅰ層	2.20	2.16	－	0.54	3.60	黒		5-289
	12	碁石	J8		5撹乱	2.20	2.32	－	0.46	3.65	黒		5-290
	13	碁石	B-C7	6-TB1		1.79	1.88	－	0.66	3.47	黒		6-79
	14	碁石	J3		7整地土1	1.84	2.00	－	0.39	2.40	黒		7-26
	15	碁石	J1		7撹乱	2.19	2.22	－	0.61	4.09	黒		7-27
	16	碁石	A2	7-128		1.65	1.85	－	0.56	2.66	黒	17C	7-60
	17	碁石	J5-6	2-63	下層	1.89	1.90	－	0.77	3.31	不明　黒？	17C前葉	2-82
	18	碁石	J5-6		2整地土1	1.80	1.70	－	0.52	2.04	安山岩　白？		2-84
	19	碁石	A6		2整地土3	2.56	2.88	－	0.62	7.01	不明　白？		2-83
	20	碁石	H1		3整地土	2.08	1.82	－	0.70	3.27	白		3-240
	21	碁石	B9	5-4	Ⅱ層	2.15	2.26	－	0.70	3.99	白	17C頃～近代	5-285
	22	碁石	B-C7	6-1		1.81	1.99	－	0.80	3.61	白		6-62
	23	碁石	D9		6撹乱	1.63	1.97	－	0.52	2.46	白		6-76
	24	碁石	C8	6-140	道路3	1.90	2.15	－	0.68	3.93	白	～17C初	6-77
	25	碁石	B-C8	6-TB2		1.99	2.13	－	0.60	3.09	白		6-80
	26	碁石	C8	6-283		1.95	2.48	－	0.68	4.64	白	16C後葉	6-90
	27	碁石	C8	6-283		1.67	1.84	－	0.77	3.01	白	16C後葉	6-91
	28	碁石	C4		7撹乱	1.92	1.98	－	0.68	3.51	白		7-29
	29	碁石	J2	7-164		1.89	2.12	－	0.63	3.62	白	17C	7-59

第29表　石瓦・建材等観察表

図版番号	挿図番号	種別	出土地点			計測値(cm)			(g)	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
			地区	遺構番号	層位	長・縦	幅・横	高・厚	重			
73	1	軒丸瓦	F9		3撹乱	(20.0)	12.6	12.4	3372			3-111
73	2	丸瓦	I10		3撹乱	(24.4)	14.4	11.9	3618			3-40
73	3	丸瓦	D8-9	6-18	上層	(31.3)	15.3	11.6	4378		17C後	6-95
73	4	丸瓦	D8-9	6-18	上層	(34.6)	14.3	(10.5)	4964	改変（鳥盆）	17C後	6-96
73	5	丸瓦	G10	3-439		46.3	15.0	10.6	6072		16C末～17C中	3-153
73	6	丸瓦	H10	3-522		(25.6)	11.7	(8.2)	2496		17C中	3-3
73	7	丸瓦	F6	転車台西	基礎掘方	40.2	15.3	12.9	7500			4-71
74	1	平瓦	G10	3-148		(25.7)	29.1	7.4	4510			3-175
74	2	平瓦	F9		3撹乱	(33.2)	29.9	7.6	4321			3-38
74	3	平瓦	G10	3-148		(41.1)	30.8	7.2	6750			3-174
74	4	平瓦	H5	2-石19		(23.6)	(24.2)	5.4	3914			2-6
74	5	平瓦	G10	3-148		(19.5)	(19.2)	5.3	2102			3-179
74	6	軒平瓦	H1		3整地土	(25.6)	(14.7)	5.7	1861			3-90
74	7	軒平瓦	F6	転車台西	基礎掘方	(36.4)	29.7	11.2	8850			4-70
75	1	棟瓦	G10	3-98		(64.5)	19.0	16.2	25300	角型無穫式　大型品	17C初～中	3-188
75	2	棟瓦	D8		6整地土4	(42.8)	10.8	8.2	5050	角型無穫式　オス側		6-94
75	3	棟瓦	J6		2整地土2	(17.8)	12.8	8.5	2068	角型無穫式		2-4
75	4	棟瓦	G10	3-TB4		42.6	21.5	17.1	19300	角型無穫式　大型品		3-312
75	5	棟瓦	J5-6	2-63		(17.2)	11.6	8.4	1722	角型無穫式	17C前葉	2-5
75	6	棟瓦	C8	5-4	Ⅰ層	(13.0)	18.5	16.2	3233	角型無穫式　メス側		5-170
75	7	棟瓦	B7	2-石列15		(28.3)	14.9	13.0	6638	角型有穫式		2-2
76	1	平瓦	B9	5-4	Ⅱ層	(89.5)	36.1	10.7	30600	大型品	17C頃～近代	5-96
76	2	棟石	C7	6-102	井戸枠	86.2	23.7	15.5	36630	大型品	17C前半	6-102
76	3	鴟	B7	2-石列15		76.1	25.6	17.3	25230			2-1
76	4	鴟				(58.2)	18.6	12.0	14400			3-340
76	5	鴟	B4	7-58	掘方	30.8	23.6	13.4	8850	掘方断割り	近代	7-50
77	1	礎石	F10		3撹乱	28.9	17.9	10.6	5416	枘穴		3-65
77	2	礎石	G4		3整地土	23.1	29.5	9.3	9800	枘穴		3-99
77	3	石格子(基礎)	A6		2整地土3	(18.0)	29.8	8.7	4033	反花座		2-16
77	4	石造物(宝珠)			2表土	16.4	16.5	(24.9)	7786	行灯		2-17
77	5	石格子(不明)			2表土	(14.2)	(20.7)	18.0	6608	銘刻「石■」（横書き）有		2-18

第30表　煉瓦観察表

図版番号	挿図番号	種別	出土地点			計測値(cm)			(g)	色調	備考	遺物番号
			地区	遺構番号	層位	長・縦	幅・横	高・厚	重			
78	1	煉瓦	F9		163-撹乱	(18.8)	(15.2)	(10.5)	4063	外面:にぶい赤褐 側面:灰白	「三石耐火煉瓦株〔　〕 岡山県備前市に株式会社 現在も操業中	3-321
78	2	煉瓦	F6	転車台		10.6	22.1	5.4	2643	にぶい赤褐	「イ」絞り出し痕あり	4-121
78	3	煉瓦	F6	転車台		11.2	22.5	5.5	2725	にぶい赤褐	「へ」	4-112
78	4	煉瓦	F6	転車台		11.1	22.8	5.4	2662	にぶい赤褐	「わ」	4-116
78	5	煉瓦	F6	転車台		10.8	22.5	5.7	2522	にぶい赤褐	「そ」ナデ	4-114

図版番号	挿図番号	種別	出土地点			計測値(cm)			(g)	色調	備考	遺物番号
			地区	遺構番号	層位	長・縦	幅・横	高・厚	重			
78	6	煉瓦	F6	転車台		10.8	22.2	5.4	2319	赤褐	「よ」絞り出し痕あり	4-122
78	7	煉瓦	F6	転車台		11.1	22.3	5.5	2728	明赤褐	「ち」絞り出し痕あり	4-125
78	8	煉瓦	F6	転車台		11.3	23.5	5.9	2610	にぶい赤褐	「う」ナデ	4-126
78	9	煉瓦	F6	転車台		11.5	23.2	5.8	2589	にぶい赤褐	「ゆ」	4-115
78	10	煉瓦	F6	転車台		10.8	22.2	5.6	2419	にぶい赤褐	「れ」	4-123
78	11	煉瓦	F6	転車台		11.0	22.9	5.6	2774	にぶい赤褐	「ら」	4-118
78	12	煉瓦	F6	転車台		10.8	22.2	5.5	2462	にぶい赤褐	「た」	4-117
78	13	煉瓦	F6	転車台		11.0	(21.9)	5.5	3262	にぶい赤褐	「と」降灰あり	4-124
78	14	煉瓦	F6	転車台		11.2	22.8	5.7	2485	明赤褐	「に」	4-119
78	15	煉瓦	F6	転車台		11.2	22.2	5.7	2364	にぶい赤褐	「よ」	4-113
78	16	煉瓦	F6	転車台		11.0	22.4	5.7	2439	にぶい赤褐	「は」	4-120
78	17	煉瓦	F6	転車台		11.3	22.8	5.5	2988	明赤褐	「わ」	4-127

第５章　金属製品

今回の調査で出土した金属製品は状態が良好なもの305点を図化した。以下、武器・武具、農工具、調度品（日用品・その他）、煙管、銭貨の５項目に分ける。鋳造関連遺物も節を分けてここで扱う。

第１節 金属製品

１　武器・武具（第79図　第31表）

刀装具、鍔、鐺、切羽、縁、笄、小柄小刀、弾丸、火縄鋏、猿手、鏃がある。

刀（第79図１・２）１の刀は先端を僅かに欠くが、全長34.3cm、刃部長25cm、柄部長9.35cmを測る。２の短刀は柄部に緻密な魚々子状装飾を施す銅板を巻く。柄部に目釘の痕を１箇所認める。

刀装具（第79図３～26）３の鍔は丸形で、茎穴の左側に茎より小さい楕円形の穴を開け、右側の縁沿いに先端が双丘形の透かしを施す。４・５の鐺は一重鐺で、形状や法量、厚さがそれぞれ異なる。４は縦3.6cm、横1.3cmと５より大きく、表面に複数条の線刻を認める。６は厚さが１mmと薄く楕円形を呈する鐺である。５・６は溶接痕を認める。７～10の切羽のうち、９は縁に線刻があり、10は周囲に「こきざみ」を施す。11・12は厚みは薄いが、残りは比較的良好で、12には溶接痕がある。13の笄には直線の中央に植物文があり、隙間を魚々子で埋める装飾を施す。小柄小刀は、21を除く14～20が刀身を失い小柄、22～26は小柄を失い刀身のみとなる。小柄には文様や刻線を施すものがあり、15は五三桐文と藤の意匠、18は植物文、16・20・21は刻線と思われる痕跡がある。刀身には銘のあるものが半数ある。21は「（氏）重」、26は「□内□茂植」、24には判読不能の銘が線刻される。37は柄頭の兜金に付ける猿手である。兜金と猿手の間の穴に刀の落下を防ぐ「腕貫緒」と呼ぶ緒を通すためのものである。

火縄鋏（第79図38）両先端を欠くが火種となる火縄を挟む部分で、左部分に穴の一部がある。

鏃（第79図39）丸味のある先端に向けて、幅のある基部から徐々に広がる鳥舌形の鏃である。

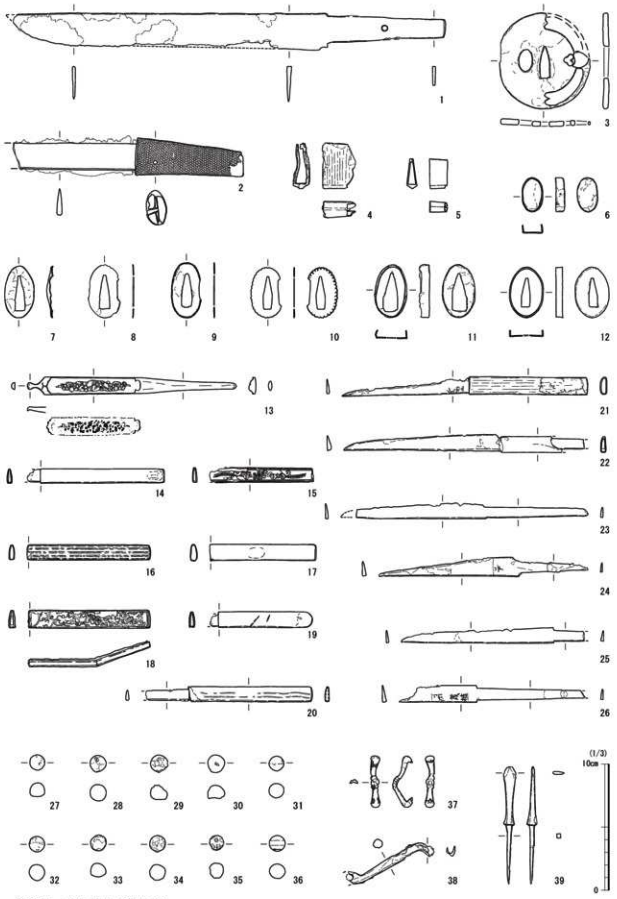
弾丸（第79図27～36）球形で素材は鉛である。弾丸の径は27の1.1cm～29の1.4cm、重さは8.2～11.6ｇに収まる。多くが口径４匁の中筒の弾丸になるものと思われる。

２　農工具（第80・81図　第32表）

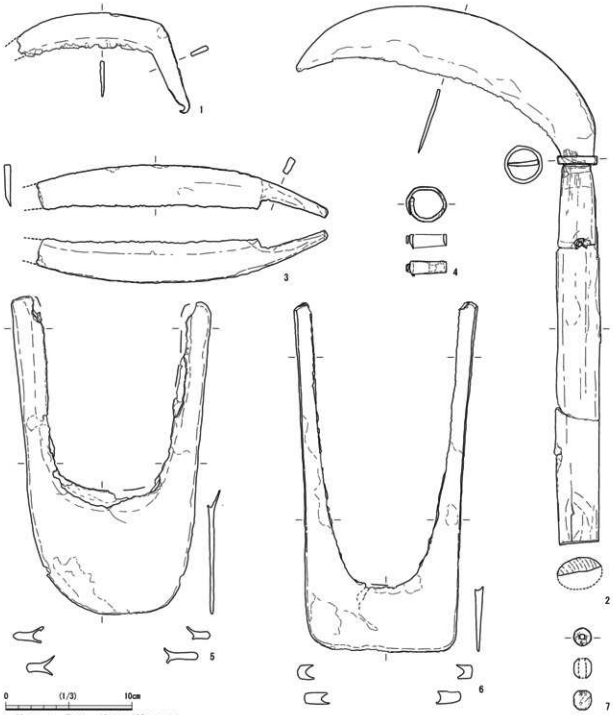
農具の鎌、鉈、鍬先金具、錘、工具の釘、鋲、鏟、金槌、錐がある。

農具（第80図）１・２は鎌で、茎の先端を鍵状に曲げ目釘孔とする。２は鉄製の刃部と木製の柄部がそれぞれ残り、それを固定する金輪もある。刃部長33.3cm、柄部長30cm、全長約60cmを測る。３の鉈は先端を欠くが、刃部中央と茎部の厚さが0.5cm程を測る。５・６は鍬先の金具で、５は刃先端が丸味を帯びるが６は平らで、刃先の長さも５が広い。７は錘で、重さ16.1ｇ、約４匁半である。

工具（第81図）１～49は釘である。１～26は巻頭釘、27～40は頭巻釘、44・45は環状釘、41は平頭釘、42は合鍵と思われる。頭幅と身幅の比率が2.5：１以上のものを巻頭釘、頭幅の比率差が小さいものを頭巻釘とするが、ともに上端を団扇状に薄く平らに成形し、それを巻くようにして頭とする。44・45の環状釘は素材の鉄を折り曲げて合わせて身とし、折り曲げた部分を頭とし環状にする。42は両先端が釘の合鍵で、胴部が曲がる。17・39・45は木質が残り、43は４本の釘が複雑に交差する。46～48は鋲で、48は頭に花文を線刻した銹鋲である。49は折釘である。鏟は23.7cmの大型品、12cm～18.2cmの中型品、4.4cmの小型品がある。いずれも断面が四角い角鏟である。55は先切金槌で、片側は平らな隅丸方



第79図　武器武具（縮尺1/3）



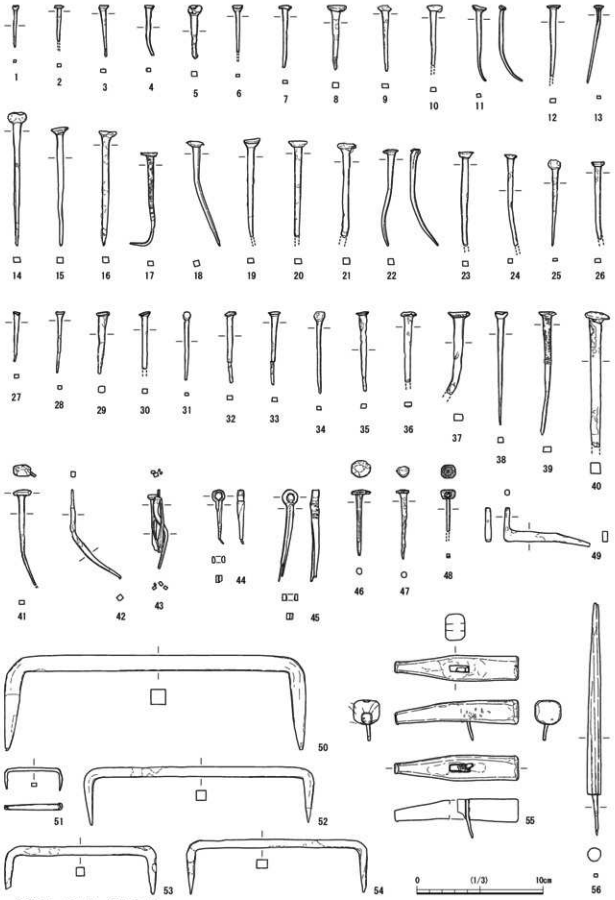
第80図　農具・漁具（縮尺1/3）

形である。柄を欠くが、長方形の鎹の穴に木質と柄を繋げた鉄釘が残る。56は錐で、長さ約3.2cmの針が15.2cmを測り、先端に向けて細まる断面円形の木製の柄に付く。

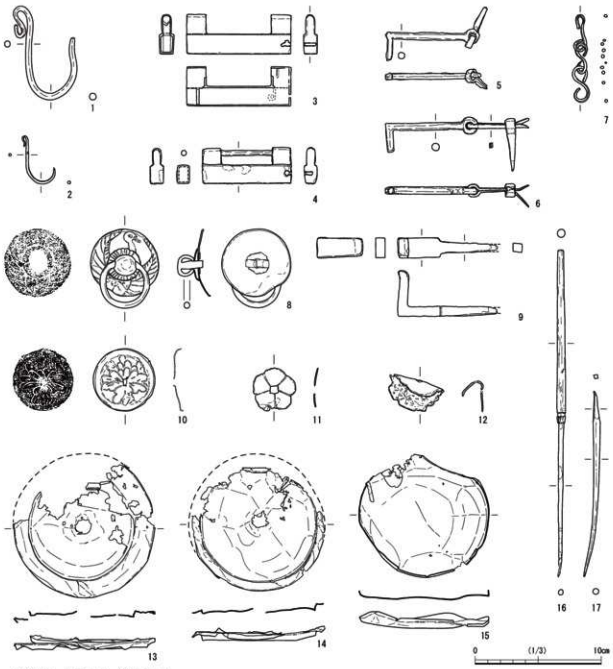
３　調度品（日用品・その他）（第82・83図　第33表）

釣鈎、錠前、煽留め金具、鎖、額受金具、引手金具、座金、燭台、千枚通し、鏡、紅皿、容器、簪、簪の飾玉、笄、毛抜き、水滴、皿、鈴、薬匙、和鋏、火箸、包丁、鉄鍋、鍋釣、薬缶、鉄瓶等がある。

第82図１・２は鈎が１本の吊鈎で、上端を鈎と反対側に環状に曲げる。３・４は錠前で、４は施錠した状態のものである。８は鐶引手金具で、環状の付く座金の表面に羽を広げた鳥の意匠を認める。９は

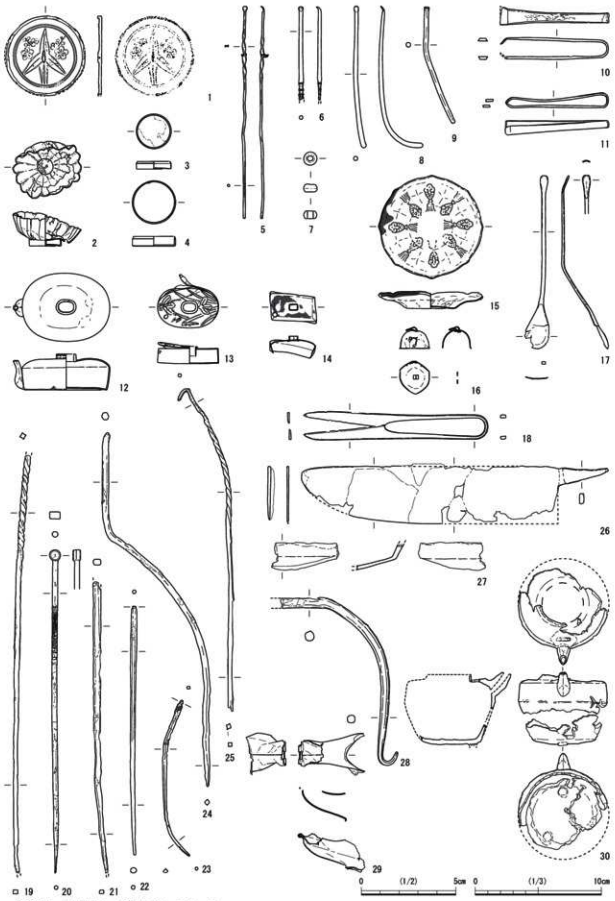


第81図　工具類（縮尺1/3）



第82図　日用品１（縮尺1/3）

額縁金具で受部が直角に曲がる。10～12は固定部と部材間に挟む座金である。11は鐶引手金具に伴うもので表面に花文の意匠を認める。11は花弁形で表面に線刻で花弁を５つ表現する。13・14は遺存状況が悪いが、縁を直角に折り曲げる燭台の皿で、中央に穴がある。16・17は千枚通しで、鉄製の16は木の柄が残る。第83図１の鏡は径6.3cmを測る。裏面の縁が僅かに盛り上がり、２条の沈線内に沢渇の意匠を認める。２は平面形・側面とも菊花弁様の紅皿だが、錆による劣化のため穴が空いている。３・４は口径2.7cm～3.4cm、器高0.8cmに収まる小型容器で、口縁端部に受部がある。３の身側に赤色顔料が付着しており、紅入として使用したと思われる。５・６は一本足の簪で、反対側が耳かきとなる。ともに捩じるなどして装飾を加えた部分に孔がある。なお５は真鍮製である。８・９は断面円形の笄で、下部が大きく折れ曲がる８の先端は耳かきとなる。10・11は毛抜きで、10は文様の判別はできないが、持手に



第83図　日用品２（縮尺1/3　1/2：7）

絵柄がある。水滴は小判形の12・13と長方形の14がある。12は注口が付き、13は蓋に植物文と考える意匠がある。15は稜花型の皿で、交互に内面に上下逆の同一文様を放射状に認める。17の薬匙はつぼが楕円形で、柄の断面形態はやや広がる柄尻では扁平になる。19～25は火箸である。19・25は上部に捻りを加えた意匠がある。20は円形の頭部を持ち、上部の２条の沈線間に上下で様相の変わる打刻がある。箸先の残る22・23は、頭部の装飾が欠失したと考える。特に花柄の意匠がある23はその可能性が高い。26は出刃系の包丁で、先端が丸味を帯びる。刃部長20.4㎝、幅4.4㎝、茎部長3.9㎝を測る。27は鉄鍋の底部の底である。28は吊部に向けて大きく湾曲する鍋釣金具で、全体の半分程が残存する。30は注口の付く鉄瓶で、欠損しているが底部に脚が３つあったと思われる。

４　煙管・その他（第84・85図　第34表）

煙管の多くが雁首と吸口に分かれて出土している。雁首と吸口がともに出土したのは４例あるが、セット関係が明確な７を除くと、土坑３-70出土の１・２がその可能性が高い。なお羅宇で結合される７は、側面に穿孔を認める火皿に接合の補強帯があり、油返し部分の形状は大きく湾曲する。

雁首（第84図１～17）　単独出土の雁首は14点である。火皿に接合の補強帯がある４・６・８・９などや、肩部が付く１・３～６、補強帯と肩のある４・６に分かれるが大半は両者を欠く。油返し部分の形状は大きく湾曲する３・４・６・８～10・12、直線的に伸びて火皿に繋がる５・11・13があり、残りは火皿付近で屈曲する。６は火皿上半部と肩部に線刻と魚々子状装飾を施す。４は油返し部分に花文があり、14も不明瞭だが植物文と魚々子状装飾がある。９は胴部、16は肩部の断面が八角形である。

吸口（第84図18～31）　単独出土の吸口は14点である。胴部が明瞭な18～21、圏線で胴部を表す22・23のほかは胴部がない。狭義の吸口部分の形状は、先端の膨らむ22・23・25～29以外は先に向かい窄まる。25は肩部に線刻で緻密な文様を施す。19・22の内側には宇羅が残存する。

宇羅（第84図32）　先端に線刻を施す宇羅である。多くが竹等の有機物性のため一部が雁首・吸口内に残存することもあるが、ほとんどの場合失われる。ただ銅製のため遺存していた。

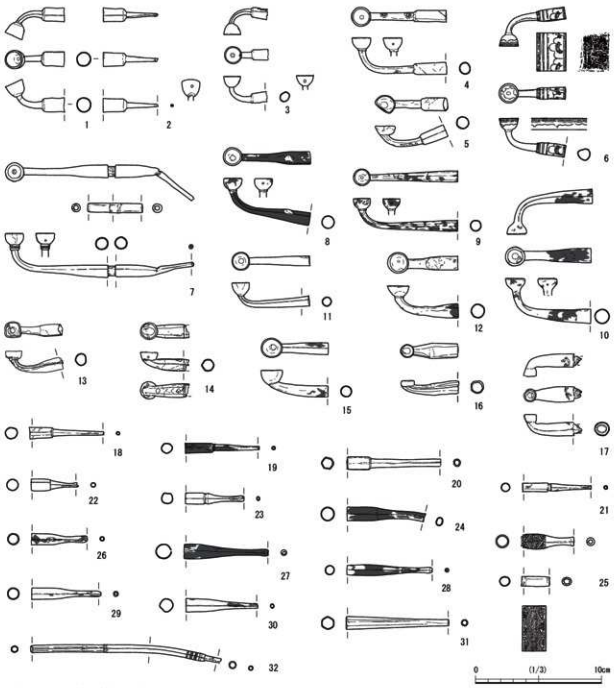
５　銭貨（第86図　第35表）

銭貨は残存状況の良いものを選択して89点提示した。１点を除き銅銭である。銭文の内訳は１～９の寛永通寶、10の乾元重寶、11・12の唐國通寶、13～16の開元通寶、17の淳化元寶、18の太平通寶、19～21の至道元寶、22・23の咸平元寶、24・25の景德元寶、26～28の祥符通寶、30の天聖元寶、31～33の景裕元寶、34～39の皇宋通寶、40の至和元寶、41の嘉祐元寶、42・43の治平元寶、44～46の熙寧元寶、47～50の元豐通寶、51～53の元祐通寶、54～56の紹聖元寶、57～60の元符通寶、61～63の聖宋元寶、64～66の大觀通寶、67～69の政和通寶、70の淳熙元寶、71の嘉定通寶、72の淳祐元寶、73・74の洪武通寶、75の宣德通寶、76～78の永楽通寶があり、79～83の無文銭も認める。無文銭は土坑４-168から纏まって出土している。

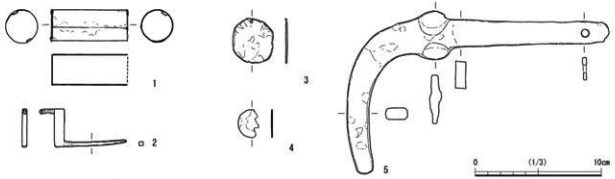
国内鋳造銭は、摸鋳銭の祥符通寶と寛永通宝がある。寛永通宝の内訳は１～４・９が古寛永、５～８が新寛永である。４は「文」の背文があり、９は鉄製のいわゆる鉄一文銭である。

渡来銭は中国銭が占める。唐國通寶、開元通寶は南唐、淳熙元寶・嘉定通寶・淳祐元寶は南宋、洪武通寶・宣德通寶、永楽通寶は明、残りは北宋のものである。13・16の開元通寶は背上に「月」、70の淳熙元寶、71の嘉定通寶、73の洪武通寶はそれぞれ「十二」・「元」、「浙」の背文がある。

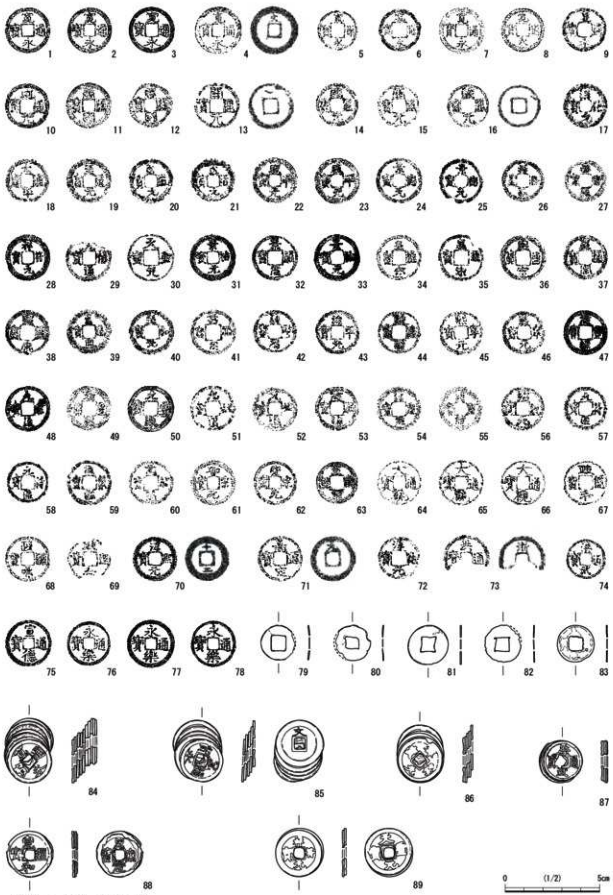
錆固まった銭貨はもともと銭緡の状態だったと思われる。84は古寛永通宝が10枚、85は新寛永通宝が５枚、86は祥符通寶が５枚、87は洪武通寶が４枚錆着している。



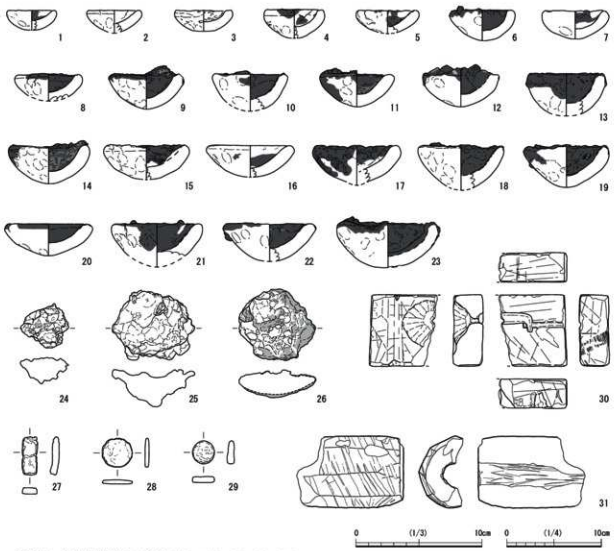
第84図　煙管（縮尺1/3）



第85図　その他（縮尺1/3）



第86図　銭貨（縮尺1/2）



第87図　鋳造関連遺物（縮尺1/3　1/4：24～26・31）

第２節　鋳造関連遺物（第87図・第36表）

鋳造関連遺物は残存状況の良いものを選択して31点提示した。これらは取鍋・坩堝、羽口、鋳型、鋳造素材とみられる金属片、鉄滓もしくは溶け固まった金属である。

取鍋・坩堝（第87図１～23）　全て手捏ねの碗型土製品である。形態は多くが体部が斜めに直線的に伸びて尖底気味なものだが、碗部が湾曲して立ち上がり見込が広く丸底気味なものもある。６・９・12・19・22・23は炭が残存し、11・14は内面に銅の溶け残りがある。口径はばらつきがあるが、概ね４㎝～５㎝、5.2㎝～5.4㎝、６㎝前後、6.4～7.3㎝、8.2㎝に纏まり、いくつかの規格に区分される。

羽口（第９図31）　31は径15.2㎝を測る笏谷石製の輪の羽口である。半分のみの残存だが、円孔径は残存部位で最大2.6㎝を測る。内外面とも被熱痕や煤を認めないため未使用に近い状態と考える。

鋳型（第９図30）　30は石製の箟筒の把手の鋳型で、型の位置を合せる目印となる抉りがある。

鉄滓・鋳造素材（第87図24～29）　24～26は鉄滓は金属精錬時に廃棄される不純物である。27～29は金属を生産する際の素材である。27のように方形のものと28・29のように円形のものがある。これらの金属を生産する鋳造関連遺物は土坑３-544から纏まって大量に出土していることから、この遺構の周辺に工房が存在した可能性が高い。

第31表　武器武具観察表

図版番号	挿図番号	種別	属性	出土地点			層位	計測値								備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
								cm							g			
				地区	遺構番号			全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長 柄部長	茎部幅 柄部幅	茎部厚 柄部厚				
79	1	刀	鉄	B6			2整地上4	(34.30)	(25.00)	2.80	0.35	9.35	1.50	0.20	80.00			2-1
79	2	刀	鉄	I6	4-113			(18.30)	(9.80)	2.10	0.40	8.60	2.90	1.40	70.00	短刀 柄部に銅板目釘穴(径3.0mm)	～18C後半	4-1
								長径	短径	孔縦	孔横	最大厚						
79	3	鐔	銅	H5			2整地上3	7.60	7.10	2.55	0.80	0.45			73.95			2-15
								縦	横	長さ	最大厚							
79	4	縁	銅				2表土	3.60	1.30	2.55	0.35				16.58	縁刻有		2-16
79	5	縁	銅	H6-7	4-11			2.35	0.80	1.40	0.30				5.27		17C	4-4
								縦	横	奥行	最大厚							
79	6	縁	銅	I6	4-121			2.70	1.60	0.70	0.10				4.57	縁金	17C	4-3
								縦	横	孔縦	孔横	最大厚						
79	7	切羽	銅	A7	2-363			4.10	2.25	2.75	0.80	0.05			2.68	金体に歪む		2-5
79	8	切羽	銅	F10	3-170			4.23	2.50	2.65	0.80	0.05			2.36			3-5
79	9	切羽	銅	4-21	7-149			4.40	2.30	2.65	0.80	0.05			2.42	縁に線刻有	17C前半	7-4
79	10	切羽	銅	G1			3層乱	4.00	2.20	2.15	0.75	0.05			3.25	縁に小刻有		3-7
図版第(2)-1		切羽	銅	H10	3-539			(2.05)	2.10	1.80	0.80	0.03			0.64	折れ曲がる 補正後縁3.25cm	16C末	3-6
								縦	横	孔縦	孔横	奥行	最大厚					
79	11	縁	銅	G10			3整地上	4.20	2.50	3.05	1.10	0.70	0.10		7.65			3-8
79	12	縁	銅	H6-7	4-11			4.00	2.70	2.30	0.70	0.50	0.10		8.03		17C	4-5
								全長	肩幅	最大厚								
79	13	笄	銅	C8	6-140		道跡3	16.55	1.40	0.55					37.66	縁金 属物の意匠 魚々子有	～17C初	6-1
								全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	小柄部長 茎部長	小柄部幅 茎部幅	小柄部厚 茎部厚				
79	14	小柄 小刀	刀部鉄 柄部銅	J1	7-150			(10.80)	(1.00)	(1.00)	(0.10)	9.80	1.10	0.40	14.35			7-2
79	15	小柄 小刀	銅	C8-9 D8	6-99			(8.25)	–	–	–	(8.25)	1.12	0.35	7.82	柄部のみ 玉三 桐紋 藤の意匠	16C後半	6-2
79	16	小柄 小刀	銅	F9			3整地上	(9.80)	–	–	–	9.80	1.20	0.40	15.72	柄部のみ 線刻有		3-3
79	17	小柄 小刀	銅	B6			2整地上3	(8.40)	–	–	–	8.40	1.25	0.50	40.05	柄部のみ		2-4
79	18	小柄 小刀	刀部鉄 柄部銅	G10			3整地上	(9.70)	(0.10)	0.70	0.20	9.65	1.40	0.50	18.62	表面剥離 城物柄有		3-1
79	19	小柄 小刀	刀部鉄 柄部銅	J2	7-146			(8.10)	(0.65)	(1.00)	(0.20)	7.45	1.25	0.42	17.61		16C後～17C初	7-3
79	20	小柄 小刀	刀部鉄 柄部銅	J6			2整地上3	(13.20)	(3.40)	0.90	0.22	9.80	1.20	0.32	15.65	表面剥離 線刻		2-3
79	21	小柄 小刀	刀部鉄 柄部銅	I5	2-184			19.45	10.10	1.15	0.20	9.35	1.30	0.55	29.28	線刻あり 銘有 (「氏」か)	17C前半	2-2
79	22	小柄 小刀	刀部鉄 柄部銅	B7			6整地上3	(19.10)	12.45	1.15	0.30	(4.90) (6.80)	1.25 0.80	0.40 0.20	27.36			6-3
79	23	小柄 小刀	銅	G10			3整地上	18.40	(10.30)	1.20	0.20	8.10	0.80	0.20	14.14	刀身のみ		3-2
79	24	小刀	鉄	D9	6-19			(16.55)	11.25	1.15	0.30	(5.30)	0.75	0.15	14.87	刀身のみ 銘有 (判読不能)	18C後～	6-26
79	25	小柄 小刀	銅	A2	7-27			14.50	12.05	0.95	0.20	2.45	0.95	0.23	11.01	刀身のみ	～18C中	7-1
79	26	小柄 小刀	銅	H7-8			4層乱1	(14.80)	(6.20)	1.35	0.30	(8.60)	0.80	0.20	13.96	刀身のみ 銘「口 内口茂秘」		4-2
								直径	高さ									
79	27	俵丸	鉛	I2	7-8			1.10	1.10						9.95			7-5
79	28	俵丸	鉛	A7	2-39			1.30	1.30						11.59		18C前半	2-6
79	29	俵丸	鉛	4-B7			2整地上	1.40	(1.15)						9.92			2-7
79	30	俵丸	鉛	H4			2整地上2	1.30	1.10						9.98			2-8
79	31	俵丸	鉛	H5			2整地層2	1.20	1.15						8.36			2-9
79	32	俵丸	鉛	I4			2整地層3	1.20	1.25						11.03			2-11
79	33	俵丸	鉛	A7	2-39			1.20	1.10						8.88		18C前半	2-12
79	34	俵丸	鉛	B7			2整地上1	1.20	1.30						10.16			2-13
79	35	俵丸	鉛	J5-6			2整地上	(1.10)	(1.20)						8.19			2-14
79	36	俵丸	鉛	J6			2整地上2	1.20	(1.10)						12.18			2-10
								縦	最大幅	厚さ								
79	37	猿手	銅	G10			3整地上	4.05	0.65	0.30					5.49	縁金		3-4
								全長	最大幅	最大厚								
79	38	火縄挟	鉄	B6-7			6整地上4	(7.05)	0.70	0.65					9.03			6-4
								全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚				
79	39	鏃	鉄	E-C7	6-126			9.30	4.60	1.00	0.25	4.70	0.30	0.35	8.85	鳥舌形	～18C中	6-6

第32表　生産具等観察表

図版番号	挿図番号	種別	属性	出土地点			層位	計測値						備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
								cm					g			
				地区	遺構番号			刃部全長	最大幅	最大厚	柄部 全長	柄部 最大幅	柄部 最大厚			
80	1	鎌	鉄	D9	6-21			(13.55)	2.90	0.30				38.46	刃部のみ	～17C後	6-7
80	2	鎌	刀部鉄 柄部本	A2	7-30			33.30	5.25	0.25	30.90	3.50	(2.20)	216.10	柄部を含む全長 (60.0)cm	17C前半	7-6

図版番号	挿図番号	種別	属性	出土地点			計測値							備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
							cm						g			
				地区	遺構番号		層位	全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅				
80	3	鉈	鉄				2表土	(23.1)	(17.4)	3.20	0.50	5.50	1.30	130.50	茎部厚0.55cm		2-18
								径	最大幅	最大厚							
80	4	金棚	鉄	G10	3-298			3.15	1.10	0.30				8.53		17C前葉	3-9
								縦	横	厚さ	最大幅	最大厚					
80	5	鍵先 金具	鉄	B6-7			6整地上3	25.30	13.07	0.40	15.40	1.10		429.00			6-8
80	6	鍵先 金具	鉄	H5			2層乱	27.75	12.13	0.55	14.60	1.00		517.5			2-17
								全長	最大幅								
80	7	鉾	鉛	G1-10			3層乱	1.55	1.35					16.09	約4匁半		3-29
								全長	幅	厚さ	頭幅	頭高					
81	1	釘	鉄	A7			2整地上2	3.33	0.20	0.22	0.52	0.35		0.68	巻頭釘		2-31
81	2	釘	鉄	B8			6整地上3	(2.90)	0.30	0.25	0.80	0.25		1.04	巻頭釘 先欠		6-25
81	3	釘	鉄	G10			3整地上	4.05	0.40	0.25	(0.80)	0.25		1.80	巻頭釘		3-23
81	4	釘	鉄	F10	3-132			(4.00)	0.30	0.30	0.78	0.35		1.48	巻頭釘	～18C後	3-21
81	5	釘	鉄	G10	3-313			4.18	0.45	0.40	(1.12)	0.80		2.42	巻頭釘 頭欠		3-16
81	6	釘	鉄	B7	6-126			(3.7)	0.25	0.20	0.80	0.30		1.19	巻頭釘 先欠	～18C中	6-19
81	7	釘	鉄	D8-9	6-19		下層	4.95	0.40	0.25	(1.00)	0.30		2.42	巻頭釘 先欠	18C後～	6-23
81	8	釘	鉄	I6	2-201			(5.00)	0.50	0.40	1.50	0.50		3.27	巻頭釘 先欠	17C前半	2-30
81	9	釘	鉄	G10			3整地上	(5.25)	0.50	0.30	(1.10)	–		3.70	巻頭釘 頭欠		3-24
81	10	釘	鉄	I5	2-184			(4.75)	0.40	0.30	(1.25)	0.40		2.61	巻頭釘 先欠	17C前半	2-32
81	11	釘	鉄	B8	6-140		道跡3	(6.00)	0.35	0.25	(1.10)	0.30		3.49	巻頭釘		6-18
81	12	釘	鉄	I6	4-34			(5.60)	0.40	0.30	1.10	0.15		3.68	巻頭釘 先欠	18C後～	4-8
81	13	釘	鉄	B7			6整地上4	6.20	0.30	0.20	0.80	(0.25)		1.85	巻頭釘		6-21
81	14	釘	鉄	G10	3-304			10.60	0.50	0.40	1.45	0.80		7.26	巻頭釘		3-19
81	15	釘	鉄	G9-10			3整地上	9.40	0.45	0.45	1.32	0.59		9.60	巻頭釘		3-25
81	16	釘	鉄	A3			7表土	9.10	0.50	0.50	1.40	(0.30)		8.61	巻頭釘		7-9
81	17	釘	鉄	D8-9	6-18		下層	(7.40)	0.45	0.35	1.30	0.30		6.29	巻頭釘 本質残存	～17C後	6-17
81	18	釘	鉄	B7			6整地上4	8.30	0.40	0.40	1.40	0.45		6.62	巻頭釘		6-24
81	19	釘	鉄	H10	3-512			(7.80)	0.50	0.35	1.25	0.35		6.43	巻頭釘 先欠	16C後～17C前	3-20
81	20	釘	鉄	G1	3-166			(7.60)	0.55	0.40	(1.50)	0.50		9.85	巻頭釘 先欠	18C	3-18
81	21	釘	鉄	G-F10	3-84			(7.50)	0.45	0.50	1.50	0.40		10.18	巻頭釘 先欠	17C前～中	3-17
81	22	釘	鉄	B7			6整地上4	(7.65)	0.50	0.45	(1.20)	(0.30)		7.42	巻頭釘		6-20
81	23	釘	鉄	A-B9	5-4		II層	7.45	0.45	0.40	1.20	0.45		11.40	巻頭釘 先欠	17C頃～近代	5-2
81	24	釘	鉄	H10			3整地上	(7.23)	0.35	0.32	0.98	0.37		5.69	巻頭釘 頭欠 先欠		3-22
81	25	釘	鉄	H6-7	4-11			7.30	0.40	0.20	0.95	(0.80)		2.88	巻頭釘	17C	4-9
81	26	釘	鉄	D-E8			6整地上4	6.10	0.40	0.30	1.00	0.30		5.85	巻頭釘 先欠		6-22
81	27	釘	鉄	G10	3-407			(4.00)	0.36	0.30	0.53	0.28		0.96	巻頭釘 先欠		3-13
81	28	釘	鉄	A7			2整地上2	(4.85)	0.30	0.30	0.70	0.20		1.64	巻頭釘		2-27
81	29	釘	鉄	J6			2整地上2	4.50	0.45	0.50	1.05	0.35		2.94	巻頭釘		2-26
81	30	釘	鉄	I5	2-184			(4.55)	3.80	3.20	0.90	0.32		3.97	巻頭釘 先欠	17C前半	2-24
81	31	釘	鉄	J5	2-162			5.40	3.50	0.20	(0.65)	0.65		1.71	巻頭釘 頭欠 先欠	17C前半	2-22
81	32	釘	鉄	B7			2整地上3	(5.65)	0.40	0.32	0.93	0.38		2.16	巻頭釘 先欠		2-29
81	33	釘	鉄	B7	6-126			(5.80)	0.40	0.30	(0.95)	0.20		2.75	巻頭釘	～18C中	6-16
81	34	釘	鉄	D9	6-21			(6.50)	0.30	0.30	(0.80)	(0.70)		2.86	巻頭釘 頭欠	～17C後	6-14
81	35	釘	鉄	J5-6			2整地上1	(6.30)	0.50	0.35	1.62	0.30		4.75	巻頭釘 先欠		2-25
81	36	釘	鉄	G10			3整地上	(5.55)	0.53	0.30	1.25	0.35		4.44	巻頭釘 先欠		3-15
81	37	釘	鉄	H10			3整地上	(6.60)	0.75	0.50	1.75	0.50		12.22	巻頭釘 先欠		3-14
81	38	釘	鉄	I5	2-184			8.9	0.43	0.4	1.00	0.55		6.63	巻頭釘 頭欠	17C前半	2-23
81	39	釘	鉄	B-C7	6-126			(9.75)	0.65	0.40	1.40	(0.25)		9.70	巻頭釘 本質残存	～18C中	6-15
81	40	釘	鉄	A6			2整地上2	(10.75)	0.80	0.85	1.95	0.90		35.91	巻頭釘 先欠		2-28
81	41	釘	鉄	J8	5-17		II層	(7.60)	0.40	0.30	1.40	0.40		5.54	平頭釘？	17C前	5-1
								全長	最大幅	最大厚							
81	42	釘	鉄	H10	3-512		井戸枠	10.00	0.45	0.35				4.76	合釘？	16C後～17C前	3-10
81	43	釘	鉄	I5	2-184			(6.30)	1.25	0.70				6.80	4本踏書	17C前半	2-21
								全長	幅	厚さ	環状 部高	環状 部幅	環状 部厚				
81	44	釘	鉄	G10			3整地上	(4.30)	0.45	0.50	0.90	0.25	0.50	2.77	環状釘		3-12
81	45	釘	鉄	A1-2	7-30			7.30	0.50	0.55	1.10	0.30	0.50	8.89	環状釘 本質付着	17C前半	7-8
81	46	鋲	銅	I1	3-2		5層	5.20	0.40	0.50	1.50	0.35		8.63		18C	3-27
81	47	鋲	銅	G1			3整地上	5.55	0.40	0.45	1.00	0.30		4.99			3-28
81	48	鋲	銅	H2	3-303			(3.30)	0.25	0.30	1.15	0.70		4.90	鋲脚 先欠	16C後～17C前	3-26
81	49	釘	鉄	H10			3整地上	(6.80)	2.70	0.40				11.94	折釘		3-11
								全長	高さ	厚さ							
81	50	鎹	鉄	B4	7-56		新田 井戸枠	23.70	(7.60)	11.50				297.50		近代	7-7
81	51	鎹	鉄	B6			6整地上4	4.40	1.80	0.40				4.23			6-10
81	52	鎹	鉄	D8	6-19			18.20	4.55	0.75				96.09		18C後～	6-12
81	53	鎹	鉄	H5			2層乱	12.00	3.85	0.65				42.92			2-19
81	54	鎹	鉄	D8	6-19			14.30	4.35	0.85				99.28		18C後～	6-11
								全長	最大幅	高さ							
81	55	先切 金具	鉄	G4	2-44		撹乱	9.80	2.05	1.90				166.00	本質残存	～近代	2-33
								全長	柄部長	刃部長	最大幅	最大厚					
81	56	鎌	刀部鉄 柄部本	I5	2-184			18.45	15.2	3.25	0.30	0.25		6.43		17C前半	2-20

第33表　日用品等観察表

図版番号	挿図番号	種別	属性	出土地点 地区	出土地点 遺構番号	出土地点 層位	計測値 cm							g	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
							高さ	釣幅	長径厚	短径厚	環部径						
82	1	釣錘	銅	D9	6-19		7.45	4.05	0.45	0.55	1.40			26.11		18C後～	6-27
82	2	釣錘	銅	I5	2-359		3.80	2.20	0.20	0.25	0.40			1.61		17C初	2-34
							全長	幅	厚さ								
82	3	錠前	鉄	I5	2-184		8.25	3.10	1.15					44.22		17C前半	2-53
82	4	錠前	鉄	D9	6-61		7.05	2.85	1.60					49.85			6-39
							全長	幅	体部幅	体部厚	環部径						
82	5	あおりとめ	鉄	C7	6-10		8.10	2.30	0.50	0.50	1.13			15.00			6-9
82	6	あおりとめ	鉄	H7	4-6		11.40	2.30	0.60	0.60	1.40			28.77		19C	4-6
							全長	全長(上)	全長(中)	全長(下)	最大	最小径					
82	7	鎖	銅	J3	7-28		6.95	2.90	2.45	2.85	0.28	0.10		5.24	3連	18C後～	7-12
							最大径	厚	環部径	環部太さ							
82	8	引手金具	銅	M6-7		6整地土4	4.57	0.05	2.60	0.30				15.89	鐙引手金具		6-41
							全長	高さ	最大幅	厚							
82	9	猿金具	鉄	J6		2整地土2	(7.90)	3.60	1.60	0.75				53.86			2-36
							全長	最大幅	最大厚								
82	10	座金	銅	A9	5-4	Ⅱ層	3.30	3.20	0.05					0.95	鐙引手金具の座金 魚々子有 鍍金	17C端～近代	5-5
82	11	座金	銅	C7		6整地土4	2.28	2.25	0.05					1.31			6-38
82	12	座金	鉛	C・D4	7-86		(2.90)	(1.60)	0.10					7.10	鐙金具	～18C後半	7-13
							直径	高さ	厚さ								
82	13	燭台	銅	G9	3-405		11.15	(1.10)	0.05					17.97	脚部のみ	17C前	3-42
82	14	燭台	銅	J1・2	7-142		(10.50)	0.70	0.05					19.17	脚部のみ	17C前半	7-14
82	15	皿状製品	銅	I5	2-184		10.30	(1.30)	0.03					14.35	燭台か	17C前半	2-52
							全長	柄部長	刃部長	最大幅	最大厚						
82	16	千枚通し（目打ち）	刃部鉄 柄部木	I5	2-184		25.95	13.75	12.2	0.35	0.40			12.95		17C前半	2-35
82	17	千枚通し（目打ち）	銅	M6-9	6-TR1		14.70		14.70	0.50	0.45			16.08	刃部のみ		6-28
							全長	厚さ									
83	1	鏡	銅	G1		3整地土	6.30	0.30						41.01	沢瀉の図案 鏡孔径0.1cm		3-31
							長径	短径	全高	高台高	厚さ						
83	2	紅皿	銅	D8		6整地土4	(5.50)	(4.50)	(2.75)	0.50	0.10			18.50	サビによる劣化穴があいている		6-46
							直径	高さ	厚さ								
83	3	容器	銅	C7	6-2		2.75	0.60	0.04					4.43	身側のみ 赤色顔料付着 紅入	19C	6-48
83	4	容器	銅	D9	6-18・19		3.40	0.78	0.10					10.63	身側のみ	17C後～18C後	6-49
							全長	最大幅	最大厚								
83	5	簪	真鍮	I1	3-2	服方内	16.70	0.35	0.18					3.32	1本足	～19C	3-32
83	6	簪	銅	B7	6-126		(7.42)	0.40	0.35					4.25		～18C中	6-29
83	8	笄	銅	F10		3整地土	(11.25)	0.40	0.40					7.77	大きく曲がる		3-41
83	9	笄	銅	B7		2整地層3	9.20	0.35	0.35					8.26			2-50
							径	孔径	厚さ								
83	7	簪の銜玉	不明	M6-7	4-11		6.50	0.30	0.40					0.34		17C	4-11
							全長	高さ	幅	厚さ							
83	10	毛抜	鉄	B6		6整地土4	8.60	1.65	0.75	0.25				13.31	持ち手部分に絵柄（判別不能）骨抜？		6-37
83	11	毛抜	銅	F5	4-168		8.20	1.20	0.55	0.15				10.95		～18C後半	4-14
							全長	幅	体部高	体部厚	口縁部長	口縁部幅	口縁部厚				
83	12	水滴	銅	G3・4	2-44	撹乱	7.65	5.40	2.83	0.07	1.58	1.20	0.18	38.53	小判型	～近代	2-54
83	13	水滴	銅	G9	3-547		4.83	3.10	1.18	0.04	1.30	1.00	0.04	14.72	小判型 裏付絵柄 鍍金	17C初	3-43
83	14	水滴	銅	B・C4		7撹乱1	3.50	2.10	(1.30)	0.03	0.70	0.50	0.05	5.54	注口 底部欠 鍍金		7-15
							長径	短径	最大高	厚さ							
83	15	盃	銅			2表土	8.28	8.15	1.35	0.05				25.04	稜花型 鍍金		2-51
							高さ	径	厚さ	環状部高	環状部厚						
83	16	鈴	銅	H5		2整地層3	(1.70)	(2.35)	0.05	(0.30)	0.05			2.08			2-55
							全長	最大幅	最大厚								
83	17	鋲尻	銅	A6		2撹乱	13.75	1.80	0.20					6.99	鍍金		2-56
83	18	和鋏	鉄	B7		6整地土3	14.60	6.45	0.13	2.30	1.95	0.42		16.79			6-50
							全長	幅	頭高	頭幅	頭厚						
83	19	火箸	鉄	J3	7-28		(33.15)	0.35						30.29	銀ろう有	18C後～	7-17
83	20	火箸	銅	C8		6撹乱3	25.65	0.45	0.85	0.85	0.65			25.09	打刻有 全体に鍍金		6-43
83	21	火箸	銅	A2	7-30		(24.10)	0.60						27.68		17C前半	7-18
83	22	火箸	銅	D9	6-18		(9.65)	0.48	0.20	0.30				16.70		17C後	6-42
83	23	火箸	銅	J2		7整地土1	(12.40)	0.30	0.35	0.30				6.53	上部に花柄の刻印有		7-16
83	24	火箸	銅	I7		4撹乱	(28.50)	0.50						40.59			4-17
83	25	火箸	鉄	M6-7	6-297		(25.60)	0.40						16.86	銀ろう有 絵柄米？	16C後葉	6-44

図版番号	挿図番号	種別	属性	出土地点 地区	出土地点 遺構番号	出土地点 層位	計測値 cm							g	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
							全長	刃部長	刃部厚	刃部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚				
83	26	鉋丁	鉄	H5	2-183		(24.30)	20.40	(4.40)	(0.20)	3.90	0.80	0.35	62.69		16C後半	2-57
							幅	高さ	最大厚								
83	27	鉄鐵	鉄	B6・7		6整地土3	(5.00)	(2.15)	(0.30)					22.94	底部片		6-40
							全長	幅	厚さ								
83	28	鋲尻金具	鉄	H7	4-6		(9.30)	0.70	0.75					62.81	1/2残存	19C	4-16
							長さ	最大径	注口幅	高さ							
83	29	薬缶	銅	D9	6-19		(5.25)	3.00	2.05	3.20				9.24	注口のみ	18C後～	6-47
							胴部径	最大高	体部最大厚	注口長							
83	30	鉄板	鉄	I5	2-184		12.60	(9.70)	0.60	2.40				324.90		17C前半	2-56
							長さ	径	厚さ								
85	1	筒状製品	銅	I7	4-101		6.00	2.50	0.05					19.09		17C前半	4-15
							全長	幅	最大厚	体部幅	体部厚						
85	2	不明	鉄	B・C7		6表土	6.90	3.00	0.38	0.30	0.32			10.07	製品の一部		6-45
							全長	最大幅	最大厚								
85	3	錘	鉛	F10		3整地土	3.65	3.20	1.50					11.62	約3.5g（11.25g）に近い		3-30
85	4	円盤状製品	銅	I8	4-101		2.20	(1.60)	0.04					0.73		17C前半	4-10
85	5	不明	鉄	J1	7-TR2		33.60	3.85	0.95					287.00	とり物道具？		7-10

第34表　煙管観察表

図版番号	挿図番号	種別	属性	出土地点 地区	出土地点 遺構番号	出土地点 層位	計測値 cm							g	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
							全長	前高	胴部径	火皿径	火皿高						
84	1	雁首	銅	G1	3-70		4.70	2.60	1.13	1.45	1.10			7.97	刻付 火皿孔 W30とセット	17C後	3-33
							全長	胴側径	口側径	胴部長							
84	2	吸口	銅	G1	3-70		4.40	1.13	0.20	1.85				3.80	W33とセット	17C後	3-38
							全長	前高	胴部径	火皿径	火皿高	胴部長	羅宇長	羅宇径			
84	3	雁首	銅	H2	3-303		(3.49)	2.12	0.80	1.38	0.85	1.32		3.10	刻付 火皿孔	16C後～17C前	3-34
84	4	雁首	銅	H7		4-撹乱2	7.50	2.90	0.90	1.50	1.05	2.60		11.04	刻付 火皿孔 鐵刻有 花柄		4-13
84	5	雁首	銅	H10		3-溝成土	5.75	1.60	0.95	(1.55)	0.70	2.05		6.24			3-36
84	6	雁首	銅	D8	6-19		5.30	2.40	1.00	1.54	0.90	2.30		7.53	鐵刻有 魚々子有	18C後～	6-32
84	7	雁首	銅	I5	2-184		8.75	3.50	1.00	1.50	0.88	－	4.38	0.72	17.37	羅宇残存 火皿孔 種施帯付 M49とセット	17C前半	2-41
							全長	胴側径	口側径	胴部長	完形全長	完形全高					
84	7	吸口	銅	I5	2-184		6.22	0.95	0.30	－	15.00	3.50			17.37	W41とセット	17C前半	2-69
84	8	雁首	銅	H7	4-2		6.80	3.70	1.00	1.45	1.00	－		8.06	火皿孔 鍍金	19C	4-12
84	9	雁首	銅	B・C7	6-126		8.25	2.60	0.90	1.30	0.95	－		10.08	火皿孔 鍍金 隅部八角形	～18C中	6-34
84	10	雁首	真鍮	I5	2-184		6.80	3.60	1.15	1.55	1.00			9.94	火皿孔 鍍金	17C前半	2-38
84	11	雁首	銅	D7・8	6-18		6.15	1.95	0.80	1.40	1.10	－		5.79		17C後	6-30
84	12	雁首	銅	D8	6-18	下層	5.60	2.50	1.10	1.70	0.90	－		8.38	節み有 鍍金	～17C後	6-33
84	13	雁首	銅	A・B7	2-39	下層	(4.60)	2.70	1.00	1.30	0.60			3.12		18C前半	2-37
84	14	雁首	銅			2-表土	(3.88)	1.55	1.00	1.20	0.58			4.19	魚々子 図柄判別不能		2-40
84	15	雁首	銅	D8	6-19		5.30	2.10	0.85	1.50	1.20	－		12.01	鍍金	18C後～	6-31
84	16	雁首	銅	F10		3-撹乱	4.55	1.11	1.00	1.00	0.50			7.61	胴部八角形		3-35
84	17	雁首	銅			2-表土	4.60	1.70	1.10	1.00	0.60	－	2.80	0.80	5.52	図柄判別不能 羅宇一部残存		2-39
							全長	胴側径	口側径	胴部長							
84	18	吸口	銅	A・J6	2-63	下層	(5.85)	0.95	0.25	(1.90)				3.70	鍍金	17C前葉	2-43
84	19	吸口	銅	I5	2-184		5.85	0.80	0.25	2.15				2.89	鍍金 羅宇一部残存	17C前半	2-44
84	20	吸口	銅			2-表土	7.45	1.00	0.60	2.00				9.81	胴部六角形		2-48
84	21	吸口	銅	A・J6	2-63	下層	5.45	0.70	0.30	2.05				2.65	鍍金	17C前葉	2-42
84	22	吸口	銅	I6	2-201		(3.75)	0.90	0.35	1.55				3.40	羅宇一部残存	17C前半	2-45
84	23	吸口	銅	D8	6-18	上層	4.62	0.85	0.35	1.60				1.82		17C後	6-35
84	24	吸口	銅	A・B9	5-4	Ⅱ層	6.25	1.10	0.65	－				6.58	鍍金	17C端～近代	5-4
84	25	吸口	銅			2-表土	4.20	1.05	0.70	－	－	－	2.20	0.75	7.60	柄有		2-47
84	26	吸口	銅	I1	3-2	服方内	4.45	0.85	0.35	－				3.63	鍍金	～19C	3-37
84	27	吸口	銅	G9	3-405		6.70	1.15	0.45	－				7.88	鍍金	17C前	3-39
84	28	吸口	銅	B9	5-4	Ⅱ層	6.78	0.70	0.30	－				6.18	鍍金	17C端～近代	5-3
84	29	吸口	銅	D8	6-18	下層	5.50	0.90	0.35	－				3.64	鍍金	～17C後	6-36
84	30	吸口	銅	J3	7-28		5.70	1.05	0.30	－				2.91	鍍金	18C後～	7-11
84	31	吸口	銅	A6		2整地層2	8.15	1.00	0.50	－				9.61	胴部六角形		2-46
							全長	胴側径	口側径	胴部長		雁首長					
84	32	羅宇	銅	I1	3-30		15.15	0.55 0.35	0.55	8.00	－	5.90			12.88	鐵刻有	17C	3-40

第35表　銭貨観察表

図版番号	挿図番号	銭文	初鋳年	素材	出土地点			計測値					備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
					地区	遺構番号	層位	cm				g			
								径	内区径	孔径	厚さ	重さ			
86	1	寛永通寶	日本1636	銅	B10	3-293		2.44	1.96	0.58		3.44	古寛永	16C後～17C前	3-86
86	2	寛永通寶	日本1636	銅	B7-8	6-18		2.42	1.93	0.58		2.49	古寛永	17C後	6-53
86	3	寛永通寶	日本1636	銅	D9	6-19		2.47	1.98	0.59		3.15	古寛永	18C後～	6-54
86	4	寛永通寶	日本1697	銅	I4		2整地上1	2.52	1.98	0.58		2.21	古寛永　背「文」		2-63
86	5	寛永通寶	日本1697	銅	I-J6		4掘底	2.18	1.78	0.68		1.26	新寛永		4-19
86	6	寛永通寶	日本1697	銅	I7		4掘底	2.28	1.82	0.93		1.92	新寛永		4-20
86	7	寛永通寶	日本1697	銅	B9	5-4	8盤	2.46	1.94	0.57		2.63	新寛永	17C頃～近代	5-8
86	8	寛永通寶	日本1697	銅	B9	5-4	8盤	2.34	1.85	0.62		2.77	新寛永	17C頃～近代	5-9
86	9	寛永通寶	日本1739	鉄	G3-4	2-44	掘底	2.38	1.94	0.69		1.86	古寛永　鉄一文銭	～近代	2-62
86	10	乾元重寶	唐758	銅	I5	2-184		2.39	1.95	0.68		3.27	当十銭	17C前半	2-64
86	11	唐國通寶	南唐959	銅	B6		2整地上4	2.42	1.92	0.57		3.43	篆書		2-80
86	12	唐國通寶	南唐959	銅	B1	3-91		2.41	1.91	0.59		2.25	篆書	16C後葉	3-67
86	13	開元通寶	南唐960	銅	J5		2整地上4	2.43	2.02	0.65		2.16	真書　背上「月」		2-61
86	14	開元通寶	南唐960	銅	G1		3掘底	2.35	1.86	0.60		2.78	真書		3-44
86	15	開元通寶	南唐960	銅	J7		5掘底	2.33	1.93	0.58		2.23	真書		5-6
86	16	開元通寶	南唐960	銅	A2	7-30		2.30	1.97	0.67		2.44	真書　背右「月」	17C前半	7-19
86	17	淳化元寶	北宋990	銅	A2		7整地上1	2.41	1.79	0.61		2.21	行書		7-27
86	18	太平通寶	北宋976	銅	D9	6-18・19		2.35	1.86	0.55		2.18		17C後・18C後～	6-63
86	19	至道元寶	北宋995	銅	G10	3-544		2.41	1.74	0.54		2.80	真書	16C後	3-60
86	20	至道元寶	北宋995	銅	F5		4掘底	2.41	1.83	0.54		2.43	行書		4-24
86	21	至道元寶	北宋995	銅	D9		6表土	2.45	1.62	0.55		2.74	行書		6-56
86	22	咸平元寶	北宋998	銅	B7	6-193		2.42	1.83	0.55		2.66		16C後葉	6-65
86	23	咸平元寶	北宋998	銅	A2	7-27		2.45	1.80	0.56		3.81		～18C中	7-30
86	24	景德元寶	北宋1004	銅	J6		2整地上2	2.45	2.04	0.61		2.11			2-66
86	25	景德元寶	北宋1004	銅	F10	3-222		2.42	1.95	0.56		3.74			3-47
86	26	祥符通寶	中宋末期～近世初頭	銅	I5	2-184		2.27	1.77	0.62		1.78	模倣銭	17C前半	2-74
86	27	祥符通寶	中宋末期～近世初頭	銅	G10	3-439		2.27	1.75	0.55		2.07	模倣銭	16C末～17C中	3-64
86	28	祥符元寶	北宋1009	銅	I6		2整地上3	2.45	1.82	0.56		2.06			2-73
86	29	銭文不鮮明	(北宋1017)	銅	A3		7整地上2	2.52	2.07	0.68		1.59	二縁通寶　部分欠 天縁通寶？		7-31
86	30	天聖元寶	北宋1023	銅	B7		6整地上3	2.59	2.19	0.72		3.44	真書		6-64
86	31	景祐元寶	北宋1034	銅	B5	2-432		2.48	1.97	0.58		3.24	真書	16C後半	2-67
86	32	景祐元寶	北宋1034	銅	I7	4-20		2.46	2.05	0.70		2.20	篆書	～17C中	4-21
86	33	景祐元寶	北宋1034	銅	A2	7-30		2.49	1.97	0.68		3.28	真書	17C前半	7-22
86	34	皇宋通寶	北宋1038	銅	A7	2-39		2.43	1.97	0.64		2.67	真書	18C前半	2-70
86	35	皇宋通寶	北宋1038	銅	G1		3表土	2.50	2.12	0.68		3.04	真書　半欠		3-55
86	36	皇宋通寶	北宋1038	銅	F10		3整地上	2.49	1.89	0.71		4.60	真書		3-56
86	37	皇宋通寶	北宋1038	銅	G10		3整地上	2.39	1.89	0.65		2.17	篆書		3-58
86	38	皇宋通寶	北宋1038	銅	G10		3整地上	2.43	1.94	0.71		3.30	篆書		3-59
86	39	皇宋通寶	北宋1038	銅	A2	7-30		2.39	1.63	0.63		2.69	篆書	17C前半	7-25
86	40	至和元寶	北宋1054	銅	A2	7-30		2.42	1.83	0.69		3.60	真書	17C前半	7-28
86	41	嘉祐元寶	北宋1056	銅	C9		6整地上4	2.45	2.03	0.74		2.45	篆書		6-52
86	42	治平元寶	北宋1064	銅	I6	4-92		2.33	1.91	0.69		1.85	篆書	17C	4-25
86	43	治平元寶	北宋1064	銅	A2	7-30		2.44	1.90	0.62		3.67	真書	17C前半	7-29
86	44	熙寧元寶	北宋1068	銅	A6		2掘底	2.28	1.94	0.65		2.67	篆書		2-65
86	45	熙寧元寶	北宋1068	銅	I8		5掘底	2.39	1.92	0.58		3.04	真書		5-11
86	46	熙寧元寶	北宋1068	銅	A2	7-30		2.37	1.83	0.60		4.45	真書	17C前半	7-21
86	47	元豊通寶	北宋1078	銅	I5	2-84		2.39	1.88	0.69		2.95	篆書	17C前半	2-69
86	48	元豊通寶	北宋1078	銅	F-G10	3-13		2.42	1.94	0.68		2.64	行書	18C	3-51
86	49	元豊通寶	北宋1078	銅	I7		4掘底	2.41	1.72	0.69		3.14	篆書		4-22
86	50	元豊通寶	北宋1078	銅	A2	7-30		2.47	1.96	0.68		3.53	行書	17C前半	7-23
86	51	元祐通寶	北宋1086	銅	I1	3-7		2.45	2.06	0.71		2.10	行書	17C後	3-53
86	52	元祐通寶	北宋1086	銅	G10		3表土	2.39	1.88	0.54		2.24	行書		3-54
86	53	元祐通寶	北宋1086	銅	B6		6整地上2	2.37	1.84	0.60		3.35	篆書		6-55
86	54	紹聖元寶	北宋1094	銅	G10		3掘底	2.39	1.86	0.70		2.28	篆書		3-62
86	55	紹聖元寶	北宋1094	銅	I2		3整地上	2.41	1.77	0.62		2.43	篆書		3-63
86	56	紹聖元寶	北宋1094	銅	C7		6整地上4	2.49	1.90	0.64		2.85	行書		6-58
86	57	元符通寶	北宋1098	銅	A6	2-316		2.36	1.89	0.66		2.13	行書	16C後葉	2-68
86	58	元符通寶	北宋1098	銅	I1	3-80		2.26	1.91	0.61		1.32	行書		3-48
86	59	元符通寶	北宋1098	銅	B10		3整地上	2.42	1.95	0.62		2.80	篆書		3-49
86	60	元符通寶	北宋1098	銅	B10		3整地上	2.43	1.98	0.59		2.74	篆書		3-50
86	61	聖宋元寶	北宋1101	銅	J6		2整地上3	2.43	1.98	0.61		2.44	行書		2-75
86	62	聖宋元寶	北宋1101	銅	B10		3掘底	2.36	1.96	0.61		2.34	行書		3-65
86	63	聖宋元寶	北宋1101	銅	G9		3整地上	2.27	1.82	0.70		2.24	篆書		3-66
86	64	大觀通寶	北宋1107	銅	A6		2整地上3	2.35	2.10	0.61		1.68			2-78
86	65	大觀通寶	北宋1107	銅	A6		2掘底	2.41	2.02	0.63		2.65			2-79
86	66	大觀通寶	北宋1107	銅	C7		6整地上4	2.40	2.07	0.61		3.06			6-62
86	67	政和通寶	北宋1111	銅	A6-7	2-31		2.38	2.10	0.64		2.22	分銭	19C	2-76
86	68	政和通寶	北宋1111	銅	C8	6-140	道路3	2.45	2.06	0.69		3.09	篆書	～17C初	6-60
86	69	政和通寶	北宋1111	銅	D8		6整地上2	2.34	2.08	0.61		1.27	分銭		6-61
86	70	淳熙元寶	南宋1174	銅	B6		6整地上2	2.39	1.82	0.59		2.71	真書　背「十二」 南宋番銭		6-57
86	71	嘉定通寶	南宋1208	銅	C7		6整地上4	2.41	2.07	0.62		2.98	背「元」		6-51
86	72	淳祐元寶	南宋1241	銅	B7		2整地上4	2.28	1.87	0.68		1.99			2-72

図版番号	挿図番号	銭文	初鋳年	素材	出土地点			計測値					備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
					地区	遺構番号	層位	cm				g			
								径	内区径	孔径	厚さ	重さ			
86	73	洪武通寶	明1368	銅	J6		2整地上2	2.48	2.05	0.60		1.06	背「形」		2-71
86	74	洪武通寶	明1368	銅	A-B2	7-30		2.11	1.79	0.55		2.29		17C前半	7-26
86	75	宣德通寶	明1433	銅	A6		2整地上3	2.50	2.05	0.51		2.73			2-77
86	76	永乗通寶	明1408	銅	J-M6	2-63	下層	2.39	2.03	0.57		1.56		17C前葉	2-59
86	77	永乗通寶	明1408	銅	J6		2整地上3	2.55	2.07	0.55		2.86			2-60
86	78	永乗通寶	明1408	銅	M6-7	4-11		2.42	2.05	0.60		2.36		17C	4-18
86	79	無文銭		銅	M6-7	4-11		1.80		0.80	0.05	0.80		17C	4-27
86	80	無文銭		銅	F5	4-167		1.85		0.65	0.03	0.24		～19C	4-28
86	81	無文銭		銅	F5	4-168		2.10		0.75	0.05	1.35		～18C後半	4-29
86	82	無文銭		銅	F5	4-168		1.95		0.70	0.03	0.41		～18C後半	4-30
86	83	無文銭		銅	F5	4-168		1.95		0.75	0.04	0.82	爆耗著しい	～18C後半	4-26
86	84	銭鐺	日本1636	銅			2表土	2.30	1.90	0.55	0.10	28.11	古寛永通寶 10枚銭者		2-81
86	85	銭鐺	日本1697 日本1668	銅			2表土	2.20	1.80	0.60	0.07	16.97	表 新寛永通寶 裏 文銭 5枚銭者		2-82
86	86	銭鐺	北宋1009	銅	I6		2整地上3	2.30	1.90	0.60	0.10	15.39	祥符元寶 5枚銭者		2-84
86	87	銭鐺	明1368	銅	A6		2整地上3	2.10	1.80	0.58	0.10	6.17	洪武通寶 4枚銭者		2-83
86	88	銭鐺	北宋1101 北宋1119	銅	C7	6-TB5	整地上2	2.40	2.00	0.60	0.10	6.18	聖宋元寶(篆書)・宣和通寶(楷書) 3枚銭者		6-66
86	89	銭鐺	北宋1009 北宋1023	銅	A2	7-30		2.45	1.75	0.55	0.10	7.05	祥符元寶 天聖元寶(真書) 2枚銭者	17C前半	7-32

第36表　鋳造関連遺物観察表

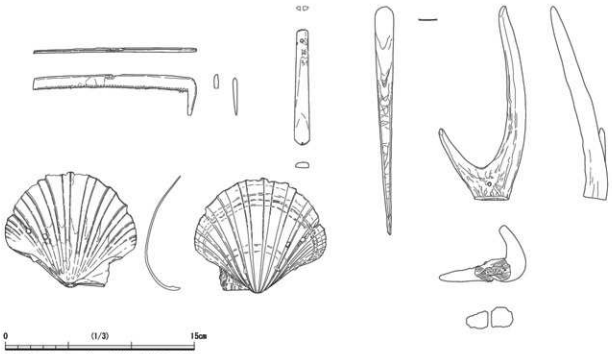
図版番号	挿図番号	出土地点			種別	素材	計測値				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
		地区	遺構番号	層位			cm			g			
							口径	高	厚	重さ			
87	1	G10		3整地上	取板・埋亀		(4.00)	(1.60)	0.70	5.53	口縁部のみ		T3-25
87	2	G10	3-544		取板・埋亀		(4.40)	(1.85)	0.70	7.70		16C後	T3-7
87	3	G10	3-544		取板・埋亀		(4.60)	(1.65)	0.73	8.38	口縁部のみ	16C後	T3-9
87	4	G10	3-544		取板・埋亀		(4.83)	(2.30)	0.80	11.15	口縁部のみ	16C後	T3-10
87	5	G10	3-544		取板・埋亀		(5.00)	(1.80)	0.70	12.30		16C後	T3-11
87	6	G10	3-544		取板・埋亀		5.20	2.40	0.80	32.74	炭残存	16C後	T3-15
87	7	C9		6表土	取板・埋亀		5.30	2.20	0.70	28.90			T6-30
87	8	G10	3-544		取板・埋亀		5.40	(2.10)	0.80	27.92		16C後	T3-14
87	9	G10	3-544		取板・埋亀		5.95	2.80	0.90	50.00	炭残存	16C後	T3-17
87	10	G10	3-544		取板・埋亀		(6.00)	(2.90)	0.90	33.27		16C後	T3-16
87	11	G9		3整地上	取板・埋亀		6.00	3.05	1.00	51.42	内側に胴の部け残り有		T3-22
87	12	G10	3-544		取板・埋亀		(6.00)	(2.50)	1.00	36.46	炭残存	16C後	T3-13
87	13	A+J6	2-63		取板・埋亀		(6.40)	(3.40)	1.00	17.35		17C前葉	T2-1
87	14	G9		3整地上	取板・埋亀		6.40	2.90	0.95	62.72	内側に胴の部け残り有		T3-21
87	15	H-I5	2-415		取板・埋亀		(6.80)	(2.75)	1.00	17.65	口縁部のみ	16C後半	T2-2
87	16	C8-9		6整地上3	取板・埋亀		7.00	(2.50)	1.00	21.68			T6-29
87	17	F10	3-325		取板・埋亀		(7.00)	(3.15)	1.10	25.40		16C	T3-6
87	18	G10	3-544		取板・埋亀		(6.70)	(3.70)	0.90	48.72		16C後	T3-18
87	19	G10	3-544		取板・埋亀		6.80	3.40	1.10	80.55	炭残存	16C後	T3-19
87	20	G10		3整地上	取板・埋亀		(7.00)	3.55	1.00	21.47	口縁部のみ		T3-24
87	21	G10	3-544		取板・埋亀		(7.20)	(3.40)	1.05	34.14		16C後	T3-12
87	22	G10		3整地上	取板・埋亀		(7.30)	(2.90)	1.10	41.77	炭残存		T3-23
87	23	G10	3-544		取板・埋亀		8.20	3.65	0.90	134.00	炭残存	16C後	T3-20
							最大幅	最大厚					
87	24	B6		2整地上4	紡淨		5.10	2.70		60.17	炭残存		T2-3
87	25	J5		2整地上2	紡淨		8.80	3.10		263.00	底部に炭付着		T2-4
87	26	I1	3-555		紡淨		8.10	2.75		200.50	土付着	17C～19C	T3-27
							縦	横	厚				
87	27	H1		3表土	素材	鉛	3.00	1.13	0.50	14.68			T3-8
							最大径	厚					
87	28	J5-6		2整地上1	素材	鉛	2.38	0.30		10.90			T2-5
87	29	H1-2	3-473		素材	鉛	1.90	0.55		11.65		17C前	T3-26
87	30	I-J6		4掘底	鋳型		5.65	(5.40)	2.30	114.77	篆書の取手		T4-28
							長	幅					
87	31	B6		2整地上3	羽口		(22.60)	15.20		369.00	筌谷石		T2-11

第６章　その他の遺物

今回の調査では骨や角、貝を加工した製品が数点出土している。以下、それらの遺物の説明をする。

１は歯を欠損した骨製の解櫛で、峰は水平に近い。16−２調査区の整地土１出土品で、18世紀後半以降のものと思われる。どの生物の骨かは不明である。２は表面を丁寧に研磨した骨製のへら状製品で、頂部に１箇所穿孔がみられ断面は片面がやや膨らむ。哺乳類の四肢骨を利用したもので土坑７−２から出土している。３は骨製の笄で、頂部は緩やか丸く、先端に向けて直線的に窄まる。４はニホンジカの角で作られた骨角器で、又の部分が鋸で切断され１箇所穿孔を認める。17世紀前半の土坑４−170から出土している。５は貝杓子で、左側に２箇所穿孔を認める。17世紀後半頃の土坑７−27出土品だが、この遺構は断面観察から何らかの構造物が存在した可能性があり、木製品の柄杓が纏まって出土している。

今回の調査で出土したものには、鹿の角の加工段階と思われるものもある。また貝杓子の出土した遺構も柄杓が多く出土しており、その特異性を考慮した検討が必要と考える。



第88図　その他の遺物（縮尺1/3）

第37表　その他の遺物観察表

図版番号	挿図番号	器種	材質	出土地点			計測値（cm）				備考	出土遺構のおな遺物の時期
				遺構番号	地区	層位	最大長	最大幅	厚さ	重さ		
88	1	櫛	骨		B6	2整地土1	13.0	3.0	0.3		解櫛　歯欠損	
88	2	笄	骨	7−2	F5		9.3	1.2	0.4		頂部穿孔	
88	3	笄	骨	4−170	E4		18.1	1.5	0.3			17C前半
88	4		角	4−トレンチ	J2・3		15.4	5.0	1.9		又部に敲痕　穿孔1	
88	5	貝杓子	貝	7−27	A2		10.4	9.1	0.3	2.8	穿孔2	18C

第７章　自然科学分析

本章では、本調査で出土した大型植物遺体、貝類・動物骨、植物遺体等の自然遺物の同定、木製品の樹種同定と塗膜分析の結果について報告する。

第１節　自然遺物

１　大型植物遺体

江戸時代と推定される溝や廃棄土坑等から出土した大型植物遺体について、同定結果を報告し、当時の利用植物について検討した。

試料と方法

試料は、遺構から取り上げた堆積物試料および水洗済みの取り上げ試料である。

（１）堆積物試料

堆積物試料は、16−３調査区の土坑181から採取された堆積物１試料（21789g）である。試料の水洗はパレオ・ラボにて最小0.5mm目の篩を用いて行った。大型植物遺体の抽出および同定、計数は実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部分が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。イネの籾殻は小穂軸が残っている場合に１個体とした。そのほかの同定困難な微細な破片、小穂軸以外の籾殻、昆虫遺体、動物遺体の破片は、おおよその数を記号（+）で示した。

（２）水洗済み試料

溝や廃棄土坑等から採取された試料の水洗から種実の抽出までの作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで行われた。試料は16−２調査区の溝63から４試料、溝184・207から１試料、16−３調査区の土坑90・180から１試料、16−４調査区の土坑２から５試料、土坑３・65から２試料、土坑29・30と井戸167から１試料、16−５調査区の土坑４から５試料、16−６調査区の溝18上層から２試料、同溝下層から５試料、溝19と道路140から３試料、土坑126と溝294から１試料、16−７調査区の土坑27・30から１試料である。同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。モモとウメ、ヒメグルミとオニグルミは形態を観察し、完形、一部破損の個体、動物食痕のある個体、一部焦痕のある個体、打撃痕のある個体、半割の個体、破片とに分類した。

結果

（堆積物試料）

同定の結果、木本植物は広葉樹のキブシ種子とキイチゴ属核、ヒメコウゾ核、クワ属核、キハダ種子、サンショウ種子、アカメガシワ種子、ヒサカキ属種子、カキノキ属種子、キリ種子、ニワトコ核、タニウツギ属核、タラノキ核の13分類群、草本植物はヘラオモダカ種子とオモダカ属種子、コナギ種子、カワラスガナ果実、ホッスモ種子、イボクサ種子、スゲ属果実、ヒメクグ果実、カヤツリグサ属果実、メヒシバ属有ふ果、オヒシバ属種子（顕果）、ヒエ属有ふ果・炭化種子（顕果）、イネ籾殻・炭化籾殻・炭化種子（顕果）、アワ炭化種子（顕果）、エノコログサ属有ふ果、ハギ属果実、コムギ炭化種子（顕果）、ソバ果実、キケマン属種子、イヌタデ果実・炭化果実、スミレ属種子、カラムシ属果実、トウガン種

子、ミズ属果実、タネツケバナ属種子、オランダイチゴ属―ヘビイチゴ属果実、カアカザ属種子、タバミ属種子、キク科果実、メロン仲間種子、エノキグサ属種子、ノミノフスマ種子、ミチヤナギ属果実、ウシハコベ種子、ミドリハコベ種子、スベリヒユ属種子、オカトラノオ属種子、ザクロソウ属種子、ナス属種子、オオバコ属種子、キランソウ属果実、ナス種子・炭化種子、ゴマ種子、シソ属果実、オトコエシ属果実、トウバナ属果実、チドメグサ属種子、タカサブロウ果実、ウド核の49分類群の計62分類群がみいだされた。このほか科以上の詳細な同定ができなかった種実を不明種実とし、不明の芽は一括した。また、残存状態が悪く、微細な破片であるため科以上の細分に必要な識別点を欠く一群を、同定不能炭化種実とした。種実以外に子嚢菌と不明昆虫遺体、不明動物遺体も得られたが同定の対象外とした（第39表）。

数量としては、イネとメロン仲間、エノキグサ属、アカザ属が多く、サンショウとオヒシバ属、キケマン属とカタバミ属、スベリヒユ属とゴマがやや多く、ヒサカキ属とキリ、タニウツギ属とカヤツリグサ属、オランダイチゴ属―ヘビイチゴ属、ヒエ属とトウバナ属、シソ属ソバとノミノフスマ、ウシハコベとナスが少量、タネツケバナ属とニワトコ、ザクロソウとタカサブロウ、イヌタデとミドリハコベ、チドメグサ属がわずかに得られた。このほかの分類群は、産出数が５点未満であった。

（水洗済み試料）

木本植物は針葉樹のマツ属複維管束亜属球果とスギ球果、カヤ種子の３分類群、広葉樹のイチョウ種子とモモ核、ウメ核、スモモ核、サクラ属サクラ節核、ナシ亜科果実、ナツメ核、クリ果実、ヒメグルミ核、オニグルミ核、サンショウ種子、ツバキ属種子の12分類群、草本植物はカワラスガナ果実とヒエ属有ふ果・炭化有ふ果、イネ籾殻・炭化籾殻・炭化種子塊、キケマ

第38表　福井城跡出土の大型植物遺体分析（１）

		地区	16-3地区
		遺構番号	181
		グリッド	F10
		時期	江戸時代
分類群		部位／水洗量（g）	21789
キブシ	種子		1
キイチゴ属	核		(4)
ヒメコウゾ	核		1
クワ属	核		(1)
アカメガシワ	種子		(1)
キハダ	種子		(1)
サンショウ	種子		4 (46)
ヒサカキ属	種子		8 (2)
カキノキ属	種子		(3)
キリ	種子		17 (2)
ニワトコ	核		(6)
タニウツギ属	核		27 (11)
タラノキ	核		(1)
ヘラオモダカ	種子		2
オモダカ属	種子		(1)
ホッスモ	種子		1
イボクサ	種子		1
コナギ	種子		4
スゲ属	果実		1
カワラスガナ	果実		1
ヒメクグ	果実		3
カヤツリグサ属	果実		31
メヒシバ属	有ふ果		4
オヒシバ属	種子（頴果）		83 (5)
ヒエ属	有ふ果		12 (2)
	炭化種子（頴果）		2
イネ	籾殻		100 (++++)
	炭化籾殻		75 (++)
	炭化種子（頴果）		4 (16)
アワ	炭化種子（頴果）		1 (2)
エノコログサ属	有ふ果		2
コムギ	炭化種子（頴果）		1 (1)
キケマン属	種子		53 (35)
ハギ属	果実		1
オランダイチゴ属―ヘビイチゴ属	果実		10 (13)
カラムシ属	果実		2
ミズ属	果実		2
トウガン	種子		(3)
メロン仲間	種子		22 (84)
カタバミ属	種子		53 (28)
エノキグサ属	種子		11 (99)
スミレ属	種子		1
タネツケバナ属	種子		6
ソバ	果実		(15)
イヌタデ	果実		2 (3)
	炭化果実		(1)
ミチヤナギ属	果実		3 (1)
ノミノフスマ	種子		27
ウシハコベ	種子		24 (4)
ミドリハコベ	種子		5 (4)
アカザ属	種子		34 (101)
スベリヒユ属	種子		40 (20)
オカトラノオ属	種子		1
ザクロソウ	種子		9
ナス	種子		4 (26)
	炭化種子		1 (1)
ナス属	種子		1
オオバコ属	種子		2
ゴマ	種子		1 (64)
キランソウ属	果実		2 (2)
トウバナ属	果実		10 (4)
シソ属	果実		6 (11)
タカサブロウ	果実		6
キク科	果実		1
オトコエシ属	果実		1
ウド	核		3 (1)
チドメグサ属	種子		7 (2)
不明	種実		(34)
同定不能	炭化種実		(54)
不明	芽		(+)
子嚢菌	炭化子嚢		70
不明	動物遺体		(+++)
不明	昆虫遺体		(++++)

+:1-9, ++:10-49, +++:50-99, ++++:100以上
括弧内は破片数

ン属種子、ノブドウ種子、ゴキヅル種子、トウガン種子、メロン仲間種子、イヌタデ果実、キンポウゲ属果実、スイカ種子、アカザ属種子、ノミノフスマ種子、コウゾリナ果実、スミレ属種子、ミドリハコベ種子、チヒョウタン仲間果実・種子、ドメグサ属種子、サナエタデ―オオイヌタデ果実、トウバナ属果実、ニホンカボチャ果実（果柄）の21分類群の計36分類群がみいだされた。このほかに科以上の詳細な同定ができなかった種実は不明種実とした。また種実以外に不明昆虫遺体も得られたが、同定の対象外とした。以下に大型植物遺体の産出状況を調査区ごと、遺構別に記載する。

16-２調査区

溝63：メロン仲間が非常に多く、モモが少量、マツ属複維管束亜属とオニグルミ、キケマン属、サナエタデ―オオイヌタデが僅かに得られた。

溝184：モモが少量、マツ属複維管束亜属とナシ亜科、クリが僅かに得られた。

溝207：モモとオニグルミが僅かに得られた。

16-３調査区

土坑90：極めて多くのイネが得られた。

土坑180：モモが僅かに得られた。

16-４調査区

土坑２：メロン仲間が多く、モモがやや多く、ヒエ属とイネが少量、ウメとカワラスガナ、キンポウゲ属、ノブドウ、スミレ属、イヌタデ、ノミノフスマ、ミドリハコベ、アカザ属、トウバナ属、コウゾリナ、チドメグサ属が僅かに得られた。

土坑３：イチョウとモモ、ウメとヒメグルミ、オニグルミとニホンカボチャが僅かに得られた。

土坑29：モモが僅かに得られた。

土坑30：モモが僅かに得られた。

土坑65：モモとイネ、メロン仲間が僅かに得られた。

井戸167：モモが僅かに得られた。

16-５調査区

溝４：サンショウが多く、モモとメロン仲間がやや多く、マツ属複維管束亜属とオニグルミが少量、カヤとクリ、ツバキ属とが僅かに得られた。

16-６調査区

溝18上層：マツ属複維管束亜属とモモ、オニグルミが僅かに得られた。

溝18下層：ヒョウタン仲間やや多く、マツ属複維管束亜属とスギ、モモとオニグルミ、メロン仲間とが僅かに得られた。

溝19：ヒメグルミとオニグルミがやや多く、モモが少量、マツ属複維管束亜属とウメ、クリ、ゴキヅルが僅かに得られた。

土坑126：モモとクリ、オニグルミが僅かに得られた。

道路140：モモが少量、マツ属複維管束亜属が僅かに得られた。

溝294：モモとスモモが僅かに得られた。

16-７調査区

土坑27：トウガンとメロン仲間が少量と、スイカが僅かに得られた。

土坑30：モモとウメ、サクラ属サクラ節とナツメが僅かに得られた。

次に得られた分類群の記載を行い、写真を示し同定の根拠とする。なお分類群の学名は米倉・梶田(2003-) に準拠しAPGⅢリストの順とした。

（１）イチョウ　*Ginkgo biloba* L.　種子　イチョウ科

黄褐色で完形ならばやや扁平な楕円体。先端がわずかに突出する。表面は平滑で光沢がない。高さ19.5mm、残存幅12.8mm。

（２）モモ　*Prunus persica* (L.) Batsch　核　バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形～紡錘形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺があり、片側の側面には縫合線沿いに深い溝が入る。完形個体は、高さ31.0mm、幅21.8mm、厚さ15.8mm（図版第50-２）、動物食痕のある個体は高さ24.0mm、幅18.8mm、残厚14.0mm（図版第50-３）、半割の個体は、高さ26.1mm、幅17.9mm、残存厚7.2mm（図版第50-４）。

（３）ウメ　*Prunus mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese　核　バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は卵円形。表面には全体的に不規則で深く小さな孔がある。着点は凹み縫合線沿いに深い溝が入る。完形個体は高さ22.0mm、幅17.4mm、厚さ15.3mm（図版第50-５）、動物食痕のある個体は高さ15.2mm、残存幅11.8mm、厚さ10.6mm（図版第50-６）。

（４）スモモ　*Prunus salicina* Lindl.　核　バラ科

褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観はいびつな楕円形。縫合線沿いにやや深い溝が入る。表面は平滑だが、臍付近に縦方向の不規則な皺がある。高さ12.2mm、幅11.1mm。

（５）サクラ属サクラ節　*Prunus* sect. *Pseudocerasus* spp.　核　バラ科

褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は卵円形。上・下端は尖る。表面は平滑で核皮は厚く硬い。長さ16.6mm、幅12.3mm、厚さ8.4mm。

（６）ナシ亜科　Subfam. *Maloideae*　果実　バラ科

黄褐色で、上面観は円形、側面観は楕円形。表面は平滑。割れた面から内部の種子の痕跡がみえる。長さ8.4mm、幅13.7mm、厚さ14.6mm。

（７）ナツメ　*Zizyphus jujuba* Mill.　核　クロウメモドキ科

暗褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で上部が尖る。縦方向の不規則な深い溝がある。長さ13.2mm、幅8.3mm。

（８）クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　果実　ブナ科

黒褐色で、完形なら側面は広卵形。表面は平滑で細い縦筋がみられる。底面の殻斗着痕はざらつく。残存高26.6mm、幅27.4mm、残存厚10.1mm。

（９）ヒメグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. var. *cordiformis* (Makino) Kitam.　核　クルミ科

褐色～暗褐色で、上面観は楕円形、側面観は先端が尖る広卵形。外面中央にやや深い溝が走るが、それ以外は表面が平滑でオニグルミと異なる。明瞭な縫合線がある。完形個体は高さ26.7mm、幅20.4mm、厚さ18.4mm（図版第50-12）、動物食痕のある個体は高さ28.7mm、残存幅17.2mm、厚さ17.8mm（図版第50-13）、半割の個体は高さ25.3mm、幅20.2mm、残存厚8.6mm（図版第50-14）。

（10）オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam.　核　クルミ科

淡褐色～暗褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。溝や凹凸の間には微細な皺がある。内部は二室に分かれる。完形個体は高さ32.0mm、幅22.0mm、厚さ22.2mm（図版第50-15）、動物食痕のある個体は高さ25.8mm、残存幅18.1mm、

厚さ17.6mm（図版第50-16）、打撃痕のある個体は残存高26.0mm、幅24.5mm、残存厚11.7mm（図版第50-17）、半割の個体は高さ30.0mm、幅21.5mm、残存厚9.3mm（図版第50-18）。

（11）サンショウ　*Zanthoxylum piperitum* (L.) DC.　種子　ミカン科

黒褐色で、上面観は卵形、側面観は楕円形ないし倒卵形。縦方向に中央部まで伸びる稜線があり、短い臍が斜め下を向く。網目状隆線では低く細かい。種皮は厚く硬い。長さ4.4mm、幅3.2mm、厚さ2.9mm。

（12）カキノキ属　*Diospyros* spp.　種子　カキノキ科

黒褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。表面にはちりめん状の皺がみられる。残存長3.8mm、残存幅2.8mm。

（13）ヒエ属　*Echinochloa* spp.　有ふ果・炭化有ふ果・炭化種子（頴果）イネ科

有ふ果は赤褐色。側面観は紡錘形で、縦方向に細かい筋がある。内頴は膨らまず、外頴は中央部が最も膨らむ。長さ2.2mm、幅1.2mm。炭化種子の側面観は卵形。断面は片凸レンズ形で、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広く、長さが全長の2/3程度と長い。臍は幅が広いうちわ型。長さ1.6mm、幅1.2mm。那須（2017）に示された現生種の長幅比と比較すると、栽培型のヒエより野生植物のタイヌビエやイヌビエに近い。

（14）イネ　*Oryza sativa* L.　籾殻・炭化籾殻・炭化種子（頴果）・炭化種子塊　イネ科

籾殻は黄褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形。２条の稜があり、表面には四角形の網目状隆線と隆線状の顆粒状突起が規則正しく並ぶ。長さ7.6mm、幅3.8mm。炭化籾殻は、長さ7.5mm、残存幅1.9mm。炭化種子（頴果）の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の２本の浅い溝がある。長さ5.4mm、幅2.9mm。炭化種子は最大で残存長42.5mm、残存幅43.5mm、残存厚42.5mm。

（15）エノコログサ属　*Setaria* spp.　有ふ果　イネ科

赤褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形。先端がやや突出するが残存していない。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。残存長1.5mm、幅0.9mm。

（16）コムギ　*Triticum aestivum* L.　炭化種子（頴果）イネ科

上面観と側面観は楕円形。腹面中央部には上下に走る１本の溝がある。背面の下端中央部には扇形の胚がある。長さ2.8mm、幅2.1mm、厚さ1.6mm。

（17）トウガン　*Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn.　種子　ウリ科

赤褐色で、倒卵形。表面は平滑。基部の両側には薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり、中央部は窪む。長さ10.7mm、幅6.6mm。

（18）スイカ　*Citrullus lanatus* (Thunb.) Matsum. et Nakai　種子　ウリ科

赤褐色で、倒卵形。表面は平滑。基部の両側には薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚が、わずかにみられる。長さ11.6mm、幅6.8mm。

（19）メロン仲間　*Cucumis melo* L.　種子　ウリ科

赤褐色で上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅狭でやや厚みがある。長さ7.7mm、幅3.5mm。

（20）ニホンカボチャ　*Cucurbita moschata* (Duchesne ex Lam.) Duchesne ex Poir.　果実（果柄）ウリ科

黄褐色で、丸い五角形の基部と大きな頂点があり木質。長さ26.4mm、幅30.2mm、厚さ31.8mm。

（21）ヒョウタン仲間　*Lagenaria siceraria* (Molina) Standl.　果実・種子　ウリ科

果実は暗赤褐色で、完形ならば円筒形。表面は平滑で、やや光沢がある。壁は厚い。果柄や花梗痕、花落ち部分は残存していない。残存長85.0㎜、残存幅125.0㎜。種子は淡褐色で上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや湾曲しており左右は非対象。先端はW字状で基部から先端まで浅く広い溝が２本走る。壁はややスポンジ質。長さ15.5㎜、幅7.6㎜。

（22）ソバ　*Fagopyrum esculentum* Moench　果実　タデ科

暗赤褐色で、完形ならば上面観は三角形、側面観は頂部の尖った卵形。稜となる辺縁部はやや薄い。残存長5.1㎜、残存幅4.1㎜。

（23）ナス　*Solanum melongena* L.　種子　ナス科

赤褐色で、上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面に畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。残存長3.0㎜、幅3.6㎜。

（24）ナス属　*Solanum* spp.　種子　ナス科

黄褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には細かい畝状突起をもつ網目状隆線がある。長さ1.3㎜、幅1.8㎜。

（25）ゴマ　*Sesamum orientale* L.　種子　ゴマ科

黄褐色で、完形ならば上面観は扁平、側面観は狭倒卵形。表面には平滑で縁沿いに浅い溝がある。残存長3.0㎜、残存幅1.4㎜。

（26）シソ属　*Perilla* spp.　果実　シソ科

赤褐色で歪な球形。端部には着点がある。表面に低い隆起で多角形の網目状隆線がある。長さ1.4㎜、幅1.3㎜。

（27）不明　Unknown　種実

黒褐色で、破片のため全体形は不明である。表面は平滑で光沢がある。残存長13.4㎜、残存幅8.4㎜。

考察

江戸時代の溝や廃棄土坑から取り上げた大型植物遺体を同定した結果、栽培植物のモモやウメ、スモモ、イネ、トウガン、スイカ、ニホンカボチャ、メロン仲間、ヒョウタン仲間が得られた。食用可能な植物としてはカヤとイチョウ、サクラ属サクラ節、ナシ亜科、ナツメ、クリ、ヒメグルミ、オニグルミが得られた。

16−2調査区の溝63・184・207からは栽培植物で果樹のモモ、畑作物のメロン仲間が得られた。メロン仲間は、藤下（1984）によれば、種子が長さ6.0㎜以下の雑草メロン型、長さ6.1〜8.0㎜のマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1㎜以上のモモルディカメロン型の概ね３群に分けられるという。今回、溝63から得られた状態の良い種子10点の大きさは、長さ6.1〜7.5（平均6.9±0.5）㎜で、藤下（1984）の分類では、マクワウリ・シロウリ型の大きさであった（第40表）。モモの核は果肉を食べた後に、食用にならない核の部分が廃棄され、遺構内に堆積した可能性がある。モモ核には、ネズミ類によるとみられる動物食痕が残る個体が確認された。ほかにも食用可能な植物としてナシ亜科やクリ、オニグルミが得られた。半割のモモとオニグルミの個体には打撃痕はみられなかったため、自然に割れた可能性がある。クリは食用となる子葉を取り出したのちに、不要な果実が捨てられた可能性がある。針葉樹のマツ属複維管束亜属の球果も僅かに産出しており、これらの遺構周辺に針葉樹のアカマツやクロマツが生育していたと推定される。

第39表　福井城跡出土の大型植物遺体分析（２）（括弧内は破片数）

分類群	部位	16-2地区						16-3地区		16-4地区												16-5地区				
遺構		63				184	207	90	180	2					3		29	30	65		167	4				
遺物No.		6	10	8	-	2,4,6	4	4	1	1	3	6	7	8	2,7,10	2,5~7	2	5	1,7	3	2	18	12	10,14,20,24,25,27	10,11,14,15,17,20,23~27	22
グリッド		J6 A6			A6	I5	J6	G1	F10	H7	H7	I7	I7	I7	I6		G7	I7	I6	I6	F5	B9	B9	B9 B8	A9 B9 B8	B9
	部位/層位	上層		下層	種子集中部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1層	1層	2層	2層	3層
マツ属複維管束亜属	毬果			1		1																	1	13		
スギ	毬果																									
カヤ	種子																								(1)	
イチョウ	種子															(3)										
モモ	核（完形）	1	1	6		24						4	1	37		3	1	1	2		2		1		52	10
	核（一部破損）						1											1							2	
	核（動物食痕）	(1)		2		1							1													1
	核（半割）			(6)		(1)			(1)			(7)		(2)		(2)		(2)			(1)				(2)	
	核（破片）	(2)				(1)						(1)		(2)											(2)	
ウメ	核（完形）													2												
	核（動物食痕）																									
	核（破片）															(4)										
スモモ	核																									
サクラ属サクラ節	核																									
ナシ亜科	果実					2 (4)																				
クリ	果実					1																(5)				
ヒメグルミ	核（完形）																									
	核（動物食痕）																									
	核（半割）															(8)										
	核（破片）																									
オニグルミ	核（完形）			1																						9
	核（一部破損）																									
	核（動物食痕）																									3
	核（打撃痕）																									
	核（一部焦損）			(1)			(1)									(1)									(1)	
	核（半割）																								(7)	
	核（破片）																						(1)		(1)	
サンショウ	種子																					245 (2)				
ツバキ属	種子																									9
ナツメ	核																									
カワラスガナ	果実									1																
ヒエ属	有ふ果									16	19 (1)															
	炭化有ふ果										1 (2)															
イネ	籾殻									1 (+)	3 (+)									2						
	炭化籾殻										4 (+)															
	炭化種子塊							(2)																		
キケマン属	種子				7																					
キンポウゲ属	果実									1																
ノブドウ	種子										1															
トウガン	種子																									
スイカ	種子																									
メロン仲間	種子				1851 (124)					181 (15)	1									1		89 (9)				
ヒョウタン仲間	果実																									
	種子																									
ニホンカボチャ	果実（果柄）														3											
スミレ属	種子									1																
サナエタデ－オオイヌタデ	果実				1																					
イヌタデ	果実									1																
ノミノフスマ	種子									1																
ミドリハコベ	種子									1																
アカザ属	種子									1																
トウバナ属	果実										1															
コウゾリナ	果実									1																
オトギリソウ属	種子									1																
ゴキヅル	種子																									
不明	種実					(1)																				
不明	昆虫遺体									(+)	(++++)															

分類群	地区	16-6地区														16-7地区	
	遺構	18上層	18上層	18下層	18下層	18下層	18下層	18下層	19	19	126	140	140	140	294	27	30
	遺物No.	1～3	6	3	3,5	7	9	8	4	1～8	1,3	1	6	8	1	3,8	1,2,9,10
	グリッド	D7～D9	D8 D9	D9	D7 D8	D8 D9	D9	D8 D9	D9	D7～D9	D7 C7	D7	C8	D7・8 C7・8	D7 C7	A2	A1・2 B2
	層位/層位	-	トレンチ1	-	上面フヨウ土	3	-	下面ミゾ	フヨウ土	-	-	ドウロ1	ドウロ2	ドウロ3	-	-	-
マツ属複維管束亜属	葉束		1						1	8				1			
スギ	球果						1										
カヤ	種子																
イチョウ	種子																
モモ	核（完形）	2		1	1	5				16	3	1	1	3	1		2
	核（一部破損）									2	2			1			
	核（動物食痕）																
	核（半割）				(1)					(2)	(2)	(1)		(4)			
	核（破片）										(1)			(1)			
ウメ	核（完形）																1
	核（動物食痕）									1							
	核（破片）									(2)							
スモモ	核														1		
サクラ属サクラ節	核																1
ナシ亜科	果実																
クリ	果実									(1)	(5)						
ヒメグルミ	核（完形）								1	4							
	核（動物食痕）								2(3)	24(9)							
	核（半割）									(7)							
	核（破片）								(10)	(4)							
オニグルミ	核（完形）	3			1				1	8							
	核（一部破損）	1								1							
	核（動物食痕）								2	10(3)							
	核（打撃痕）	(1)								(2)							
	核（一部焦痕）			(1)						(1)							
	核（半割）	(3)		(1)	(1)			(1)		(12)	(1)						
	核（破片）	(1)								(13)							
サンショウ	種子																
ツバキ属	種子																
ナツメ	核																1
カワラスガナ	果実																
ヒエ属	有ふ果																
	炭化有ふ果																
イネ	籾殻																
	炭化籾殻																
	炭化種子塊																
キケマン属	種子																
キンポウゲ属	果実																
ノブドウ	種子																
トウガン	種子															18(1)	
スイカ	種子															1	
メロン仲間	種子				5											18(3)	
ヒョウタン仲間	果実				(26)												
	種子				49(1)												
ニホンカボチャ	果実（果柄）																
スミレ属	種子																
サナエタデ－オオイヌタデ	果実																
イヌタデ	果実																
ノミノフスマ	種子																
ミドリハコベ	種子																
アカザ属	種子																
トウバナ属	果実																
コウゾリナ	果実																
チドメグサ属	種子																
ゴキヅル	種子								1(1)								
不明	種実																
不明	昆虫遺体																

*:1-9, **:10-49, ***:50-99, ****:100以上

16-3調査区の土坑90・180からは栽培植物のモモとイネが得られた。イネ炭化種子塊の表面の粒同士は糊着しており、多くの種子は粒の形状がはっきりと確認できなかった。膨張や潰れなどによって著しく変形している種子も含まれており、調理中ないしは調理後のご飯と判断した。イネ炭化種子塊は、炭化種子の完形換算個体数で4559点ほどと考えられる。

16-4調査区の土坑２・３・29・30・65と井戸167からは、栽培植物で果樹のモモやウメ、水田作物のイネ、畑作物のメロン仲間とニホンカボチャ、野生植物で食用利用可能なヒメグルミとオニグルミが得られた。土坑２から出土したモモ核の任意10個体の大きさを計測した結果、高さ平均31.0±2.6mm、幅平均21.0±2.4mm、厚さ平均15.0±1.7mmで、縦長の個体が多かった（第41表）。山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代は核長が24.6～26.5mmと比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるとされる。さらに奈良・平安時代のモモの核長は23.6～26.6mm、鎌倉時代には大きさの変異幅が大きく、江戸時代後期頃になると、大型になり平均核長26.9mm、最大で38.0mm程度の核がみられるとしている。今回のモモ核は高さの平均が31.0±2.6mmで、山梨県内の江戸時代後期のモモよりも大きめであった。土坑３から得られたオニグルミでは一部焦痕のある個体がみられ、人為的に割られて中の子葉を食用のために取り出した可能性がある。栽培植物であるイネの籾殻やメロン仲間の種子、ニホンカボチャの果柄も得られており、食べられない部位が遺構に廃棄された可能性がある。土坑２からは野生の草本植物で、湿地性植物のカワラスガナやヒエ属、ノミノフスマを産出した。ほかに乾いた場所に生育するキンポウゲ属やノブドウ、スミレ属、イヌタデ、ミドリハコベ、アカザ属、トウバナ属、コウゾリナ、チドメグサ属が産出しており、周辺に生育していたと考えられる。

第40表　メロン仲間種子の大きさ（単位：mm）

		長さ	幅
16-2地区	遺構63	6.2	3.0
		7.5	3.6
		6.6	3.1
		6.8	3.2
		7.4	3.4
		7.2	3.5
		7.4	3.7
		6.1	3.0
		7.2	3.5
		7.0	3.4
最小		6.1	3.0
最大		7.5	3.7
平均		6.9	3.3
標準偏差		0.5	0.3

第41表　モモ核の大きさ（単位：mm）

		長さ	幅	厚さ
16-4地区	遺構2	35.4	23.2	16.1
		34.0	24.4	17.6
		30.9	20.4	14.6
		30.0	21.8	15.5
		34.2	22.9	15.5
		29.9	19.8	14.9
		29.8	22.3	16.5
		27.2	20.3	14.2
		29.1	18.7	13.9
		29.4	16.4	11.3
最小		27.2	16.4	11.3
最大		35.4	24.4	17.6
平均		31.0	21.0	15.0
標準偏差		2.6	2.4	1.7

16-5調査区の溝４からは、栽培植物のモモとメロン仲間、野生植物で食用として利用可能なカヤとクリ、オニグルミ、サンショウが得られた。サンショウは油として利用された可能性もある。３層から出土したツバキ属は周辺に生育していた種子が落下し、遺構内に堆積した可能性がある。ツバキ属種子は油がとれるため利用された可能性もある。また、針葉樹のマツ属複維管束亜属も得られた。

16-6調査区の溝18上下層と溝19、土坑126、道路140、溝294からは栽培植物のモモとウメ、スモモ、ヒョウタン仲間、メロン仲間、野生植物では食用として利用可能なクリとヒメグルミ、オニグルミが得られた。ヒョウタン仲間は果実を加工して容器等に利用される。ただ今回得られた果実は破片であり、花梗痕もしくは花落ち部分は残存しておらず全体形は不明であった。

16-7調査区の土坑27・30からは栽培植物のモモやウメ、トウガン、スイカ、メロン仲間得られており、食べられない部位が遺構に廃棄された可能性がある。野生植物では食用として利用可能なサクラ属サク

ラ節とナツメが得られており、果肉を食べた後に食用にならない核の部分が廃棄され堆積した可能性がある。

16－３調査区の土坑181からは栽培植物で水田作物のイネ、畑作物のアワとコムギ、トウガン、メロン仲間、ソバ、ナス、ゴマが得られており、周辺の水田や畑地から流れ込んだ可能性や、居住域において利用された後に食べられない部位や残滓が廃棄された可能性が考えられる。野生植物では食用可能な分類群としてはキイチゴ属とヒメコウゾ、クワ属、キハダ、サンショウ、カキノキ属、ニワトコ、タラノキ、ウド等が得られた。野生の草本植物では沈水植物のホッスモ、湿生～抽水植物のヘラオモダカとオモダカ属、コナギ、スゲ属、カワラスガナ、ヒメクグ、カヤツリグサ属、ヒエ属、タネツケバナ属、ノミノフスマ等、やや湿った道端に生育するタカサブロウが産出した。ほかに乾いた草地や荒地、畑などに生育するメヒシバ属とオヒシバ属、エノコログサ属、キケマン属、ハギ属、オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ属、スミレ属、イヌタデ、ミチヤナギ属、ウシハコベ、ミドリハコベ、アカザ属、スベリヒユ属、オカトラノオ属、ザクロソウ、ナス属、オオバコ属、キランソウ属、トウバナ属、シソ属、キク科、オトコエシ属、チドメグサ属等が得られており、周辺に草地が存在したと考えられる。また林縁に生育するカラムシ属とミズ属も得られた。

引用文献

藤下典之　1984「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『文化財に関する保存科学と人文・自然科学－総括報告書』：同朋舎出版．638-654.

那須浩郎　2017「縄文時代にヒエは栽培化されたのか？」SEEDS CONTACT　４．27-29.

新津　健　1999「遺跡から出土するモモ核について―山梨県内の事例から―」山梨考古学論集　Ⅳ．361-374.

米倉浩司・梶田　忠　2003「BG Plants 和名－学名インデックス（YList）」http://ylist.info

２　貝類遺体

溝や廃棄土坑等から出土した貝類について報告する。

試料と方法

試料は各遺構と整地土から採取された。貝類遺体の点数は16－２調査区で31点（シジミ属殻皮は除く）、16－４調査区で135点、16－５調査区で87点、16－６調査区で66点、16－７調査区で153点の計472点である。それらの資料観察は肉眼で行い、標本との比較により同定した。

最小個体数の算出は、腹足綱（巻貝）については、ほぼ完存と殻軸が1/2以上が残存する個体の合計数とした。それらがない遺構では蓋を数えた。蓋も無く破片だけの遺構では複数があっても１とした。斧足綱（二枚貝）は左右殻の数の多い方を最小個体数とし、左右不明の場合は複数の破片があっても、１とした。

結果と考察

同定された分類群を第42表に、同定結果を第44表に示す。同定されたのは腹足綱でミミガイ科、サザエ、アカニシ、斧足綱でハマグリ、マルスダレガイ科、フネガイ科、イタヤガイ、イタヤガイ科、マガキ、イタボガキ科、イガイ科、シジミ属である。

最小個体数は、16－７調査区の土坑27、16－４調査区の土坑29・30、16－６調査区の土坑126等を除きサ

ザエの出土が中心となる。特に16－４調査区の土坑65や16－５調査区ではサザエの出土が卓越する。16－７調査区の土坑27ではシジミ属の出土が多い。

殻頂が欠損して種の同定に至らない試料も多いが、16－５調査区の溝４では同一個体と考えられるミミガイ科の破片が多く出土した。大きさや殻の特徴からするとメガイアワビと思われるが定かではない。イタヤガイには内面から外面方向に穿たれた２つの穿孔がみられた。ふくらみの強い右殻に穿孔があるため柄を付けて貝杓子として利用したと考えられる。

第42表　福井城跡出土貝類の一覧

腹足綱	Gastropoda
	ミミガイ科　Haliotoidea sp.
	サザエ　*Turbo sazae*
	アカニシ　*Rapana venosa*
斧足綱	Pelecypoda
	フネガイ科　Arcidae gen. et sp. indet.
	イタヤガイ科　Pectinidae sp.
	イタヤガイ　*Pecten albicans*
	イタボガキ科　Ostreidae spp.
	マガキ　*Crassostrea gigas*
	シジミ属　*Corbicula* spp.
	マルスダレガイ科　Veneridae sp.
	ハマグリ　*Meretrix lusoria*
	イガイ科？　Mytilidae sp.

第43表　福井城跡出土貝類の最小個体数

遺構	ミミガイ科	サザエ	アカニシ	腹足綱の一種	ハマグリ	ハマグリ？	マルスダレガイ科	フネガイ科	イタヤガイ	イタヤガイ科	マガキ	イタボガキ科	イガイ科？	シジミ属	シジミ属？	斧足綱の一種
162-63		3	1	1										1		
162-184		1														
162-207		1														
164-29								1								
164-30		1		1										9		
164-65		37		1			1							1		1
164-167		5										1		1		
165-4	1	24		1	1	1					1	1		3	1	1
166-21		10	1	1												1
166-126				1									1	1		
166-294		1		1												
167-27	1	7			1		1		1	1				29		1
167-30		5	1	1												

出土した貝類を生息域でみると、サザエは内湾および外海の岩礁域に、アワビ類は外海の岩礁域に生息する。ミミガイ科がメガイアワビとすれば、水深５～30mの岩礁に生息する。ハマグリは内湾の砂泥底に、アカニシは内湾泥底に生息する。海産貝類はいずれも沿岸部に生息する貝類が中心で、貝の採取活動は沿岸部の水深の浅い海域で行われたと考えられる。

これらの貝類はいずれも食用として利用されたと考えられ、イタヤガイを除き、殻に人為的な加工の痕跡は認められなかったため、食材として利用された後に殻が廃棄されたと考えられる。

参考文献

奥谷喬司編2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会．1173

第44表　福井城跡出土の貝類遺体同定結果

資料番号	遺構	層位	グリッド	取上番号	分類群	部位	左右	状態	数量	備考
1	162-63	下層	A・J6	8	サザエ	殻軸	—	破片	5	
					シジミ属	殻皮	不明	破片	多数	
				11	サザエ	殻軸	—	1/2以上残	3	
				13	サザエ	殻軸	—	破片	2	
					アカニシ	殻軸	—	1/2以上残	1	
					腹足綱	殻	—	破片	17	
2	162-184		I5	4	サザエ	殻軸	—	破片	2	
3	162-207		J6	4	サザエ	殻軸	—	破片	1	
4	164-29		G7	2	ツネガイ科	殻軸	不明	破片	2	
5	164-30		I7	2	シジミ属	殻皮	不明	破片	10	9個体分
				5	サザエ	殻軸	—	破片	2	
					腹足綱	殻	—	破片	2	
6	164-65		I6	3	シジミ属	殻	左	破片	1	
						殻	右	破片	1	
						殻	不明	破片	1	
					サザエ	殻軸	—	破片	14	
						殻軸	—	1/2以上残	16	
						蓋	—	破片	1	
					腹足綱	殻	—	破片	7	
					マルスダレガイ科	殻	不明	殻頂なし	1	バインダー処理済み
					斧足綱	殻	不明	破片	2	
				5	サザエ	殻軸	—	1/2以上残	1	
				6	サザエ	殻軸	—	破片	7	
					腹足綱	殻	—	破片	1	
				7	シジミ属	殻	左	ほぼ完存	1	
						殻皮	不明	破片	1	
					サザエ	殻軸	—	破片	16	
						殻軸	—	1/2以上残	12	
						蓋			6	ほぼ完存3・破片3
					腹足綱	殻	—	破片	3	
				9	サザエ	殻軸	—	破片	2	
						殻軸	—	1/2以上残	8	
					腹足綱	殻	—	破片	2	
7	164-167		F5	1	シジミ属	殻皮	—	破片	1	
					サザエ	殻軸	—	破片	5	
						殻軸	—	1/2以上残	4	
					斧足綱	殻	不明	破片	2	
				2	サザエ	殻軸	—	1/2以上残	1	
		石垣内		4	サザエ	殻軸	—	破片	1	
					イタボガキ科	殻	不明	破片	1	
8	165-4	Ⅱ層	B9	14	シジミ属	殻	右	ほぼ完形	1	
					サザエ	殻軸	—	破片	6	
						殻軸	—	1/2以上残	13	
					腹足綱	殻	—	破片	14	
					斧足綱	殻	不明	破片	5	
					イタボガキ科	殻	不明	破片	2	
				18	サザエ	殻軸	—	1/2以上残	11	
						殻軸	—	破片	1	
					腹足綱	殻	—	破片	4	
			B・A9	19	シジミ属	殻	左	完形	3	
						殻	右	完形	1	
						殻皮	不明	破片	5	
					シジミ属か	殻	不明	破片	2	
					マガキ	殻	右	ほぼ完形	1	
					ハマグリ	殻	左	殻頂あり	1	
					ハマグリか	殻	左	殻頂部	1	
						殻	右	殻頂部	1	
					斧足綱	殻	不明	破片	1	
					腹足綱	殻	—	破片	2	
					ミミガイ科	殻	—	破片	12	メガイアワビ？同一個体
9	166-21	上面フヨウ土	D8	3	サザエ	殻軸	—	破片	1	
				5	腹足綱	殻	—	破片	5	
			D・D9	7	サザエ	殻軸	—	破片	2	
						殻軸		1/2以上残	7	
					アカニシ	殻	—	ほぼ完形	1	
						殻		破片	1	
						殻軸	—	破片	2	
					斧足綱	殻	不明	破片	1	
					腹足綱	殻	—	破片	13	
9	166-21		D8	8	サザエ	殻軸	—	破片	4	
						殻軸	—	1/2以上残	2	

資料番号	遺構	層位	グリッド	取上番号	分類群	部位	左右	状態	数量	備考
9	166-21		D8	9	腹足綱	殻	—	破片	5	
					サザエ	殻軸	—	1/2以上残	1	
10	166-126		B7	1	腹足綱	殻	—	破片	3	
			B・C7	3	シジミ属	殻皮	不明	破片	1	
					イガイ科か	殻	不明	破片	8	
11	166-294		B7	1	腹足綱	殻	—	破片	1	
			D7	1	腹足綱	殻	—	破片	1	
				1	サザエ	殻軸		破片	1	
			C・D7	1	腹足綱	殻	—	破片	6	
12	167-27		A2	7	サザエ	殻軸	—	破片	2	
						殻軸	—	1/2以上残	7	
					イタヤガイ	殻	右	前耳欠損	1	貝灯子、穿孔あり
						殻	右	破片	1	
					ハマグリ	殻	右	破片	1	
						殻	不明	破片	1	
					シジミ属	殻	左	ほぼ完形、破片	29	
						殻	右	ほぼ完形、破片	24	
						殻	不明	破片	1	
						殻皮	不明	破片	12	
					マルスダレガイ科	殻	不明	破片	1	
					サザエ	蓋	—	破片	4	
					ミミガイ科	殻	—	殻頂なし破片	9	
					イタヤガイ科	殻	不明	殻頂なし破片	8	
					シジミ属	殻	不明	殻頂なし破片	25	
					斧足綱	殻	不明	殻頂なし破片	11	
13	167-30		A・B2	1	サザエ	殻軸	—	1/2以上残	3	
			A2	2	サザエ	殻軸	—	1/2以上残	2	
				3	腹足綱	殻	—	破片	1	
					アカニシ	殻	—	体層部欠損	1	
					腹足綱	殻	—	破片	9	

3　動物遺体

ここでは、魚類や哺乳類等について報告する。

試料と方法

試料は各遺構と整地土から採取された。今回、同定した哺乳類遺体の点数は、16−２調査区で31点、16−３調査区で６点、16−４調査区で54点、16−５調査区で45点、16−６調査区で135点、16−７調査区で１点の計272点である。ほかに整地層などから骨角器３点が出土しており、これらについても素材同定を試みた。

試料の観察は肉眼で行い、現生標本との比較により部位と分類群を同定した。鳥類や哺乳類については同定が可能な骨端部が残る試料を中心に行った。ニワトリは江田・井上（2011）をもとに判別した。

結果

同定された分類群を第45表に、同定結果を第46表に示す。以下、調査区ごとにその特徴を述べる。

16−２調査区

魚類ではタイ科、マダイ亜科、カレイ科、ブリ属が同定された。ブリ属の椎骨には、刃物による切断の痕跡が認められ、マダイ亜科の歯骨は焼けて白色を呈していた。

鳥類ではサギ科とカラス科の上腕骨が同定された。

哺乳類ではウシ、ウシまたはウマ、イノシシまたはブタ、イヌが同定された。ウシの角突起には鋸による斜めの切り込みが認められた。骨角器の素材となる角鞘を獲得するための痕跡と考えられる。ウシまたはウマとした試料は、脛骨の骨幹部破片だが、骨端部が欠損しており判別できなかった。イノシシまたはブタは下顎骨が出土しており、第２後臼歯が未萌出のため幼獣と考えられた。イヌでは上顎骨と下顎骨が出土している。下顎骨で少なくとも３個体が認められた。

第45表　福井城跡出土動物遺体一覧

脊椎動物門　Vertebrata
硬骨魚綱　Osteichthyes
　　カレイ科　Pleuronectidae sp.
　　タイ科　Sparidae sp.
　　マダイ亜科　Pagrinae sp.
　　マダイ　*Pagrus major*
　　ブリ属　*Seriola* sp.
鳥綱　Aves
　　カラス科　Corvidae sp.
　　カモ亜科　Anatinae sp.
　　ガン亜科　Anserinae sp.
　　サギ科　Ardeidae sp.
　　キジ科　Phasianidae sp.
　　ニワトリ　*Gallus gallus domesticus*
爬虫綱　Reptilia
　　スッポン　*Pelodiscus sinensis*
哺乳綱　Mammalia
　　ネズミ科　Muridae sp.
　　ニホンジカ　*Cervus nippon*
　　イノシシまたはブタ　*Sus scrofa* or *Sus scrofa domesticus*
　　ウシ　*Bos taurus*
　　ウマ　*Equus caballus*
　　イヌ　*Canis lupus familiaris*
　　ハクジラ亜目　Odontoceti sp.

16-３調査区

魚類でタイ科、マダイ亜科、哺乳類でウマが同定された。タイ科の中には一部炭化した試料があり、火を受けたと思われる。ウマの上顎臼歯は第３前臼歯～第２後臼歯のいずれと考えられる。

16-４調査区

魚類ではマダイ亜科、マダイ、ブリ属が同定された。マダイの上後頭骨に半割を意図した切断痕があり、ブリ属の椎骨にも切断の痕が認められた。

鳥類ではサギ科、キジ科、ニワトリ、カモ亜科、ガン亜科が同定された。解体痕などは認められず、完形を保つ試料が多い。

爬虫類ではスッポンが同定された。背甲骨板の破片で、１個体に由来する試料と考えられる。

哺乳類ではニホンジカとイヌが同定された。ニホンジカでは、上腕骨や大腿骨等の主要四肢骨のほか手根骨等の細かい骨も出土している。大腿骨や脛骨は骨端の癒合していない若い個体のものであり、ほかの部位も含め、同一個体に由来する試料と考えられる。尺骨と橈骨には解体痕が認められた。

16-５調査区

魚類でブリ属、鳥類でキジ科が同定された。爬虫類ではスッポンが認められ、背甲骨板や腹骨板等多数の破片が出土している。複数個体が含まれるとみられるが、解体痕などは確認できなかった。

哺乳類ではニホンジカとイヌが同定された。イヌでは、同一個体の完形の橈骨と尺骨があり、山内(1958) をもとに骨の全長から体高を推定すると約42.3cmであった。

16-６調査区

魚類でタイ科、マダイ亜科、マダイの頭部骨が数点、鳥類でキジ科の大腿骨１点、爬虫類でスッポンの背甲骨板や腹甲骨板の破片が多数同定された。

哺乳類ではイヌ、ネズミ科、ハクジラ亜目が同定された。調査区で中心となるのはイヌであった。頭骨や上腕骨、大腿骨等の主要な四肢骨をはじめ、中手・中足骨等も出土している。土坑21では右第３中手骨が２個体含まれており、複数個体が含まれると考えられる。完形の左尺骨の全長から体高を推定す

第46表　福井城跡出土の動物遺体同定結果

資料番号	遺構	層位	グリッド	取上番号	分類群	部位	部分	左右	個数	備考
1	162-63	下層	A・J6	11	マダイ亜科	歯骨	破片	右	1	焼（白色）
					イヌ	上顎骨	P4, M1, M2残存	右	2	1個体分
					イヌ	下顎骨	C, P2～P4, M1, M2残存	右	2	2個体分
					イノシシorブタ	下顎骨	m3, M1萌出	左	1	M2未萌出
					哺乳綱	不明	破片	不明	2	
2	162-120		J5	1	タイ科	前鰓蓋骨	破片	左	1	
3	162-184		I5	2	ウシ	角突起	先端部欠損	左	1	獣による切り込み
				4	ブリ属	椎骨	尾椎	—	1	
					ブリ属	椎骨	尾椎	—	2	切断痕
					ブリ属	方骨	破片	右	1	
					カレイ科	椎骨	尾椎	—	1	
					硬骨魚綱	椎骨	破片	—	2	
				6	カラス科	上腕骨	ほぼ完形	左	1	
					ウシorウマ	肩骨	骨幹部	左	1	
					サギ科	上腕骨	ほぼ完形	左	1	
					木片	—	—	—	8	
4	162-207		J6	1	イヌ	下顎骨	C・P1（歯槽）, P2～P4, M1残存	右	1	
					イヌ	下顎骨	破片	不明	2	
5	163-181		F10	1	硬骨魚綱	不明	破片	—	1	
				2	マダイ亜科	歯骨	ほぼ完形	左	1	
					タイ科	歯骨	破片	左	1	一部炭化
					タイ科	前鰓蓋骨	破片	左	1	
					硬骨魚綱	不明	破片	—	1	
6	163-303		H2	3	ウマ	上顎臼歯	上顎第3前臼歯～第2後臼歯のいずれか	左	1	歯冠高20.9mm
7	164-2		H7	6	鳥綱	不明	破片	—	11	焼（白色）
8	164-3		H6	5	ガン亜科	尺骨	近位～骨幹部	左	1	ヒシクイサイズ
					ガン亜科	烏口骨	ほぼ完形	右	1	ヒシクイサイズ
					ガン亜科	肩甲骨	ほぼ完形	右	1	ヒシクイサイズ
					サギ科	上腕骨	ほぼ完形	左	1	
				10	キジ科	足根中足骨	ほぼ完形	右	1	
					ニワトリ	上腕骨	ほぼ完形	左	1	
					ニワトリ	脛足根骨	ほぼ完形	左	1	
9	164-10		H7	3	サギ科	足根中足骨	ほぼ完形	右	1	
					鳥綱	脛足根骨	骨幹部破片	右	1	サギ科？
					哺乳綱	不明	破片	—	1	
					ニホンジカ	尺骨	近位～骨幹部	右	1	
						橈骨	ほぼ完形	右	1	同一個体、尺骨・橈骨骨幹部（近位側）に解体痕
						上腕骨	ほぼ完形	右	1	
						大腿骨	骨幹部	右	1	同一個体
						大腿骨	遠位端	右	1	
						中手骨	ほぼ完形	右	1	
						脛骨	ほぼ完形	右	1	同一個体
						脛骨	近位端	右	1	
						基節骨	ほぼ完形	不明	1	
						中足手根骨	ほぼ完形	右	1	
						副手根骨	ほぼ完形	右	1	
						第4手根骨	ほぼ完形	右	1	
						菱骨	ほぼ完形	右	1	
						肩甲骨	烏口突起	右	1	癒合
				4	カモ亜科	尺骨	破片	右	1	
						基節骨	ほぼ完形	不明	1	
						距骨	ほぼ完形	右	1	
					ブリ属	椎骨	尾椎	—	1	切断痕
					木片	—	—	—	2	
10	164-29		G7	2	マダイ亜科	歯骨	ほぼ完形	右	1	
					マダイ	上後頭骨	破片	—	1	切断痕（半割）
					カモ亜科	尺骨	ほぼ完形	—	1	
11	164-65		I6	2	ブリ属	椎骨	尾椎	—	1	
				3	ニワトリ	烏口骨	ほぼ完形	右	1	
				7	イヌ	肩甲骨	ほぼ完形	左	1	
					硬骨魚綱	不明	破片	不明	2	
				9	マダイ	上後頭骨	破片	—	1	切断痕（半割）
12	164-113		I6	2	スッポン	背甲骨板	第1肋骨板～第4肋骨板	右	4	同一個体
13	165-4	Ⅱ層	B9・B8	19	硬骨魚綱	不明	破片	—	3	
					スッポン	背甲骨板	破片	—	5	1個体分
					スッポン	背甲骨板	破片	—	7	1個体分
					スッポン	背甲骨板	破片	—	6	
					スッポン	頭骨板	破片	—	1	
					スッポン	上腹骨板	完形	左	1	同一個体

資料番号	遺構	層位	グリッド	取上番号	分類群	部位	部分	左右	個数	備考
13	165-4	Ⅱ層			スッポン	上腹骨板	完形	右	1	
					スッポン	内腹骨板	完形	—	1	
					スッポン	中腹骨板	完形	左	1	
					スッポン	中腹骨板	完形	右	1	
					スッポン	下腹骨板	完形	左	1	
					スッポン	剣上腹骨板	完形	右	1	
					哺乳綱	肋骨	破片	不明	1	
			B8	20	スッポン	背甲骨板	第Ⅰ肋骨板	不明	1	
			B9		イヌ	腰椎	ほぼ完形	—	1	第4腰椎
					イヌ	下顎骨	M1残存	右	1	
			B8	22	イヌ	第3中手骨	完形	右	1	
					哺乳綱	不明	破片	不明	2	
					キジ科	足根中足骨	鷹爪部欠損	左	1	
			B9・B8	23	イヌ	橈骨	完形	左	1	同一個体、橈骨全長129.3mm、尺骨全長153.1mm
					イヌ	尺骨	完形	左	1	
					哺乳綱	下顎骨	破片	不明	1	
			B9・B8	25	イヌ	橈骨	遠位部欠損	左	1	
			B9・B8	26	ブリ属	椎骨	尾椎骨	—	1	
		Ⅲ層	A9	30	イヌ	尺骨	遠位部欠損	左	1	
			B9	31	ニホンジカ	尾甲骨	ほぼ完形	左	1	
			B9	32	イヌ	橈骨	骨幹部	左	1	
14	166-19		D9	6	哺乳綱	肋骨	破片	不明	2	
				7	イヌ	尾甲骨	ほぼ完形	右	1	
15	166-21	上面フヨウ土	D8	3	キジ科	大腿骨	骨幹部	左	1	
					イヌ	胸椎	ほぼ完形	—	3	
					イヌ	腰椎	ほぼ完形	—	3	
					イヌ	第3中手骨	ほぼ完形	右	2	2個体分
					イヌ	第5中手骨	ほぼ完形	右	1	
					イヌ	第4中足骨	ほぼ完形	左	1	
					イヌ	第5中足骨	ほぼ完形	左	1	
					イヌ	第2中足骨	ほぼ完形	右	1	
					イヌ	第3中足骨	ほぼ完形	右	1	
					イヌ	第4中足骨	ほぼ完形	右	1	
					イヌ	第3中手骨	ほぼ完形	左	1	
					イヌ	第4中手骨	ほぼ完形	左	1	
					イヌ	第2中足骨	ほぼ完形	左	1	
					イヌ	第3中足骨	ほぼ完形	左	1	
					イヌ	肋骨	破片	不明	2	
					イヌ	橈骨	骨幹部	左	1	
			D8	5	イヌ	上腕骨	骨幹～遠位	左	1	
					イヌ	寛骨	腸骨一部欠損	左	1	
					イヌ	寛骨	腸骨および座骨の一部欠損	右	1	
					イヌ	大腿骨	近位端および遠位端一部欠損	左	1	
					イヌ	大腿骨	近位部一部欠損	右	1	
			D8・D9	7	イヌ	頭蓋骨	左：T3、C、P3、P4、M1、M2 右：C、P2～P4、M1、M2	—	1	
					イヌ	上腕骨	骨幹～遠位	右	1	
					イヌ	尺骨	近位	右	1	
					イヌ	寛骨	ほぼ完形	左	1	
					イヌ	大腿骨	近位端および遠位端一部欠損	左	1	
					イヌ	橈骨	近位端および遠位端一部欠損	左	1	
					イヌ	橈骨	近位端および遠位端一部欠損	右	1	
					イヌ	基節骨	ほぼ完形	不明	1	
					イヌ	胸椎	ほぼ完形	—	1	
					イヌ	腰骨	ほぼ完形	右	1	
					哺乳綱	肋骨	ほぼ完形	左	1	肋骨頭に解体痕
					哺乳綱	不明	破片	—	2	
	166-21		D8	8	マダイ	前鰓骨	破片	—	1	
					マダイ亜科	前上顎骨	ほぼ完形	左	1	
					マダイ亜科	前鰓蓋骨	ほぼ完形	右	1	
					タイ科	尾甲骨	破片	左	1	
					硬骨魚綱	不明	破片	不明	4	
					哺乳綱	肋骨	破片	不明	6	
					哺乳綱	尾椎	破片	—	2	
					哺乳綱	不明	破片	不明	1	
					イヌ	腰椎	ほぼ完形	—	5	
					イヌ	仙椎	ほぼ完形	—	1	
					哺乳綱	不明	破片	不明	1	
					イヌ	橈骨	近位～骨幹部	左	1	
					イヌ	下顎骨	M2残存	右	1	
					イヌ	尺骨	完形	左	1	全長155.0mm

資料番号	遺構	層位	グリッド	取上番号	分類群	部位	部分	左右	個数	備考
15	166-21		D8	8	イヌ	橈骨	近位～骨幹部	右	1	
					イヌ	寛骨	腸骨および座骨欠損	左	1	
					イヌ	寛骨	ほぼ完形	左	1	同一個体
					イヌ	寛骨	ほぼ完形	右	1	
16	166-294		D7	1	スッポン	背甲骨板	破片	不明	43	
					スッポン	腹甲骨板	破片	不明	5	
					イヌ	肩甲骨	破片	右	1	
					イヌ	上腕骨	完形	右	1	同一個体、上腕骨全長147.9mm、尺骨全長173.1mm、橈骨全長145.2mm
					イヌ	尺骨	完形	右	1	
					イヌ	橈骨	完形	右	1	
					ハクジラ亜目	椎骨	破片	—	1	イルカ類
					ハクジラ亜目	不明	破片	—	1	鯨骨？
			B7		ネズミ科	臼歯骨	破片	—	1	
					ネズミ科	下顎骨	完形	右	1	
					ネズミ科	寛骨	ほぼ完形	左	1	同一個体
					ネズミ科	寛骨	ほぼ完形	右	1	
17	167-30		A2	4	ニワトリ	足根中足骨	鷹爪部欠損	左	1	
骨角器										
資料番号	遺構	層位	グリッド	取上番号	分類群	部位	部分	左右	個数	備考
18	167-トレンチ6	自然堆積層	J2・J3	3	ニホンジカ	角	眉による切断、又部分に穿孔			
19	164-2		F5		独生哺乳類	肋骨	へら状の骨製品、緻密質を利用、全体のによく研磨			
20	162	整地層Ⅰ	B6		不明	不明	櫛、表面はざらつき、わずかに光を透過、げっ歯類の咬痕あり			

ると約42.7cmであった。溝294では同一個体で完形の右上腕骨および橈骨、尺骨が確認された。骨の全長から体高を推定すると（山内1958）、約46cmであった。ハクジラ亜目は小型の椎骨であり、イルカ類と考えられる。

16-７調査区

ニワトリの足根中足骨が１点認められたのみである。

骨角器の素材同定

16-２・４・７調査区からは骨角器が出土している。16-７調査区のトレンチ６から出土したのは、ニホンジカの角で作られた骨角器である（図版第51）。鹿角の又部分が鋸で切断され、又部分には１箇所の穿孔が確認できる。16-４調査区の土坑２から出土したのは、へら状の骨製品である。大型の陸生哺乳類の四肢骨を利用したと考えられる。緻密質を利用しており、全体的によく研磨されている。16-２調査区の整地土１から出土したのは歯の欠損した櫛である。表面は全体的にざらついており、僅かに光を透過する。長さ129.6mm、幅29.6mm、厚さは３mmである。骨や角のような緻密さはない。ある程度の大きさの板状の素材が必要である点を踏まえると、鹿角やウシ・ウマ等の四肢骨は除外してもよいと考えられる。同調査区の溝184からは、鋸による切り込みのあるウシの角突起が出土しており、本製品についてもウシの角鞘の可能性を考えたが、現生ウシの角鞘と比較してみたところ素材の緻密さなどの特徴が異なっていた。ほかに櫛の材料として、鼈甲（タイマイ）や象牙、ヒゲクジラのヒゲ板等が考えられるが、いずれも現生の標本と比べ特徴を異にしている。櫛の製作の過程で、表面を加工している可能性も考えられるため、未加工の素材との単純な比較は注意が必要だが、素材の特定には至らなかった。

考察

魚類は、タイ科やブリ属が中心に出土している。タイ科は沿岸の岩礁域、ブリ属は季節性の回遊魚である。どちらも刃物による切断の痕跡があり、食用後に不要な部位が廃棄されたと考えられる。鳥類はカモ亜科、ガン亜科、サギ科、キジ科、ニワトリ等が認められた。カモ亜科やガン亜科、サギ科等は、池沼、湖、河川、海岸部などに生息し、狩猟により獲得されたと考えられる。ニワトリも含めて目立っ

た解体痕は確認できなかったが、いずれも食用になる種類であり、これらも食用後の食物残渣と考えられる。爬虫類はスッポンの背甲骨板や腹甲骨板等がみられたが、頭部や手足の骨はみられなかった。スッポンは、河川の流れが緩やかな中下流域、平地の比較的大きな池や湖沼などに生息する。出土したスッポンもこうした場所で捕獲され、食用に供されたと考えられる。

哺乳類は、ニホンジカ、イノシシまたはブタ、ウシ、ウマ、イヌ、ネズミ科、ハクジラ亜目（イルカ類か）等が認められた。ニホンジカでは骨角器素材として利用される中手骨が出土しているが、加工の痕跡はみられなかった。主に食用として捕獲されたものであろう。一方、家畜としてイヌやウシ、ウマ等がみられるが、イヌについては解体痕がほとんど認められなかったため、全てが食用とされたかは不明である。またウシやウマについても、出土部位は断片的だが、ウシの角突起には角鞘の獲得に伴う鋸の切り込みがみられたため、骨角器素材の獲得後の不要な部位を廃棄したと考えられる。食用のほか骨角器や皮革等に利用された可能性もあり、日常的な食物残渣をはじめ骨角や皮革等の加工といった活動の痕跡が認められる。

引用・参考文献

江田真毅・井上貴央2011「非計測形質によるキジ科遺存体の同定基準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」『動物考古学』28，23-33

松井　章・西本豊弘1999『考古学と動物学』同成社．210p

松井　章2008『動物考古学』京都大学学術出版会．312p

山内忠平1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報』7，125-131

４　昆虫

昆虫遺体を含む試料は、16-４調査区土坑２より検出された。

土坑の大きさは長辺約3.6m、短辺2.4m、深さ１mである。出土遺物から土坑の時期は19世紀とされている。分析段階ですでに水洗されており、分析試料中には漆黒色で光沢のあるサナギが多数確認された。本報告ではこのサナギがどの昆虫のサナギで、その存在が何を意味するのか調査・分析した。

昆虫遺体の同定

分析試料は乾燥していたが、その後の顕微鏡観察や写真撮影のためエチルアルコール入りの純水に浸し、試料に含まれる昆虫遺体について調査した。試料中の昆虫遺体は、ほぼ同形、同大のサナギのみで構成されており、ほかの昆虫片は一部を除き、含まれていなかった。

試料全体を肉眼および実体顕微鏡下にて詳細に検鏡・分析した結果、試料中に含まれたサナギは、完形が計83点、破壊されたサナギが計152点であった。破壊されたサナギのうち、概ね半分ないし半分以上の大きさの破片は60点、半分以下の大きさの破片は92点であった。完形の83点はいずれもすべての環節が連結したままになっており、羽化した痕跡が認められないため、これらのサナギは生きたまま埋もれ、今日に至ったと考えられる。

次に土坑２より得られたサナギ（福井城跡標本）の特徴などを述べる。

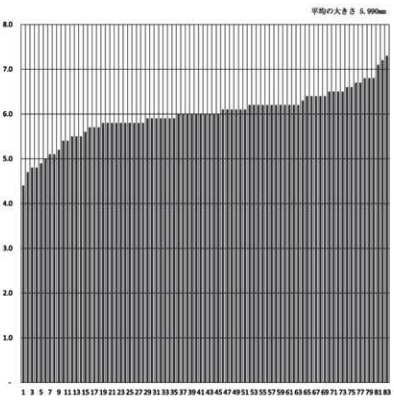
福井城跡標本は、長さ4.4～7.3mm、最大幅2.5～2.8mmの米俵型あるいは丸みを帯びた長楕円体の形状を呈する（図版第53-１）。長さの平均値は5.990mmで、大きさは揃っている。平均サイズよりはずれた大型のサナギは少ないが、小型で5.5mm以下のサナギは計14点認められ、比較的頻度が高いといえる。

サナギは全体に光沢のある黒色ないし黒褐色だが、一部に虹色光沢を有するサナギもあった。

福井城跡標本は、幅0.5～0.6mmのリング状の10体節（環節）がみられて、前後はやや大きさの異なる頭部と尾部で構成されている。

福井城跡標本は、頭部と尾部がほぼ同じ形状の米俵型を呈しており、完全変態昆虫のすべてにみられるサナギではなく、囲蛹という名で呼ばれる双翅目特有の蛹殻であると考えられる。

双翅目はカやガガンボ・チョウバエ等からなる長角亜目と、アブの仲間やハエ類等を含む短角亜目に分かれるが、福井城跡標本は大きさや形状からして長角亜目ではなく、短角亜目環縫群（いわゆるハエの仲間）に属する囲蛹であると分かる。



第89図　イエバエ蛹のサイズ

福井城跡標本の環節についてみると全体に微細な縦筋が密に認められるが、連結部において光沢が失われて、やすり状になっている。連結部を詳細に観察すると、腹面観ではやすり部分が幅広で凹凸が大きく、移動・歩行に役立てるための匍匐隆として機能している様子がわかる（図版第53-１）。一方、背面観では、やすり部分は目立たず、匍匐隆は発達していない（図版第53-２）。尾部末端に１対の後気門が配置され（図版第53-４・５）、後気門は小型（最大径約0.15～0.2mm）で蚕豆形を呈し、外周をキチン環が囲み、内部に明瞭なボタンが認められる（河田1959）。加えて、後気門内に発達する裂孔がＳ字状にうねる（林・篠永1979）特徴より、土坑２から検出された囲蛹はイエバエ *Musca domestica* Linnaeusと同定される。頭部には小さいながら触角が認められる（図版第53-３）。

イエバエは体長６～８mm、体は灰黒色、胸に４本の黒縦筋が認められる中型ないし大型のハエである。イエバエの成虫は台所や居間でデンプン質の食物や牛乳等によくたかる。便池から発生せず、都会では主にゴミ（塵芥）、農村では畜舎の敷藁や堆肥が発生源である（安富・梅谷1983）。ヒトの生活環境に好んで生息し、自然環境ではほとんどみられない（倉橋1982）、都市型の昆虫である（松崎・武衛1993）。イエバエのサナギのほかはハネカクシ科Staphylinidae gen. et sp. indet.の左上翅（図版第53-９）やアリ科Formicidae gen. et sp. Indet.の頭部（図版第53-11）、ショウジョウバエ属*Drosophila* sp.の囲蛹片（図版第53-８）等が確認されたが、いずれも１mm前後の微小体節片のみで構成されている。イエバエ以外の昆虫片は計６点であった（第47表）。

考察

福井城跡の16-４調査区土坑２から得られた昆虫遺体は、一部を除き、ほぼイエバエの囲蛹のみで占められた。同一試料から汚物集積の指標昆虫として知られるハネカクシ科やアリ科・オサムシ科等、い

第47表　16-4調査区土坑２から得られた昆虫遺体

	和名	学名	部位	長さ(mm)
1	ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	左上翅	1.2
2	アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	頭部	0.7
3	ショウジョウバエ属	*Drosophila* sp.	囲蛹片	1.4
4	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet	胸部片	1.2
5	ハエ目	Diptera gen. et sp. indet	囲蛹片	1.5
6	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	部位不明	1.0

ずれも地表徘徊性の昆虫が検出されたため、本分析試料が廃棄されたのは生活ゴミの集積場のようなところであったと考えられる。

イエバエのメスは一度に50～150個位の卵を卵塊として産みつけ、約１ヶ月の生存期間中に４～５回産卵する。卵は卵期間0.5～１日、幼虫期間７日、蛹期間４～５日で成虫になるという（安富・梅谷1983）。

今回、確認されたイエバエのサナギは完形が計83点（83匹）で、破壊されたサナギを含めると、検出されたサナギだけで個体数はおよそ150～200匹と考えられる。この数はイエバエのメスの１回分ないしせいぜい２回分の産卵数といえる。つまりは１頭ないしせいぜい２頭のメスが飛来・産卵し、この卵が幼虫期間を経て無事にサナギまで成長した結果であると推定される。だがその後これらのサナギが羽化することなく埋もれ、今日に至った背景には、廃棄土坑が速やかに水没する洪水などの自然災害が福井城跡周辺を襲った可能性が考えられる。

ハエ目は昆虫のなかで最も進化した分類群の１つとして知られ、幼虫からサナギへの完全変態を経て成虫となる。ハエ類のサナギ形成の際は、終齢幼虫は脱皮せずに、幼虫の体が短縮するかたちで硬化し真のサナギの中に二重構造のサナギとして形成される（素木1958）。こうしたサナギは囲蛹Puparium とされてキチン化が著しいため、遺跡からの検出例も多い。ハエは成虫になる際に囲蛹を脱ぎ捨て、そこから脱出しなければ羽化できない。そのためサナギの形状をみれば、成虫になる前に埋没した個体か羽化して成虫になったのちのサナギであるかが分かる。

イエバエは、盛夏のころに夏眠し、活動を休止すると知られているため（鈴木・緒方1968）、洪水などの自然災害が襲った時期は初夏から盛夏までか秋季であった可能性が考えられる。一方イエバエがヒトの生活環境周辺にのみ特化した都市型昆虫である点は、19世紀頃の福井城跡の古環境を復元するうえで重要である。

なお、愛知県清洲城下町遺跡の近世以降の遺構で検出されたイエバエの囲蛹の多産（計112点112匹）は、ゴミ穴として利用された遺構であるとした（森・伊藤1990）。また、神奈川県鎌倉市の中世遺跡である若宮大路周辺遺跡群では、イエバエのサナギ（完形96点）のみからなる昆虫群集が得られており、こうした昆虫組成をもとに廃棄土坑の性格や埋没時期などについて考察した（森・株式会社パレオ・ラボ2022）。今回の福井城跡でイエバエのサナギを多産した16-４調査区土坑２は、清洲城下町遺跡や若宮大路周辺遺跡群の遺構と類似した生活ゴミの廃棄場所であったと考えられる。

引用文献

林　晃史・篠永　哲1979「ハエ－生態と防除－」文永堂．228p.

河田　黨1959「日本幼虫図鑑」北隆館．712p.

倉橋　弘1982「都市化にともなうハエ相の変化－環境の変化と環境衛生害虫の出現」昆虫と自然　17．2．

松崎沙和子・武衛和雄1993「都市害虫百科」朝倉書店．263p.

森　勇一・伊藤隆彦199「清洲城下町遺跡の中堀から検出された珪藻遺骸（付・昆虫遺体）」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書17：清洲城下町遺跡』：財団法人愛知県埋蔵文化財センター．103-108.

森　勇一・株式会社パレオ・ラボ2022「鎌倉市若宮大路周辺遺跡群出土の昆虫遺体」『若宮大路周辺遺跡群（鎌倉市No.242遺跡）発掘調査報告書－鎌倉市雪ノ下一丁目148番１地点－』：博通．269-271.

素木得一1958「衛生昆虫」北隆館．1556p.

鈴木　猛・緒方一喜1968「日本の衛生害虫－その生態と防除－」新思潮社．245p.

安富和男・梅谷献二1983「原色図鑑衛生害虫と衣食住の害虫」全国農村教育協会．310p.

第２節　遺物の構造分析

１　木製品の樹種調査結果

１）試料

試料は本調査で出土した木製品のうち、完形で状態の良い遺物や製品、部材として珍しいものなどの傾向分析のため抽出した100点である。

２）調査方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取して永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡（Nikon DS-Fi1）で観察して同定した。なお遺物の状態や形状により、資料No.73・78（底板）は木口と板目、No.34・77（側板）は板目、No.46・62・70（底板）および No.87・88・99は木口の採取がそれぞれできなかった。

３）結果

樹種同定で判明した針葉樹６種、広葉樹11種、樹皮１種、シュロ類１種を第48表と図版第54～60の顕微鏡写真で示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ（*Cephalotaxus Harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura）（資料No.88）（写真No.54）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在して数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で１分野に１～２個ある。仮道管内部に螺旋肥厚がみられる。短冊形をした樹脂細胞が早材部、晩材部の区別なく軸方向に連続（ストランド）して存在する。板目では放射組織はほぼ単列である。イヌガヤは本州（岩手以南）、四国、九州に分布する。

コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.）（資料No.43）（写真No.23・24）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて狭い。柾目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で１分野に１～２個ある。板目では放射組織は全て単列である。コウヤマキは本州（福島以南）、四国、九州（宮崎まで）に分布する。

マツ科マツ属（二葉松類）（*Pinus* sp.）（資料No.32・41・47）（写真No.12・13・21）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急である。大型の垂直樹脂道が細胞間隙にみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かい鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で１～15細胞高のものと水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属（二葉松類）はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica* D. Don）（資料No. 38・49・52・53・56・62・63・76・80・81・85・87・89～91・93・94・97・98）（写真No. 18・19・33・39・46～48・52・55）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織は全て単列である。樹脂細胞の末端壁は概ね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として、太平洋側に分布する。

ヒノキ科ヒノキ属（*Chamaecyparis* sp.）（資料No. 33～35・39・40・42・46・48・54・57・58・71・73～75・76・77・83・96）（写真No. 14・15・20・30・34・36・37・44・45・56）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急である。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個ある。板目では放射組織は全て単列である。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）（資料No. 43・50・51・55・60・61・67～70・77～79・82・84・86・92・99）（写真No. 22・32・35・38・42・49～51・53）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織は全て単列である。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属はアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが、顕微鏡では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

カバノキ科ハンノキ属（*Alnus* sp.）（資料No. 45）（写真No. 29）

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管（～90μm）が２～数個半径方向に放射複合管孔をなして平等に分布する。軸方向柔組織は単接線状柔組織を形成している。放射組織は多数の単列放射組織と幅の広い放射組織がある。柾目では道管は階段穿孔と小型で円形の対列壁孔を有する。放射組織は概ね平伏細胞からなるが、ときに上下縁辺に方形細胞が現れる。板目では多数の単列放射組織（１～30細胞高）と単列放射組織が集まってできた集合型の広放射組織がある。ハンノキ属はハンノキ、ミヤマハンノキ、ケヤマハンノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

ブナ科ブナ属（*Fagus* sp.）（資料No. ５～７・９・12～14・16～18・21・23・25・66）（写真No. ３・４・７・10）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110μm）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かい大きさと数の減少を認める配列をする。放射組織には単列のもの、２～３列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部に充填物（チロース）がみられる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、２～３列、広放射組織の３種類がある。広放射組織は肉眼でも１～３mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてみられる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）（資料No. 48）（写真No. 31）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500μm）が年輪に沿い幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは２～３個

集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織がみられ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維がみられる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

ニレ科ケヤキ属ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）（資料No. ３・４・10・11・20）（写真No. ２・８）

環孔材である。木口では概ね円形で単独の大道管（～270μm）が１列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ多角形の小道管が多数集まり円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は１～数列で多数の筋としてみられる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の１～３列のものと大部分を占める６～７細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞はほかの部分に比べて大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

ニレ科エノキ属（*Celtis* sp.）（資料No. 36）（写真No. 16）

環孔材である。木口では概ね円形で単独の大道管（～230μm）が数列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が多数集まって円形、斜線状の集団管孔を形成し、花綵状に配列している。放射組織は１～数列で多数の筋としてみられる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏型のものと８～10細胞列の大型のものがある。大型の放射組織は周囲を軸方向に長くやや大型の細胞（鞘細胞）に取り囲まれている。エノキ属はエノキ、エゾエノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

クワ科クワ属（*Morus* sp.）（資料No. 45）（写真No. 29）

環孔材である。木口では大道管（～280μm）が年輪界に沿い１～５列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が２～６個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。小道管に螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物（チロース）がみられる。板目では放射組織は１～６細胞列、高さ～1.1mmからなる。単列放射組織はあまりみられない。クワ属はヤマグワ、ケグワ、マグワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

モクレン科モクレン属（*Magnolia* sp.）（資料No. 44）（写真No. 25～27）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110μm）が単独ないし２～４個複合し多数分布する。軸方向柔組織は１～２層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は１～３細胞列、高さ～700μmとなっている。モクレン属はホオノキ、コブシ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

バラ科サクラ属（*Prunus* sp.）（資料No. 64）（写真No. 40）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～100μm）がほぼ一定の大きさで単独あるいは放射方向ないし斜方向に連なり分布している。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔および螺旋肥厚を有する。道管内に着色物質がみられる。放射組織は同性ないし異性で中央部の平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなる。板目では放射組織は１～４細胞列、高さ～１mmからなる。サクラ属はサクラ、ヤマナシ等があ

第48表　樹種同定結果一覧

図版番号	挿図番号	資料No.	図版第54～57	器種	樹種	本番号	図版番号	挿図番号	資料No.	図版第58～60	器種	樹種	本番号
31	2	1	1	漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	162-20	51	7	52	33	人形	スギ科スギ属スギ	164-292
30	14	2		漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	162-23	51	8	53		人形首	スギ科スギ属スギ	164-293
30	13	3		漆器皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	162-42	51	1	54	34	人形の頭	ヒノキ科ヒノキ属	166-199
31	5	4	2	漆器椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	162-60	58	6	97		墨書(曲物面)	スギ科スギ属スギ	165-2
27	6	5		漆器椀	ブナ科ブナ属	162-64	58	1	98		墨書(曲物面)本体	スギ科スギ属スギ	164-303
27	1	6	3	漆器椀	ブナ科ブナ属	162-70					墨書(曲物面)樹皮	ヤマザクラorカバノキの樹皮	
27	3	7		漆器椀	ブナ科ブナ属	162-71	51	6	55	35	人形	ヒノキ科アスナロ属	167-356
31	6	8		漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	164-11	52	10	56		不明品	スギ科スギ属スギ	162-292
28	11	9	4	漆器椀	ブナ科ブナ属	164-13	36	1	57		擂粉木	ヒノキ科ヒノキ属	162-361
31	8	10		漆器椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	164-14	50	3	58	36	碗屏本体	ヒノキ科ヒノキ属	162-379
31	9	11		漆器椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	164-16				37	碗屏脚部	ヒノキ科ヒノキ属	
28	4	12		漆器椀	ブナ科ブナ属	164-17	46	1	59		鋲	ショロ類	162-462
31	10	13		漆器椀	ブナ科ブナ属	164-18	48	5	60	38	刷毛	ヒノキ科アスナロ属	162-463
29	10	14		漆器椀	ブナ科ブナ属	165-88	46	7	61		刷毛	ヒノキ科アスナロ属	166-192
27	2	15	5	漆器椀本体	トチノキ科トチノキ属トチノキ	165-121	53	6	62		板	スギ科スギ属スギ	163-162
			6	漆器椀柄	ハイノキ科ハイノキ属		36	3	63	39	火鑽臼	スギ科スギ属スギ	164-195
26	11	16		漆器椀	ブナ科ブナ属	165-125	47	1	64	40	櫛型	バラ科サクラ属	164-314
28	9	17	7	漆器椀	ブナ科ブナ属	165-140	46	4	65	41	箒	ショロ類	165-77
28	6	18		漆器椀	ブナ科ブナ属	165-247	49	1	66		ばんば	ブナ科ブナ属	166-275
29	7	19		漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	166-10	51	10	67		反乳刀本体	ヒノキ科アスナロ属	163-250
30	12	20	8	漆器椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	166-14					反乳刀柵	ヒノキ科アスナロ属	
26	12	21		漆器椀	ブナ科ブナ属	166-15	51	11	68	42	薙刀状木製品	ヒノキ科アスナロ属	165-36
26	4	22	9	漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	166-22	51	12	69		木刀本体	ヒノキ科アスナロ属	166-274
29	16	23		漆器椀	ブナ科ブナ属	166-26					木刀柵	ヒノキ科アスナロ属	
30	6	24		漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	166-33	40	3	70		曲物底板	ヒノキ科アスナロ属	166-121
29	2	25	10	漆器椀	ブナ科ブナ属	167-2					曲物側板	ヒノキ科アスナロ属	
30	3	26		漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	167-3					曲物樹皮	ヤマザクラorカバノキの樹皮	
31	4	27		漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	167-5	40	10	71		板板(大型盤)本体	ヒノキ科ヒノキ属	167-155
28	1	28	11	漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	167-6					板板(大型盤)樹皮	ヤマザクラorカバノキの樹皮	
30	10	29		漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	167-7	33	3	72	43	柄杓(刺り物)	ウコギ科タカノツメ属タカノツメ	163-196
29	15	30		漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	167-9	—		73		柄杓底板	ヒノキ科ヒノキ属	162-33
31	3	31		漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	167-43					柄杓側板	ヒノキ科ヒノキ属	
34	2	32	12	漆塗重箱本体	マツ科マツ属（二葉松類）	165-23	39	5	74	44	柄杓底板	ヒノキ科ヒノキ属	167-210
	3,4		13	漆塗重箱側板	マツ科マツ属（二葉松類）					45	柄杓側板	ヒノキ科ヒノキ属	
34	1	33	14	漆塗　重箱蓋	ヒノキ科ヒノキ属	164-88	39	11	75		柄杓底板	ヒノキ科ヒノキ属	167-211
33	9	34		漆塗部材	ヒノキ科ヒノキ属	164-313					柄杓側板	ヒノキ科ヒノキ属	
33	7	35	15	漆塗部材	ヒノキ科ヒノキ属	164-316	39	2	76	46	柄杓側板	スギ科スギ属スギ	167-213
33	1	36	16	漆塗台子	ニレ科エノキ属	166-59				47	柄杓底板	スギ科スギ属スギ	
33	4	37	17	漆塗盆	トチノキ科トチノキ属トチノキ	167-81				48	柄杓柄	スギ科スギ属スギ	
44	8	38	18	下駄(漆塗・打付・角)本体	スギ科スギ属スギ	162-377	39	13	77		柄杓(大型)側板	ヒノキ科ヒノキ属	167-214
			19	下駄(漆塗・打付・角)歯	スギ科スギ属スギ						柄杓(大型)底板	ヒノキ科ヒノキ属	
43	11	39	20	下駄(漆塗・角)	ヒノキ科ヒノキ属	163-44					柄杓(大型)柄	ヒノキ科ヒノキ属	
44	3	40		下駄(漆塗・丸)	ヒノキ科ヒノキ属	163-54	39	3	78		柄杓(大型)側板	ヒノキ科アスナロ属	167-215
44	1	41	21	下駄(漆塗・角)	マツ科マツ属（二葉松類）	166-94					柄杓(大型)底板	ヒノキ科アスナロ属	
—		42		下駄(漆塗・角)	ヒノキ科ヒノキ属	167-83					柄杓(大型)柄	ヒノキ科アスナロ属	
45	1	43	22	下駄(露卯・丸)本体	ヒノキ科アスナロ属	162-111	39	1	79	49	柄杓(大型)側板	ヒノキ科アスナロ属	167-216
			23	下駄(露卯・丸)前歯	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ					50	柄杓(大型)底板	ヒノキ科アスナロ属	
			24	下駄(露卯・丸)後歯	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ					51	柄杓(大型)柄	ヒノキ科アスナロ属	
45	8	44	25	下駄(隠卯・角)本体	モクレン科モクレン属	164-47	57	2	80		墨書(板材)	スギ科スギ属スギ	163-500
			26	下駄(隠卯・角)前歯	モクレン科モクレン属		57	13	81	52	墨書(板材)	スギ科スギ属スギ	163-501
			27	下駄(隠卯・角)後歯	モクレン科モクレン属		57	5	82		墨書(板材)	ヒノキ科アスナロ属	164-296
45	9	45	28	下駄(隠卯・角)本体	クワ科クワ属	165-151	57	4	83		墨書(板材)	ヒノキ科ヒノキ属	164-298
			29	下駄(隠卯・角)歯	カバノキ科ハンノキ属		57	3	84		墨書(板材)	ヒノキ科アスナロ属	164-305
—		46		下駄(腹合型・連歯・丸)	ヒノキ科ヒノキ属	164-49	57	10	85		墨書(板材)	スギ科スギ属スギ	165-78
—		47		板草履	マツ科マツ属（二葉松類）	163-69	57	12	86	53	墨書(板材)	ヒノキ科アスナロ属	166-216
46	3	48	30	板草履本体	ヒノキ科ヒノキ属	166-85	57	9	87		墨書(板材)	スギ科スギ属スギ	166-217
			31	板草履歯	ブナ科クリ属クリ		57	7	91		墨書(付札)	スギ科スギ属スギ	165-182
46	4	49		板草履	スギ科スギ属スギ	167-89	58	5	92		墨書(面)	ヒノキ科アスナロ属	164-304
46	8	50		板草履	ヒノキ科アスナロ属	167-100	57	8	93		墨書(ヘラ)	スギ科スギ属スギ	164-306
51	2	51	32	人形	ヒノキ科アスナロ属	164-294							

図版番号	挿図番号	資料No.	図版第60	器種	樹種	本番号	図版番号	挿図番号	資料No.	図版第60	器種	樹種	本番号
58	4	94		墨書(曲物面)本体	スギ科スギ属スギ	162-137	58	3	95		墨書(曲物面)本体	スギ科スギ属スギ	162-399
				墨書(曲物面)樹皮	ヤマザクラorカバノキの樹皮						墨書(曲物面)樹皮	ヤマザクラorカバノキの樹皮	
57	9	87		墨書(板材)	スギ科スギ属スギ	166-217	58	2	96	56	墨書(曲物面)本体	ヒノキ科ヒノキ属	162-402
58	11	88	54	墨書(付根駒)	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ	166-214				57	墨書(曲物面)樹皮	ヤマザクラorカバノキの樹皮	
57	1	89	55	墨書(付札)	スギ科スギ属スギ	165-1	50	4	99		墨書(刺形)底板	ヒノキ科アスナロ属	164-308 ～311
57	6	90		墨書(付札)	スギ科スギ属スギ	165-113					墨書(刺形)	ヒノキ科アスナロ属	

り、本州、四国、九州、琉球に分布する。

トチノキ科トチノキ属トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）（資料No. 1・2・8・15・19・22・24・26～31・37）（写真No. 1・9・11・17）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～80μm）が単独かあるいは２～４個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数とも年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は１～３細胞の幅で年輪の一番外側（ターミナル状）に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は、上下縁辺の１～２列の柔細胞に限り六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている。板目では放射組織は単列で大半が高さ～300μmとなっている。それらは比較的大きさが揃い階層状に規則正しく配列しており、肉眼で微細な縞模様（リップルマーク）としてみられる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

ウコギ科タカノツメ属タカノツメ（*Evodiopanax innovans* Nakai）（資料No. 72）（写真No. 43）

半環孔材である。木口では孔圏には道管（～100μm）が連続せずに疎らに１層あり、単独または接線方向に２個接続する。孔圏外でやや急に径を減し50μm以下となる。孔圏外では単独のものほかに、年輪の内境では主に放射方向で、年輪の外境に向かうにつれて斜線方向、接線方向に２～８個連続する。軸方向柔細胞は１列のターミナル状および散在状に配列するが、あまり目立たない。柾目では道管は単穿孔を有する。道管放射組織間壁孔はやや大型のふるい状、放射組織は異性である。板目では放射組織は１～３（４）列、高さ～0.5mm以下となる。タカノツメは北海道、本州、四国、九州に分布する。

ハイノキ科ハイノキ属（*Symplocos* Jacq.）（資料No. 15(柄)）（写真No. 6）

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～60μm）が平等に分布する。虫害の傷害組織（ピスフレック）がみられる。柾目では道管は階段穿孔と、側壁に螺旋肥厚を有する。放射組織は、平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状あるいは階段状壁孔がある。板目では放射組織は１～２細胞列、高さ～600μmからなる。単列部と多列部の幅はほぼ同じですっきりした形をしている。ハイノキ属はハイノキ、クロバイがあり、本州（千葉以西）、四国、九州、琉球に分布する。

ヤマザクラまたはカバノキの樹皮　（資料No. 70・71・94・95・96・98）（写真No. 57）

横断面と放射断面ではコルク組織とコルク皮層が交互に並んで密に詰まっている。接線断面では細胞が放射方向に規則正しく配列している。ただ桜、樺の皮は顕微鏡観察での判別は難しい。

ヤシ科シュロ属シュロ（*Trachycarpus Fortunei* H. Wendl.）（資料No. 59・65）（写真No. 41）

横断面では中心からずれた位置に薄壁の維管束があり、それを取巻く厚壁繊維がみられる。実体顕微鏡での観察からシュロの葉柄基部の繊維網と考えられる。シュロは九州に分布し、日本各地で栽培されている。

参考文献
林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

２　漆塗膜観察と分析

本調査で出土した漆製品41点の計58箇所の製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行った。以下にその結果を報告する。

１）試料

調査した資料は、第49表に示した中近世の什器、服飾具、その他41点である。

２）調査方法

第49表の資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

次に作製した塗膜断面プレパラートの導電性を上げて観察精度を上げる為にプラチナ(Pt)蒸着を行い、日本電子株式会社製走査型電子顕微鏡JSM-6010LAを用いて塗膜混和物の元素同定を行った。

３）調査結果

（１）断面観察

検鏡下での目視による塗膜断面の観察結果を、第49表と以下の文章に示す。

什器（椀・盃・皿・重箱（部材も含む）、合子・盆の計37点

塗膜構造:下層から木胎、下地、漆層がみられた。下地と木胎間に布着せがみられたものもある（No.11）。

下地：淡黄褐色を呈する漆に砥の粉が混和された漆下地と、濃褐色を呈する柿渋に木炭粉が混和された炭粉渋下地がみられた。挽き物である椀、盃、皿の中では漆下地が５点、炭粉渋下地が26点であった。組物である重箱の中では漆下地が２点、炭粉渋下地が１点のほか不明が１点あった。

布着せ：No.11の木胎と下地の間に布着せがみられた。下地の膠着剤が浸透せずに白く抜けた四角形～横長楕円形を呈するものが集まり、全体として円形になる。これは植物の繊維細胞の横断面が集まった糸の横断面である。繊維細胞の集まり具合から木綿の可能性が高い。

漆層：顔料等の混和物がみられない透明漆層や、顔料が混和された色漆層、また金属粉が蒔きつけられた蒔絵層等がみられた。

顔料：赤色漆層や黄色漆層には顔料がみられた。また金属粉が蒔きつけられた部分もみられた。赤色漆層に混和されていたのは、透明で明確な粒子形状を呈する朱と、粒子形状は明確でない微細なベンガラである。黄色漆層に混和されていたのは明確な粒子形状を呈する石黄であった。

服飾具、その他（下駄、木刀の計４点）

下地：下駄３点のうち１点に明確な炭粉渋下地、残る２点に墨のみがみられた。木刀の下地は、遺存状態が良好ではないが、炭粉渋下地が少量残存していた。

漆層：下駄３点に顔料を混和しない透明漆１層のみがみられた。

（２）元素同定

数値は未提示だが、EPMA分析による元素同定分析により第49表の通りの結果を得た。

分析により無機質の金属粉や鉱物系の顔料の材質が判明した。

No.15・24外面の蒔絵に使用された金属粉は、それぞれAg・Snが検出されたことから銀粉と錫粉と判断される。No.２・12・18・22外面、No.27・37内面の黄色文様部に使用された顔料は、すべてAsが検出されたことから石黄と判断される。赤色文様部はNo.６・７・16～18・20・22・23・30外面に使用された顔料はHgが検出されたことから朱、No.５・９・12・19・21・25・34外面に使用された顔料はFeが検出されたことからベンガラと判断される。地色が赤色か茶色でも、No.３内面とNo.20・26外面に使用された顔料は朱と判断される。同じく地色が赤色の中でNo.1・28・33外面、No.14・37内面に使用された顔料はベンガラと判断される。なお、検鏡下での目視による塗膜断面構造の観察結果と元素同定のEPMA分析の結果には矛盾は生じなかった。

４）考察

本調査で出土した漆製品41点について塗膜分析を行った。纏まった点数を調査した什器37点を中心に、木胎の樹種も交えて記す。

今回調査した漆製品は木胎の上に下地を施し、その上に漆層を重ねる構造が観察されたが、下駄の２点には木胎の上に墨を塗布し、上に漆を塗布したものがみられた。

什器は製作工程で挽き物、指物に分かれる。広葉樹か針葉樹かという木胎の樹種の違いも考慮すべきだが、木胎に下地を施し、その上に漆層を重ねる構造は共通している。以下、31点の挽き物について記す。樹種はトチノキとブナ属がそれぞれ13点、ケヤキ５点である。下地には漆下地と炭粉渋下地がみられるが、漆下地が施された資料は全て木胎の樹種はケヤキである。そのほかのトチノキとブナ属の資料には炭粉渋下地が施されていた。

資料に施された塗膜層の内、No.４・５-２・10・14・27-１・29・31・36・46外面、No.19-２の口縁部、No.11の口縁端部、No.13の口縁外面、No15-２・25-２の口縁端部外面、No.32の底板内面、No.44の歯、No.35黒色部の透明漆層は層の上部が濃褐色で別層の様にみえるが、使用時に照射された太陽光の紫外線による変色である。またNo.18-３の口縁、No.46側面の最上層にみられる褐色層は遺棄後に付着した汚れと考えられる。

加飾（文様）についてみると蒔絵と色漆の装飾が認められた。蒔絵は２点にあり、断面によると比較的大きな金属粉は長辺が水平方向を向き、漆に金属粉が混和されたのではなく蒔きつけられた様子を示す。また元素同定によりこの金属粉は銀粉と錫粉であると判明した。この技法がみられた資料の樹種はともにトチノキであった。色漆は多数の資料にあり、赤色漆、黄色漆、黒色漆による文様が描かれた。赤色漆に混和された顔料は朱とベンガラで、使用される資料の樹種との顕著な傾向は特にみられなかった。ブナ属の資料にも朱が混和された赤色漆で文様が描かれていた。ただ地塗に赤色漆が使用されたケヤキの資料はベンガラではなく朱が使用されていた。黄色漆に混和された顔料は石黄で、これも樹種との傾向は特にみられなかった。黄色漆が確認できた資料の内、No.37-３内面の加飾は目視による観察では茶色であったが、断面観察で黄色漆による加飾が確認できた。黒色漆には油煙が混和され、赤色地塗の上に黒色の文様部がみられた。樹種と加飾（文様）については今回のケヤキの資料には加飾はみられなかった。

以上の通り、大まかに漆製品の製作工程は共通すること、什器の挽き物では樹種と下地に傾向がある

第49表　漆塗膜分析結果表

図版番号	挿図番号	木No.	器種	資料No.	分析No.	部位	図版第61～66	塗膜構造（下層から）				朱素同定による分析結果
								下地	混和材	漆層構造	顔料	
								膠着剤				
31	2	162-20	椀	1	1-1	外面（紋様部）	1	植物	木炭粉	赤色漆1層／黒色漆1層	ベンガラ 油性	ベンガラ
					1-2	外面	2	植物	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	ベンガラ
30	14	162-23	椀	2	2-1	外面（紋様部）	3	植物	木炭粉	透明漆1層／黄色漆1層	石黄	石黄
					2-2	外面口縁部	4	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
30	13	162-42	盃	3	3-1	内面	5	漆	砥の粉	赤色漆1層	朱	朱
					3-2	外面	6	漆	砥の粉	漆+微量の赤色顔料	朱?	朱
31	5	162-60	椀	4	4	外面	7	漆?	砥の粉?	透明漆2層	—	—
27	6	162-64	椀	5	5-1	外面（紋様部）	8	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	ベンガラ	ベンガラ
					5-2	外面	9	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
27	1	162-70	椀	6	6	外面（紋様部）	10	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱?	朱
27	3	162-71	椀	7	7	外面（紋様部）	11	植物?	木炭粉?	透明漆1層／赤色漆1層	朱?	朱
31	6	164-11	椀	8	8	口縁部	12	植物	木炭粉	透明漆1層／黒色漆1層	油性	—
28	11	164-13	椀	9	9	外面（紋様部）	13	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	ベンガラ?	ベンガラ
31	8	164-14	椀	10	10	外面	14	漆	砥の粉／墨	透明漆1層	—	—
31	9	164-16	椀	11	11	口縁端部	15, 16	植物／漆	布着せ／砥の粉／墨	透明漆1層	—	—
28	4	164-17	椀	12	12	外面（紋様部）	17, 18	植物	木炭粉	透明漆1層／色漆1層	ベンガラ 石黄	石黄
31	10	164-18	椀	13	13	外面口縁端部	19	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
29	10	165-88	椀	14	14-1	内面	20	植物	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	ベンガラ
					14-2	外面	21	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
27	2	165-124	椀	15	15-1	外面（紋様部）	22	植物	木炭粉	透明漆1層／漆+金属粉	金属	銀
					15-2	外面口縁端部	23	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
26	11	165-125	椀	16	16	外面（紋様部）	24	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱?	朱
28	9	165-140	椀	17	17	外面（紋様部）	25	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱	朱
28	6	165-247	椀	18	18-1	外面（赤色紋様部）	26	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱	朱
					18-2	外面（黄色紋様部）	27	植物	木炭粉	透明漆1層／黄色漆1層	石黄	石黄
					18-3	口縁部	28	植物	木炭粉	透明漆1層／内れ?	—	—
29	7	166-10	椀	19	19-1	外面（紋様部）	29	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	ベンガラ	ベンガラ
					19-2	口縁部	30	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
30	12	166-14	盞	20	20	外面	31	漆	砥の粉	赤色漆1層／透明漆1層／赤色漆1層	朱／朱	朱／朱
26	12	166-15	椀	21	21	外面（紋様部）	32	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	ベンガラ	ベンガラ
26	4	166-22	椀	22	22-1	外面（黄色紋様部）	33	植物	木炭粉	透明漆1層／黄色漆1層	石黄	石黄
					22-2	外面（赤色紋様部）	34	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱	朱
29	16	166-26	椀	23	23-1	外面（紋様部）	35	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱	朱
					23-2	外面	36	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
30	6	166-33	椀	24	24	外面（紋様部）	37	植物	木炭粉	透明漆1層／漆+金属粉	金属	錫
29	2	167-2	椀	25	25-1	外面（紋様部）	38	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	ベンガラ?	
					25-2	外面口縁端部	39	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
30	3	167-3	椀	26	26	外面	40	植物	木炭粉	赤色漆1層	朱?	朱
31	4	167-5	椀	27	27-1	外面	41	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
					27-2	内面（紋様部）	42	植物	木炭粉	透明漆1層／黄色漆1層	石黄	石黄
28	1	167-6	椀	28	28-1	外面	43	植物	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	ベンガラ
					28-2	外面（紋様部）	44	植物	木炭粉	赤色漆1層／黒色漆1層	ベンガラ 油性	ベンガラ
30	10	167-7	椀	29	29	外面	—	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
29	15	167-9	椀	30	30-1	外面（紋様部）	45	植物	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱?	朱
					30-2	外面口縁端部	46	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
31	3	167-43	椀	31	31	外面	47, 48	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
34	2	165-23	重箱	32	32	底板内面	49	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
34	1	164-48	重箱蓋	33	33	側板外面	50	?	?	透明漆1層／赤色漆1層	ベンガラ	ベンガラ
33	9	164-315	部材	34	34	外面?	51	漆	墨、砥の粉、墨	透明漆1層／赤色漆1層	ベンガラ	ベンガラ
33	7	164-316	部材	35	35	黒色部	52	漆	墨、砥の粉、墨	透明漆1層	—	—
33	1	166-59	合子	36	36	外面	53	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
33	4	167-81	盆	37	37-1	内面	54	植物	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	ベンガラ
					37-2	内面（黒色紋様部）	55	植物	木炭粉	赤色漆1層／黒色漆1層	油性	—
					37-3	内面（黄色紋様部）	56	植物	木炭粉	赤色漆1層／黄色漆1層	石黄	石黄
45	1	162-111	下駄	43	43	本体側面	57	—	墨	透明漆1層	—	—
45	8	164-47	下駄	44	44	歯	58	植物	木炭粉	透明漆1層	—	—
		164-49	下駄	46	46	本体側面	59	漆	墨	透明漆1層	—	—
51	12	166-274	木刀	69	69	側面	—	植物?	木炭粉	—	—	—

ことなど従来の漆製品と矛盾しない結果となった。

第３節　16−３調査区出土布の材質調査

16−３調査区から布が出土している。その材質の調査を行ったため以下にその結果を報告する。

１）資料

調査した資料は１点である。分析時は土の張り付いた状態の布で乾燥状態であった。

２）観察方法

資料本体を実体顕微鏡で表面観察を行った後、破片から試料を採取した。採取した数mm四方の有機質の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨し、薄片プレパラートを作製した。これを顕微鏡で断面観察した。

３）観察結果

顕微鏡写真を示し、以下に観察結果を記す。

（１）資料の表面観察結果

資料を観察した結果、直交する糸が布を構成している様子が見られた（図版第66）。布は経糸と緯糸が単純に１本ずつくぐる平織りの布であった。糸を観察すると、撚りは両方向ともに緩んでいるものの所々にＳ方向に撚られているのが確認できる。

断面観察

（２）布の断面（図版第66）

写真に写るいくつかの茶褐色を呈する楕円形が、糸の横断面である。その上に波状に覆いかぶさるのが糸の縦断面である。

糸の横断面で確認出来る繊維細胞断面の形状は中空で多角形である。繊維細胞は概ね単独だが中には単離せず数個が一塊の状態で糸の中に撚られている繊維細胞も確認できる。以上のことから布に使用されている繊維は大麻か苧麻の麻類と推察される。

４）摘要

16−３調査区から出土した布の調査を行った。表面観察と断面観察からＳ方向に撚った大麻か苧麻の糸で平織りされた布と考えられる。

第８章　まとめ

１　屋敷地の変遷

福井県埋蔵文化財調査センターは、今回と昨年度報告した新幹線建設事業に伴う発掘調査のほか、JR福井駅周辺の連続立体交差事業、福井駅西口駐車場整備、北陸新幹線福井駅部建設、えちぜん鉄道高架建設等の大事業に伴う発掘調査や小規模な工事立会を実施してきた。このほか福井市による発掘調査も長年実施されており、これらの成果を合わせると福井駅周辺の福井城跡の様相が窺えるようになった。

調査地は南地点報告で述べた城ノ橋の北方、福井城南東の外曲輪の１つである中之馬場にあたるが、当地は福井藩士でも士分と呼ばれる中級以上の武士屋敷地が展開する。今回の調査はこれら武家屋敷の一部が対象となった。主な調査成果は福井城跡の遺構・遺物であり、石垣や道路や屋敷境の溝等、屋敷区画に関わるもの、井戸・土坑・柱穴、残存状況は悪いが、第Ⅰ街区屋敷地１にある礎石建物や掘立柱建物等と屋敷に伴うものがあるが、今回の調査範囲では各遺構の展開や繋がりを把握することは困難である。だが調査地西側には連続立体交差事業に伴う発掘調査区が隣接して平行に延びており、その成果と城下絵図等の情報を合わせると、武家屋敷の変遷を確認することが可能である。ここではそれらに依拠して屋敷地の変遷状況を復元し、現段階での総括とする。なお、遺構編で呼称した「街区」はそのまま用いたが、屋敷の番号は連続立体交差事業の調査で確認された屋敷を新たに含めて示した。

１）福井城下の屋敷地

調査地は、福井城の「中之馬場」の武家屋敷を縦断するような位置となる。

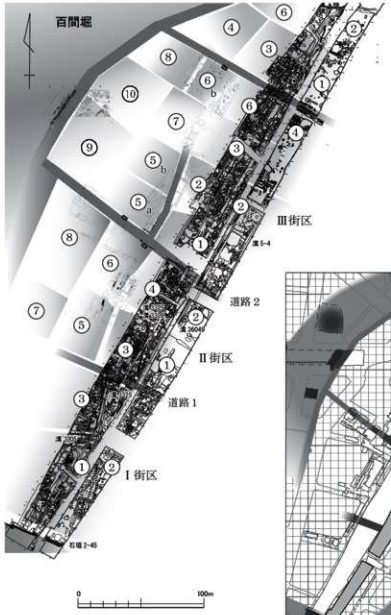
中之馬場は百間堀の南東に位置する曲輪である。中之馬場には概ね南北に直線的に延びる道路とそれに交差する道路１・２があり、それらは江戸時代を通して変化しない。そのため各屋敷地の規模や形状が変化したり小路が追加されても、曲輪全体の街区割には変化がない。なお南北に直線的に延びる道路が中之馬場であり、曲輪の名称にもなった。この道路はえちぜん鉄道高架建設等に伴う調査で検出されており、幅は７～８ｍになると考えられる。今回の調査区は曲輪南端から北方に延びるものである。

屋敷境　屋敷境は石垣と道路と素掘り溝からなる。石垣は中之馬場南端に位置する２-45のみで、それより北方では認めない。道路は第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ街区間にそれぞれ東西方向に延びる２条を認める。溝も２条確認したが、第Ⅰ街区の６-18・19は17世紀後半以降のもの、第Ⅲ街区の５-４は福井城築城当初からのものである。第Ⅱ街区も城下絵図では屋敷地が分かれることがわかる。調査区の攪乱が激しいため屋敷境は削平された可能性があるが、明確な区画が存在しなかった可能性も考慮する必要がある。

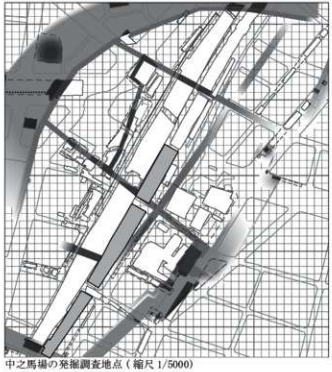
２）屋敷地の変遷

調査区内で確認した２条の東西道路で区画された屋敷地を南側から第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ街区とした。

第Ⅰ街区は、17世紀前葉は連続立体交差事業検出溝3205・3325で区画された林九郎右衛門の屋敷地③を除く結城晴朝の屋敷地にあたる。ただ後半に当屋敷は屋敷地①・②に分かれ以降変化しない。①・②の境は溝６-18・19であるが、この東西溝は17世紀後半から存在し、幕末まで存続した。なおこの溝は調査区外へ延びた後に北に屈曲して南北溝3325に繋がり、屋敷地①～③を区画したことが分かる。また第Ⅱ街区南側の道路１に面する土塀がある。17世紀中葉以降は屋敷地①が西尾氏・永見氏、屋敷地②が西尾氏与力・堀氏・彦坂氏・渥美氏・丹羽氏と移り変わり、前者は嘉永５年、後者は文久５年に調練場となる。屋敷地①の19世紀中頃以前の遺構から「永見」と線刻した硯が２点出土しているが、「永見安



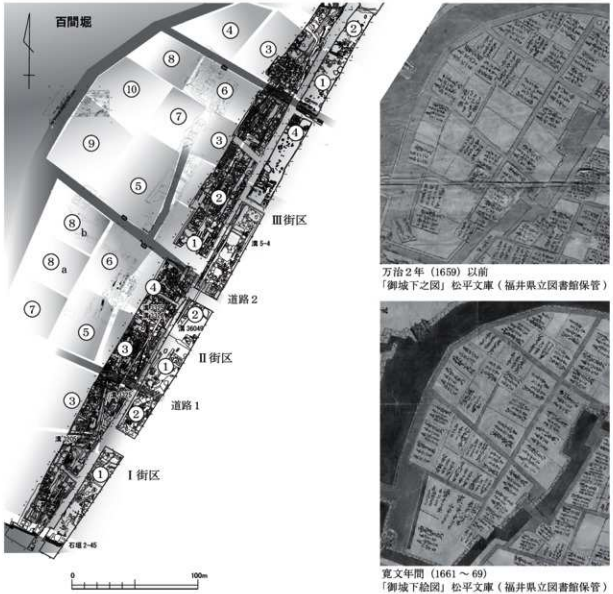
慶長 18 年（1613）頃
「越前北ノ庄城ノ図」
松平文庫（福井県立図書館保管）



中之馬場の発掘調査地点（縮尺 1/5000）

第90図　中之馬場屋敷地の変遷１

治□」は永見安次郎（寛政２年（1790）から永見主殿洪次）を指す。永見氏は寄合席に名を連ねる上級武士である。なお17世紀前半の溝２-184からは「羽□□□衛」と記された墨書木製品が出土している。この名前に当てはまる人物は「羽田少兵衛」か「羽島繁兵衛」のいずれかである。仮に前者に該当するなら松平忠直に仕えた人物だが、この名は元和９年（1623）の越前騒動を境にみられなくなる。後者ならば松平光通や綱昌に仕えた人物になるが、いずれも本調査区より遠く離れた場所に居住する。このほか17世紀後半～18世紀代の溝２-18からは墨書を記した土師質皿が纏まって出土した。墨書の内容は「かくしんさま」・「そうへさま」・「みやしきさま」・「れん長さま」等であるが、この時期に該当する人名がないため屋敷内で仕えた人物の可能性がある。また屋敷地②では18世紀後半以降の井戸３-２から表面に「佐々木」と記された墨書木製品が出土している。ただこの時期は彦坂・渥美・丹羽氏いずれかの屋敷地であり記載名とは一致しない。このほか近代の遺物を大量に含む堀２-44から「肴や/（兼）善/

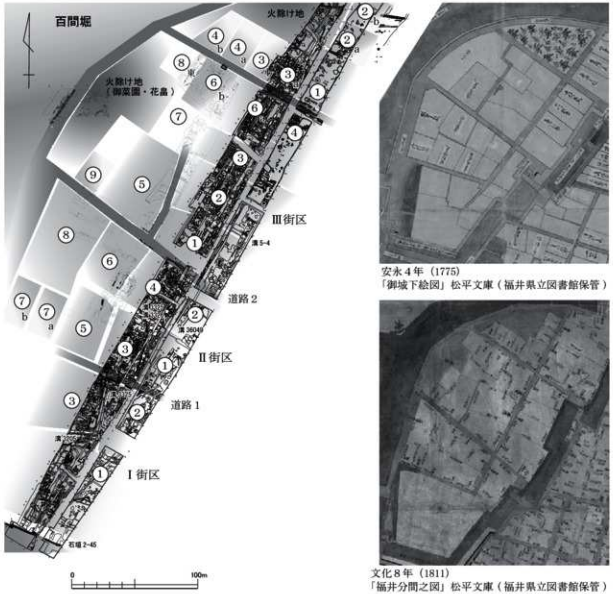


第91図　中之馬場屋敷地の変遷２

三一」と線刻した硯が出土している。これは近辺に在住していた魚屋の所有物であったと思われる。

第Ⅱ街区は福井城築城以降、屋敷境がほとんど変化せず存続する。調査区は屋敷地①･②にあたるが、両屋敷地の西側は連続立体交差事業の調査地にかかる。屋敷地①の周縁は幅約１～1.7m、深さ0.6mに収まる溝3326・3425とそこから５mほど延びた後に直角に曲がり本調査区に至る溝36049により区画されるが、屋敷地②の西側には区画がない。なお、屋敷地①・②を南北に分ける後者の溝は深度が浅いためか攪乱で削平されたと思われる。屋敷地①は鷺山氏・牧野氏・石川氏・周防氏・岩城氏、屋敷地②は鮫嶋氏・海福氏・牧野氏・大崎氏・小栗氏と移り変わるが、それらを示す石製品や木製品等は認めない。

第Ⅲ街区は連続立体交差事業に伴う発掘調査で多くの屋敷地が確認され、屋敷地の統廃合による変化も多い。屋敷地①は福井城築城期から幕末まで大きく変わらないが、屋敷地②は17世紀前葉に東西２軒に分かれていたものが、17世紀中葉に統合される。屋敷地①・②の境は溝５-４だが、出土遺物から福井城築城期から幕末頃まで存続したことが分かる。屋敷地①は水戸氏・堤氏・笹治氏・松原氏・中川氏、屋敷地②は本調査区では岸氏・松原氏・大関氏・稲垣氏に移り変わる。屋敷地①からは名前を記したも



第92図　中之馬場屋敷地の変遷３

のが２点出土しているが、そのうちの１点は攪乱出土である。残る１点は18世紀後半以降の土坑４-３出土の硯で、「□木金次郎」の線刻を認めるが、これは「青木金次郎」を指すものと考える。青木金次郎は、享和３年（1803）に第Ⅲ街区屋敷地⑥・⑦と⑧の東半分の中ノ馬場内北西寄りお花畑付近、直線距離にして約120～150mと比較的近距離に住居があり、遺構の年代とも矛盾しない。なお攪乱出土の小柄小刀には「□内□茂植」の名を認めるが、これは所有者自身の氏名を記したものである。なお、屋敷地①の住人は、結城秀康の妻の弟にあたる水戸三七（江戸宣通）である。水戸氏は「常陸江戸氏」の流れをくみ、結城氏ともゆかりの深い家である。この屋敷地からは園池５-17が検出され、多くの織部焼を認めた。これは福井城下における上級武士の高い生活文化の一端を示す例と思われる。

以上のように本調査区の屋敷地は移り変わるが、名前を認める資料を概観すると、第Ⅰ街区屋敷地①の遺構から「永見」と線刻した硯が出土したように、その屋敷に該当する氏名を認める例もあるが、第Ⅲ街区に屋敷を持つ「青木金次郎」銘の硯があるなど、近距離からの人々の往来を示すものもある。その一方で荷札等に記された氏名が遠距離にある屋敷地のものの例も数例ある。これは離れた屋敷地から

第50表　中之馬場（調査地）の屋敷地名義の変遷

	第Ⅰ街区①	第Ⅰ街区②	第Ⅱ街区①	第Ⅱ街区②	第Ⅲ街区①	第Ⅲ街区②
慶長18年頃（1613）	結城晴朝		鷲山伝八	蛇嶋任右衛門	水戸三七	a 岸内匠 b 岩熊勘平
万治2年以前（1659）	西尾源太右衛門	西尾源太右衛門与力	牧野清右衛門	海福瀬左衛門	（）	（）
寛文年間（1661～69）	西尾源太右衛門	福島左衛門	牧野清右衛門	牧野九郎左衛門	堤宗右衛門	松原角左衛門
寛文10年（1670）	西尾十左衛門	福島左衛門	牧野清右衛門	牧野九郎左衛門	堤宗右衛門	松原角左衛門
延享2年（1685）	西尾十之丞	堀平兵衛	石川七之助	牧野九郎左衛門	堤甚三郎	松原三郎兵衛
正徳4年（1714）	西尾源太右衛門	（　　）	岡防清左衛門	大崎左太夫	笹治兵庫	松原角左衛門
安永4年（1775）	（　　）	（　　）	（　　）	（　　）	（　　）	（　　）
享和3年（1803）	永見	彦坂	結城	小栗	松原	大関
文化8年（1811）	永見	増美 （安政以降、丹羽）	結城 （慶祐後、三寺）	小栗	中川	大関 （慶祐後、稲垣）
慶応年間（1865～68）	調綱盛 ①は嘉永５年（1852）、②は文久５年（1863）から			小栗治右衛門	中川源	稲垣次郎

第51表　名前の記された遺物

	挿図番号		種別	釈文等	出土地点				出土遺構の主な遺物の時期	報告
					屋敷地区分	屋敷	遺構・層位			
1	2	6-18下-6	墨書土師質皿	「かくしんさま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
2	2	6-18下-7	墨書土師質皿	「そやうきうさま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
3	2	6-18下-8	墨書土師質皿	「きうしんさま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
4	2	6-18下-9	墨書土師質皿	「ひのへ」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
5	2	6-18下-10	墨書土師質皿	「しやうよ」「そうへさま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
6	2	6-18下-11	墨書土師質皿	「れん長さま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
7	2	6-18下-12	墨書土師質皿	「しやうよ」「そうへさま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
8	2	6-18下-13	墨書土師質皿	「かくしんさま」「そうし」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
9	2	6-18下-14	墨書土師質皿	「れん長さま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
10	2	6-18下-15	墨書土師質皿	「□（長）さま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
11	2	6-18下-16	墨書土師質皿	「ミやうきち」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
12	2	6-18下-17	墨書土師質皿	「□（う）しんさま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
13	2	6-18下-18	墨書土師質皿	「そやしきさま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
14	2	6-18下-19	墨書土師質皿	「□よ」「そう へさま」	中之馬場	Ⅰ街区①・②	2-18下層		17C後半	本書
15		68-2	硯	「看や／（銘）舞／三～」	中之馬場	Ⅱ街区②	2-44		～近代	本書
16		68-4	硯	「□本金次郎」	中之馬場	豊街区①	4-3		19C頃	本書
17		79-26	小柄小刀	「□内□茂幅」	中之馬場	豊街区①	4-撹乱			本書
18		58-4	墨書木製品	「羽□□□穂／□木□□□」	中之馬場	豊街区①	2-184		17C前半	本書
19		58-4	墨書木製品	（表）「化々木」 （裏）「老人　正□□□／□□」	中之馬場	Ⅰ街区②	3-2		19C頃	本書
20		181-1	硯	「寛政十一己未年十月十九□□□求之□□/永見氏」	中之馬場	Ⅰ街区①	池3201d層		17C前半～19C中頃	1
21		181-10	硯	「文政二巳年/山田代」	中之馬場	Ⅰ街区①	撹乱			1
22		182-8	硯	「□　七年/□□丁□/江川○作」	中之馬場	Ⅰ街区①	3171		19C前半	1
23		182-16	硯	「□　戌歳/永見安次　□」	中之馬場	Ⅰ街区①	3171		19C前半	1
24			墨書木製品	（表）「□身（見か）六郎衛門」 （裏）「□/□　□□」	中之馬場	Ⅰ街区①	3309		19C中頃～近代	1
25		146-1	墨書木製品	「□□/中屋左衛門　□□□」	中之馬場	Ⅰ街区②			18C後半	1

の荷物の運搬を表す資料であろう。このような資料の蓄積と分析により、今後、福井城下での人々の往来を把握することができるものと考える。加えて武家屋敷や町屋に住む住人の階級に基づいた遺構と遺物の検討を行うことで、当時の福井城下での人々の暮らしの様相がより明らかにされると思われる。

２　北庄城期の遺構について

本調査では第Ⅰ街区の下層で北庄城期の遺構を確認した。遺構は主に道路跡・井戸・土坑・溝・柱穴列と多岐にわたるが、特に道路跡が注目できる。この遺構は16－２・６調査区で確認できたが、調査区外に北方に延びるこの道路は連続立体交差事業に伴う発掘調査でも確認されている。ここではそれらに依拠して屋敷地の区割りを復元し、現段階での総括とする。なお区割りは「屋敷地」とし、屋敷の番号は連続立体交差事業の調査で確認されたものを含めて新たに示した（第93図）。

本調査で当期の遺構として道路３を検出したが、これを連続立体交差事業の調査区と合わせると、この調査で確認された道路を繋ぐ部分であることが分かる。本調査の成果で屋敷地を区分すると、南から道路３（道路２-359）南側を屋敷地１、屈曲して南北に延びる同道路（道路２-369・６-140）西側を

第93図　北庄城期の遺構

屋敷地２、その東側を屋敷地３とできる。このうち屋敷地３の北境である道路４は、本調査で検出した道路２と位置がほぼ変わらないことが分かる。ただ屋敷地２については、連続立体交差事業の調査で溝32166・32167により２つに分かれている。この遺構は今回の調査では検出されていないが、当時期の屋敷地が道路や溝を境にして存在していたことが理解できる。以下、本調査と連続立体交差事業に伴う発掘調査の成果をもとに本調査区の屋敷の様相を概観する。

屋敷地１　屋敷地の北は道路３により屋敷地２と区画される。南境は不明だが、近世の中之馬場石垣（石垣２~45）付近にあったものと推定すると、南北幅は約30ｍである。屋敷地内は近代の攪乱が著しいく、福井城期の遺構も少ない。本調査では土坑や溝、砂利敷や柱穴列等を確認した。

屋敷地２　連続立体交差事業に伴う発掘調査で認めた屋敷地５を含めて述べる。屋敷地の南と東は道路３で屋敷地１・３と区画される。この屋敷地は連続立体交差事業の調査の成果を考慮すると、それぞれ南北約20ｍと47ｍを測る屋敷地２・５に分かれる可能性がある。主な遺構は井戸側が木製の桶と板材、石組と板材の井戸、土坑と溝および本調査区の道路側溝沿いにある柵と考える柱穴列である。

屋敷地３　屋敷地の北は道路４により屋敷地４と区画される。南境は東西に延びる道路３と考えると南北幅約111ｍも測るが、屋敷境と考える遺構がないため１つの屋敷地として扱う。主な遺構は掘立柱建物と素掘りの井戸、土坑と柵と考える柱穴列、本調査で認めた石組等である。

屋敷地４　屋敷地の南は道路４により屋敷地３と区画され、北境は道路５である。この屋敷地は近代や近世の攪乱が著しく、北庄城期の遺構は極めて希薄である。主な遺構は石垣や門、土坑である。石垣は屋敷地西側に沿って南北に延びる。この石垣の途切れた部分に門があるが、これは屋根の付かない冠木門と想定されている。門の前にある溝には木造橋が架かっていたとされる。

なお、溝33448の北側で道路３を挟み屋敷地３・４と対面する屋敷地６からは、門と土塀基礎、暗渠と溜桝が検出されている。門は礎石立ちで、両側に土塀を配する櫓門とされる。この門の南側石列の下には屋敷地の排水に利用された暗渠がある。

以上、本調査で認めた遺構も踏まえて各屋敷地の様相を述べたが、連続立体交差事業に伴う発掘調査の成果を含めると、南北に延びる１条の道路の両側に屋敷地が並び、それらに伴う門や石垣、建物や井戸や土坑、溝や柱穴列等が存在することが分かる。遺構の多くは福井城築城および近代の攪乱に伴い削平されているが、例えば道路４・５などは位置を大きく変えずに幕末まで存続したことが、これまでの調査で確認されている。今回の調査でもその一端を示すことができた。今後も調査の進捗に伴い、当期の様子が明らかにされていくものと思われる。

参考文献

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2008『福井城跡』－JR北陸線外２線連続立体交差事業に伴う調査－　第１分冊－遺構編－

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2021『福井城跡（えちぜん鉄道地点）』－JR北陸線外２線連続立体交差事業に伴う調査－第１分冊－遺構編－

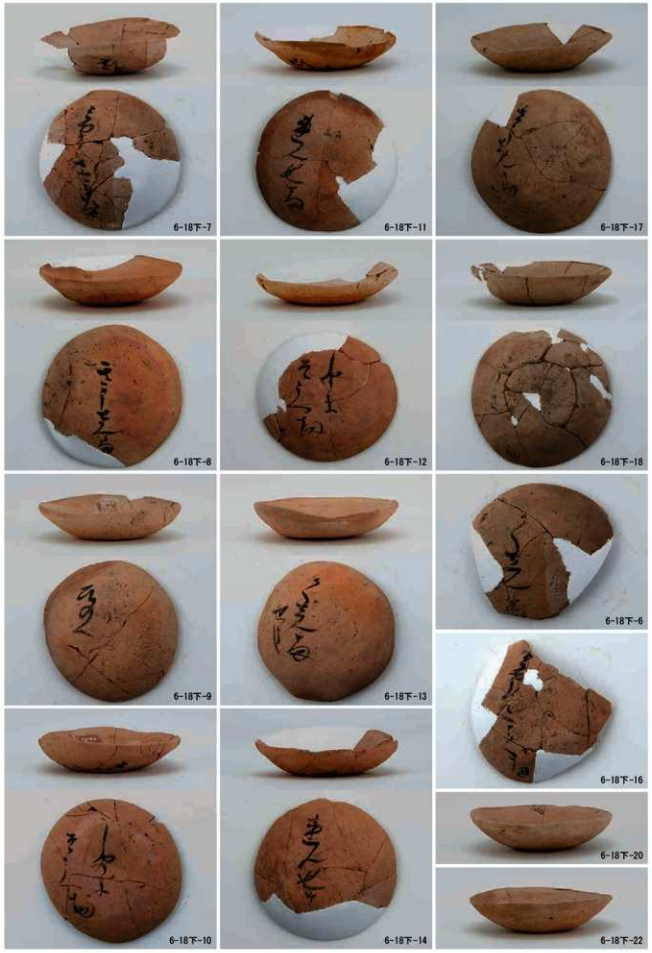
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2022『福井城跡（新幹線南地点）』－北陸新幹線建設事業に伴う調査６－　第１分冊－遺構編－

＊掲載した福井城下絵図は、いずれも松平文庫所蔵（福井県立図書館保管）のものである。

写　真　図　版

図版第一　土器・陶磁器　屋敷境溝

図版第二　土器・陶磁器　屋敷境溝



図版第三　土器・陶磁器　第Ⅰ街区

図版第四　土器・陶磁器　第Ⅰ街区

図版第五　土器・陶磁器　第Ⅰ街区

図版第六　土器・陶磁器　第Ⅰ街区

図版第七　土器・陶磁器　第Ⅰ街区

図版第八　土器・陶磁器　第Ⅰ街区

図版第九　土器・陶磁器　第Ⅱ街区

図版第一〇　土器・陶磁器　第Ⅱ街区

図版第一一　土器・陶磁器　第Ⅱ街区

図版第一二　土器・陶磁器　屋敷境溝

図版第一三　土器・陶磁器　屋敷境溝

図版第一四　土器・陶磁器　第Ⅲ街区

図版第一五　土器・陶磁器　第Ⅲ街区

図版第一六　土器・陶磁器　第Ⅲ街区

図版第一七　土器・陶磁器　第Ⅲ街区

図版第一八　土器・陶磁器　第Ⅲ街区

図版第一九　瓦

図版第二〇　瓦

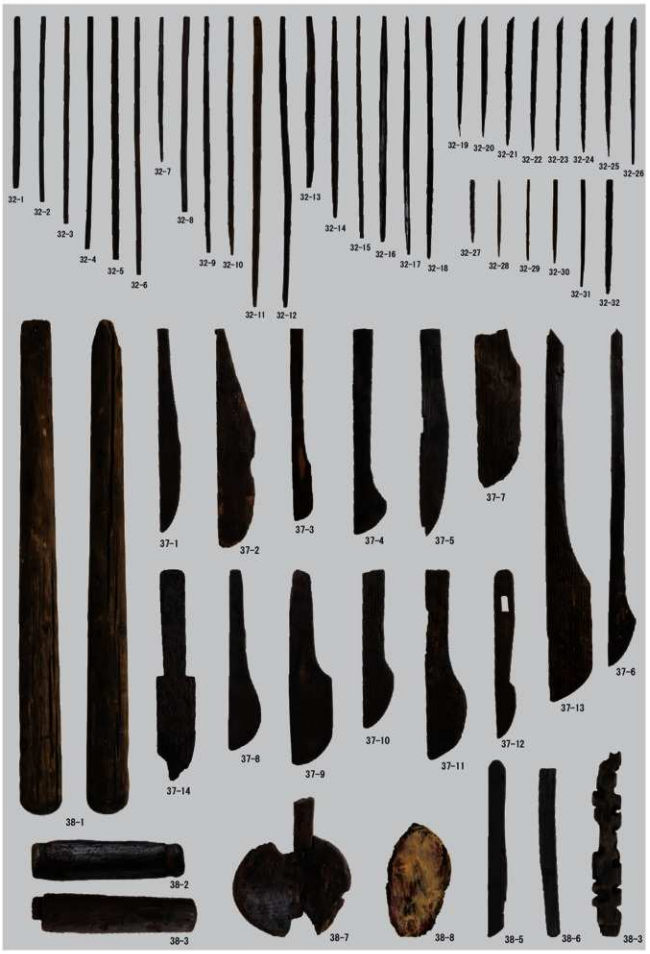
図版第二一　瓦

図版第二二　木製品　漆器椀類

図版第二三　木製品　漆器椀類

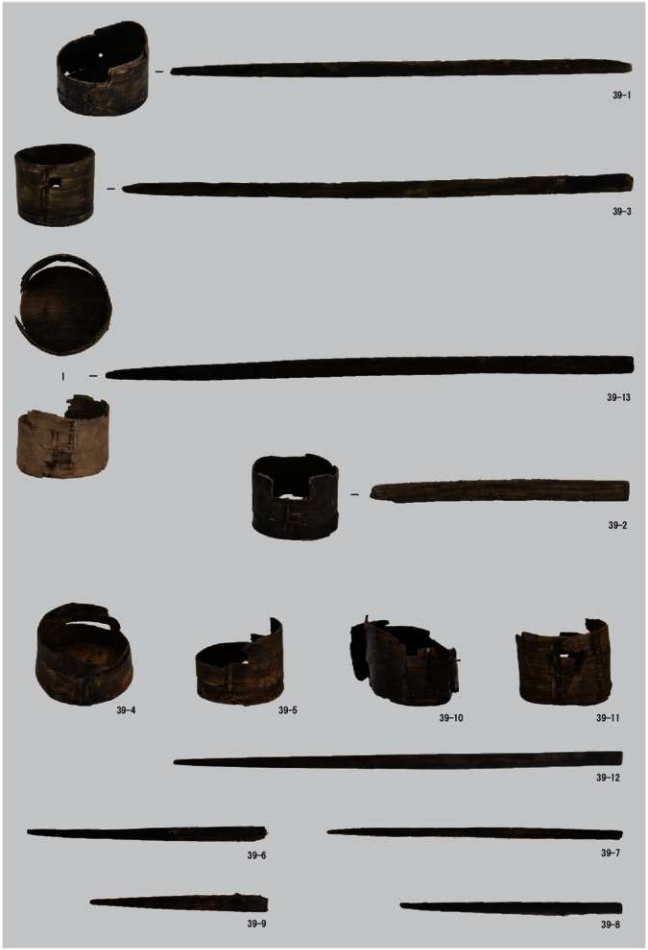
図版第二四　木製品　漆器椀類

図版第二五　木製品　箸・楊枝・切匙・擂粉木等

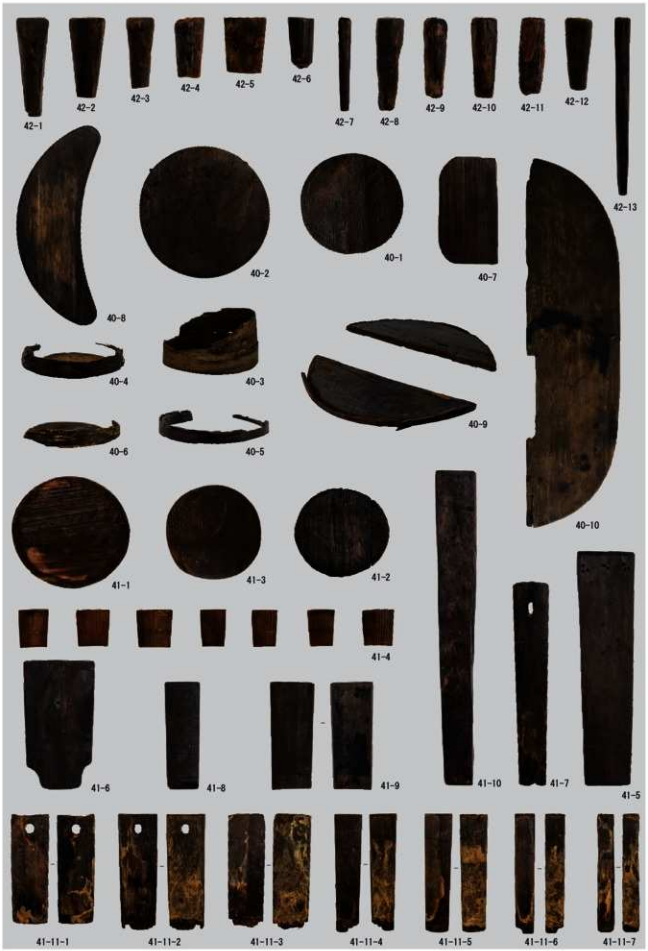


図版第二六　木製品　漆器

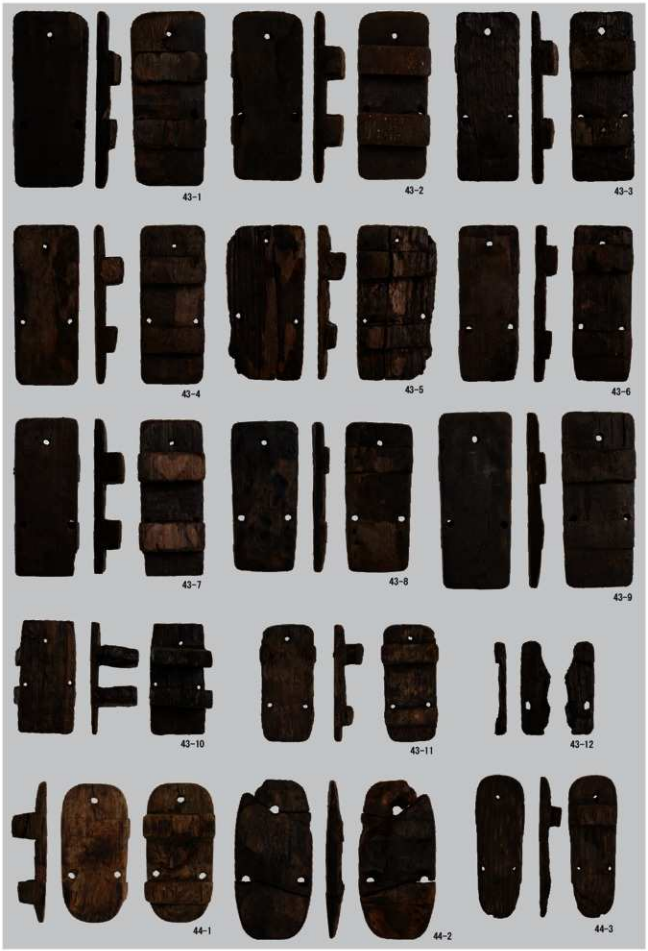
図版第二七　木製品　柄杓



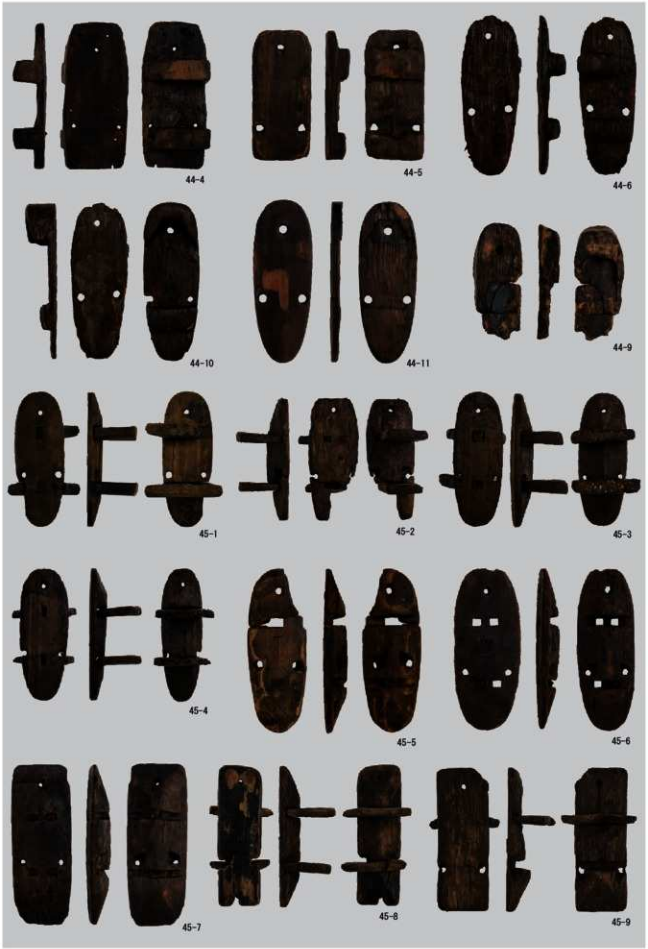
図版第二八　木製品　栓・曲物・桶



図版第二九　木製品　下駄



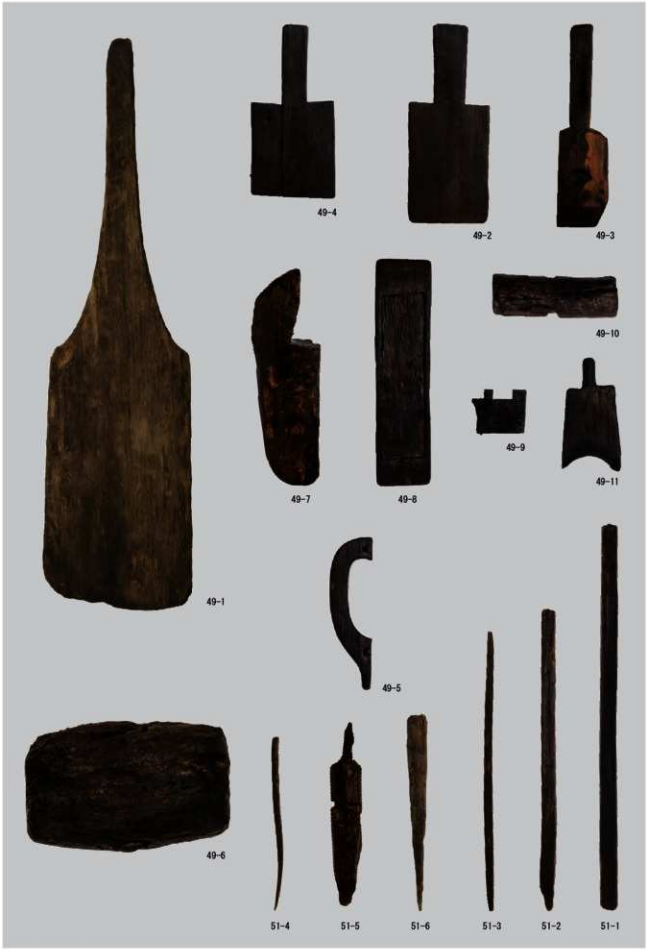
図版第三〇　木製品　下駄



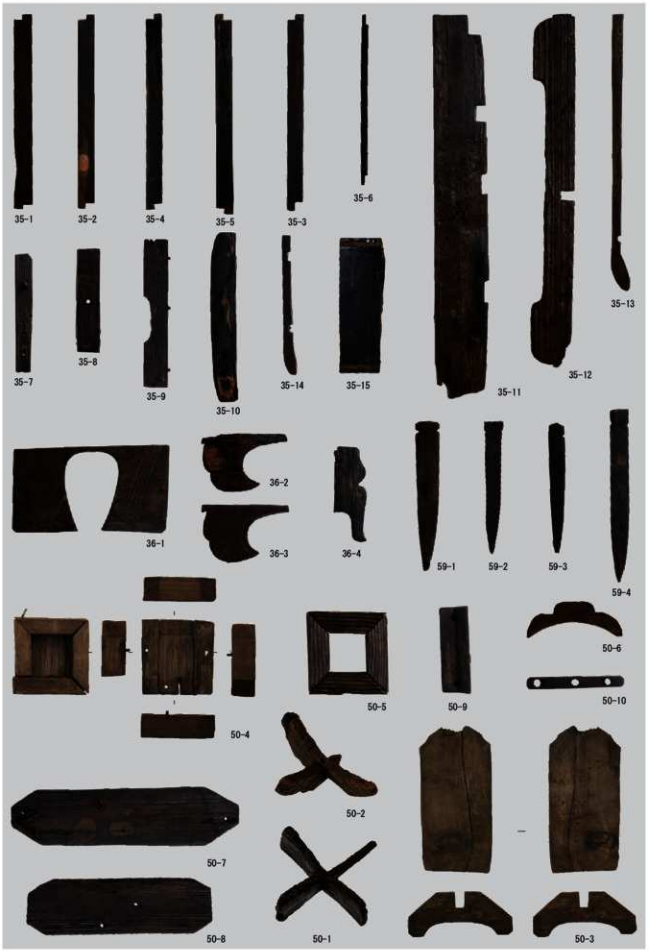
図版第三一　木製品　下駄

図版第三二　木製品　紐・刷毛・櫛・紡錘車

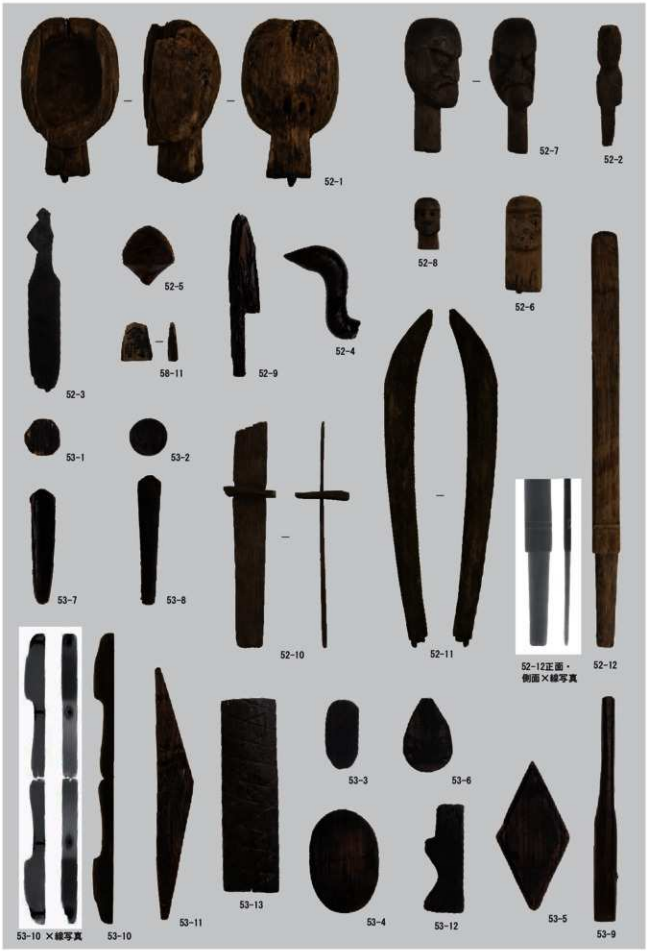
図版第三三　木製品　バンバ・箆・鍬・槌等



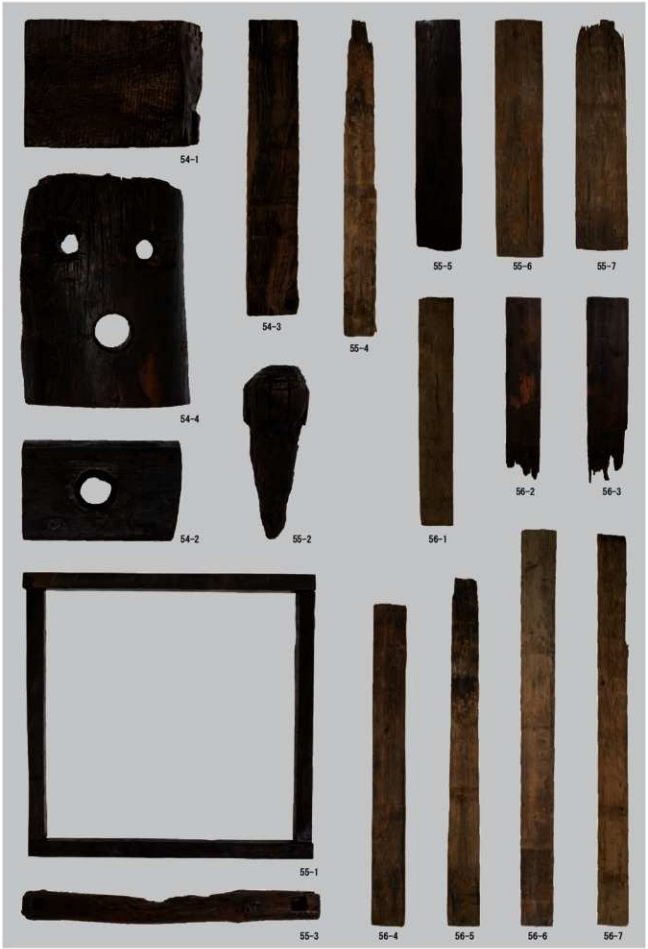
図版第三四　木製品　指物・折敷・灯明台等



図版第三五　木製品　人形・玩具・不明品等



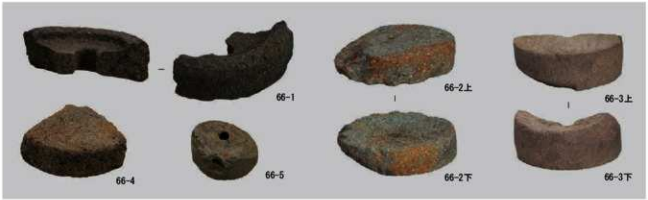
図版第三六　木製品　水道・井戸関連



図版第三七　木製品　墨書・焼印

図版第三八　石製品　容器類・臼類

（1）容器類



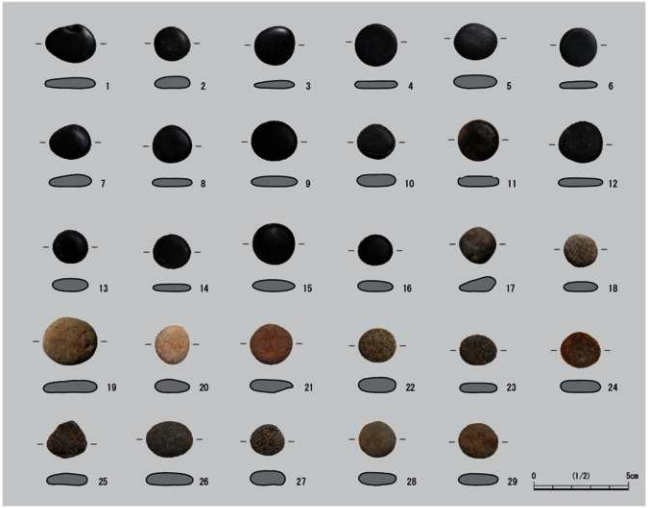
（2）石臼

図版第三九　石製品　暖房具・香炉等

図版第四〇　石製品　硯・砥石

図版第四一　石製品　重石・碁石

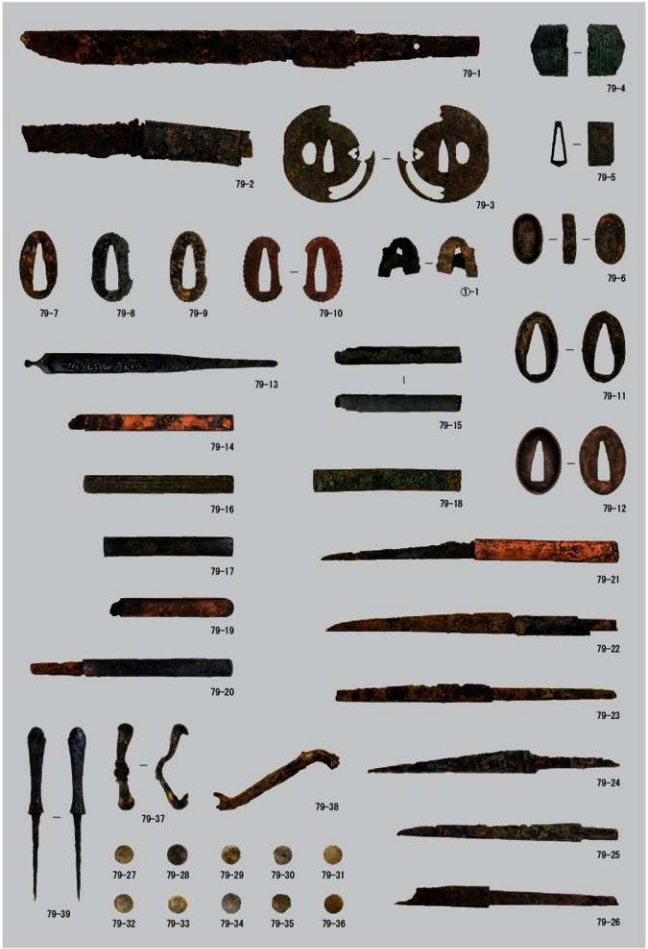
（1）重石・人形等



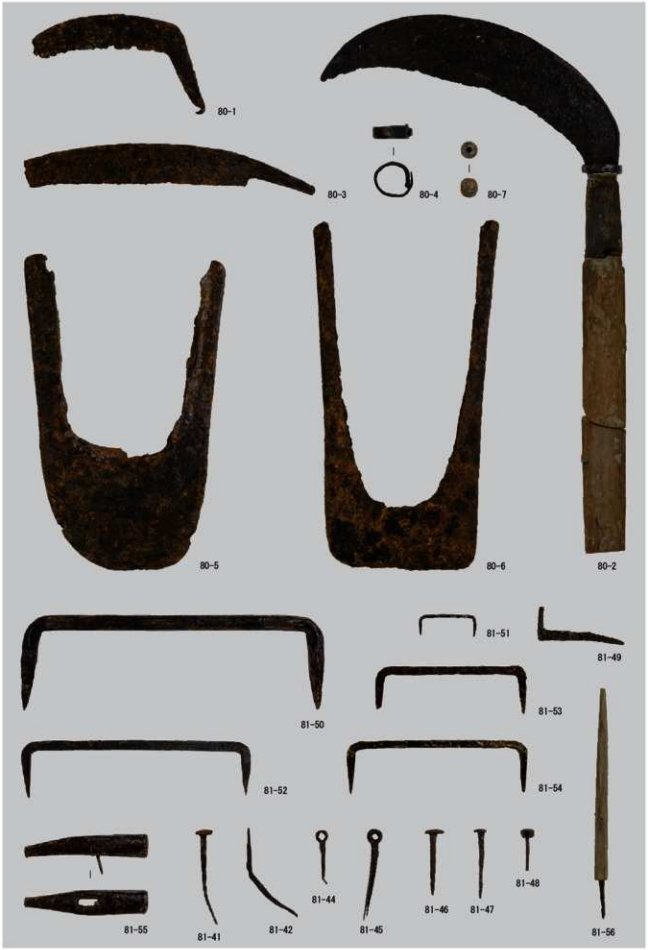
（2）碁石

図版第四二　石製品　瓦・建材等

図版第四三　金属製品　武器・武具

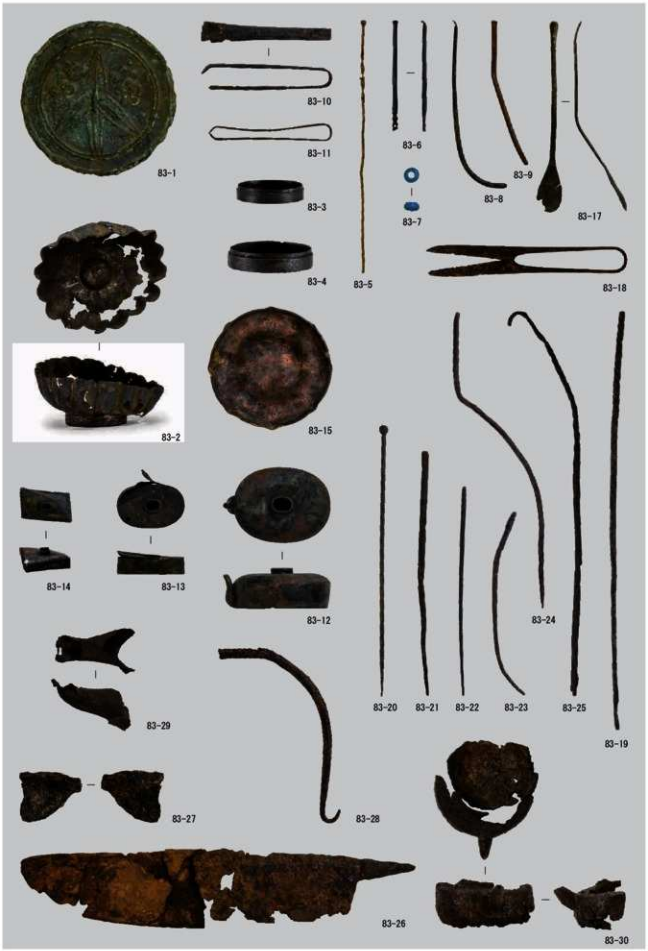


図版第四四　金属製品　農具・漁具・工具



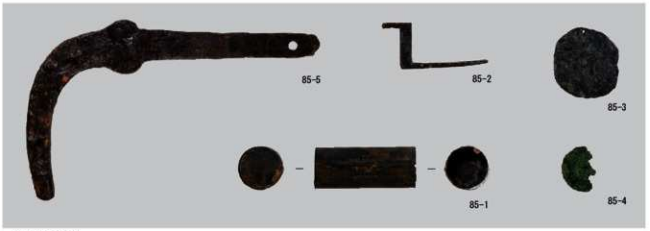
図版第四五　金属製品　釘・日用品

図版第四六　金属製品　日用品



図版第四七　金属製品　煙管

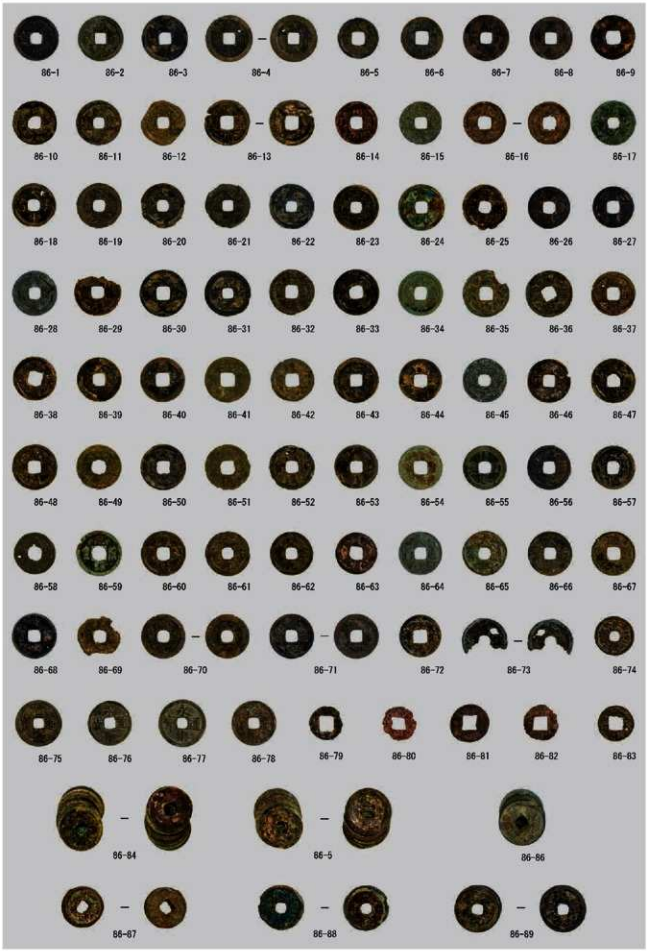
図版第四八　金属製品　不明品　鋳造関連遺物



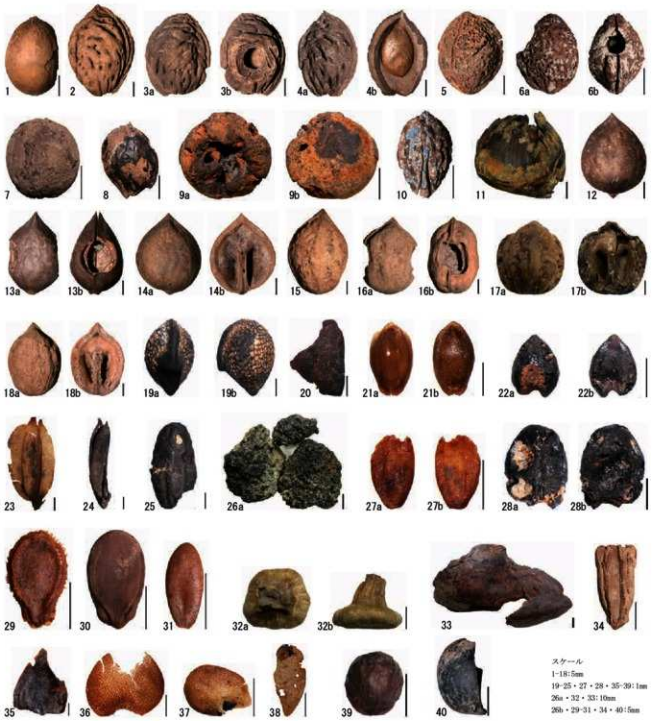
（1）不明品

（2）鋳造関連遺物

図版第四九　金属製品　銭貨



図版第五〇　自然遺物　大型植物遺体



1. イチョウ種子（16-4区　遺構3 No. 6）
2. モモ核（完形）（16-4区　遺構2 No. 6）
3. モモ核（動物食痕）（16-2区　遺構63 No. 8）
4. モモ核（半割）（16-4区　遺構2 No. 6）
5. ウメ核（完形）（16-4区　遺構2 No. 8）
6. ウメ核（動物食痕）（16-6区　遺構19 No. 4）
7. スモモ核（16-6区　遺構294 No. 1）
8. サクラ属サクラ節核（16-7区　遺構30 No. 2）
9. ナシ亜科果実（16-2区　遺構184 No. 2）
10. ナツメ核（16-7区　遺構30 No. 1）
11. クリ果実（16-2区　遺構184 No. 2）
12. ヒメグルミ核（完形）（16-6区　遺構19 No. 3）
13. ヒメグルミ核（動物食痕）（16-6区　遺構19 No. 6）
14. ヒメグルミ核（半割）（16-6区　遺構19 No. 5）
15. オニグルミ核（完形）（16-6区　遺構19 No. 6）
16. オニグルミ核（動物食痕）（16-6区　遺構19 No. 6）
17. オニグルミ核（打撃痕）（16-6区　遺構19 No. 4）
18. オニグルミ核（半割）（16-6区　遺構19 No. 6）
19. サンショウ種子（16-3区　遺構181）
20. カキノキ属種子（16-3区　遺構181）
21. ヒエ属有ふ果（16-3区　遺構181）
22. ヒエ属炭化種子（16-3区　遺構181）
23. イネ籾殻（16-4区　遺構65 No. 3）
24. イネ炭化籾殻（16-4区　遺構2 No. 3）
25. イネ炭化種子（16-3区　遺構181）
26. イネ炭化種子塊（16-3区　遺構90 No. 4）
27. エノコログサ属有ふ果（16-3区　遺構181）
28. コムギ炭化種子（16-3区　遺構181）
29. トウガン種子（16-7区　遺構27 No. 8）
30. スイカ種子（16-7区　遺構27 No. 3）
31. メロン仲間種子（16-2区　遺構63　種子集中部）
32. ニホンカボチャ果実（果柄）（16-4区　遺構3 No. 7）
33. ヒョウタン仲間果実（16-6区　遺構21 No. 7）
34. ヒョウタン仲間種子（16-6区　遺構21 No. 7）
35. ソバ果実（16-3区　遺構181）
36. ナス種子（16-3区　遺構181）
37. ナス属種子（16-3区　遺構181）
38. ゴマ種子（16-3区　遺構181）
39. シソ属果実（16-3区　遺構181）
40. 不明種実（16-2区　遺構184 No. 4）

図版第五一　自然遺物　骨角器・貝類

骨角器
1. ニホンジカ角（16-7　J2・J3区　トレンチ6）
2. 陸生哺乳類四肢骨（16-4　F5区　遺構2）
3. 不明（16-2　B6区　整地層Ⅰ）

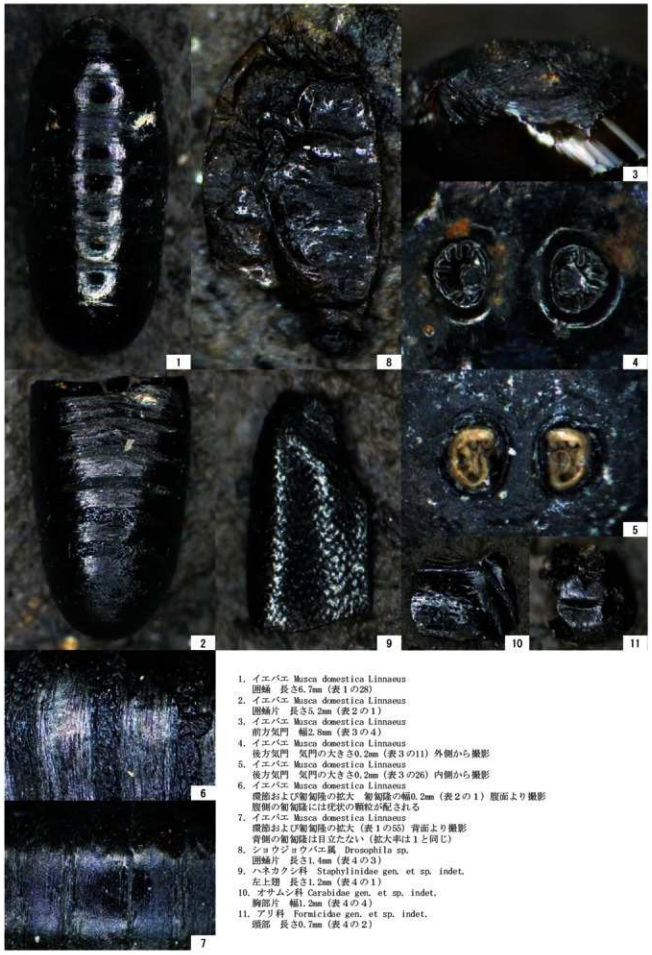
貝類遺体
4. ミミガイ科（16-5　B9・A9区　遺構4）
5. アカニシ（16-6　D8・D9区　遺構21）
6. サザエ（16-5　B9区　遺構4）
7. ハマグリ左殻（16-5　B9・A9区　遺構4）
8. シジミ属左殻（16-5　B9・A9区　遺構4）
9. マガキ右殻（16-5　B9・A9区　遺構4）
10. イタヤガイ右殻（16-7　A2区　遺構27）

図版第五二　自然遺物　動物骨

魚類・鳥類・爬虫類遺体
1. カレイ科椎骨（16-2 I5区 遺構184）
2. ブリ属椎骨（16-2 I5区 遺構184）
3. マダイ上後頭骨(16-4 G7区 遺構29)
4. カラス科左上腕骨（16-2 I5区 遺構184）
5. ガン亜科右烏口骨（16-4 H6区 遺構3）
6. サギ科左上腕骨（16-4 H6区 遺構3）
7. ニワトリ左脛足根骨（16-4 H6区 遺構3）
8. キジ科右足根中足骨（16-4 H6区 遺構3）
9. スッポン左下腹骨板（16-5 B9・A9区 遺構4）

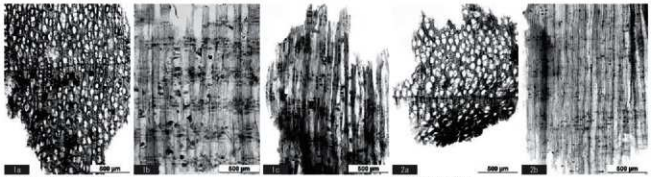
哺乳類遺体
10. ニホンジカ右大腿骨（16-4 H7区 遺構10）
11. イヌ左大腿骨（16-6 D8・D9区 遺構21）
12. ウシ左角突起(16-2 I5区 遺構184)
13. イノシシまたはブタ左下顎骨（16-2 J6・A6区 遺構63）
14. ウマ左上顎臼歯（16-3 H2区 遺構303）
15. ハクジラ亜目椎骨（16-6 D7区 遺構294）

図版第五三　自然遺物　昆虫遺体

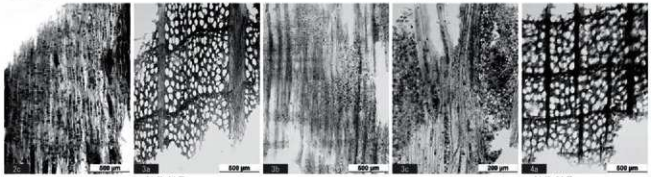


1. イエバエ Musca domestica Linnaeus
　囲蛹　長さ6.7mm（表１の28）
2. イエバエ Musca domestica Linnaeus
　囲蛹片　長さ5.2mm（表２の１）
3. イエバエ Musca domestica Linnaeus
　前方気門　幅2.8mm（表３の４）
4. イエバエ Musca domestica Linnaeus
　後方気門　気門の大きさ0.2mm（表３の11）外側から撮影
5. イエバエ Musca domestica Linnaeus
　後方気門　気門の大きさ0.2mm（表３の26）内側から撮影
6. イエバエ Musca domestica Linnaeus
　腹部および腹節隆の拡大　腹節隆の幅0.2mm（表２の１）腹面より撮影
　腹側の腹節隆には疣状の顆粒が配される
7. イエバエ Musca domestica Linnaeus
　腹部および腹節隆の拡大（表１の55）背面より撮影
　背側の腹節隆は目立たない（拡大率は１と同じ）
8. ショウジョウバエ属 Drosophila sp.
　囲蛹片　長さ1.4mm（表４の３）
9. ハネカクシ科 Staphylinidae gen. et sp. indet.
　左上翅　長さ1.2mm（表４の１）
10. オサムシ科 Carabidae gen. et sp. indet.
　胸部片　幅1.2mm（表４の４）
11. アリ科 Formicidae gen. et sp. indet.
　頭部　長さ0.7mm（表４の２）

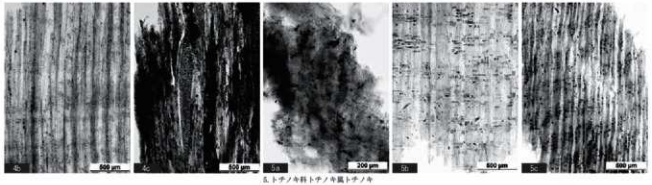
図版第五四　木製品の樹種



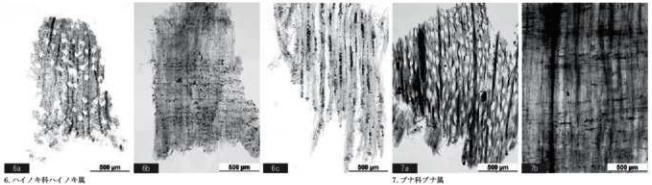
1. トチノキ科トチノキ属トチノキ
2. ニレ科ケヤキ属ケヤキ



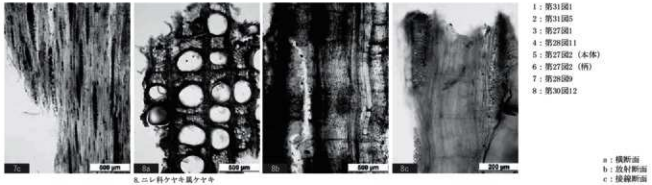
3. ブナ科ブナ属
4. ブナ科ブナ属



5. トチノキ科トチノキ属トチノキ



6. ハイノキ科ハイノキ属
7. ブナ科ブナ属

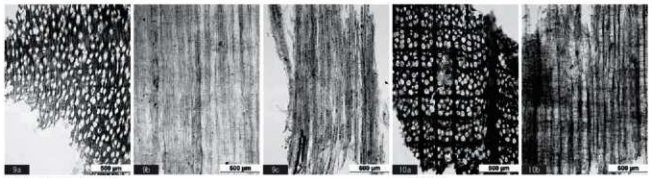


8. ニレ科ケヤキ属ケヤキ

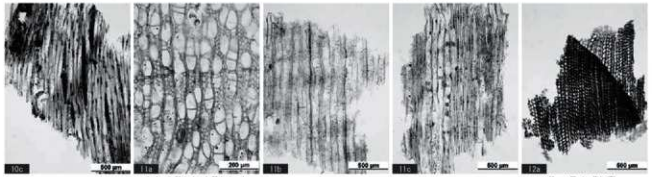
1：第31図1
2：第31図5
3：第27図1
4：第28図11
5：第27図2（本体）
6：第27図2（柄）
7：第28図9
8：第30図12

a：横断面
b：放射断面
c：接線断面

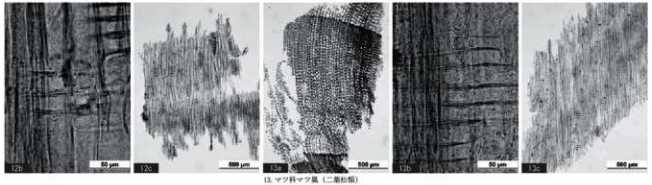
図版第五五　木製品の樹種



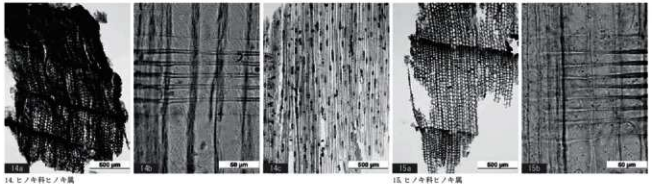
9. トチノキ科トチノキ属トチノキ
10. ブナ科ブナ属



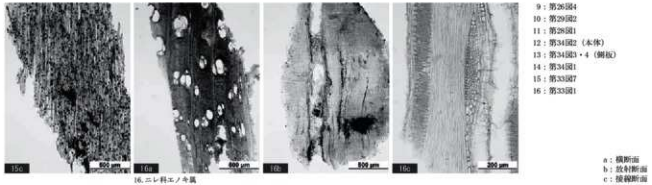
11. トチノキ科トチノキ属トチノキ
12. マツ科マツ属（二葉松類）



12. マツ科マツ属（二葉松類）



14. ヒノキ科ヒノキ属
15. ヒノキ科ヒノキ属

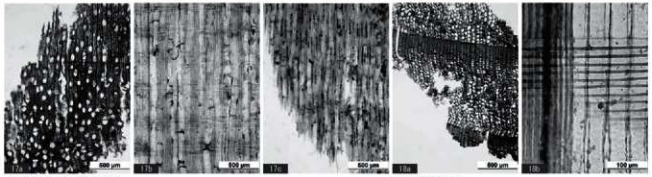


16. ニレ科エノキ属

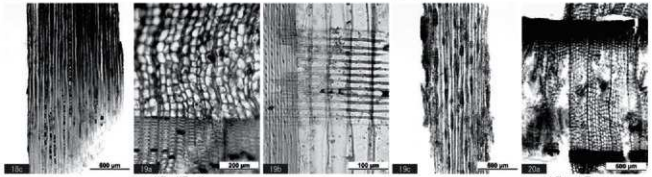
9：第26図4
10：第29図2
11：第28図1
12：第34図2（本体）
13：第34図3・4（側板）
14：第34図1
15：第35図7
16：第33図1

a：横断面
b：放射断面
c：接線断面

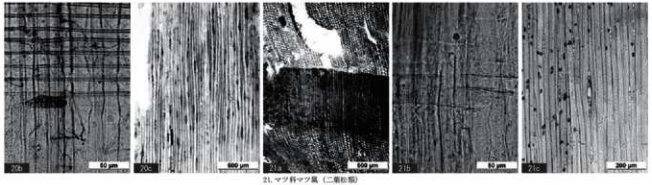
図版第五六　木製品の樹種



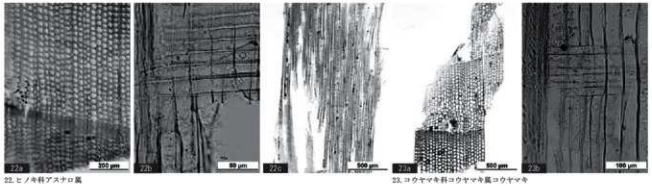
17. トチノキ科トチノキ属トチノキ
18. スギ科スギ属スギ



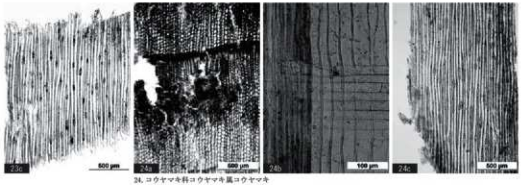
19. スギ科スギ属スギ
20. ヒノキ科ヒノキ属



21. マツ科マツ属（二葉松類）



22. ヒノキ科アスナロ属
23. コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

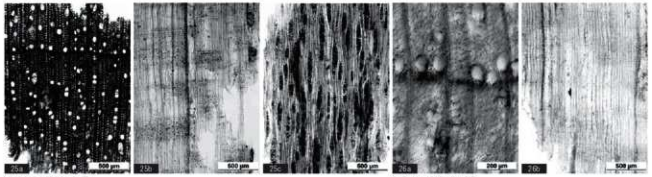


24. コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

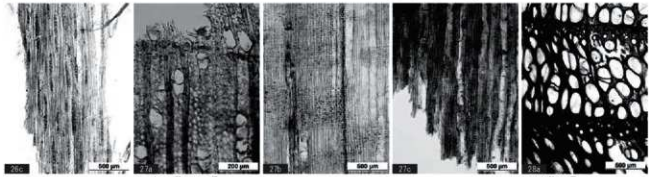
17：第33図4
18：第46図8（本体）
19：第46図8（蓋）
20：第43図11
21：第46図1
22：第45図1（本体）
23：第45図1（前蓋）
24：第45図1（後蓋）

a：横断面
b：放射断面
c：接線断面

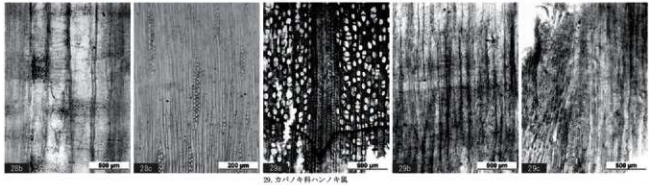
図版第五七　木製品の樹種



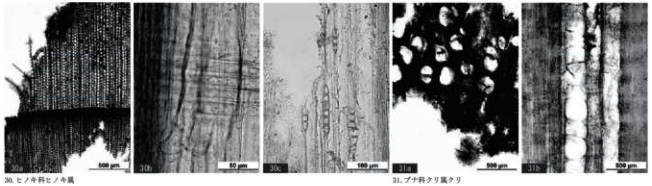
25. モクレン科モクレン属
26. モクレン科モクレン属



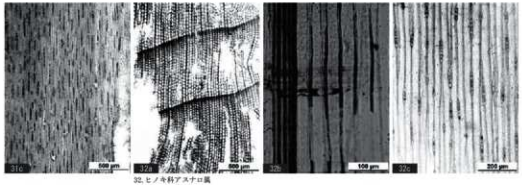
27. モクレン科モクレン属
28. クリ科クリ属



29. カバノキ科ハンノキ属



30. ヒノキ科ヒノキ属
31. ブナ科クリ属クリ

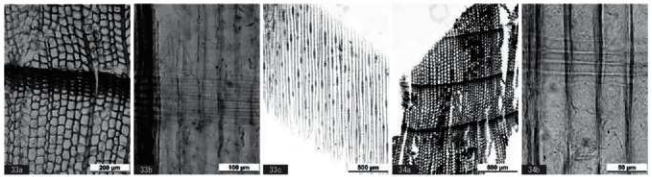


32. ヒノキ科アスナロ属

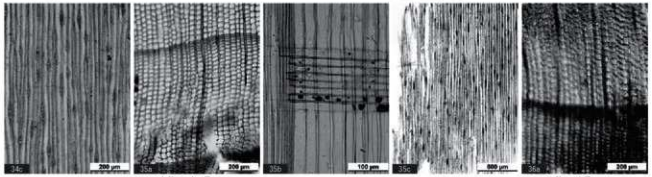
25：第45図8（本体）
26：第45図8（前蓋）
27：第45図8（後蓋）
28：第45図9（本体）
29：第45図9（蓋）
30：第46図3（本体）
31：第46図3（蓋）
32：第51図2

a：横断面
b：放射断面
c：接線断面

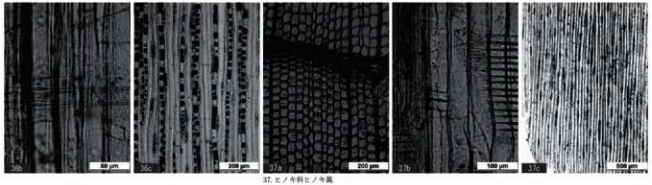
図版第五八　木製品の樹種



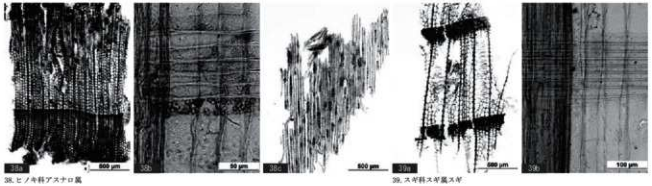
33. スギ科スギ属スギ　34. ヒノキ科ヒノキ属



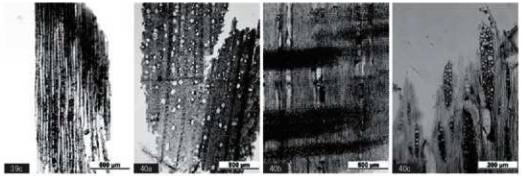
35. ヒノキ科アスナロ属　36. ヒノキ科ヒノキ属



37. ヒノキ科ヒノキ属



38. ヒノキ科アスナロ属　39. スギ科スギ属スギ

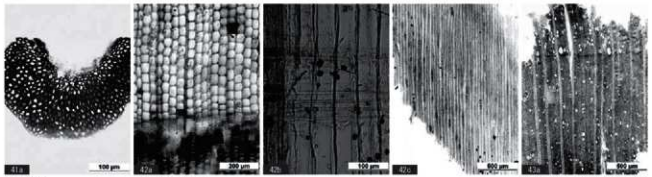


40. バラ科サクラ属

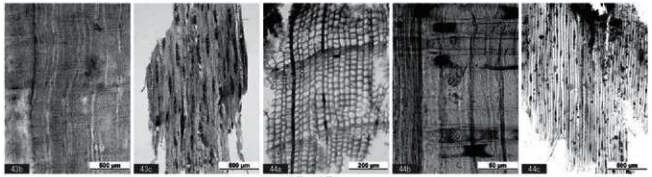
33：第51図7
34：第51図1
35：第51図6
36：第56図3（本体）
37：第56図3（脚部）
38：第48図5
39：第36図3
40：第47図1

a：横断面
b：放射断面
c：接線断面

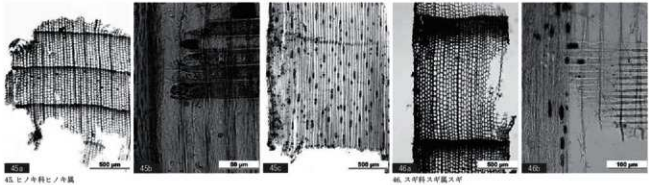
図版第五九　木製品の樹種



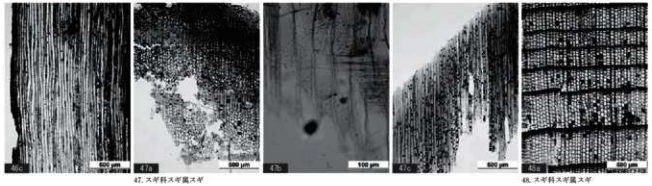
41. シュロ類　42. ヒノキ科アスナロ属　43. ウコギ科タカノツメ属タカノツメ



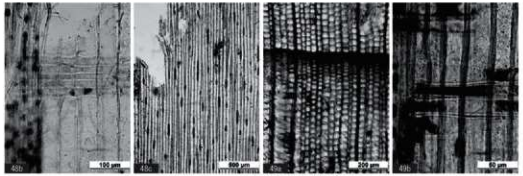
44. ヒノキ科ヒノキ属



45. ヒノキ科ヒノキ属　46. スギ科スギ属スギ



47. スギ科スギ属スギ　48. スギ科スギ属スギ

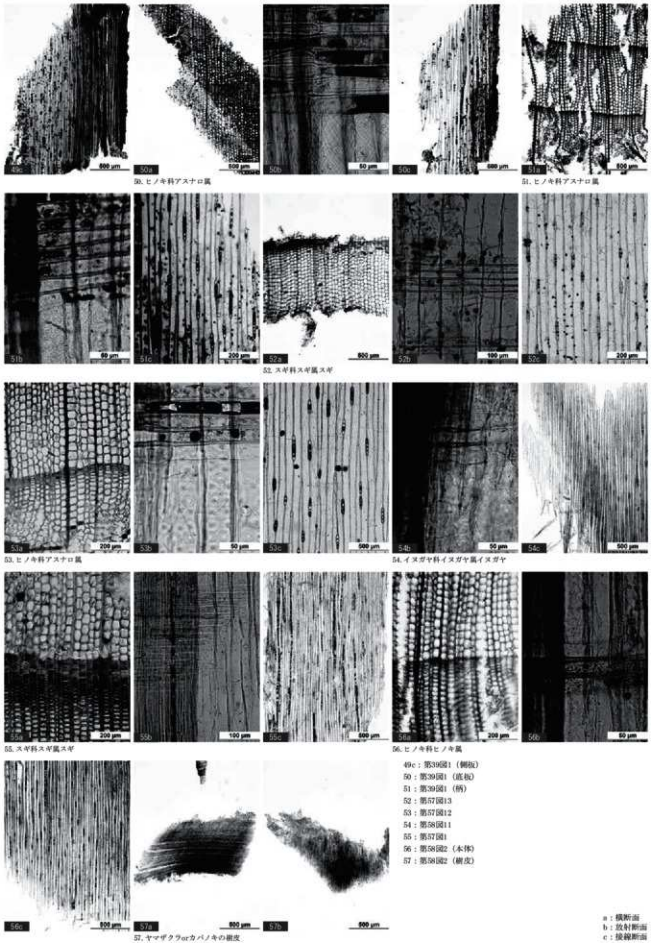


49. ヒノキ科アスナロ属

41：第48図4
42：第51図11
43：第33図3
44：第39図5（底板）
45：第39図5（側板）
46：第39図2（側板）
47：第39図2（底板）
48：第39図2（柄）
49a-b：第39図1（側板）

a：横断面
b：放射断面
c：接線断面

図版第六〇　木製品の樹種



図版第六一　漆器　漆薄片

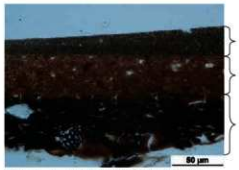


写真１　No.１外面（紋様部）の断面

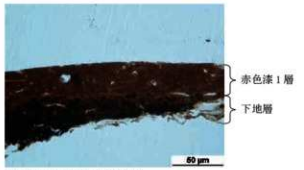


写真２　No.１外面の断面

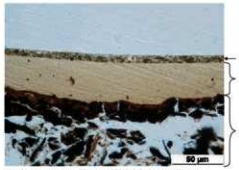


写真３　No.２外面（紋様部）の断面

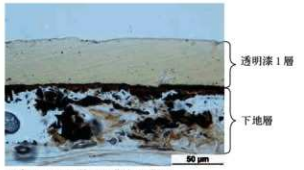


写真４　No.２外面口縁部の断面

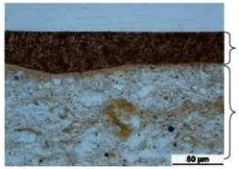


写真５　No.３内面の断面

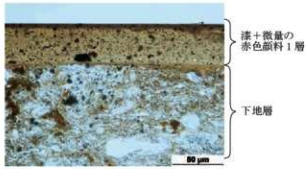


写真６　No.３外面の断面

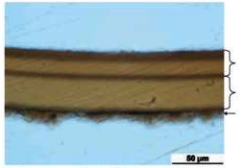


写真７　No.４外面の断面

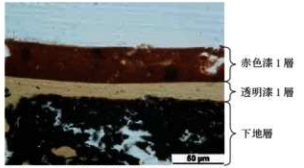


写真８　No.５外面（紋様部）の断面

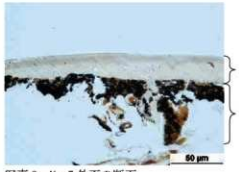


写真９　No.５外面の断面

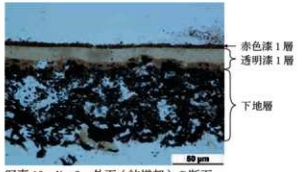


写真 10　No.６　外面（紋様部）の断面

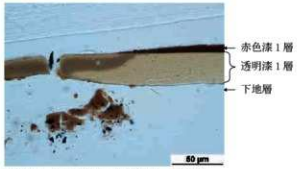


写真 11　No. 7 外面（紋様部）の断面

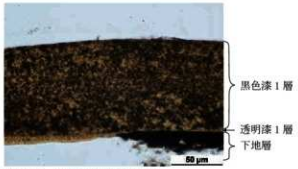


写真 12　No. 8 口縁部の断面

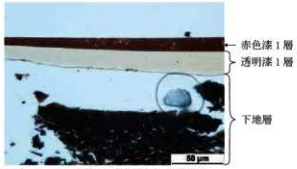


写真 13　No. 9 外面（紋様部）の断面

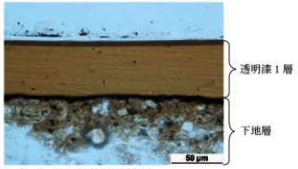


写真 14　No. 10 外面の断面

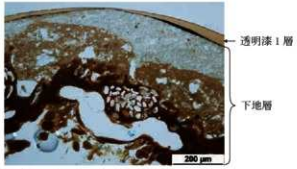


写真 15　No. 11 口縁端部の断面

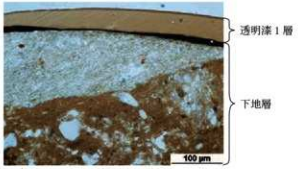


写真 16　No. 11 口縁端部の断面

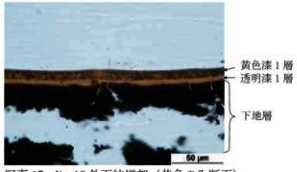


写真 17　No. 12 外面紋様部（黄色のみ断面）

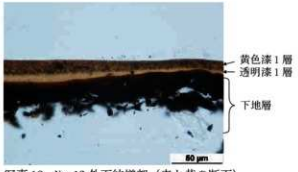


写真 18　No. 12 外面紋様部（赤と黄の断面）

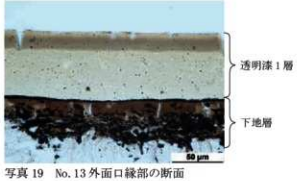


写真 19　No. 13 外面口縁部の断面

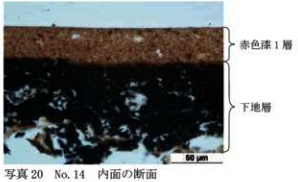


写真 20　No. 14　内面の断面

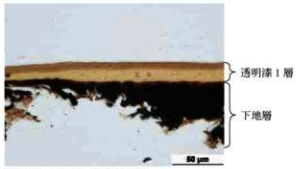


写真 21　No. 14 外面の断面

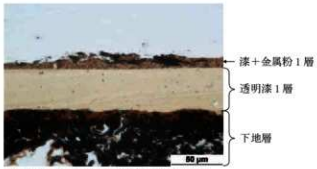


写真 22　No. 15 外面（紋様部）の断面

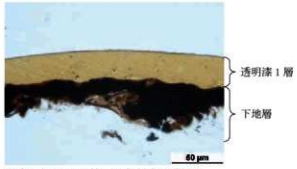


写真 23　No. 15 外面口縁端部の断面

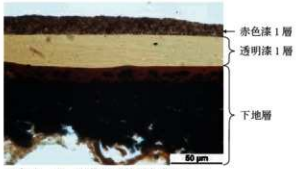


写真 24　No. 16 外面（紋様部）の断面

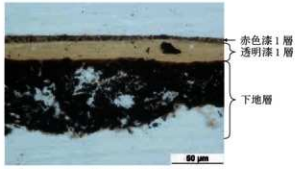


写真 25　No. 17 外面（文様部）の断面

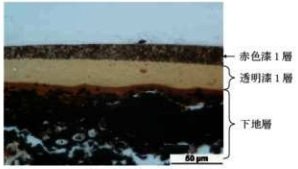


写真 26　No. 18 外面（赤色紋様部）の断面

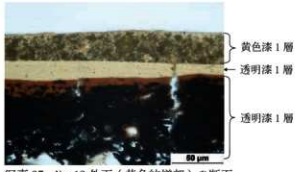


写真 27　No. 18 外面（黄色紋様部）の断面

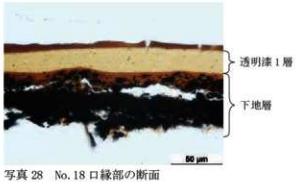


写真 28　No. 18 口縁部の断面

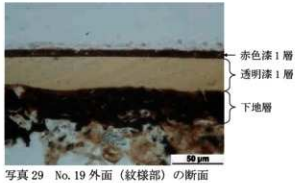


写真 29　No. 19 外面（紋様部）の断面

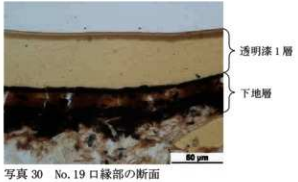


写真 30　No. 19 口縁部の断面

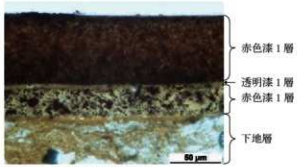


写真 31　No. 20 外面の断面

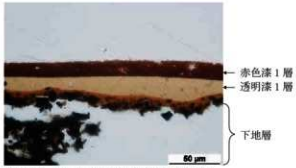


写真 32　No. 21 外面（紋様部）の断面

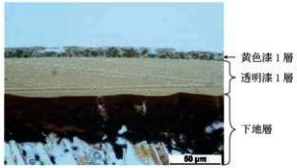


写真 33　No. 22 外面（黄色紋様部）の断面

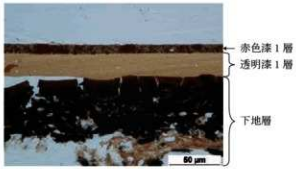


写真 34　No. 22 外面（赤色紋様部）の断面

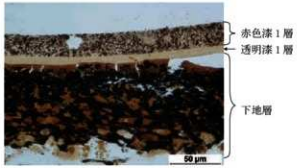


写真 35　No. 23 外面（紋様部）の断面

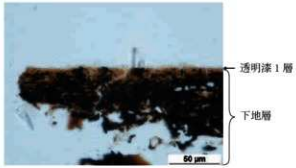


写真 36　No. 23 外面の断面

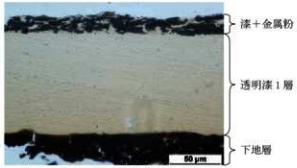


写真 37　No. 24 外面（紋様部）の断面

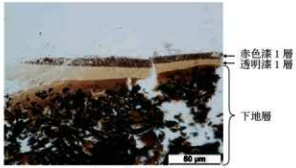


写真 38　No. 25 外面（紋様部）の断面

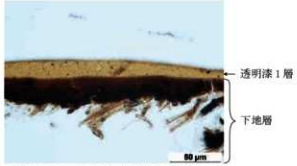


写真 39　No. 25 外面口縁端部の断面

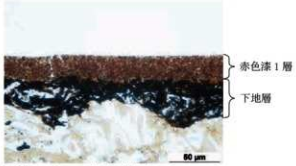


写真 40　No. 26 外面の断面

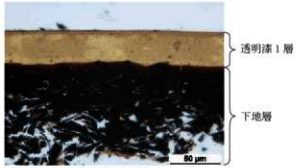


写真 41　No. 27 外面の断面

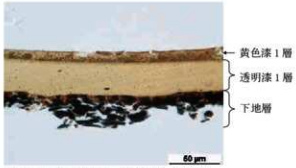


写真 42　No. 27 内面（紋様部）の断面

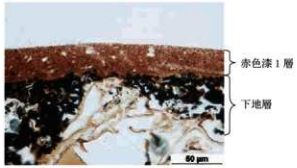


写真 43　No. 28 外面の断面

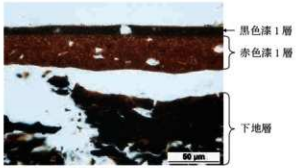


写真 44　No. 28 外面（紋様部）の断面

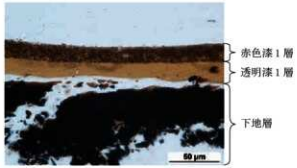


写真 45　No. 30 外面（紋様部）の断面

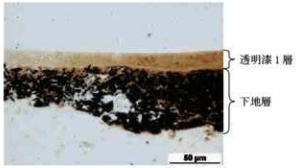


写真 46　No. 30 外面口縁端部の断面

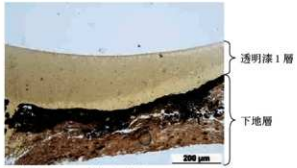


写真 47　No. 31 外面の断面

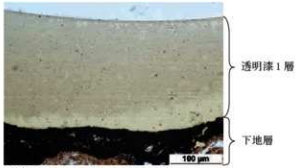


写真 48　No. 31 外面の断面拡大

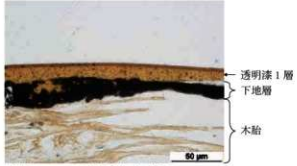


写真 49　No. 32 底板内面の断面

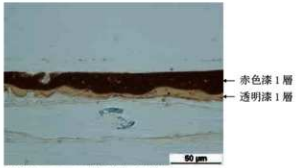


写真 50　No. 33 側板外面の断面

図版第六六　漆器　漆薄片

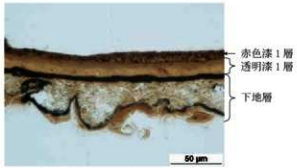


写真 51　No. 34 外面？の断面

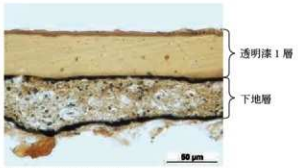


写真 52　No. 35 黒色部

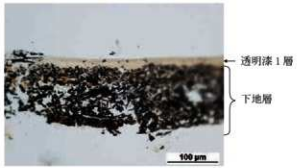


写真 53　No. 36 外面の断面

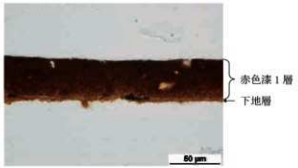


写真 54　No. 37 内面の断面

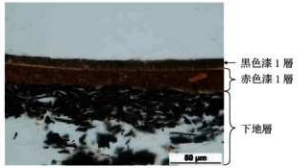


写真 55　No. 37 内面（黒色紋様部）の断面

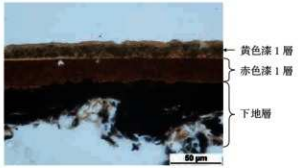


写真 56　No. 37 内面（黄色紋様部）の断面

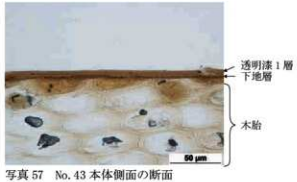


写真 57　No. 43 本体側面の断面

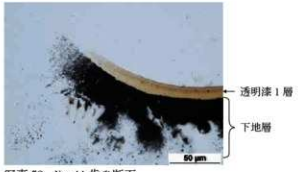
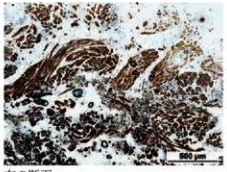


写真 58　No. 44 歯の断面

写真 59　No. 46 側面の断面



布の断面

報告書抄録

ふりがな	ふくいじょうあと
書名	福井城跡
副書名	北陸新幹線建設事業に伴う調査13
巻次	第一分冊遺構編・第二分冊遺物編
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第188集
編著者名	木村孝一郎(編)　青木隆佳
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒918-8226　福井県福井市大畑町97-21-３　TEL 0776-53-7977 E-mail：maibun-c@pref.fukui.lg.jp
発行年月日	2024年３月８日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
福井城跡 （ふくいじょうあと）	福井県 （ふくいけん） 福井市 （ふくいし） 手寄１丁目 （てよせ）	18201	01141	36° 3′ 29″	136° 13′ 14″	20160401 ～ 20161227 20170104 ～ 20170630	5,490㎡ （表面積）	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福井城跡	城郭 城下町	中世 近世	道路・屋敷境・礎石建物・掘立柱建物・柱穴列・井戸・土坑・溝等	土器（土師質皿）・陶磁器・瓦・木製品（供膳具・日用品等・墨書木製品）・石製品（容器・暖房具・硯・砥石・碁石・石瓦等）・金属製品（刀装具・日用品・煙管等）・自然遺物（種子・骨角器等）	外曲輪の中之馬場地区で、道路・屋敷境・礎石建物・掘立柱建物・柱穴列・井戸・土坑・溝等が３街区にまたがり、武家屋敷を構成していた。武家屋敷のなかに、織部焼を多く含む池もみられる。

要約

北陸新幹線建設事業に伴う調査のうち、地方主要道福井加賀線の起点である「城の橋通り」から北側の中之馬場の範囲である。調査区は福井城の外曲輪の「中之馬場」地区にあたる。大部分が武家屋敷地で、道路・屋敷境等の街区に関わる遺構や、礎石建物・掘立柱建物・井戸・土坑・溝等の屋敷地に関わる遺構が検出された。調査区では結城晴朝の屋敷地も含む。

福井県埋蔵文化財調査報告　第188集

福 井 城 跡

― 北陸新幹線建設事業に伴う調査13 ―

第２分冊　遺物編

令和６年２月27日　印刷
令和６年３月８日　発行

発行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒918-8226　福井県福井市大畑町97−21−３
印刷　白崎印刷株式会社
〒910-0843　福井県福井市西開発３−715